鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（164）

東九州自動車道建設（鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

石縊遺跡・十三塚遺跡

（鹿屋市串良町）

2011年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（164）
石縊遺跡・十三塚遺跡
二〇一一年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

遺跡遠景（西・立小野堀遺跡側から）

十三塚遺跡弥生時代出土遺物

序　　文

この報告書は，東九州自動車道建設（鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴って，平成19年度から平成21年度にかけて実施した鹿屋市串良町に所在する石縊遺跡と十三塚遺跡の発掘調査の記録です。

十三塚遺跡では，弥生時代の竪穴住居跡８軒をはじめ，土坑や掘立柱建物跡の遺構や山ノ口式土器・土製勾玉・磨製石鏃等，多くの遺物が発見されました。これらは，当時の南九州集落形成の在り方を解明する貴重な資料となるものと期待されます。

隣接した石縊遺跡からは，十三塚遺跡とは全く異なった遺跡の様相が明らかにされ，生活痕跡の実態を知る上で有効な情報を得ることができました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

ふりがな	いしくびいせき・じゅうさんづかいせき
書名	石縊遺跡・十三塚遺跡
副書名	東九州自動車道建設（鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第164集
編著者名	新保　朋久　　岩元　康成
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡0995－48－5811
発行年月日	西暦2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
いしくびいせき 石縊遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 串良町 ほそやまだ 細山田	46203	71-89	31° 27′ 01″	130° 54′ 00″	確認調査 2007.08.01～ 2007.10.16 本調査 2008.05.22～ 2009.03.19 2009.05.09～ 2010.03.19	420 12,533	東九州自動車道建設（鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う記録保存調査
じゅうさんづかいせき 十三塚遺跡			71-88	31° 26′ 46″	130° 54′ 14″	確認調査 2007.08.01～ 2007.10.16 本調査 2008.05.22～ 2009.03.19 2009.05.09～ 2010.03.19	480 27,446	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石縊遺跡	散布地	縄文時代早期 弥生時代中期	集石遺構 土坑	岩本式土器，前平式土器，志風頭式土器，石坂式土器，平栫式土器 貝殻条痕文土器，打製石鏃 磨石，敲石 山ノ口式土器，須玖式土器	
十三塚遺跡	散布地	縄文時代早期 縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代中期 古墳時代 中世～近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 道路状遺構	石坂式土器 凹線文土器，市来式土器 黒川式土器，三万田式土器 山ノ口式土器 土製勾玉，磨製石鏃，打製石鏃 磨石，敲石，砥石，棒状敲具，鉄鏃 成川式土器 加治木銭	

要約	十三塚遺跡は，弥生時代から縄文時代までの遺跡である。特に，弥生時代中期の竪穴住居跡８軒をはじめ，掘立柱建物跡・土坑等の遺構が検出され，また，遺構内遺物も多数出土しており，王子遺跡，前畑遺跡等と同時期の集落として貴重な遺跡である。 石縊遺跡は，縄文時代早期を中心とした遺跡である。特に，集石遺構や土坑は，当該期の生活の様子を知る上で貴重な資料となる。

石綵遺跡・十三塚遺跡位置図（S＝1:25,000）

例　　言

1　本報告書は，東九州自動車道建設（鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間）に伴う石縄遺跡・十三塚遺跡の発掘調査報告書である。
2　石縄遺跡・十三塚遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在し，両遺跡は隣接している。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査事業は，平成19年度から平成21年度に実施し，整理・報告書作成事業は平成22年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
5　掲載遺物番号は各遺跡ごとの通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
7　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。
8　本書で使用した方位は全て磁北である。
9　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は㈲スカイサーベイ九州，九州航空株式会社に委託した。
10　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，新保朋久が整理作業員の協力を得て行ったが，一部，デジタルデータの処理については，埋蔵文化財センター職員の長﨑慎太郎が行った。
11　出土遺物の実測・トレースは，新保，岩永勇亮，岩下直樹，岩元康成が担当し，整理作業員の協力を得て行った。また，遺物実測〈石器〉の一部を㈱九州文化財研究所に委託し岩元が監修した。
12　出土遺物の写真撮影は，埋蔵文化財センター職員の吉岡康弘と辻明啓が行った。
13　本報告書に係る自然化学分析は，放射性炭素年代測定，種実同定を㈱加速器分析研究所に委託した。
14　本書の編集は，新保・岩元が担当し，執筆は次のとおり分担して行った。

第１章～３章・・・・・・・・・・・・・・・新保
第４章・・・・・・・・新保・岩永・岩下・岩元
第５章・・・・・・・・新保・岩永・岩下・岩元
第６章第１節・・・・・前迫亮一
第７章・・・・・・・・新保・岩永・岩下・岩元

※第６章の科学分析については，委託報告書の原文のまま体裁を整えて掲載してある。

15　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。なお，遺物注記等で用いた遺跡記号は，石縄遺跡が「石」，十三塚遺跡が「十」である。

凡　　例

1　遺構について
⑴　遺構図の縮尺は，竪穴住居跡及び掘立柱建物跡が１/60，集石遺構が１/20，道跡及び土坑が１/60とした。ただし，大型の遺構等レイアウトの都合上縮尺を変えたものについては，図中に示した縮尺を参考にされたい。
⑵　遺構番号は，以下に示すとおり，遺跡ごとかつ遺構ごとの通し番号で付した。

ア　石縄遺跡
㋐　土坑　本文中，配置図とも１号土坑から始まる通し番号
㋑　集石遺構　本文中，配置図とも１号集石遺構から始まる通し番号

イ　十三塚遺跡
㋐　竪穴住居跡　本文中，配置図とも１号竪穴住居跡から始まる通し番号
㋑　掘立柱建物跡　本文中，配置図とも１号掘立柱建物跡から始まる通し番号
㋒　土坑　本文中，配置図とも１号土坑から始まる通し番号

2　遺物について
⑴　掲載遺物の縮尺は，以下に示すとおりである。

ア　土器　１/３を基本としているが，完形土器は１/４である。
イ　石器　石器の器種や大きさで縮尺が１/1，1/3，１/４と異なるので図中に示した縮尺を参考にされたい。

⑵　遺物番号は，遺跡ごとの通し番号であり，本文，挿図，図版の番号と一致する。
3　グリッド配置図，遺構配置図，遺物出土状況図等デジタルで作成した図の縮尺については，各図ごと縮尺を示してあるが，１グリッド（１マス）が20ｍ×20ｍの大きさである。

目　　次

巻頭カラー
序　　文
報告書抄録
遺跡位置図
例言・凡例
本文目次
挿図目次
表　目　次
図版目次

本　文　目　次

第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　　1　分布調査・詳細分布調査 …… 1
　　2　試掘調査 …… 3
　　3　確認調査 …… 3
　　4　本調査 …… 4
　　5　整理・報告書作成作業 …… 6

第２章　遺跡の位置と環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 7
　第３節　鹿屋串良ＩＣ～曽於・弥五郎ＩＣ間の遺跡 11

第３章　発掘調査の方法と層序 …… 13
　第１節　調査の方法 …… 13
　　1　発掘調査の方法 …… 13
　　2　遺構の認定と検出方法 …… 13
　　3　整理・報告書作成作業の方法 …… 13
　第２節　層序 …… 16

第４章　石綴遺跡の調査と成果 …… 21
　第１節　縄文時代の調査と成果 …… 21
　　1　調査の概要 …… 21
　　2　調査の成果 …… 22
　　⑴　遺構 …… 22
　　⑵　遺物 …… 26
　第２節　弥生時代の調査と成果 …… 41
　　1　調査の概要 …… 41
　　2　調査の成果〈遺物〉 …… 41
第５章　十三塚遺跡の調査と成果 …… 42
　第１節　縄文時代の調査と成果 …… 42
　　1　調査の概要 …… 42
　　2　調査の成果 …… 42
　　⑴　遺物の分類 …… 42
　　⑵　遺物 …… 43
　第２節　弥生時代の調査と成果 …… 49
　　1　調査の概要 …… 49
　　2　調査の成果 …… 49
　　⑴　遺構 …… 50
　　ア　竪穴住居跡 …… 50
　　イ　掘立柱建物跡 …… 77
　　ウ　土坑 …… 80
　　エ　集石遺構 …… 84
　　オ　土器集中区 …… 84
　　⑵　遺物 …… 88
　　ア　土器 …… 88
　　イ　石器 …… 114
　第３節　古墳時代の調査と成果 …… 128
　　1　調査の概要 …… 128
　　2　調査の成果 …… 128
　　⑴　遺物 …… 128
　第４節　中世以降の調査と成果 …… 130
　　1　調査の概要 …… 130
　　2　調査の成果 …… 130
　　⑴　遺構 …… 130
　　⑵　遺物 …… 130

第６章　自然科学分析 …… 133
　第１節　十三塚遺跡における自然化学分析 …… 133
　第２節　十三塚遺跡における放射性炭素年代
　　（ＡＭＳ測定）１ …… 134
　第３節　十三塚遺跡における放射性炭素年代
　　（ＡＭＳ測定）２ …… 136
　第４節　十三塚遺跡出土種実同定報告 …… 139

第７章　総括 …… 141
　第１節　石綴遺跡について …… 141
　第２節　十三塚遺跡について …… 141
　第３節　遺跡の残存状況 …… 144
写真図版 …… 145

挿　図　目　次

第１図　石縄遺跡・十三塚遺跡事前調査範囲図 …… 2
第２図　遺跡周辺の地質図 …… 8
第３図　周辺遺跡位置図 …… 10
第４図　東九州自動車道建設に伴う遺跡 …… 12
第５図　石縄遺跡・十三塚遺跡グリッド配置図 …… 14
第６図　石縄遺跡・十三塚遺跡発掘調査範囲 …… 15
第７図　石縄遺跡土層断面図１ …… 17
第８図　石縄遺跡土層断面図２ …… 18
第９図　十三塚遺跡土層断面図１ …… 19
第10図　十三塚遺跡土層断面図２ …… 20
第11図　石縄遺跡調査範囲図 …… 21
第12図　石縄遺跡縄文時代遺構配置図 …… 21
第13図　石縄遺跡１号土坑 …… 22
第14図　石縄遺跡１号集石遺構 …… 22
第15図　石縄遺跡２～４号集石遺構 …… 23
第16図　石縄遺跡５・６号集石遺構 …… 24
第17図　石縄遺跡７号集石遺構 …… 25
第18図　石縄遺跡縄文時代早期前半土器出土状況図 27
第19図　石縄遺跡縄文時代早期後半土器出土状況図 27
第20図　石縄遺跡縄文時代早期土器１ …… 29
第21図　石縄遺跡縄文時代早期土器２ …… 30
第22図　石縄遺跡縄文時代早期土器３ …… 31
第23図　石縄遺跡縄文時代早期土器４ …… 32
第24図　石縄遺跡縄文時代早期土器５ …… 33
第25図　石縄遺跡縄文時代早期土器６ …… 34
第26図　石縄遺跡石器出土分布図 …… 36
第27図　石縄遺跡縄文時代石器１ …… 38
第28図　石縄遺跡縄文時代石器２ …… 39
第29図　石縄遺跡縄文時代石器３ …… 40
第30図　石縄遺跡弥生時代土器 …… 41
第31図　十三塚遺跡縄文時代土器出土状況図 …… 42
第32図　十三塚遺跡縄文時代土器１ …… 43
第33図　十三塚遺跡縄文時代土器２ …… 44
第34図　十三塚遺跡縄文時代土器３ …… 45
第35図　十三塚遺跡縄文時代土器４ …… 46
第36図　十三塚遺跡縄文時代土器５ …… 47
第37図　十三塚遺跡縄文時代石器 …… 47
第38図　十三塚遺跡弥生時代中期遺構配置図 …… 49
第39図　十三塚遺跡弥生時代中期竪穴住居跡配置図 50
第40図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡位置図 …… 51
第41図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡１ …… 52
第42図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡２ …… 53
第43図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡遺物出土状況図 54
第44図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡住居内集積遺構 55
第45図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土遺物１ …… 55
第46図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土遺物２ …… 56
第47図　十三塚遺跡２号竪穴住居跡位置図 …… 57
第48図　十三塚遺跡２号竪穴住居跡 …… 58
第49図　十三塚遺跡２号竪穴住居跡遺物出土状況図 59
第50図　十三塚遺跡２号竪穴住居跡出土遺物 …… 59
第51図　十三塚遺跡３号竪穴住居跡位置図 …… 60
第52図　十三塚遺跡３号竪穴住居跡 …… 61
第53図　十三塚遺跡３号竪穴住居跡遺物出土状況図 62
第54図　十三塚遺跡３号竪穴住居跡出土遺物 …… 62
第55図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡位置図 …… 63
第56図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡 …… 64
第57図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡遺物出土状況図 65
第58図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡出土遺物 …… 65
第59図　十三塚遺跡５号竪穴住居跡位置図 …… 66
第60図　十三塚遺跡５号竪穴住居跡 …… 67
第61図　十三塚遺跡５号竪穴住居跡遺物出土状況図 67
第62図　十三塚遺跡６号竪穴住居跡位置図 …… 68
第63図　十三塚遺跡６号竪穴住居跡 …… 69
第64図　十三塚遺跡６号竪穴住居跡遺物出土状況図 70
第65図　十三塚遺跡６号竪穴住居跡出土遺物 …… 70
第66図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡位置図 …… 71
第67図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡 …… 72
第68図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡遺物出土状況図 72
第69図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡出土遺物状況図 73
第70図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡出土遺物１ …… 73
第71図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡出土遺物２ …… 74
第72図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡位置図 …… 75
第73図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡 …… 76
第74図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡遺物出土状況図 76
第75図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡出土遺物 …… 76
第76図　十三塚遺跡１号堀立柱建物跡 …… 77
第77図　十三塚遺跡２号堀立柱建物跡 …… 78
第78図　十三塚遺跡３号堀立柱建物跡 …… 79
第79図　十三塚遺跡土坑位置図 …… 80
第80図　十三塚遺跡１号土坑出土遺物 …… 81
第81図　十三塚遺跡１・２号土坑 …… 81
第82図　十三塚遺跡３号土坑 …… 82
第83図　十三塚遺跡４・５号土坑 …… 82
第84図　十三塚遺跡６号土坑 …… 82
第85図　十三塚遺跡６号土坑出土遺物 …… 82
第86図　十三塚遺跡７号土坑 …… 83
第87図　十三塚遺跡集積遺構・土器集中区位置図 … 84
第88図　十三塚遺跡集積遺構 …… 84
第89図　十三塚遺跡土器集中区（G－16区）遺物出土状況図 85
第90図　十三塚遺跡土器集中区（G－16区）土器 …… 85
第91図　十三塚遺跡土器集中区（M－18区）遺物出土状況図 86
第92図　十三塚遺跡土器集中区（M－18区）土器 …… 86
第93図　十三塚遺跡弥生時代土器分類別出土状況図 87

第94図　十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器１　88
第95図　十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器２　89
第96図　十三塚遺跡弥生時代中期土器１ …… 92
第97図　十三塚遺跡弥生時代中期土器２ …… 93
第98図　十三塚遺跡弥生時代中期土器３ …… 94
第99図　十三塚遺跡弥生時代中期土器４ …… 95
第100図 十三塚遺跡弥生時代中期土器５ …… 96
第101図 十三塚遺跡弥生時代中期土器６ …… 97
第102図 十三塚遺跡弥生時代中期土器７ …… 98
第103図 十三塚遺跡弥生時代中期土器８ …… 99
第104図 十三塚遺跡弥生時代中期土器９ ……100
第105図 十三塚遺跡弥生時代中期土器10 ……101
第106図 十三塚遺跡弥生時代中期土器11 ……102
第107図 十三塚遺跡弥生時代中期土器12 ……103
第108図 十三塚遺跡弥生時代中期土器13 ……104
第109図 十三塚遺跡弥生時代中期土器14 ……105
第110図 十三塚遺跡弥生時代中期土器15 ……106
第111図 十三塚遺跡弥生土器（その他）１ ……111
第112図 十三塚遺跡弥生土器（その他）２ ……112
第113図 十三塚遺跡土製勾玉 ……113
第114図 十三塚遺跡円盤状土製品 ……113
第115図 十三塚遺跡石器出土状況図 ……114
第116図 十三塚遺跡石器１ ……117
第117図 十三塚遺跡石器２ ……118
第118図 十三塚遺跡石器３ ……119
第119図 十三塚遺跡石器４ ……120
第120図 十三塚遺跡石材別出土状況図 ……120
第121図 十三塚遺跡石器５ ……121
第122図 十三塚遺跡石器６ ……122
第123図 十三塚遺跡石器７ ……123
第124図 十三塚遺跡石器８ ……124
第125図 十三塚遺跡石器９ ……125
第126図 十三塚遺跡古墳時代遺物出土状況図 ……128
第127図 十三塚遺跡古墳時代出土土器 ……129
第128図 十三塚遺跡中世以降遺構配置図 ……130
第129図 十三塚遺跡中世以降道路状遺構１ ……131
第130図 十三塚遺跡中世以降道路状遺構２ ……132
第131図 十三塚遺跡中世以降出土遺物 ……132
第132図 自然科学分析対象遺構配置図 ……133
第133図 大隅半島中央部弥生時代の主な遺跡 ……143
第134図 石縄遺跡・十三塚遺跡の残存状況 ……144

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 9
第２表　鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間の遺跡 … 11
第３表　石縄遺跡・十三塚遺跡基本土層 …… 16
第４表　石縄遺跡集石遺構を構成する礫の重量分布　26
第５表　石縄遺跡縄文時代早期土器観察表 …… 35
第６表　石縄遺跡石器観察表 …… 41
第７表　石縄遺跡弥生時代土器観察表 …… 41
第８表　十三塚遺跡縄文時代土器観察表 …… 48
第９表　十三塚遺跡縄文時代石器観察表 …… 48
第10表　十三塚遺跡１号竪穴住居跡柱穴計測表 …… 53
第11表　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土土器観察表　56
第12表　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土石器観察表　56
第13表　十三塚遺跡２号竪穴住居跡出土土器観察表　59
第14表　十三塚遺跡２号竪穴住居跡出土石器観察表　59
第15表　十三塚遺跡３号竪穴住居跡出土土器観察表　62
第16表　十三塚遺跡３号竪穴住居跡出土石器観察表　62
第17表　十三塚遺跡４号竪穴住居跡出土土器観察表　65
第18表　十三塚遺跡４号竪穴住居跡石器観察表 …… 65
第19表　十三塚遺跡６号竪穴住居跡石器観察表 …… 70
第20表　十三塚遺跡７号竪穴住居跡土器観察表 …… 74
第21表　十三塚遺跡７号竪穴住居跡石器観察表 …… 74
第22表　十三塚遺跡７号竪穴住居跡鉄製品観察表 … 74
第23表　十三塚遺跡８号竪穴住居跡土器観察表 …… 76
第24表　十三塚遺跡１・２号堀立柱建物跡計測表 … 78
第25表　十三塚遺跡３号堀立柱建物跡計測表 …… 79
第26表　十三塚遺跡土坑内出土遺物観察表 …… 83
第27表　十三塚遺跡土坑一覧表 …… 83
第28表　十三塚遺跡集積遺構石観察表 …… 84
第29表　十三塚遺跡土器集中区土器観察表 …… 86
第30表　十三塚遺跡弥生時代前期～中期初頭土器観察表　90
第31表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表１ ……107
第32表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表２ ……108
第33表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表３ ……109
第34表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表４ ……110
第35表　十三塚遺跡弥生時代土器（その他）観察表 112
第36表　十三塚遺跡土製勾玉計測表 ……113
第37表　十三塚遺跡円盤状土製品観察表 ……113
第38表　十三塚遺跡石器観察表１ ……126
第39表　十三塚遺跡石器観察表２ ……127
第40表　十三塚遺跡出土水晶観察表 ……127
第41表　十三塚遺跡古墳時代土器観察表 ……129
第42表　十三塚遺跡中世以降出土古銭計測表 ……132
第43表　大隅半島中央部弥生時代の主な遺跡 ……144

図　版　目　次

巻頭図版１　遺跡遠景（西・立小野堀遺跡側から）
巻頭図版２　十三塚遺跡弥生時代出土遺物
図版１　石縊遺跡・十三塚遺跡周辺地形 ……145
（国土交通省空中写真・昭和49年）
図版２　石縊遺跡･十三塚遺跡の基本土層（Ⅱ～Ⅴ層）146
図版３　石縊遺跡集石遺構検出状況１ ……147
図版４　石縊遺跡集石遺構検出状況２ ……148
図版５　石縊遺跡集石遺構検出状況３ ……149
図版６　石縊遺跡集石遺構検出状況４・
土坑検出状況 ……150
図版７　石縊遺跡調査状況 ……151
図版８　十三塚遺跡竪穴住居跡と堀立柱建物跡の
年度別検出状況 ……152
図版９　十三塚遺跡１号竪穴住居跡 ……153
図版10　十三塚遺跡２号竪穴住居跡 ……154
図版11　十三塚遺跡３号竪穴住居跡 ……155
図版12　十三塚遺跡４号竪穴住居跡 ……156
図版13　十三塚遺跡５号竪穴住居跡 ……157
図版14　十三塚遺跡６号竪穴住居跡 ……158
図版15　十三塚遺跡７・８号竪穴住居跡 ……159
図版16　十三塚遺跡調査状況 ……160
図版17　十三塚遺跡掘立柱建物跡 ……161
図版18　十三塚遺跡土坑・道路状遺構 ……162
図版19　十三塚遺跡遺物出土状況１ ……163
図版20　十三塚遺跡遺物出土状況２ ……164
図版21　石縊遺跡縄文時代早期土器 ……165
図版22　石縊遺跡縄文時代早期土器 ……166
図版23　石縊遺跡縄文時代早期土器 ……167
図版24　石縊遺跡縄文時代早期土器，弥生土器 ……168
図版25　石縊遺跡縄文時代早期石器
（打製石鏃，磨製石鏃，打製石斧）……169
図版26　石縊遺跡縄文時代早期石器 ……170
図版27　十三塚遺跡縄文時代早・中・後期土器 ……171
図版28　十三塚遺跡縄文時代後期土器 ……172
図版29　十三塚遺跡縄文時代後・晩期土器，石器 …173
図版30　十三塚遺跡弥生時代前期～中期土器 ……174
図版31　十三塚遺跡弥生時代土器 ……175
図版32　十三塚遺跡竪穴住居跡内出土土器 ……176
図版33　十三塚遺跡竪穴住居跡内出土土器 ……177
図版34　十三塚遺跡竪穴住居跡内出土石器，鉄製品 178
図版35　十三塚遺跡弥生時代土器 ……179
図版36　十三塚遺跡弥生時代土器 ……180
図版37　十三塚遺跡弥生時代土器 ……181
図版38　十三塚遺跡弥生時代土器 ……182
図版39　十三塚遺跡弥生時代土器 ……183
図版40　十三塚遺跡弥生時代土器 ……184
図版41　十三塚遺跡弥生時代土器，土製勾玉 ……185
図版42　十三塚遺跡弥生時代土器，種実痕付着
土器（最下段３点：写真図版のみ） ……186
図版43　十三塚遺跡弥生時代出土遺物 ……187
（石皿，軽石製品，砥石，鉄製品，磨製石鏃）
図版44　十三塚遺跡弥生時代石器 ……188
図版45　十三塚遺跡弥生時代石器 ……189
図版46　十三塚遺跡弥生時代石器 ……190
図版47　十三塚遺跡弥生時代石器 ……191
（水晶，2号住居内出土チップ）写真図版のみ
図版48　十三塚遺跡古墳時代遺物 ……192

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良IC～末吉財部IC間を，平成12年２月には志布志IC～鹿屋串良IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50箇所の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，鹿児島県教育委員会は，まず，平成13年1月29日から平成13年２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縄遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日から７月26日に鹿屋串良IC～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と，平成13年９月17日から10月26日まで，平成13年12月３日から12月25日までの２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日から平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志IC～鹿屋串良IC間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅IC（平成21年４月28日，「曽於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま生きるということになった。

また，日本道路公団からの再委託は曽於弥五郎ICまでで終了し，曽於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

石縄遺跡・十三塚遺跡の調査は，分布調査・詳細分布調査を平成10年度と平成13年度に，試掘調査を平成12年度と平成13年度に，確認調査を平成19年度，本調査を平成20年度から平成21年度まで実施した。

第２節　調査の経過

１　分布調査・詳細分布調査

石縄遺跡・十三塚遺跡に関する分布調査は，詳細分布調査を含め２回実施した。

１回目は分布調査で，日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道第13次区間のうち，鹿屋串良IC～末吉財部IC間の分布調査依頼を受け，平成11年１月に実施した。分布調査の結果，遺跡範囲面積が95,400㎡（石縄遺跡13,400㎡，十三塚遺跡82,000㎡）であることが判明した。調査体制は次のとおりである。

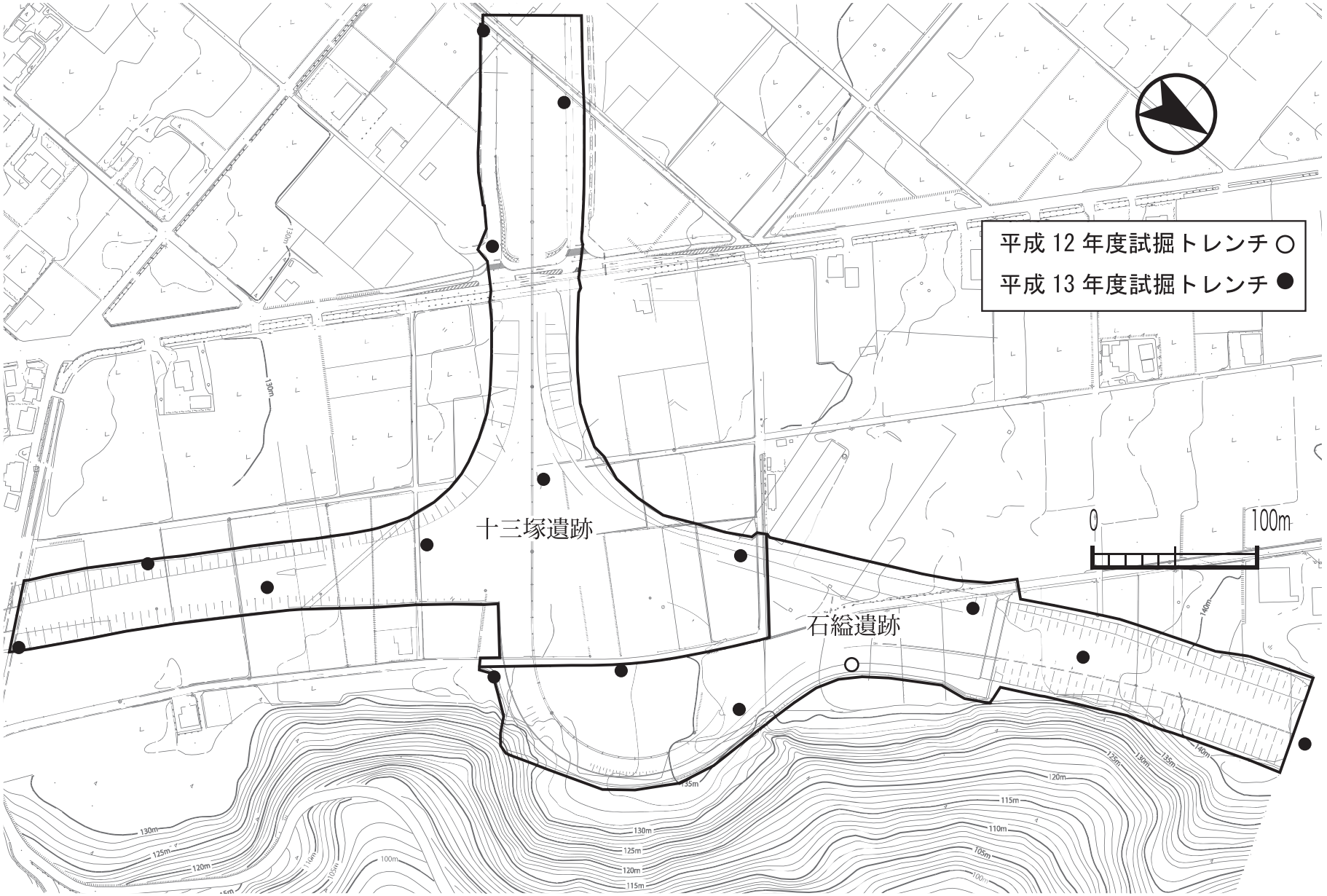
調査体制（分布調査：平成10年度）

事業主体　日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県教育庁文化財課　課長　内村正弘
〃　課長補佐　庭月野慎一
調査企画　〃　埋蔵文化財係長　戸﨑勝洋
調査担当　〃　文化財主事　倉元良文
〃　堂込秀人
鹿児島県立埋蔵文化財センター
主任文化財主事　長野眞一

２回目は詳細分布調査で，後述のとおり１回目の試掘調査で遺構・遺物が確認されなかった為，より詳細な情報を得ることと再度試掘調査を行う箇所を選定するため，東九州自動車道鹿屋串良IC～末吉財部IC間の他の遺跡も含め平成13年７月に実施した。その結果，調査対象面積が89,500㎡と１回目の分布調査時よりも面積が縮小された。また，15の試掘トレンチ設定箇所も選定した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（詳細分布調査：平成13年度）

事業主体　日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井上明文



第 1 図　石縊遺跡・十三塚遺跡事前調査範囲図

調査企画　〃　次長兼総務課長　黒木友幸
〃　主任文化財主事兼
調査課長　新東晃一
調査課長補佐　立神次郎
〃　主任文化財主事兼
第二調査係長　彌榮久志
調査担当　〃　主任文化財主事　長野眞一
〃　文化財研究員　桑波田武志

2　試掘調査

石縊遺跡・十三塚遺跡の試掘調査は，平成12・13年度に2回，16箇所の試掘トレンチを設定し実施した。

1回目は，平成13年2月5日・6日の2日間実施した。3m×10mのトレンチを1箇所設定し，小型バックホーによる掘り下げを中心に行い，地層の確認と遺構・遺物の有無についてチェックしながら，約4.2mまで掘り下げた。調査の結果，先述のとおり，遺構・遺物は確認されていない。調査体制は次のとおりである。

調査体制（試掘調査：平成12年度）

事業主体　日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井上明文
調査企画　〃　次長兼総務課長　黒木友幸
〃　主任文化財主事兼
調査課長　新東晃一
調査課長補佐　立神次郎
〃　主任文化財主事兼
第二調査係長　彌榮久志
調査担当　〃　主任文化財主事　長野眞一
〃　文化財主事　井ノ上秀文
〃　〃　大保秀樹
〃　〃　立部　剛
〃　〃　高見憲次
〃　文化財研究員　藤野義久
〃　〃　山崎克之
〃　〃　有馬孝一

2回目の試掘調査は，平成13年7月に実施された詳細分布調査時に設定した15箇所の試掘トレンチの調査を平成13年9月17日・18日の2日間実施した。調査の結果，地層の残存が確認され，弥生土器が出土した。しかしながら，ほとんどの試掘トレンチで遺構・遺物は確認されなかったことから，調査対象面積を75,805㎡と縮小した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（試掘調査：平成13年度）

事業主体　日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井上明文
調査企画　〃　次長兼総務課長　黒木友幸
〃　主任文化財主事兼
調査課長　新東晃一
調査課長補佐　立神次郎
〃　主任文化財主事兼
第二調査係長　彌榮久志
〃　主任文化財主事　長野眞一
調査担当　〃　文化財主事　岩澤和徳
〃　〃　山崎省一
〃　文化財研究員　桑波田武志
事務担当　〃　総務係長　前田昭信
〃　主査　栗山和己

3　確認調査

石縊遺跡・十三塚遺跡の確認調査は，これまでの分布調査，詳細分布調査，試掘調査の結果を受け，より詳細な情報を得るため，平成19年8月1日から10月16日に実施した。調査は，2m×10mの確認トレンチを28箇所設定し，掘り下げは人力で行った。調査の結果，石縊遺跡では，縄文時代早期の前平式土器等が出土した。十三塚遺跡では，縄文時代後期の市来式土器や弥生時代中期の山ノ口式土器等が出土した。また，本調査の対象面積を399,79㎡と確定した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（確認調査：平成19年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原景信
調査企画　〃　次長兼総務課長　平山　章
〃　次長兼南の縄文室長　新東晃一
〃　調査第二課長　立神次郎
〃　主任文化財主事兼
調査第二課
第一調査係長　彌榮久志
調査担当　〃　文化財主事　寺原　徹
〃　〃　川元禎久
事務担当　〃　総務係長　寄井田正秀
〃　主事　五百路真

調査の詳細（日誌抄より）※Tはトレンチ

※写真撮影は適宜行っているので記述を省略している。

平成19年8月

石縊遺跡　環境整備。1～10Tの設定。2T：薩摩火山灰層より土層の落ち込み検出。5T：Ⅱ層で遺物出土。6T：Ⅱ層で弥生土器出土。8T：縄文早期土器出土。

９Ｔ：石鏃１点出土。10Ｔ：Ⅱ層掘り下げ。１～５Ｔ・７Ｔの土層断面図作成。１～４Ｔ：埋め戻し。
平成19年９月
石縊遺跡　11～13Ｔ設定。６・８Ｔ：Ⅳ層出土遺物平板実測，取り上げ。５～13Ｔ：地形測量図作成。６・８・10Ｔ：土層断面図作成。11Ｔ：Ⅲ層上面遺構検出。12Ｔ：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。弥生土器出土。13Ｔ：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。11～13Ｔ土層断面図作成。
十三塚遺跡　14～20Ｔ設定，Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。14・15Ｔ：土層断面図・地形図作成。16Ｔ：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。土層断面図作成。17Ｔ：Ⅴ層上面掘り下げ。Ⅱ層出土遺物平板実測。18Ｔ：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。Ⅱ層遺物出土状況写真撮影。19Ｔ：Ⅱ層で弥生土器出土。国土交通省田中技術補助員来跡（６日）鹿児島大学理学部小林教授現場指導（25日）
平成19年10月
十三塚遺跡　16Ｔ：土層断面図作成。17Ｔ：Ⅴ層上面掘り下げ。土層断面図作成。18Ｔ：Ⅴ層検出。Ⅳ層掘り下げ。土層断面図・地形図作成。19Ｔ：Ⅲ層掘り下げ。土層断面図作成。20Ｔ：Ⅱ，Ⅲ層掘り下げ。遺物出土状況平板実測。Ⅳ層完掘。21Ｔ：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。22Ｔ：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。Ⅱ層遺物出土状況平板実測。Ⅳ層完掘。土層断面図作成。23Ｔ：Ⅰ層掘り下げ。24Ｔ：Ⅰ～Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層遺物出土状況平板実測。25Ｔ：Ⅱ層掘り下げ。26Ｔ：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。Ⅲ層上面土坑検出，写真撮影後半裁。27Ｔ：Ⅱ層掘り下げ。28Ｔ：Ⅱ層掘り下げ。鹿屋市文化課稲村氏ほか来跡（９日）

４　本調査

確認調査の結果をもとに，本調査を平成20年度と平成21年度に実施した。平成20年度は平成20年５月21日から平成21年３月19日まで，平成21年度は平成21年５月７日から平成22年３月19日まで実施した。各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

調査体制（確認調査：平成20年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
	鹿児島県土木部高速道路対策室	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	宮原景信
調査企画	〃 次長兼総務課長	平山　章
	〃 次長兼南の縄文室長	池畑耕一
	〃 調査第二課長	彌榮久志
	〃 主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村耕治
調査担当	〃 文化財主事	新保朋久
	〃 〃	寺原　徹
	〃 〃	國師洋之
	（平成21年１月～３月）	
	〃 〃	木内敏生
	（平成21年１月～３月）	
	〃 文化財調査員	岩下直樹
	（平成21年５月～10月）	
	〃 〃	岩元康成
	（平成21年11月～平成22年３月）	
事務担当	〃 総務係長	紙屋伸一
	〃 主査	五百路真
調査指導	鹿児島国際大学国際文学部教授	中園　聡

調査の詳細（日誌抄より）

平成20年５月
十三塚遺跡　環境整備。レベル移動。あ～え－２～５区：表土剥ぎ。Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構１条，土坑２基検出。
平成20年６月
十三塚遺跡　あ～え－１～10区：Ⅱ層掘り下げ。硬化面を伴う道路状遺構検出，実測。遺物取り上げ。下層確認のため１・２Ｔ設定,掘り下げ。配置図作成,土層断面写真撮影。（※トレンチ番号は20年度の新規番号）
平成20年７月
十三塚遺跡　あ～え－４～15区：表土掘り下げ。杭打ち，表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。土層断面図作成。遺物取り上げ。住居跡１号（花弁型）検出，平面図作成。下層確認３・４Ｔ設定。掘り下げ，平板実測及び遺物取り上げ。地形コンター図作成。鹿屋市文化課山口氏・山下氏，鹿屋市文化財保護審議員福元氏，伊崎田中学校校長寺師先生来跡（２日）串良商業高校３名職場見学（３日）
平成20年８月
十三塚遺跡　あ～け－10～18区：表土剥ぎ。下層確認３・４Ｔ：Ⅳ層掘り下げ，土層断面図作成。Ⅱ層遺物取り上げ。住居跡１号打製石斧出土，集積検出，実測。住居跡２号ミニＴ設定，埋土内遺物取り上げ。琉球大学池田教授・鹿児島大学本田准教授現場指導（５日）文化財課有川課長来跡（７日）
平成20年９月
十三塚遺跡　あ～け－10～26区：表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。竪穴状遺構（住居跡２・３号）遺物取り上げ，ミニＴ設定。硬化面実測。Ⅱ層出土遺物平板実測。住居跡４号検出，平面図実測。５・６Ｔ設定，Ⅴ層掘り下げ。国土交通省来跡（17日）
平成20年10月
石縊遺跡　Ｃ～Ｅ－24～26区：表土剥ぎ（アカホヤ除去，壁面清掃），Ⅳ層掘り下げ。志風頭式土器出土。

十三塚遺跡　あ～け－10～18区：Ⅱ層出土遺物平板実測及び取り上げ。土層断面実測。住居跡１号：ミニＴ掘り下げ。住居跡３号：ベルトの掘り下げ，ベルト外し。住居跡４号：土層断面の線引き。文化財課堂込係長来跡（22日）鹿屋市史談会９名来跡（24日）

平成20年11月

石縄遺跡　Ｃ～Ｅ－24～26区：Ⅳ層掘り下げ。石鏃１点出土。Ⅴ層で検出遺構。現地説明会準備。南日本新聞鹿屋総局長倉元氏現地説明会取材（14日）現地説明会約500名来跡（22日）空中写真撮影＜㈲スカイサーベイ＞（26日）鹿児島国際大学中園教授現地指導（27日）

平成20年12月

石縄遺跡　Ｃ～Ｆ－24～26区：Ⅳ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。Ⅴ層上面コンター図作成，半裁。下層確認１・２Ｔ：Ⅳ層掘り下げ。

十三塚遺跡　住居跡３・４号ベルト外し，土坑実測，出土遺物平板実測及び取り上げ。コンター図作成。鹿屋市文化課山下氏来跡（１日）肝付町新福氏来跡（12・22日）㈱ジパングサ－ベイグリッド杭打ち（19日）

平成21年１月

石縄遺跡　Ｄ～Ｆ－25～29区：Ⅳ層掘り下げ。土器集中検出。集石１号検出，実測。Ⅳ・Ⅳｂ層出土遺物平板実測及び取り上げ。Ⅳｂ層ピット検出。

十三塚遺跡　表土剥ぎ，グリッド杭打ち。

平成21年２月

石縄遺跡　Ｅ・Ｆ－28～31区：Ⅳ層掘り下げ，遺物取り上げ。Ⅴ層上面コンター図作成。下層確認Ｔ，Ⅳ層掘り下げ。３～６Ｔ配置図作成，土層断面図作成。

十三塚遺跡　Ｊ～Ｍ－15～17区：表土剥ぎ。表土・Ⅱ層掘り下げ。４号住居跡調査終了。遺物取り上げ。

平成21年３月

石縄遺跡　Ｊ～Ｍ－15～17区：Ⅱ層掘り下げ。４Ｔ周辺拡張，Ⅳ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。４号住居跡ピット確認。１号住居跡貼床検出，ピット多数検出，出土遺物平板実測及び取り上げ。Ⅴ層コンター図作成。下層確認４Ｔ：出土遺物平板実測及び取り上げ。

調査体制（平成21年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
	鹿児島県土木部高速道路対策室	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下吉美
調査企画	〃 次長兼総務課長	齋藤守重
	〃 次長兼南の縄文室長	青﨑和憲
	〃 調査第二課長	彌榮久志
	〃 主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	長野眞一
調査担当	〃 文化財主事	池畑耕一
	〃 〃	新保朋久（５月～９月）
	〃 文化財研究員	平屋大介
	〃 文化財調査員	岩下直樹（９月）
	〃 〃	岩元康成（５月～８月）
事務担当	〃 総務係長	紙屋伸一
	〃 主事	髙﨑智博
調査指導	奈良大学教授	酒井龍一
	鹿児島大学法文学部准教授	本田道輝

調査の詳細（日誌抄より）

平成21年５月

十三塚遺跡　Ｅ～Ｈ－13～19区：環境整備。Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ及び表土剥ぎ。出土遺物，平板実測及び取り上げ。土器集中検出。16区西側拡張。方形土坑検出。５号住居跡，柱穴数箇所検出。掘立柱跡検出，実測。遺物取り上げ。鹿屋市文化課長・山口主査・小竹氏来跡（20日）鹿屋市文化課稲村氏・小村氏来跡（22日）

平成21年６月

十三塚遺跡　Ｅ～Ｈ－13～19区：表土剥ぎ。掘立柱建物跡完掘，実測，ポイント釘位置平板実測。出土遺物平板実測及び取り上げ。土層断面図作成，実測。Ⅱ層掘り下げ。高橋式・入来式・山ノ口式（集中）出土。コンター図作成。５号住居跡完掘，実測，調査終了。６号住居跡検出。土坑１・２号実測，遺物取り上げ。文化財課有川課長，堂込係長視察（８日）黎明館東氏ほか１名来跡（15日）

平成21年７月

十三塚遺跡　Ｅ～Ｈ－14～18区：Ⅱ・Ⅳ層掘り下げ。住居跡１～５号精査。土器集中・石集積・土坑・ピット実測。１号住居跡：柱穴等掘り下げ。６号住居跡：実測。７号住居跡：鉄鏃・磨製石鏃実測，遺物取り上げ，土層断面実測。下層確認Ｔ：Ⅳ層掘り下げ終了。

石縄遺跡　確認Ｔ掘り下げ（縄文早期まで）。

空中写真撮影（16日）鹿屋市文化課稲村氏・河野氏来跡（７日）鹿児島大学本田准教授現場指導（９日）奈良大学酒井教授現場指導（13・14日）鹿屋市文化課稲村氏来跡（23日）

平成21年８月

石縄遺跡　Ｅ～Ｈ－24～26区：表土剥ぎ。Ⅳ層掘り下げ。土層断面実測。集石検出。土層断面実測。石坂式土器出土。集石３号実測。Ⅳａ・Ⅳｂ層出土遺物平板実測

及び取り上げ。集石７・８号の実測，取り上げ。

十三塚遺跡　Ｅ～Ｏ－２～18区：表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。磨製石鏃出土。深掘り壁，実測。出土遺物平板実測及び取り上げ。コンター実測。７号住居跡調査完了。国土交通省上村監督官・黒木専門職打ち合わせ（25日）
平成21年９月

石縊遺跡　集石８号断面実測及び取り上げ。Ｇ－25・26区：コンター図作成。

十三塚遺跡　Ｆ～Ｙ－１～18区：表土剥ぎ，杭打ち。Ⅱ層掘り下げ。勾玉出土。遺物取り上げ。硬化面及び土坑，平板実測，断面実測，半裁。掘立柱建物跡検出，実測。竪穴住居跡実測及び遺物取り上げ。北壁土層断面実測。Ｔ出土遺物平板実測及び取り上げ。Ｔ西壁実測。チップ集中地点掘り下げ。琉球大学池田教授・後藤准教授・鹿児島大学及び琉球大学の学生６名来跡（16・17日）
平成21年10月

十三塚遺跡　Ｆ～Ｐ－９～18区：Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。壺集中出土。土層断面実測。掘立柱建物跡３号の実測。地形図測量。勾玉出土。
平成21年11月

十三塚遺跡　Ｆ～Ⅰ－６～13区：表土剥ぎ。Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。北壁・東壁断面実測，遺物取り上げ。礫集中検出，実測。地形図測量。

石縊遺跡　Ｆ・Ｇ－24～26区：アカホヤまで掘り下げ。杭打ち，レベル測量，Ⅳa層掘り下げ。
平成21年12月

十三塚遺跡　Ｆ～Ⅰ－５～13区：表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測，取り上げ，地形測量。東壁断面実測。コンター図実測。

石縊遺跡　Ｆ～Ｈ－24～29区：表土剥ぎ。遺物実測，取り上げ。Ⅳ層掘り下げ。池ノ原小学校教頭肱岡先生来跡（14日）
平成22年１月

十三塚遺跡　Ｅ～Ｈ－１～６区：南壁土層断面実測。表土剥ぎ，Ⅱ層掘り下げ。遺物平板実測及び取り上げ。

石縊遺跡　Ｇ・Ｈ－26～29区：Ⅳ層掘り下げ。コンター図作成，平板実測及び遺物取り上げ。調査終了。
平成22年２月

十三塚遺跡　Ｅ～Ｔ－１～18区：表土剥ぎ，Ⅱ・Ⅳ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ。コンター図作成，杭打ち。西壁土層断面実測。鹿屋市教育委員会来跡（５日）
平成22年３月

十三塚遺跡　Ｑ～Ｓ－15～18区：Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測及び取り上げ，地形図作成。北壁道跡断面・溝状遺構実測。調査終了。岡山理科大学小林教授来跡（３・４日）

５　整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成22年４月～平成23年３月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。

出土遺物の水洗い，注記，十三塚遺跡の遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，石器や一般礫の仕分け等をはじめ，両遺跡の石器実測の委託，遺構，遺物の実測，拓本，トレース，レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。また，鹿児島大学法文学部本田道輝准教授と鹿児島大学埋蔵文化財調査室中村直子准教授に集落等の遺構や，遺物に関する指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制（平成22年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
	鹿児島県土木部高速道路対策室	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下吉美
作成企画	〃 次長兼総務課長	田中明成
	〃 次長兼南の縄文室長	中村耕治
	〃 調査第二課長	井ノ上秀文
	〃 文化財主事兼調査第二課第一調査係長	前迫亮一
作成担当	〃 文化財主事	新保朋久
	〃 文化財調査員	岩元康成
事務担当	〃 総務係長	大園祥子
	〃 主査	髙﨑智博
企画委員	〃 文化財主事	池畑耕一
調査指導	鹿児島大学法文学部准教授	本田道輝
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授	中村直子
報告書作成指導委員会	平成22年11月26日	
	中村次長ほか３名	
報告書作成検討委員会	平成22年12月１日	
	山下所長ほか９名	

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿屋市串良町は，大隅半島東南部のほぼ中央に位置し，東には東串良町，南には肝属川を隔てて肝付町，西には鹿屋市東原町，旭原町，笠之原町，東北は立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。平成18年１月１日に旧鹿屋市と合併するまでは広大な笠野原台地を二分していた。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中世層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.８m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。

本遺跡周辺の地質を第２図に示してあるが，前述の火砕流をはじめとする噴出物の堆積がベースとなっていることが分かる。噴出物は，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。

一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は，東西に6.5㎞，南北に13㎞の狭長で北部の山地中央部の台地，南部の低地に大別されるが，大部分において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ，それによる沖積地が広がり，約695haの水田地帯を形成している。また，北部には低い丘陵性の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

石縊遺跡・十三塚遺跡は，この串良町の北東部に位置し，笠野原台地の縁辺部に位置する。両遺跡の東側を串良川が蛇行しながら南流する。

第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

串良町の歴史を知る上で１つの手がかりとなる遺跡は，昭和36年度，50～52年度に分布調査が行われ数多くの遺跡が周知のものとなった。その後，詳細分布調査及び確認調査により周知の遺跡のエリアも確定しつつある。分布調査や確認調査の結果，串良町における遺跡の大半は，笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになった。

なお，串良町内では旧石器時代該当の遺跡は未だ確認されていないが，串良町の所在する鹿屋市では少数だけれども確認されている。以下，本遺跡周辺の主要な遺跡について時代別に紹介する。

１　旧石器時代

肝属川を挟んで向かい側や鹿児島湾に近い所で確認されているのみである。鹿屋バイパス建設に伴って調査が行われた西丸尾遺跡では，ナイフ形石器文化期該当のブロック，礫群等の遺構やナイフ形石器，剥片尖頭器，三稜尖頭器等の遺物が，細石刃文化期該当のブロック，礫群等の遺構や細石刃核・局部磨製石斧等の遺物が確認されている。

２　縄文時代

甫木川の東側台地縁辺部にある古園遺跡では，早期の石坂式土器に比定される山形波状口縁をもった貝殻条痕文の円筒土器が確認されている。また，益畑遺跡の南西約900ｍの孤立丘に位置するホンドンガマ遺跡では，昭和52年に県文化財課が調査を行った結果，後期の市来式土器に比定できる土器，石匙，打製石斧等の遺物が確認されている。

３　弥生時代

弥生時代の遺跡は，串良町内遺跡の約７割近くを占めている。中でも串良町上小原に位置する吉ヶ崎遺跡では，中期の竪穴住居跡が３軒確認されている。特に，１号住居跡はベッド状遺構をもち，床面の焼土や炭化物などの状態から焼失家屋であると推定される。また，壺形土器・甕形土器の完形品や，磨製石鏃・磨製石斧等が住居跡の床面から発見されている。これらは１軒あたりの土器や石器の器種構成を知るうえで貴重な資料といえる。

４　古墳時代

串良町内では現在19箇所の古墳群（85基）が周知のものとなっている。

上小原古墳群は肝属川に南面する，標高約20ｍの台地上に位置し，前方後円墳１基・円墳20基及び地下式横穴墓が確認されている。

前述の古園遺跡の南西部に近接する岡崎古墳群は，18

基の高塚墳と数基の地下式横穴墓が確認されている。中でも鹿児島大学総合研究博物館准教授の橋本達也氏等が確認調査を行った岡崎18号墳で確認された３個体の初期須恵器，鉄廷，Ｕ字型鍬先は，朝鮮半島との交流をうかがわせる貴重な資料である。

５　古代・中世以降

串良町内における中世以降の遺跡は，県教育委員会発行の「鹿児島県中世城跡」では14箇所が報告されている。しかしながら，詳細な調査はほとんどなされていない。

岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は，平成４年～５年に串良町教育委員会が主体となって調査を実施し，16基の近世墓のほか，土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が確認されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会　1997「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」　鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書⑹

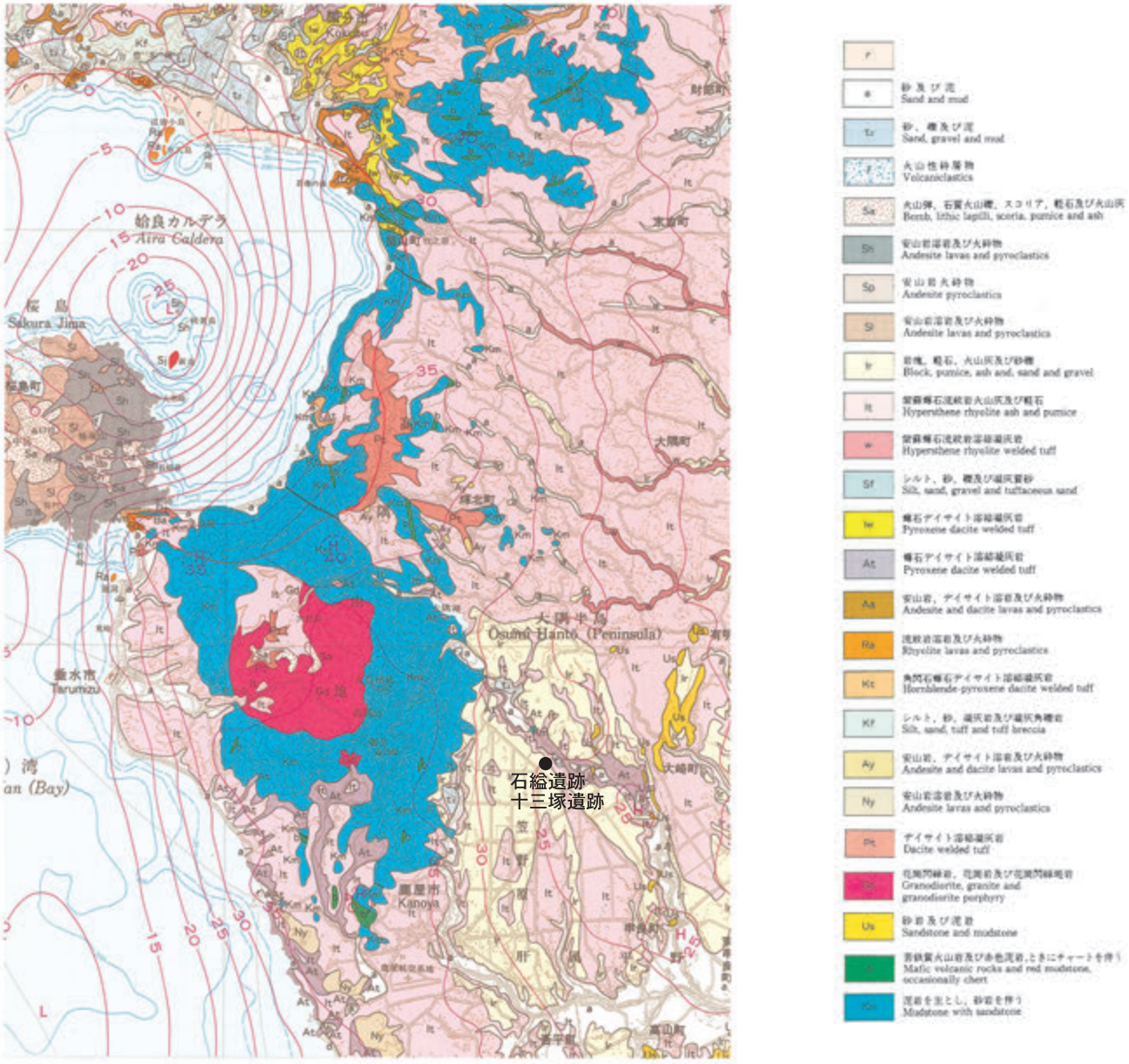
串良町教育委員会　1990「岡崎古墳群」　串良町埋蔵文化財発掘調査報告書⑶

串良町教育委員会　1994「稲村城跡」　串良町埋蔵文化財発掘調査報告書⑷

串良町教育委員会　1999「上小牧遺跡・岡崎15号古墳」　串良町埋蔵文化財発掘調査報告書⑻

串良町教育委員会　2005「益畑遺跡」　串良町埋蔵文化財発掘調査報告書⑾

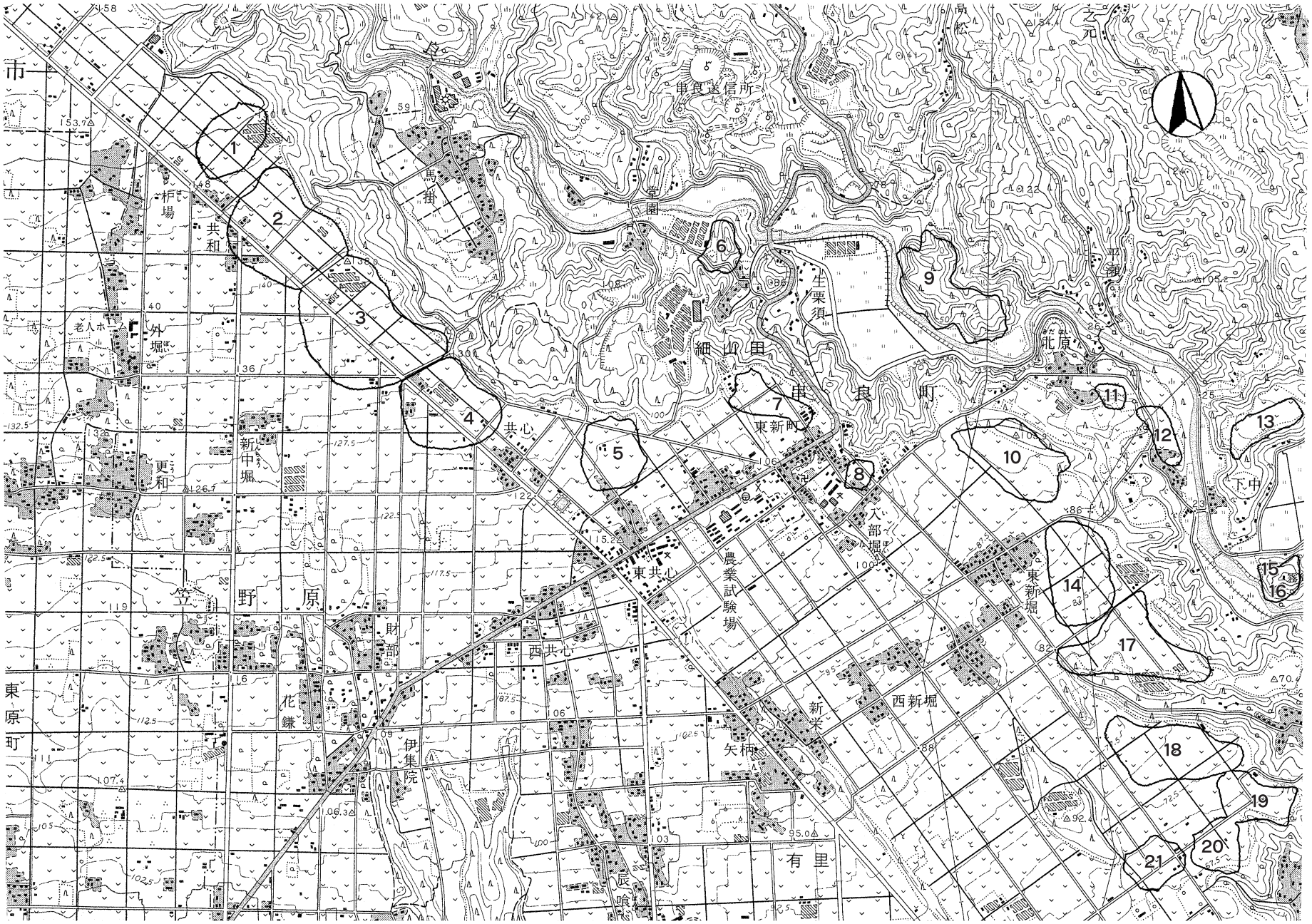
橋本達也　2002「肝属郡串良町　岡崎18号墳－　第１次調査の成果－」　14年度　鹿児島県考古学会資料



第２図　遺跡周辺の地質図

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺物台帳番号		遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	71	92	牧原	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	弥生，古墳，古代		
2	71	89	石縊	鹿児島県鹿屋市串良町細山田石縊	台地	縄文		平成６年度農政分布調査
3	71	88	十三塚	鹿児島県鹿屋市串良町細山田十三塚	台地	弥生，古墳		平成６年度農政分布調査
4	71	93	立小野堀	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	弥生，古墳，古代		
5	71	94	田原迫ノ上	鹿児島県鹿屋市串良町細山田	台地	弥生		
6	71	44	細山田城跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世		
7	71	5	高松	鹿児島県鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	弥生土器・石斧・靴形石斧	
8	71	55	入部堀	鹿児島県鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳		
9	71	38	北原城跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）		
10	71	9	アタゴ山	鹿児島県鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生，古墳	弥生土器･有肩石斧･打製石斧･成川式	旧名「町田堀」を含む
11	71	61	北原古墳群	鹿児島県鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳		枝番No.１～４
12	71	58	川久保	鹿児島県鹿屋市串良町細山田川久保	台地	弥生	打製石斧	
13	71	59	小牧	鹿児島県鹿屋市串良町細山田小牧	台地	弥生		
14	71	56	新堀	鹿児島県鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文		
15	71	1	ホンドンガマ	鹿児島県鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文		
16	71	43	霧島城跡	鹿児島県鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世		
17	71	57	是ヶ迫	鹿児島県鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生		
18	71	63	瓜々良蒔	鹿児島県鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	土器数点（弥生）･落とし穴･柱穴	平成12年本調査
19	71	64	永田堀	鹿児島県鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生，古墳		
20	71	65	柊場	鹿児島県鹿屋市串良町有里柊場	台地	弥生		
21	71	66	熊ヶ鼻	鹿児島県鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文，弥生	石鏃	



第 3 図　周辺遺跡位置図（1:25,000）

第３節　鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間の遺跡

東九州自動車道の鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間には，第２表に示すとおり13の遺跡が存在する。報告書が刊行されている遺跡もあるが，ここでは各遺跡の概要だけを記載するので，詳細については報告書を参照していただきたい。

第２表　鹿屋串良ＩＣ～曽於弥五郎ＩＣ間の遺跡

	遺　跡　名	発掘調査	報告書刊行
1	十三塚遺跡	終了	本報告書
2	石縊遺跡	（鹿屋串良IC）	
3	樋ノ口遺跡	終了	未刊行
4	大牧遺跡	未調査	未刊行
5	柿木段遺跡	終了	H21年度一部刊行
6	椿山遺跡	終了	H21年度刊行
7	加治木堀遺跡		
8	宮ノ本遺跡		
9	野方前段遺跡	終了	A地点のみH21年度刊行。B地点は整理作業中
10	天神段遺跡	調査中	整理作業中
11	宮ヶ原遺跡	一部未調査	整理作業中
12	チシャノ木遺跡	終了	H19年度刊行
13	鳥居川遺跡	（曽於弥五郎IC）	

※柿木段遺跡，椿山遺跡，加治木堀遺跡，宮ノ本遺跡，野方前段遺跡Ａ地点は合本で報告書を刊行した。

１　十三塚遺跡　鹿屋市串良町細山田字十三塚に所在し，標高約140ｍの台地上に立地している。調査の結果，遺構は弥生時代中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・古道跡，近世以降の溝状遺構等が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器，弥生時代中期の土器・勾玉・石器・鉄器・鉄製品，近世の古銭等が出土した。

弥生時代中期の竪穴住居跡は遺跡に比較的近い王子遺跡（鹿屋市王子町）や益畑遺跡（鹿屋市串良町）でも確認されており，当時の南九州の集落形成の在り方を解明する上で貴重な資料となると考える。

２　石縊遺跡　鹿屋市串良町細山田字石縊に所在し，標高約140ｍの台地の縁辺部に立地している。また，十三塚遺跡とは隣接しており，十三塚遺跡とともに鹿屋串良ＩＣ建設予定地内に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。遺物は縄文時代早期と弥生時代の土器や石器が出土した。

３　樋ノ口遺跡　鹿屋市下高隈町樋ノ口に所在し，標高約110ｍの台地上に立地している。確認調査の結果，遺物包含層の残存が少なく，遺構・遺物は確認されなかったので本調査は行わず調査を終了した。

４　大牧遺跡　鹿屋市下高隈町大牧に所在し，標高約130ｍの台地上に立地している。まだ調査に着手していないので遺跡の詳細な様相は不明である。

５　柿木段遺跡　曽於郡大崎町立小野字柿木段に所在し，標高約150ｍの小さな谷の窪地とその下部にある標高145ｍの広い谷の平坦部に立地している。

平成19・20年度と今年度発掘調査が行われ，平成19・20年度の調査終了箇所については平成21年度に報告書が刊行された。平成19・20年度の調査の結果，遺構は縄文時代晩期の落とし穴・石斧埋納遺構・土坑，古代のカマド跡・溝状遺構・古道が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器，弥生時代の土器，古墳時代の土器や鉄鏃，古代の土師器や須恵器，中世～近世の青磁・白磁・染付・薩摩焼等が出土した。今年度の調査の結果，遺構は古代及び中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器，古代の土師器，近世の陶器・染付・石鏃・鉄製品等が出土した。

６　椿山遺跡　曽於郡大崎町野方字椿山に所在し，標高約200ｍの台地縁辺部に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代の落とし穴，古代～中世の溝状遺構や古道跡等が検出された。遺物は縄文時代中期・後期の土器や石器，弥生時代中期の土器が出土した。

７　加治木堀遺跡　曽於郡大崎町野方字加治木堀に所在し，標高約200ｍの台地中央部に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代中期の落とし穴，古代～中世の溝状遺構・古道跡・畝状遺構・土坑等が検出された。遺物は縄文時代中期の土器や石器，弥生時代中期の土器，古墳時代の土器や鉄器，古代～中世の青磁・白磁・軽石製品等が出土した。

８　宮ノ本遺跡　曽於郡大崎町野方字宮ノ本に所在し，標高約200ｍの台地縁辺部に立地している。加治木堀遺跡とは県道72号線を挟んで隣接している。調査の結果，遺構・遺物は確認されなかった。

９　野方前段遺跡　曽於郡大崎町野方字野方前段に所在し，標高約200ｍの台地縁辺部に立地している。調査区をＡ・Ｂの２地点に分けて調査し，Ａ地点は平成21年度に報告書が刊行された。Ａ地点の調査の結果，遺構は縄文時代の集石遺構・落とし穴・土坑，弥生時代の土坑，古代～中世の溝状遺構・古道跡・土坑，近世の土坑が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器や石器，弥生時代中期の土器，古代～中世の須恵器，近世の染付や薩摩焼等が出土した。Ｂ地点の調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑や縄文時代中・後期の落とし穴・土坑が検出された。遺物は，縄文時代早期の土器や石器，弥生時代の土器が出土した。

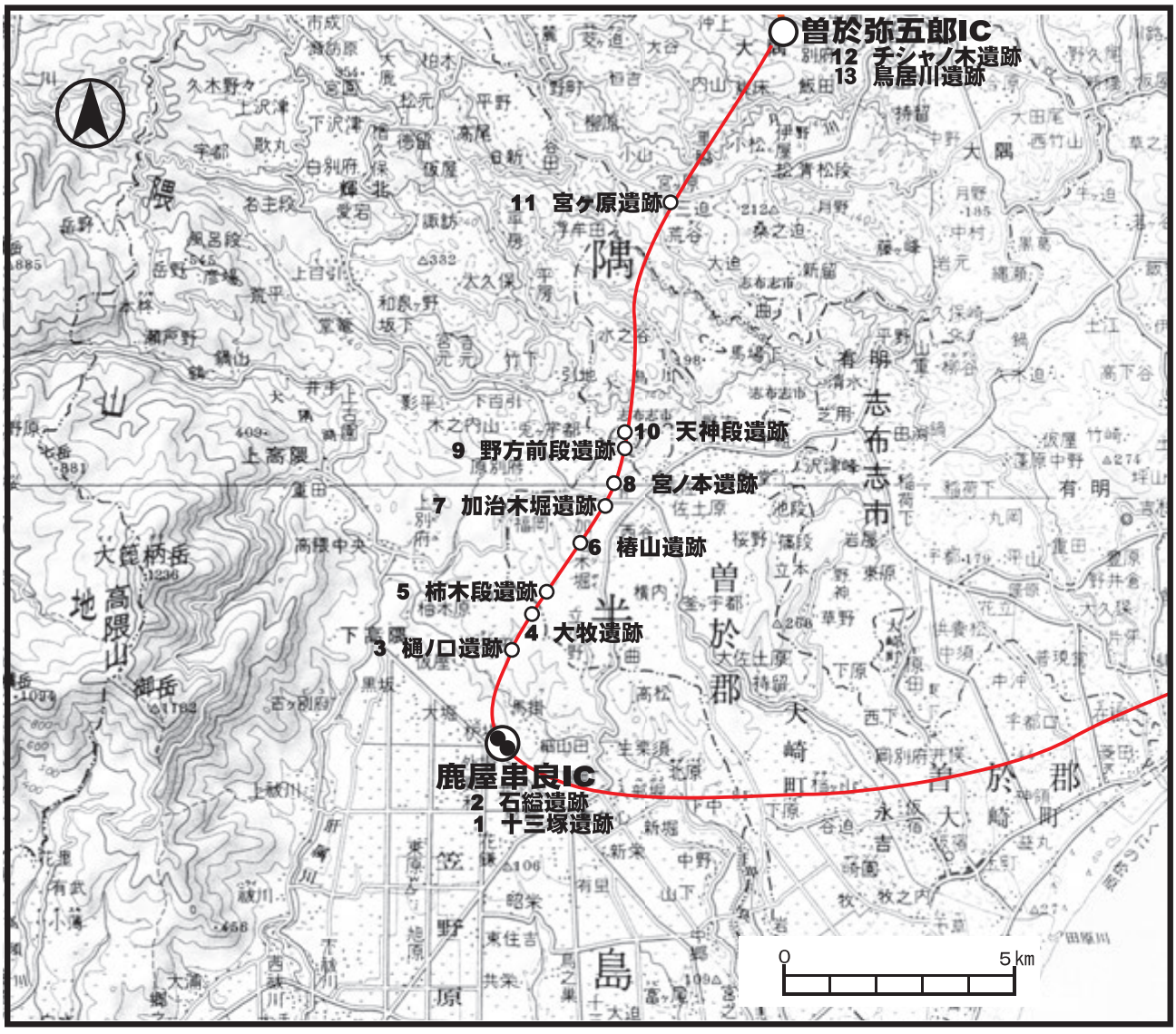
10　天神段遺跡　曽於郡大崎町野方及び志布志市有明町に所在し，標高200ｍの台地縁辺部に立地している。平成19年度から発掘調査が始まり，現在は発掘調査と整理作業を併行して行っているところである。これまでの発掘調査の結果，遺構は旧石器時代の礫群，縄文時代早期

の集石遺構・落とし穴・連穴土坑・古代・中世の掘立柱建物跡・土坑墓・溝状遺構等が検出された。遺物は旧石器時代の石器，縄文時代早期～晩期の土器や石器，土坑墓内から青磁や白磁の椀や皿などの陶磁器・銅鏡・和ばさみ，完形品で入れ子状態で出土した滑石製石鍋などが出土した。各時代とも遺構・遺物の数が多く，遺跡内外における人々の生活の変遷を知る上で貴重な資料となると考える。

11　**宮ヶ原遺跡**　曽於市大隅町荒谷及び大谷に所在し，標高約230mの台地上に立地している。調査の結果，遺構は旧石器時代の礫群，縄文時代早期の集石遺構・石皿集積遺構・落とし穴，縄文時代前期の落とし穴，縄文時代中期～後期の集石遺構，落とし穴，縄文時代後期～晩期の集石遺構，近世以降の硬化面を伴う道跡及び溝状遺構等が検出された。遺物は旧石器時代の遺物，縄文時代早期の土器や石器，縄文時代前期の土器，縄文時代中期～後期の土器，弥生時代中期の土器，硬化面を伴う道跡から近世の煙管や薩摩焼等が出土した。工事の影響がない箇所を除き調査は全て終了した。

12　**チシャノ木遺跡**　曽於市大隅町岩川字チシャノ木に所在し，標高約220mの台地上に立地している。また，鳥居川遺跡とは谷を挟んで隣接おり，鳥居川遺跡とともに曽於弥五郎ＩＣ内に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑，古代～中世の落とし穴，近世の溝状遺構が検出された。遺物は旧石器時代の遺物，縄文時代早期・後期・晩期の土器（組織痕土器を含む）や石器が出土した。その他，火打ち石，寛永通宝，軽石製品等も出土した。

13　**鳥居川遺跡**　曽於市大隅町岩川字鳥居川に所在し，標高約220mの台地上に立地している。調査の結果，縄文時代早期，縄文時代後・晩期の遺跡であることが判明した。遺構は確認されず，遺物は土器では縄文時代早期の押型文土器・塞ノ神式土器，縄文時代晩期の黒川式土器の時期の組織痕土器が，石器では石鏃が出土した。



第４図　東九州自動車道建設に伴う遺跡

第３章　発掘調査の方法と層序

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

発掘調査は，石縄遺跡と十三塚遺跡が隣接することから，東九州自動車道建設予定地のセンター杭ＳＴＡ２＋80とＳＴＡ３点を基準にして，両遺跡を含むように１マスが20m×20mのグリッドを用い調査区を設定した。

調査は，基本的には人力で掘り下げを行い，表土剥ぎ，無遺物層，火山灰のブロック等で固い地層は重機を使用した。遺構実測や遺物取上は調査担当者と発掘作業員で実施した。

２　遺構の認定と検出方法

⑴　遺構の認定について

【石縄遺跡】

石縄遺跡の発掘調査では，縄文時代早期の集石遺構，土坑等の遺構が検出された。

①集石遺構

集石遺構は計７基検出された。これらはⅣｂ層で検出されたもので，概ね拳大の礫が６個から56個集まった状態で検出された遺構である。１基あたりの平均礫数は約24個であった。

②土坑

土坑は１基検出され，ほぼ全形が推定できた。これはⅣｂ層で検出されている。

【十三塚遺跡】

十三塚遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡，土坑等が検出された。主にⅡｂ層を埋土とする。

①竪穴住居跡

竪穴住居を想定する上で，十三塚遺跡と同様に弥生時代中期の所産と考えられるこれまでの事例との関係も検討する必要がある。

幸い，大隅半島，特に笠野原台地周辺は事例の多いことでも知られている地域である。特に検出数の多い鹿屋市王子遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・中原山野遺跡・前畑遺跡が比較対象として有効と考える。花弁型タイプ，張り出しを持つタイプ，竪穴内部床面のピットや，ベッド状になるタイプなど，酷似するものが多く，ここでは，竪穴住居跡とした。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は３棟検出された。これらも竪穴住居跡と同じⅡｂ層を埋土としており，ほぼ同時期の遺構であると考えられる。

⑵　遺構の検出方法

【石縄遺跡】

石縄遺跡検出遺構の中心は，縄文時代早期のものである。鹿児島県内における当該期の遺跡の多くがそうであるように，遺物包含層の上にアカホヤ火山灰（Ⅲ層），下に薩摩火山灰層（Ⅴ層）があり，遺構検出は薩摩火山灰層上面まで掘り下げないと検出できなかった。集石遺構についてはⅣｂ層で確認された。

【十三塚遺跡】

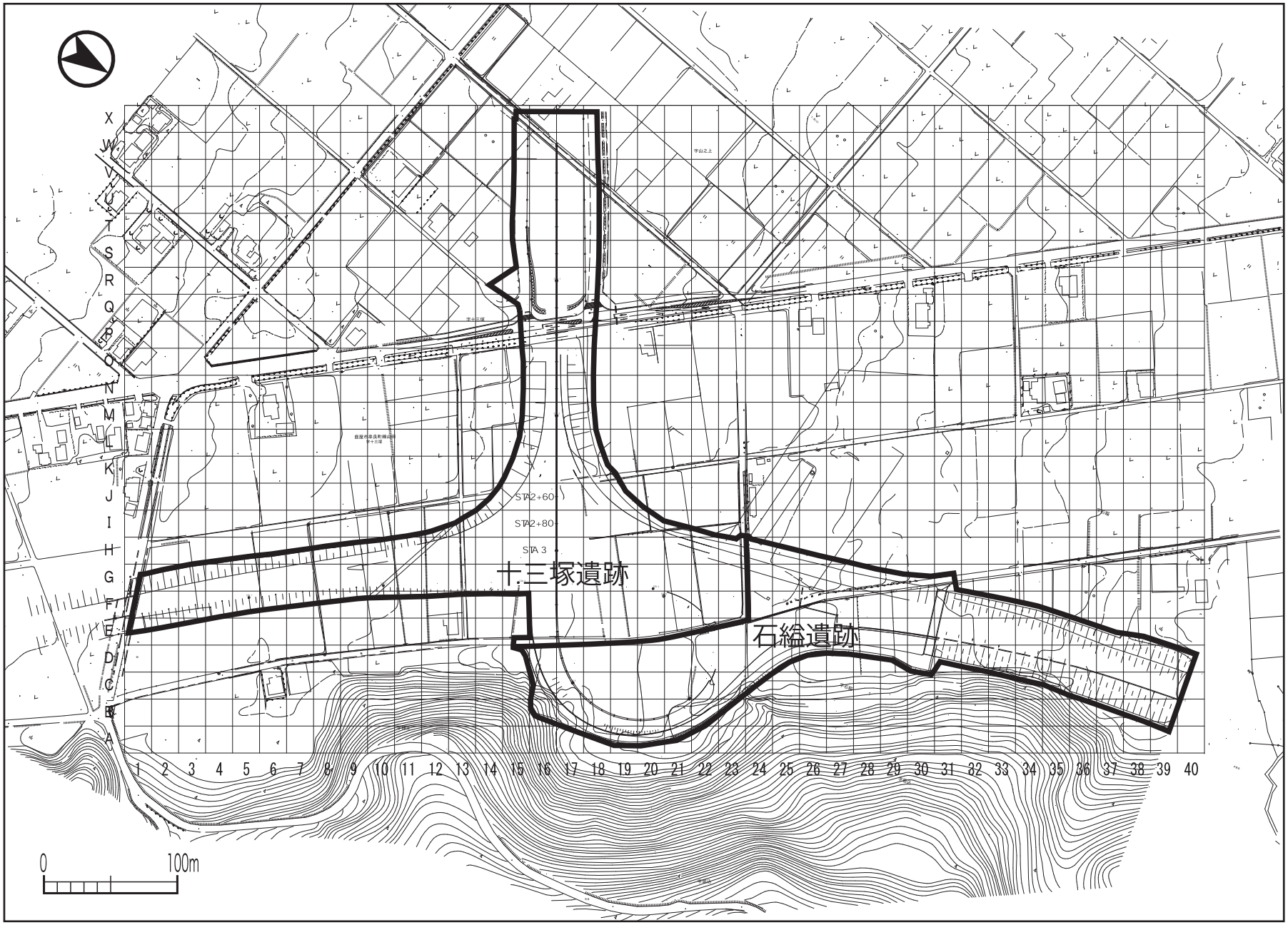
十三塚遺跡検出遺構の中心は，弥生時代中期のものである。遺物包含層（Ⅱ層）は基本的に黒褐色土を呈する土層である。若干の色調の違いから６層に分類した。しかし，遺構の立ち上がり部分はⅡｆ層（池田降下軽石層）に掘り込まれた部分で検出したものが多かった。上位については，黒色系の中の黒色系という関係もあり，なかなか検出は困難であった。しかし，天候状況，時間帯によっては朧気ながらにプランが見えた場合もあった。

なかでも注目すべきは，竪穴住居跡３号・６号・７号で，青紫色の硬質砂質層が直径約５ｍの範囲でリング状に検出されたことから確認された。遺構検出のきっかけとなった青紫色の硬質砂質層は本遺跡の埋土層にはなかったものであるが，これは開聞岳起源の暗紫ゴラである可能性が高いと考えられる。

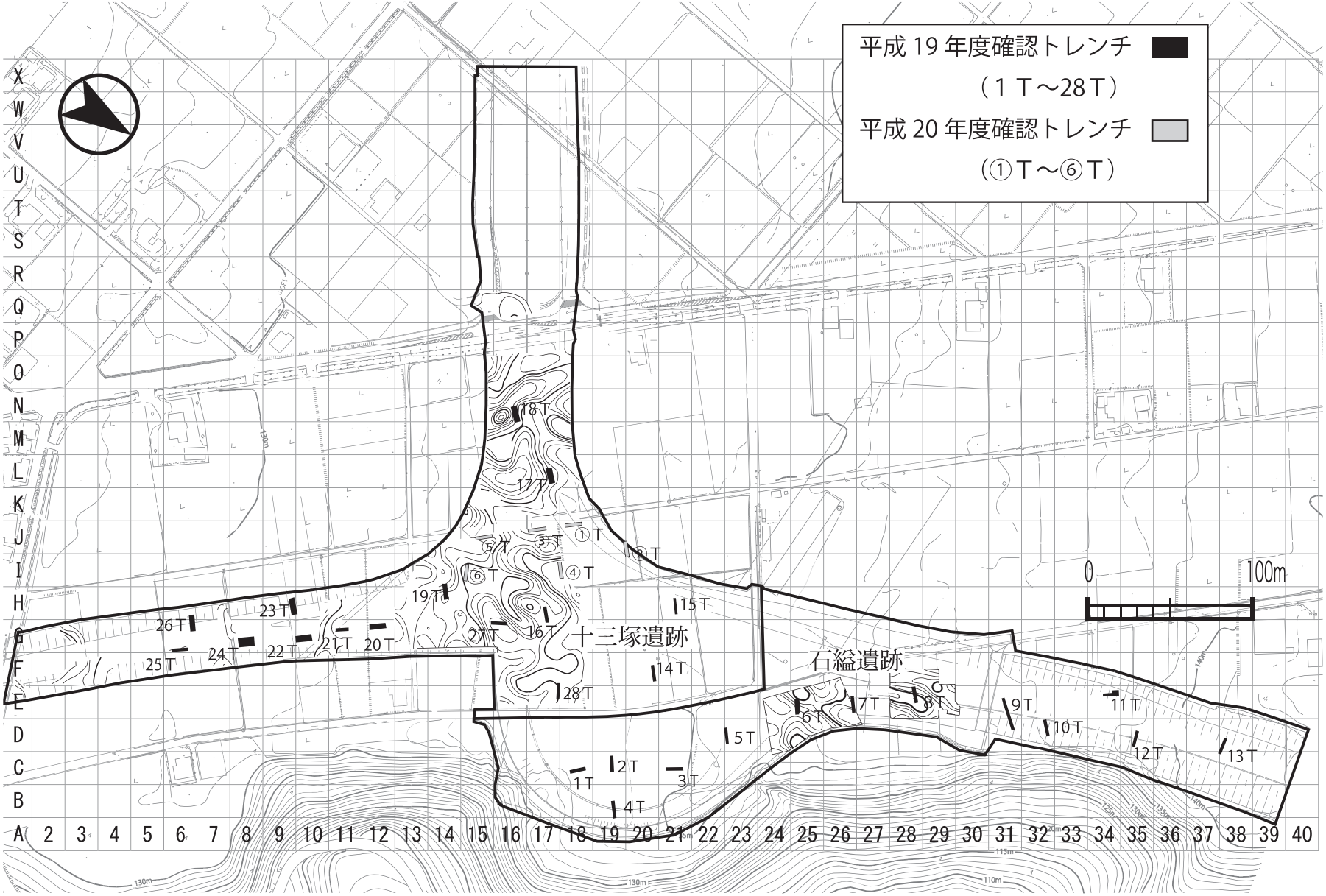
この暗紫ゴラは同じ大隅半島南部の錦江町山ノ口遺跡で，弥生時代中期後半の山ノ口式土器に覆い被さっていたとされること，南大隅町の谷添遺跡の竪穴住居跡でも同様であったことから，本遺構の時期推定に興味深い結果を導いてくれることとなった。つまり，竪穴住居跡は暗紫ゴラの噴出以前に構築されたものであり，住居跡廃棄のあとに暗紫ゴラの噴出があったものではないかと考える。その他の住居跡には本遺跡の基本土層と同様に，暗紫ゴラの層は検出できていない。若干の時代差があったのかどうかは今後の検討課題である。

３　整理・報告書作成作業の方法

本報告書刊行に伴う整理，報告書作成作業は，平成22年４月～平成23年３月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。出土遺物の水洗い，注記，十三塚遺跡の遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，石器や一般礫の石材分類，図面整理を行ったあと，石縄遺跡の土坑や集石遺構のトレース，遺構図作成，十三塚遺跡で出土した土器の実測・拓本・トレース，両遺跡の石器の実測委託を行った。また，鹿児島大学法文学部准教授の本田道輝氏と同大学埋蔵文化財調査室准教授の中村直子氏に遺構・遺物に関する指導を頂いた。



第５図　石縄遺跡・十三塚遺跡グリッド配置図



第 6 図　石縄遺跡・十三塚遺跡発掘調査範囲

第２節　層序

石縊遺跡と十三塚遺跡は同じ台地上に位置しているため，基本的な層序は同じで，Ⅰ層（表土）～Ⅸ層（ＡＴ＝シラスの二次堆積層）に分層した。（土層柱状図参照）ただし，両遺跡とも場所によっては起伏や傾斜があったり，耕作による攪乱を受けていたりしたため基本層序と一致しない箇所もあった。

Ⅰ層は表土（旧耕作土）で耕作時にトレンチャーを使用した跡が多く見られ下部の層まで攪乱しているところもある。

Ⅱ層は縄文時代後期，弥生時代前期・中期の遺物包含層である。色調が池田降下軽石を含む層まで全体的に黒褐色を呈する土層である。また，オレンジパミスや池田降下軽石を含む層はやや茶褐色化しており，黒褐色土と茶褐色土が交互に堆積していることが判明したため，Ⅱａ層～Ⅱｆ層の６つに分層した。

Ⅱａ層　暗黒褐色土

Ⅱｂ層　茶褐色土で直径２～５㎜のオレンジパミスを含む。

Ⅱｃ層　黒褐色土

Ⅱｄ層　茶褐色土で直径２～５㎜のオレンジパミスを含むが，Ⅱｂ層よりもパミスの量が多い。

Ⅱｅ層　暗黒褐色土

Ⅱｆ層　茶褐色土で上部に池田降下軽石（約6,400年前）を含む。

第３表　石縊遺跡・十三塚遺跡基本土層

Ⅰ　層	表土
Ⅱａ層	暗黒褐色土
Ⅱｂ層	茶褐色土（黄橙色パミス混）
Ⅱｃ層	黒褐色土
Ⅱｄ層	茶褐色土（黄橙色パミス混）
Ⅱｅ層	黒褐色土
Ⅱｆ層	茶褐色土（黄色パミス混）
Ⅲ　層	暗橙褐色土
Ⅳａ層	黒褐色弱粘土質土（黄橙色パミス混）
Ⅳｂ層	黒褐色土（黄橙色パミス混）
Ⅳｃ層	暗茶褐色土
Ⅴ　層	暗黄褐色砂質土
Ⅵａ層	暗茶褐色粘質土
Ⅵｂ層	茶褐色粘質土
Ⅵｃ層	茶褐色弱粘質土
Ⅶ　層	褐色土（赤橙色パミス混）
Ⅶａ層	暗茶褐色土（赤橙色パミス混）
Ⅶｂ層	茶褐色土（赤橙色パミス混）
Ⅶｃ層	明茶褐色土（赤橙色パミス混）
Ⅸ　層	黄褐色土

Ⅲ層は暗橙褐色土で下部にアカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）を含むアカホヤの腐植土層である。

Ⅳ層はＰ13（約10,600年前，桜島起源の噴出物）を含む黒褐色土及び茶褐色土である。Ｐ13が含まれる量によりⅣａ層～Ⅳｃ層３つに分層した。縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅳａ層　粘質の弱い黒褐色土でＰ13が点在している。縄文時代早期後半の遺物包含層である。

Ⅳｂ層　黒褐色土でＰ13が集中している。縄文時代早期前半と後半の遺物が混在した包含層である。

Ⅳｃ層　暗茶褐色土でＰ13の量がⅣａ層・Ⅳｂ層と比べて極端に少ない。縄文時代早期前半の遺物包含層である。

Ⅴ層は暗黄褐色砂質土でＰ14（約12,800年前，桜島起源の噴出物で「薩摩火山灰」とも呼ばれる。）

Ⅵ層は粘質土で「チョコ層」と言われる層である。粘質や色調の違いから３つに分層した。一般的にはこの層が縄文時代草創期と旧石器時代の細石器文化期が混在する層であるが，石縊遺跡・十三塚遺跡では旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。

Ⅵａ層　暗茶褐色粘質土で粘質が強い。

Ⅵｂ層　茶褐色粘質土で粘質がやや強い。

Ⅵｃ層　茶褐色弱粘質土で粘質が弱い。

Ⅶ層は褐色土でＰ15（詳細な年代は不詳。桜島起源の噴出物）と思われるオレンジパミスが含まれる。

Ⅷ層はＰ17（約26,000年前，桜島起源の噴出物）と思われるオレンジパミスが含まれる層でＰ17が含まれる量や色調の違いから３つに分層した。

Ⅷａ層　暗茶褐色土でＰ17が点在する。

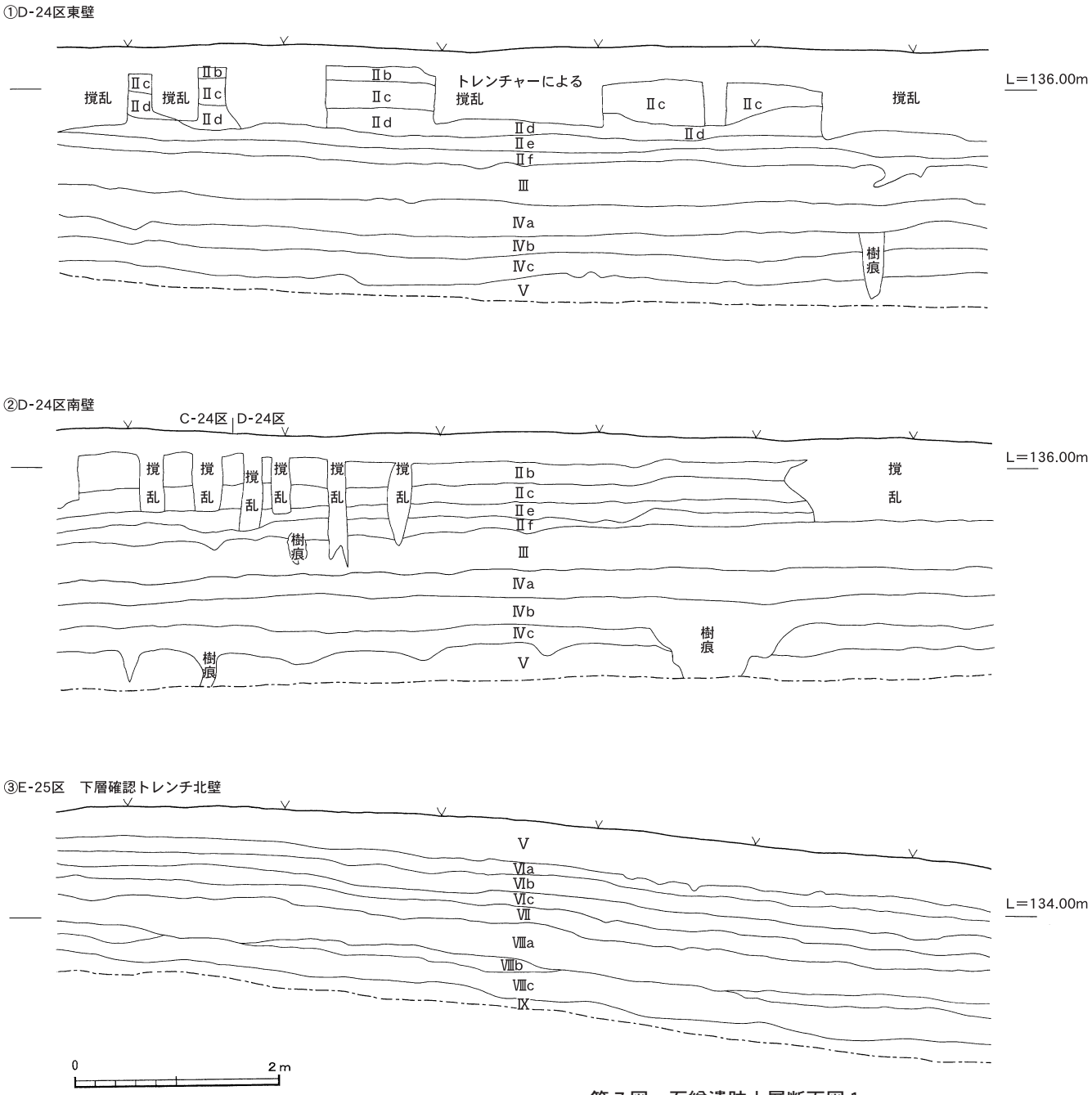
Ⅷｂ層　茶褐色土でＰ17が多く含まれる。

Ⅷｃ層　明茶褐色土で極少量のＰ17と直径５～20㎜程度の礫が混在する。

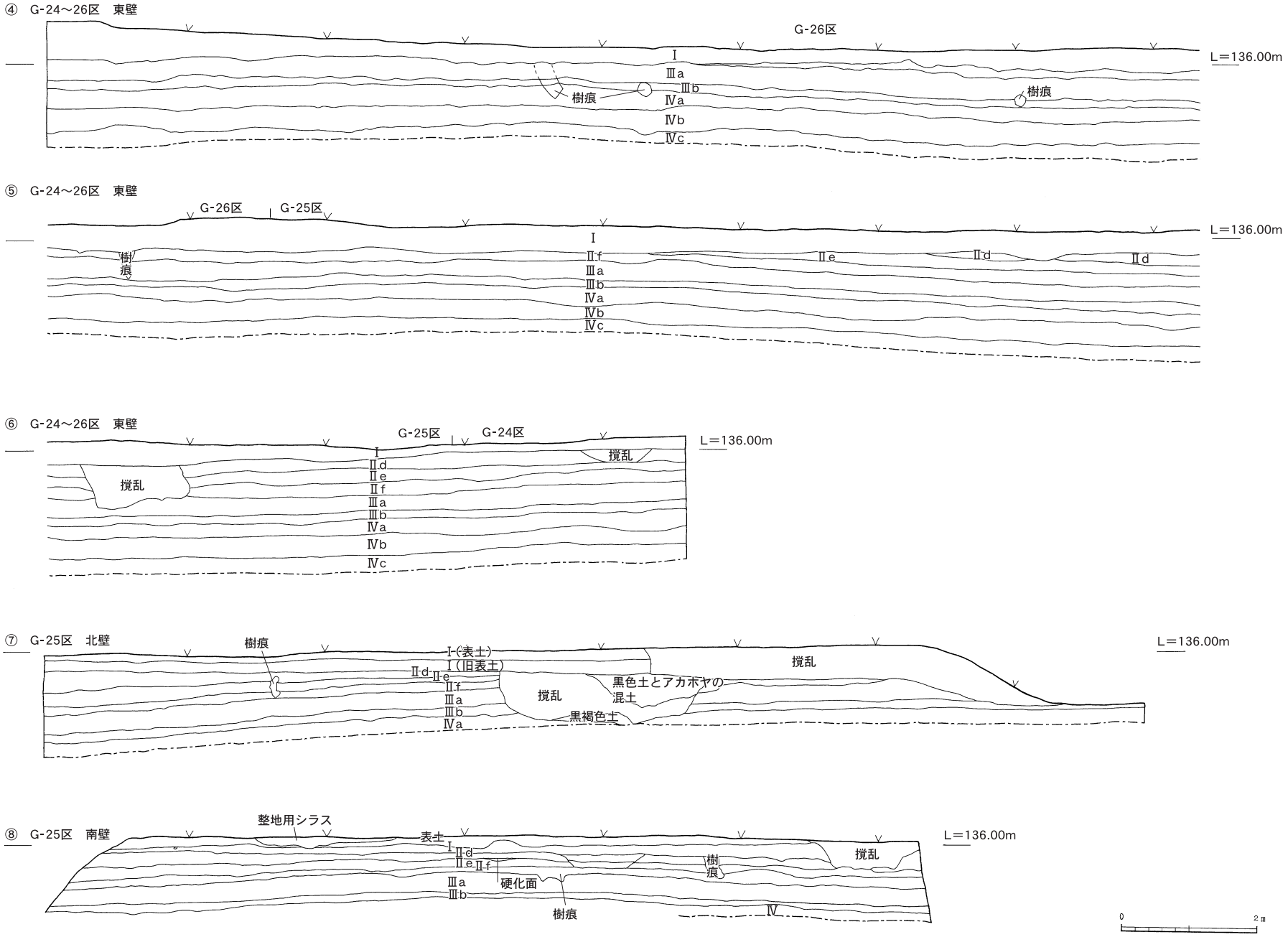
Ⅸ層はシラス（約26,000～29,000年前の姶良カルデラ起源の噴出物）の二次堆積層である。

石縊遺跡・十三塚遺跡での調査過程で鍵となった層は池田降下軽石を含むⅡｆ層，アカホヤ火山灰を含むⅢ層，Ｐ13を多く含むⅣｂ層，薩摩火山灰（Ｐ14）層のⅤ層であった。

※火山灰等の年代については『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』　町田洋　新井房夫著　東京大学出版会　2003を参考にした。

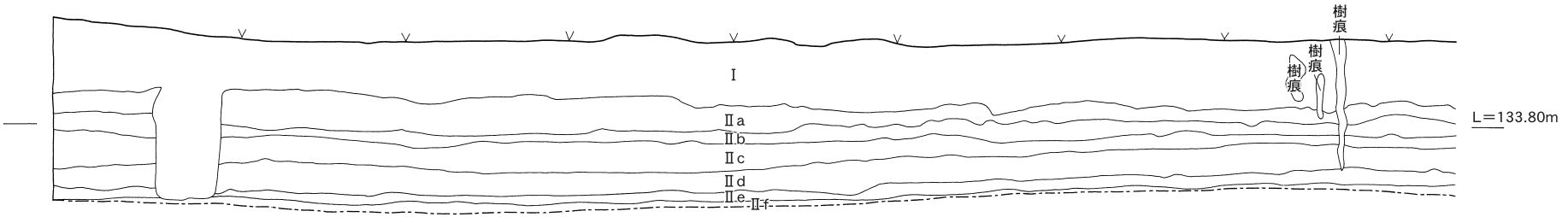


第７図　石縁遺跡土層断面図１

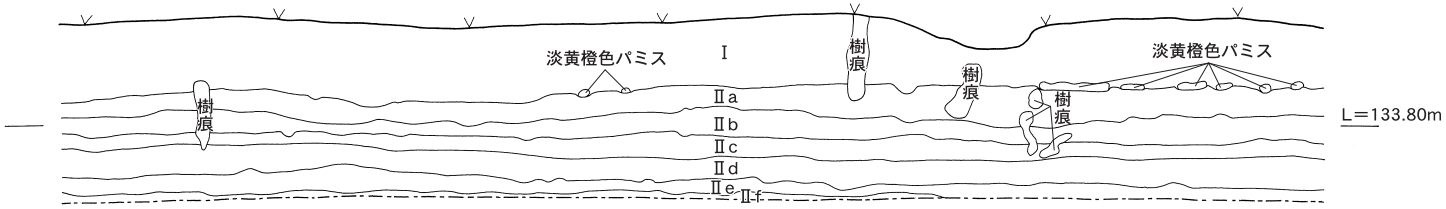


第８図　石縄遺跡土層断面図２

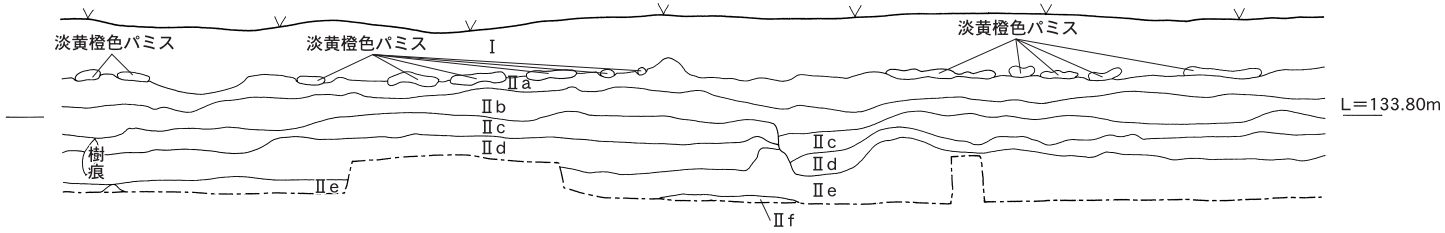
⑨ I・J-15・16区　北壁



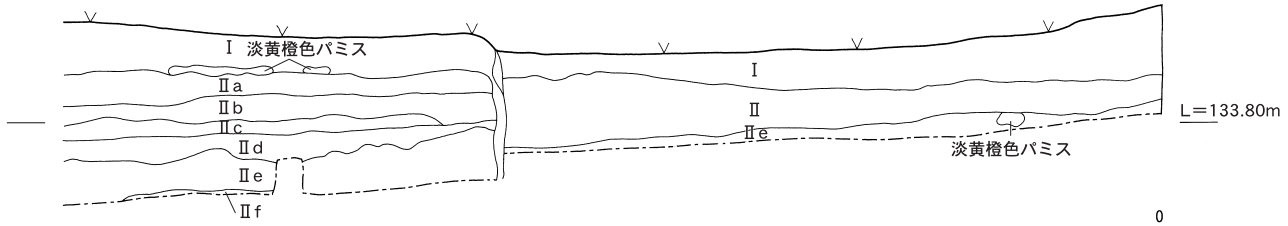
⑩ I-15・16区　北壁

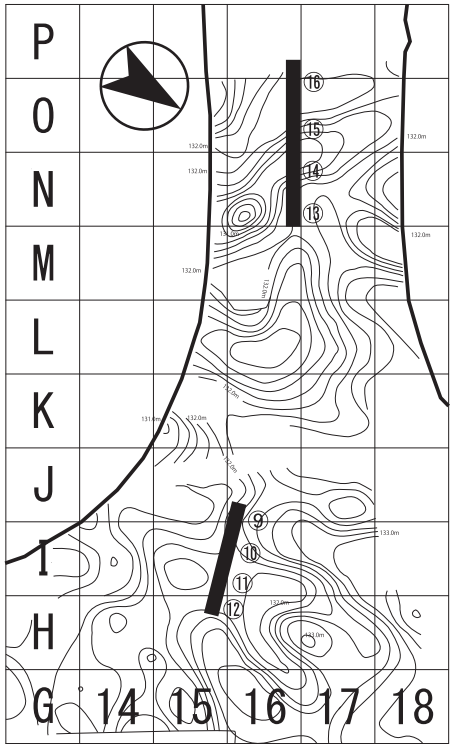


⑪ I-15・16区　北壁



⑫ H・I-15区　北壁

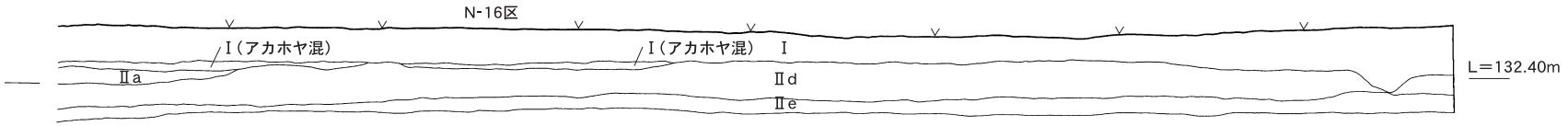




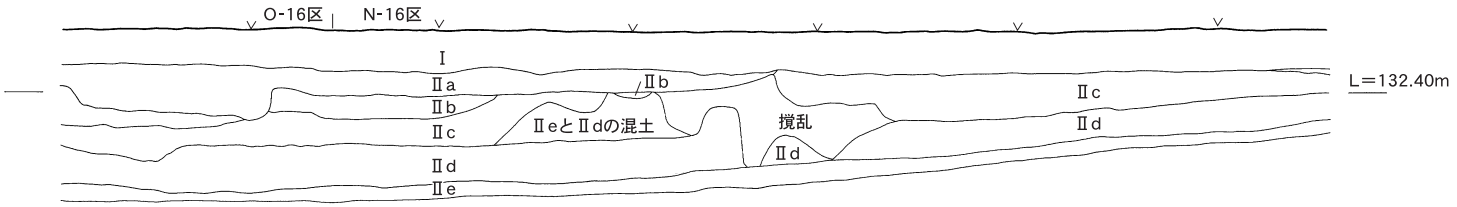
0　2m

第９図　十三塚遺跡土層断面図１

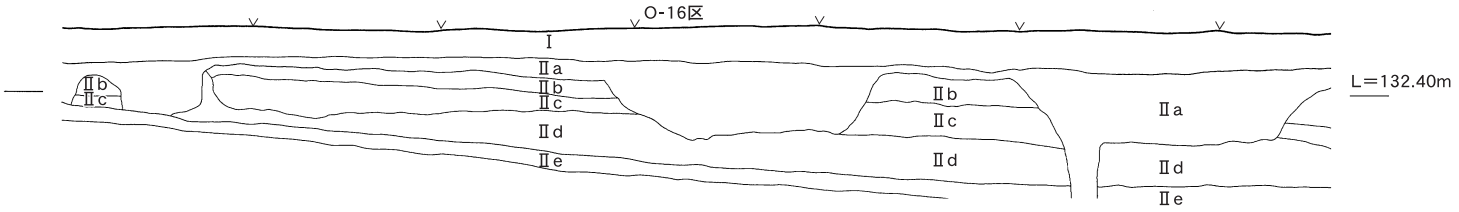
⑬ N-16区　北壁



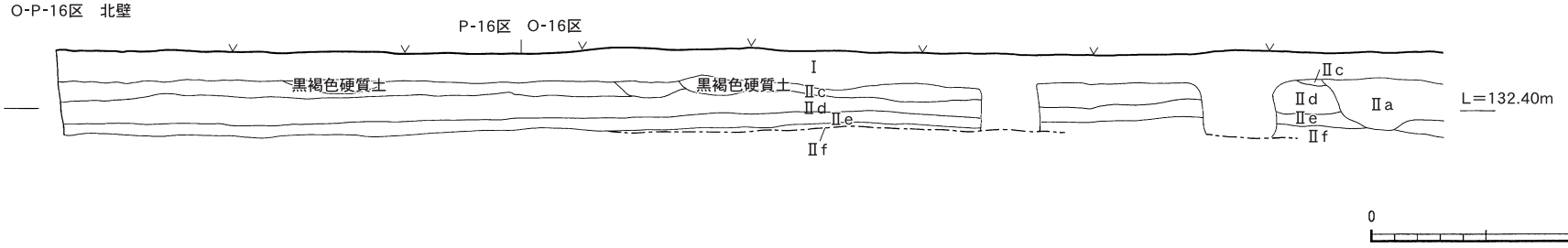
⑭ N-O-16区　北壁



⑮ O-16区　北壁



⑯ O-P-16区　北壁



第10図　十三塚遺跡土層断面図２

第４章　石縄遺跡の調査と成果

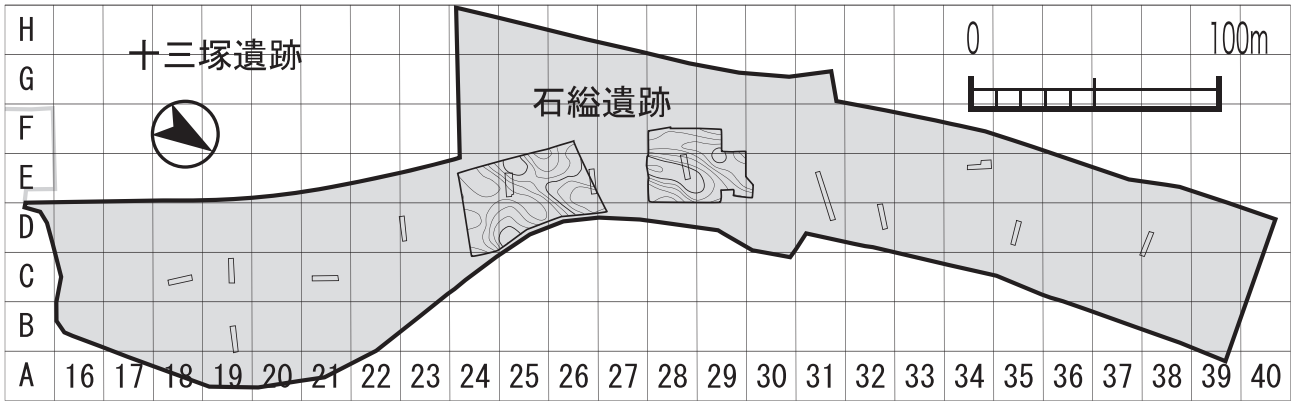
第１節　縄文時代の調査と成果

１　調査の概要（第11・12図）

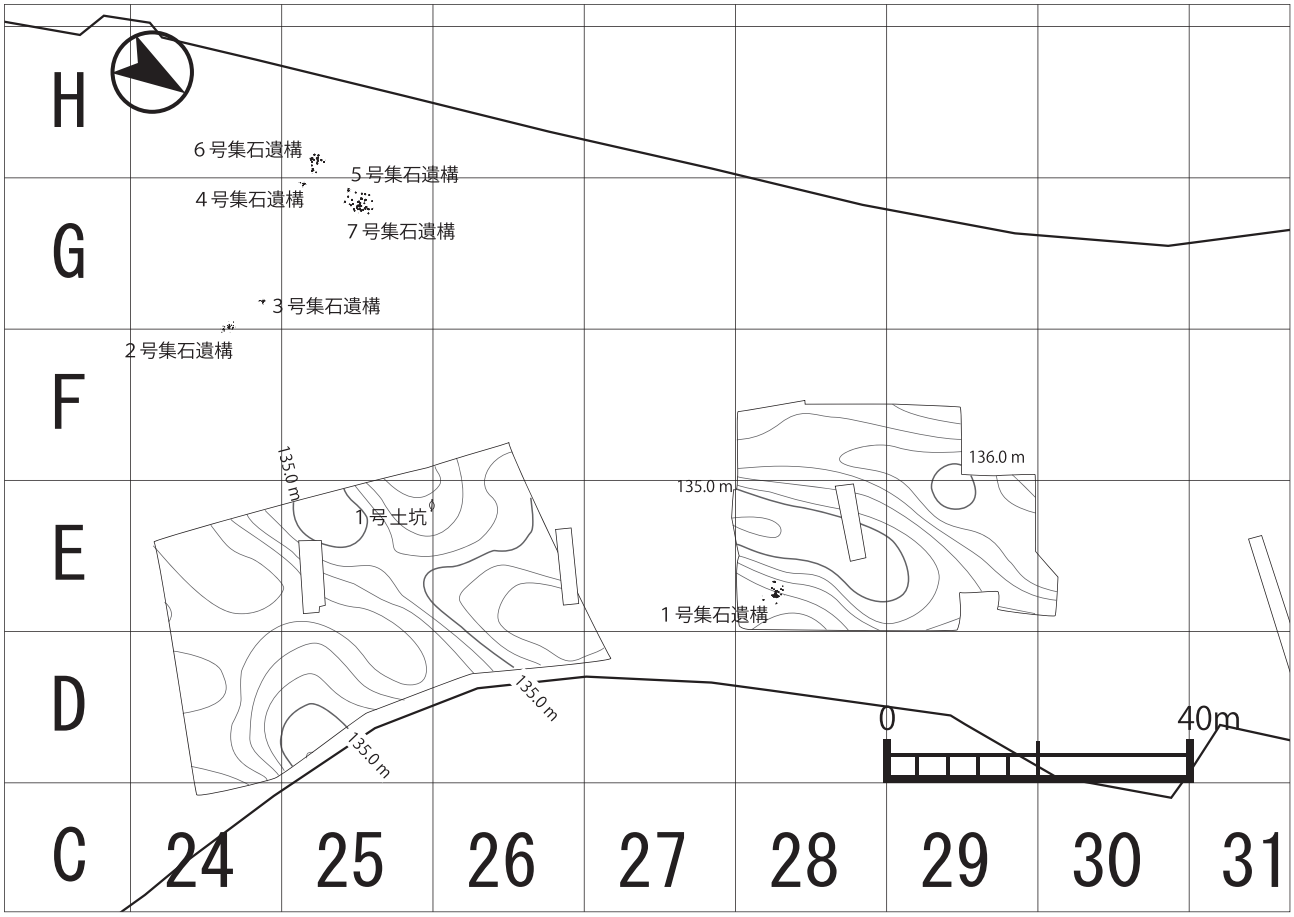
平成19年度は13の確認トレンチを設定し，確認調査を行った。重機で表土を剥いだ後，薩摩火山灰層（Ⅴ層）上面まで人力で掘り下げ，薩摩火山灰層（Ⅴ層）を重機で剥いだ後，旧石器時代該当層を人力で掘り下げるという方法で調査を行った。

確認調査の結果に基づき，石縄遺跡の本調査は，下図の部分を調査した。遺跡内の位置を決定するために，20ｍ×20ｍのグリッドを設定して行った。グリッドは，本遺跡が十三塚遺跡と隣接することから，東九州自動車道建設予定地のセンター杭ＳＴＡ２＋80とＳＴＡ３を基準に両遺跡を含むよう設定した。その結果，十三塚遺跡から石縄遺跡に向かって１から40まで，東から西へＡ～Ｘまでのグリッドが設定され，石縄遺跡は，農道を挟み，Ｂ～Ｈ，24～40区を調査区域とした。

調査の結果，縄文時代早期の土坑，土器や石器，弥生時代中期の土器が出土した。



第11図　石縄遺跡調査範囲図



第12図　石縄遺跡縄文時代遺構配置図

2　調査の成果

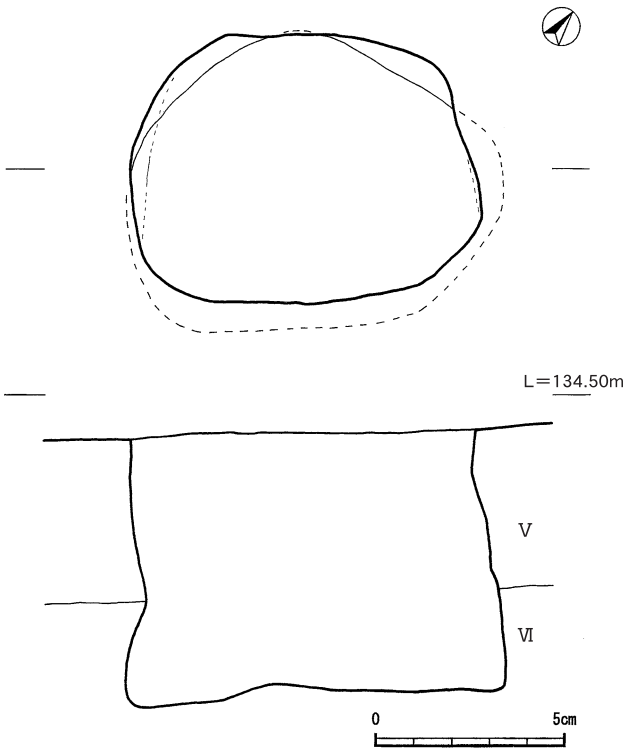
⑴　遺構（第13～17図）

ア　土坑（第13図）

Ｅ－25・26区，Ⅴ層上面で検出された。長軸は93㎝，短軸71㎝で検出面からの深さは72㎝であった。平面は楕円形で断面は箱形を呈し，床面はⅥ層まで掘りこまれている。埋土は黒褐色でⅣｂ層に近く，全体的に黄褐色のＰ13のパミスが入っている。また，一部にⅥ層に近い茶褐色土が混ざっている。周囲に遺物が少なく，他に遺構もないことから落とし穴の可能性が考えられるが，底面に小ピットなどは検出されなかった。

イ　集石遺構（第14～17図）

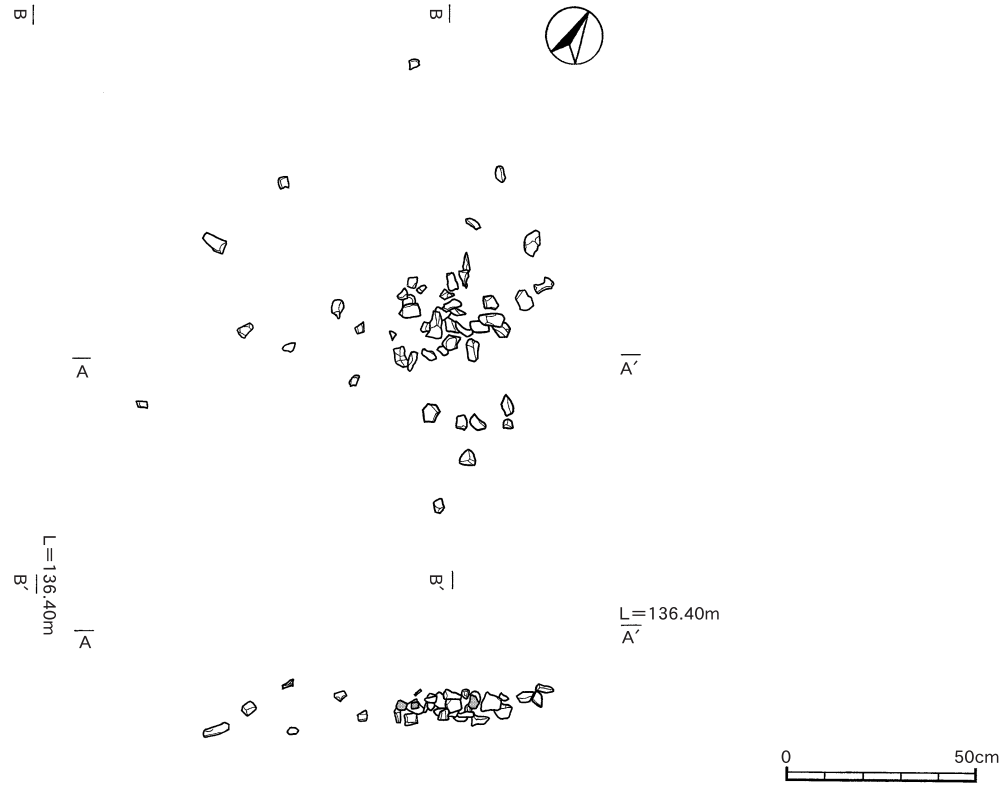
７基の集石遺構は，１基がＥ－28区に単独で，６基が南東側（Ｆ～Ｈ－24～25区）で検出された。南東側では礫がまばらに散在しており，その中でまとまっているものを集石遺構とした。周辺からはほとんどレベル差のない状況で石坂式の土器片が出土しており，ほぼ同一時期の集石遺構と考えられる。



第13図　石綘遺跡１号土坑

１号集石遺構（第14図）

Ｅ－28区，Ⅳ層で検出された。119×108㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。礫は全部で48点であった。石材は砂岩10点，安山岩38点である。礫の重さは10ｇから140ｇまである。礫は全て火熱を受けた小さな礫が多く，煤が付着しているものもあった。



第14図　石綘遺跡１号集石遺構

２号集石遺構（第15図）

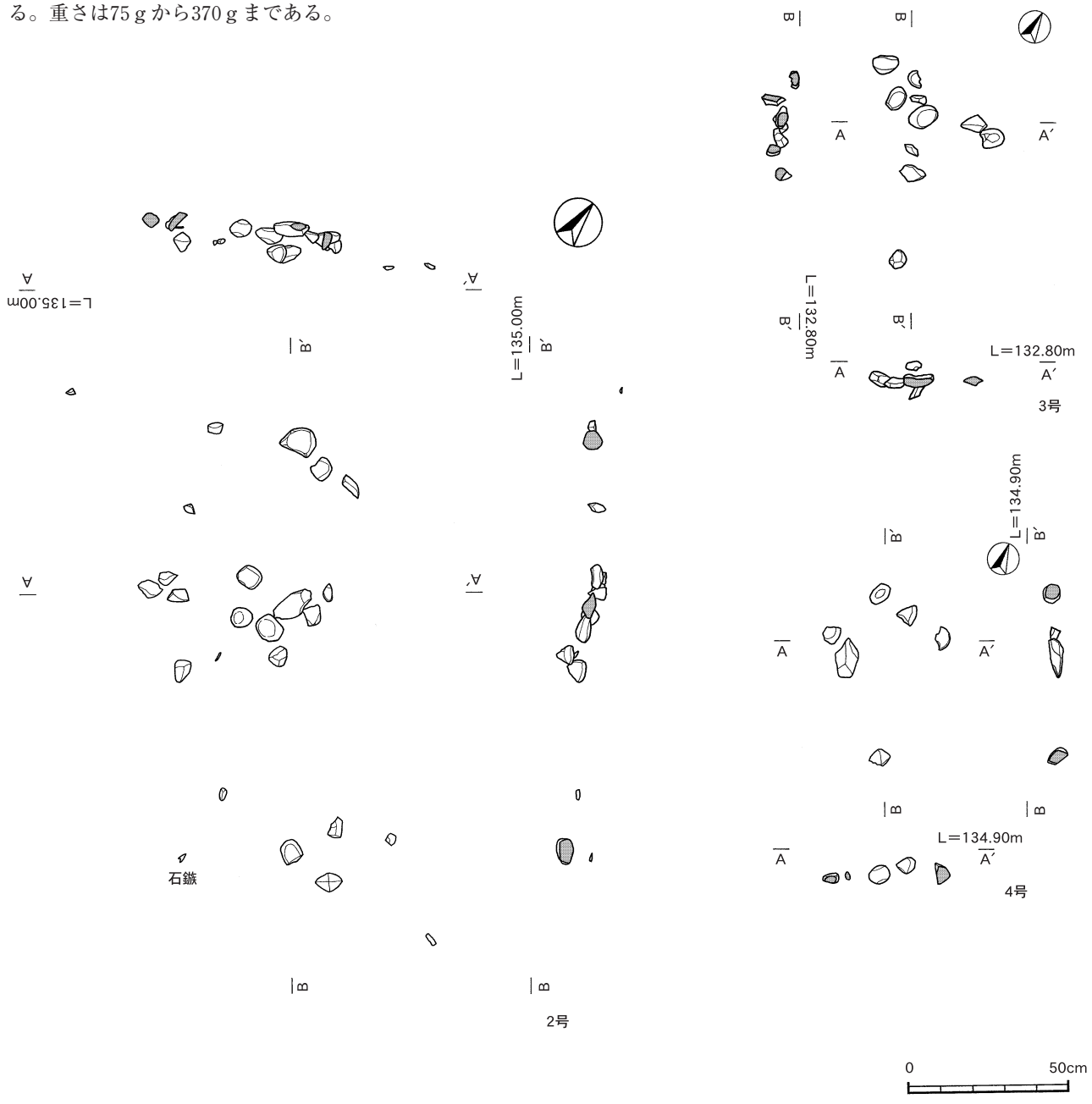
Ｆ・Ｇ－24区，Ⅳｂ層で検出された。175×115㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。24点の礫で構成されていたが，２点は同一個体であった。石材は砂岩１点，安山岩22点の円礫である。重さは５ｇの小破片から880ｇのものまである。

３号集石遺構（第15図）

Ｅ－24区，Ⅳｂ層で検出された。58×41㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。10点の礫で構成されていた。石材は砂岩が１点，安山岩９点である。重さは75ｇから370ｇまである。

４号集石遺構（第15図）

Ｇ－25区，Ⅳｂ層で検出された。57×40㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。６点の礫で構成され，石材は全て安山岩である。重さは95ｇから430ｇまである。



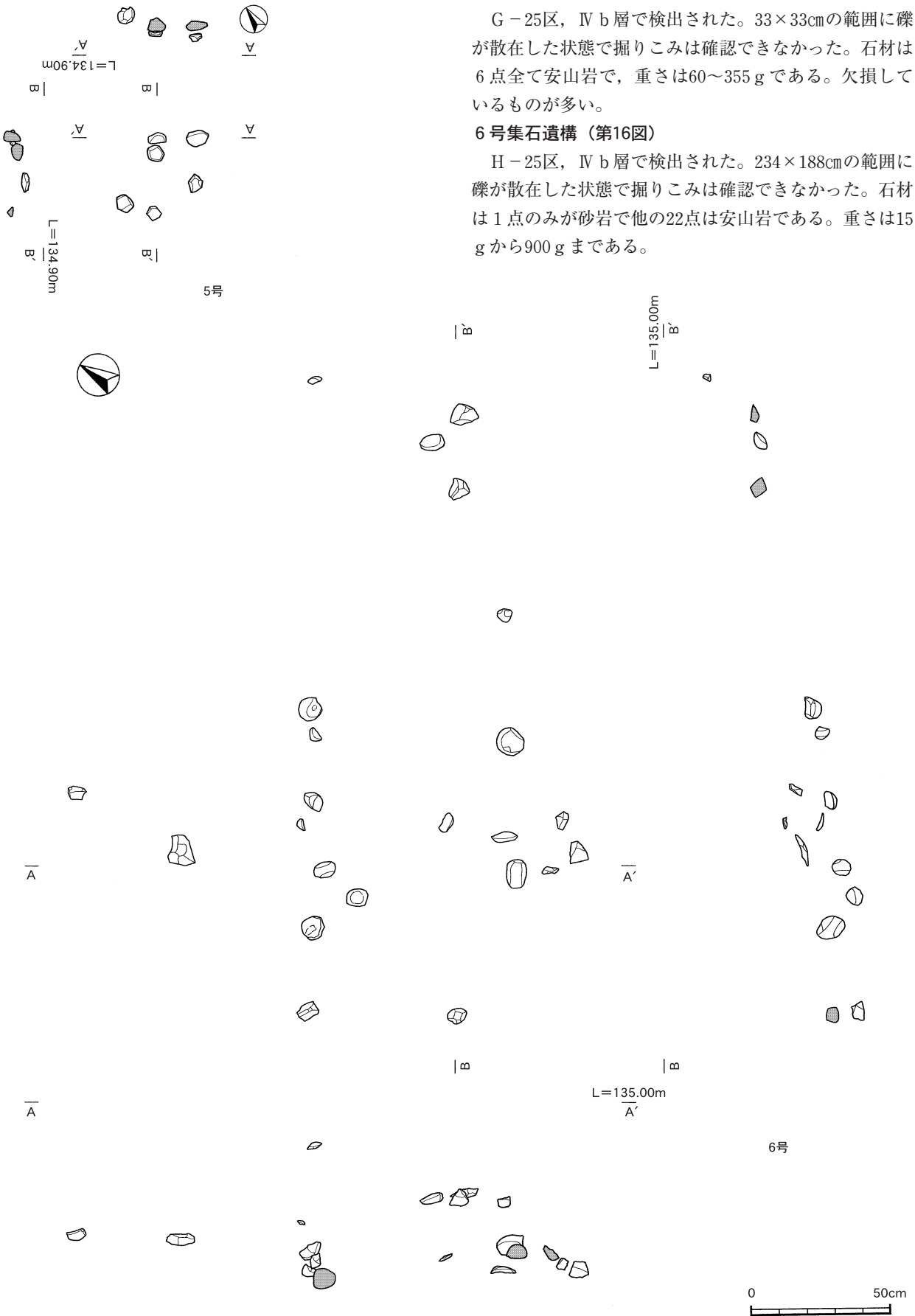
第15図　石綘遺跡２～４号集石遺構

５号集石遺構（第16図）

Ｇ－25区，Ⅳｂ層で検出された。33×33㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。石材は６点全て安山岩で，重さは60～355ｇである。欠損しているものが多い。

６号集石遺構（第16図）

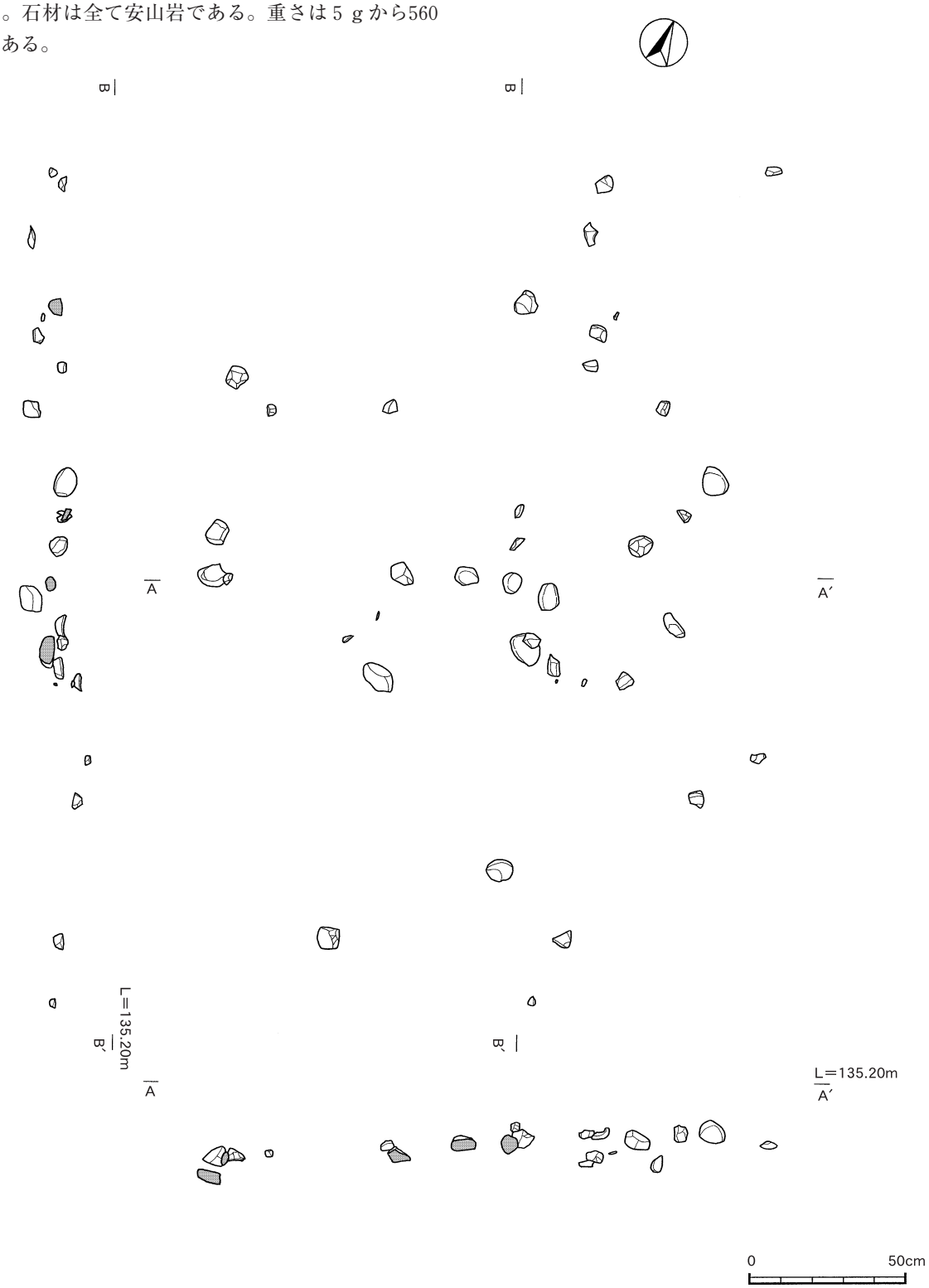
Ｈ－25区，Ⅳｂ層で検出された。234×188㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。石材は１点のみが砂岩で他の22点は安山岩である。重さは15ｇから900ｇまである。



第16図　石綘遺跡５・６号集石遺構

７号集石遺構（第17図）

Ｇ－25区，Ⅳｂ層で検出された。187×269㎝の範囲に礫が散在した状態で掘りこみは確認できなかった。39点の礫で構成されていたが，そのうち７点は同一個体であった。石材は全て安山岩である。重さは５ｇから560ｇまである。



第17図　石縊遺跡７号集石遺構

第４表　石綴遺跡集石遺構を構成する礫の重量分布

	～50（g）	51～100（g）	101～200（g）	201～300（g）	301～400（g）	401～500（g）	501～600（g）	601～700（g）	701～800（g）	801～900（g）	901～1000（g）	総数
1号集石遺構	27	12	9									48
2号集石遺構	6		7	3	4		2			1		23
3号集石遺構		2	1	5	2							10
4号集石遺構		1		2	2	1						6
5号集石遺構		1	1	2	2							6
6号集石遺構	3	4	5	3	5	2					1	23
7号集石遺構	8	5	5	2	7	3	3					33

⑵　遺物（第18・19図）

石綴遺跡では縄文時代早期前半から早期末までの土器が出土している。しかしながら，どの土器型式も１，２個体ほどしか出土しておらずごく少量の出土となっている。以下は石綴遺跡で出土した縄文土器の分類である。

土器の分類

Ⅰ類土器

器形　破片資料ではあるが，底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる円筒形を呈すると考えられる。

文様　口唇端部と口縁部上端に貝殻刺突文が巡る。

器面調整　外面胴部には貝殻条痕調整が行われるが薄い。内面は貝殻条痕調整後ナデが行われている。

土器型式　岩本式土器・前平式土器

Ⅱａ類土器

器形　底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる円筒形に近い形状を呈す平底の土器である。口唇部は平坦に整形され，やや内傾する。

文様　口縁部上端に貝殻刺突文が巡らされる。

器面調整　外面胴部には横位や斜位の貝殻条痕調整が行われている。外面底部は工具ナデが行われている。内面は工具ナデが行われている。

土器型式　前平式土器

Ⅱｂ類土器

器形　底部から口縁部まで直線的に立ち上がる平底の円筒形土器である。口唇部は平坦に整形される。

文様　口唇部にはヘラ状工具による押圧文が施される。口縁部上端にはヘラ状工具や貝殻腹縁による刺突文が巡らされる。

器面調整　胴部には横位もしくは略横位の貝殻条痕調整が行われている。外面底部は工具ナデが行われている。内面は工具ナデもしくはケズリ後ナデ調整が行われている。

土器型式　前平式土器　定塚１Ｂ類土器

Ⅲ類土器

器形　波状口縁を呈し，口縁部ではレモン形の器形を呈するが，底部は円形平底である。内傾する口唇部は平坦に整形されている。

文様　口縁部上端に貝殻押引文，胴部には縦位の流水文が施されている。

器面調整　外面は斜位の貝殻条痕調整，内面は貝殻を用いた粗いケズリが行われている。

土器型式　志風頭式土器

Ⅳ類土器

器形　口縁部が緩やかに外反し平底を呈する。外傾する口唇部は平坦に整形される。

文様　口唇部にはキザミが施される。口縁部には羽状の貝殻刺突文が施される。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されるが，底部付近のみ横位方向に施される。器面調整外面はナデ調整が行われている。底部は丁寧なナデが行われている。内面はナデ調整が行われている。

土器型式　石坂式土器

Ⅴ類土器

器形　破片資料のため全体の器形は不明であるが，胴部が緩やかに膨らむ器形であると考えられる。

文様　残存部は無文である。

器面調整　内外共にナデ調整が行われている。

土器型式　平栫式土器と考えられる

Ⅵａ類土器

器形　破片資料ではあるが，胴部下半から底部にかけてすぼまる砲弾型の器形を呈すると考えられるが，底部形は不明である。口唇部断面はかまぼこ状を呈する。

文様　縦位の貝殻条痕文の上から斜位の交差する貝殻条痕文を重ねて施している。

器面調整　外面全体に施される縦位の貝殻条痕は器面調整と見ることもできる。内面は貝殻条痕調整もしくは貝殻によるケズリが行われているが，口縁部付近は丁寧な工具ナデが行われている。

土器型式　早期末貝殻条痕文土器・鎌石橋式

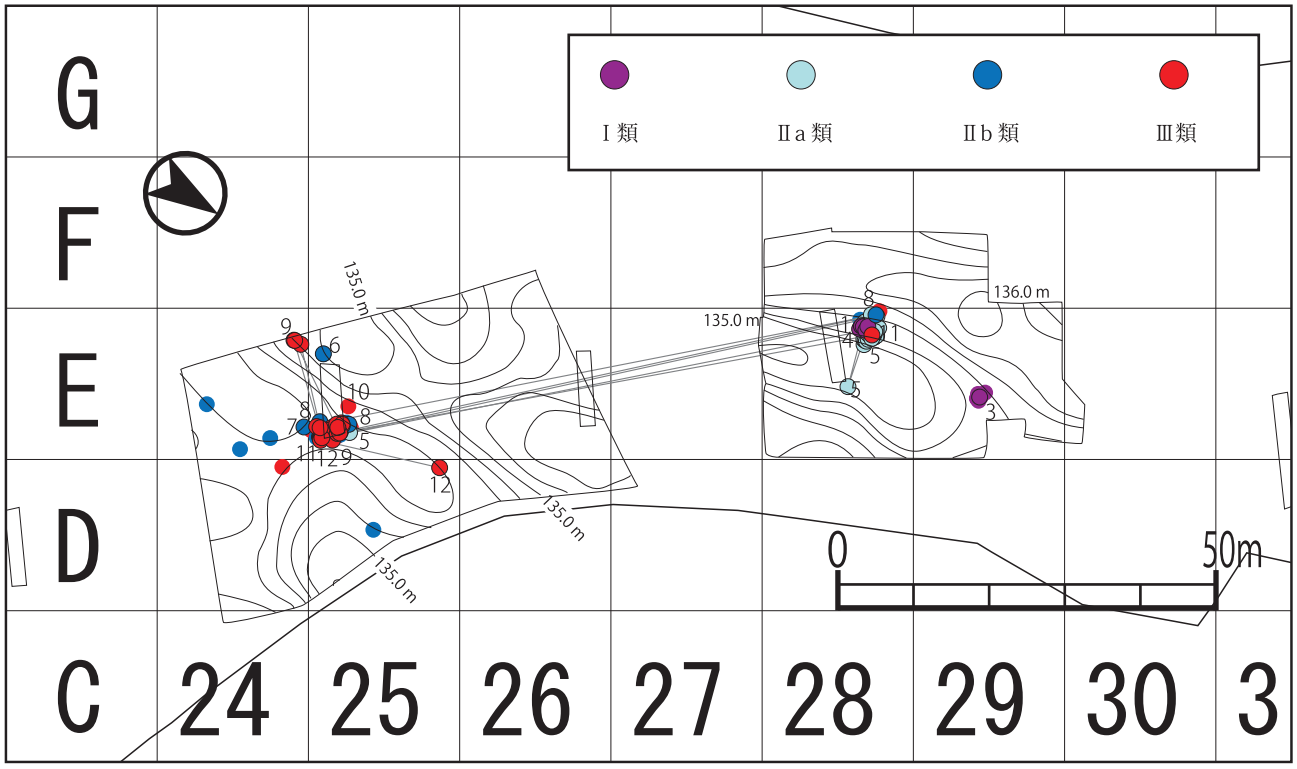
Ⅵb類土器

器形　破片資料のため全体の器形は不明であるが，口縁部が外側に開く深鉢形土器であると考えられる。底部の形状は不明。口唇部はやや平坦気味に整形されている。

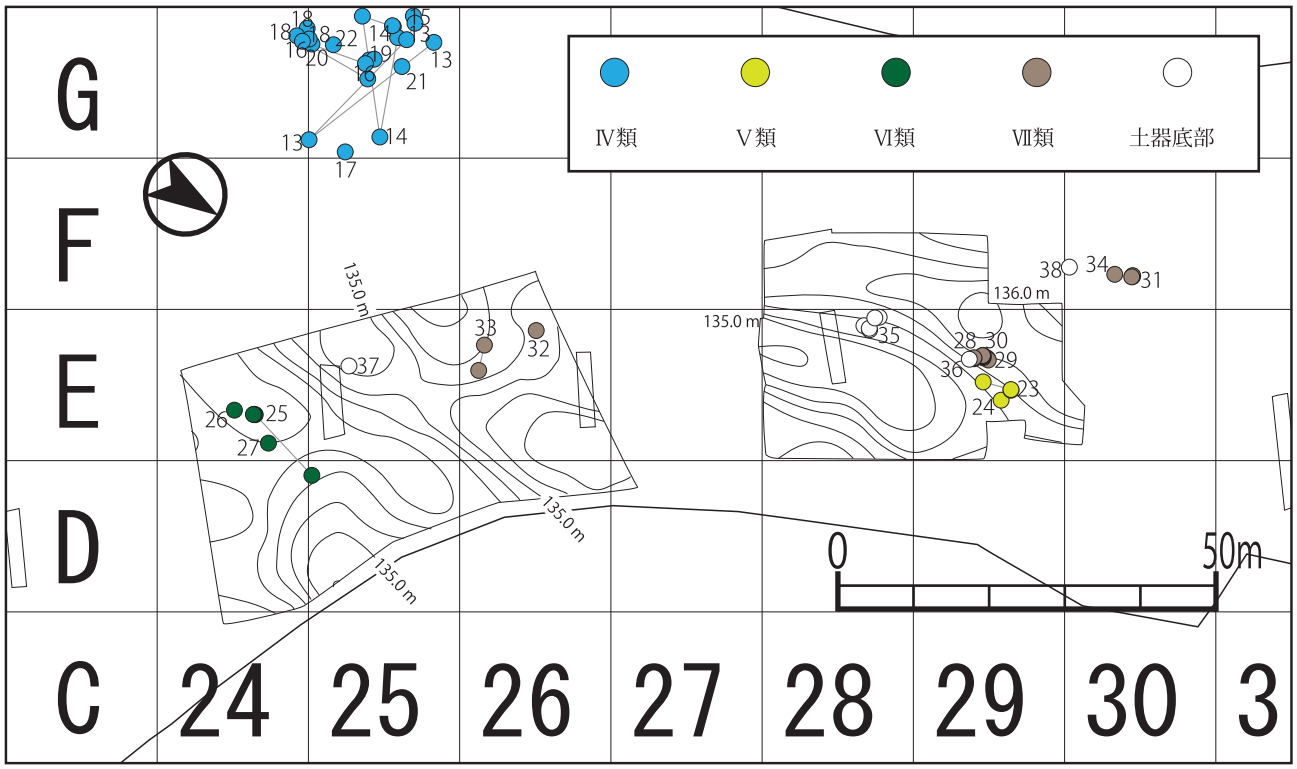
文様　貝殻条痕文が綾杉状に施されている。口縁部上端の貝殻条痕文を横位方向に施すものも見られる。口唇端部にはキザミが施されている。

器面調整　内面は貝殻条痕調整後にナデ調整が行われている。

土器型式　早期末貝殻条痕文土器・轟Ａ式（古段階）



第18図　石綘遺跡縄文時代早期前半土器出土状況図



第19図　石綘遺跡縄文時代早期後半土器出土状況図

縄文土器（第20～25図：１～38）

１～４はⅠ類土器であり，同一個体と考えられる。１～３は口縁部片であり，３点共に内面が激しく剥落しており，１は外面にも剥落が見られる。口唇部は一旦は平坦に整形されているが，外面側の口唇端部に幅の短い縦位の貝殻刺突文が巡らされるため，平坦部が残るのは口唇部の内面側のみである。口唇端部の縦位の短い貝殻刺突文の下位（口縁部上端）には斜位の貝殻刺突文が１条施されている。器面調整は胴部外面に横位から略横位の貝殻条痕調整が行われており，この貝殻条痕は全体的に薄く施されている。なお，外面の貝殻条痕調整は口縁部上端の貝殻刺突文を施したあとから行われている。内面は丁寧な工具ナデが行われている。４は胴部片である。外面は剥落が非常に激しいが，残存部から判断できる内外面の器面調整は口縁部片と同様である。

５はⅡａ類土器の完形品である。口唇部は平坦に整形され，工具によると考えられるナデ調整が行われている。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が１条施されている。部分的にはこの刺突を施す際の圧力により，口唇部の断面形が変形している部分も見られる。胴部には斜位の貝殻条痕調整が行われているが，口縁部の刺突文直下のみ横位方向に調整が行われ，胴部は斜位，底部付近は略横位方向に調整が行われている。口縁部刺突文直下の横位の貝殻条痕調整は刺突文を施した後に調整が行われており，また他の部位の調整よりも調整が強めに行われており，条痕が深くなっている。Ⅱ類土器の胴部に行われる貝殻条痕調整は，通常「左上から右下方向へ」の様に一方向に施される。５も大部分が左上から右下方向へ貝殻条痕調整が行われているが，一部分に右上から左下方向に調整が行われており，部分的にではあるが綾杉状になっている。底部外面は工具ナデ調整，内面は口縁部付近は丁寧なナデ調整，胴部中程から底部にかけては貝殻を用いたケズリが行われており，底部は貝殻条痕調整である。

６～８はⅡｂ類土器であり，同一個体と考えられる。６・７は口縁部片で，平坦に整形した口唇部にはヘラ状工具による押圧文が巡らされている。口縁部上端には異なった施文原体を用いた２条の刺突文が巡らされ，上段にはヘラ状工具による縦位の刺突文が，下段には縦位の貝殻刺突文が施されている。胴部には横位の貝殻条痕調整が行われているが，摩滅が激しい。また，Ⅱａ類の５と同様に胴部に施される貝殻条痕調整が刺突文直下のみ深く，それ以下の調整よりもはっきりと施されている。６の外面は一部剥落している。内面は口縁部付近は横位，胴部は縦位のケズリ後ナデ調整が行われている。８は胴部下半から底部の資料である。底部付近のみわずかに丸みをもつが，ほぼ直線的に立ち上がる器形を呈している。胴部外面には横位の貝殻条痕調整が行われている。底部は丁寧なナデ調整が行われており，一部に網代痕が残っている。内面は胴部から底部にかけて工具によるケズリが行われている。底部と胴部の接合は非常に丁寧におこなわれており，接合痕は確認できなかった。

９～12はⅢ類土器であり，同一個体と考えられ，レモン形の器形を呈する。９・10は口縁部片である。口唇部は平坦に整形され，やや内傾する。波状口縁を呈し，２か所の波頂部が確認できる。波頂部は胴部からほぼ垂直に立ち上がるが，その他の部分ではやや内傾する部分も見られる。口縁部上端には貝殻を用いた押引きの長さが１㎝程の短い押引文が２列連続して施されている。胴部には略横位の貝殻条痕調整が行われており，その上から貝殻を用いた２条の流水文が縦位方向に底部付近まで施されている。内面は貝殻を用いた粗いケズリが行われており，口縁部付近のみ横位，胴部は斜位方向に行われている。胎土には３～５㎜程の小礫が混ざっている。11は胴部片である。９・10と同様に縦位の流水文が確認できる。器面調整も９・10と同様である。12は底部片である。円形を呈し，このことから，この個体は口縁部はレモン形，底部は円形の器形を呈するものと推測される。外面は摩滅が激しいが，横位の貝殻条痕調整が行われており，その上から外面の底部末端まで流水文が施されている。内面はケズリが行われているが，底部と胴部のパーツを接合した痕跡と考えられるナデの痕跡も見られる。

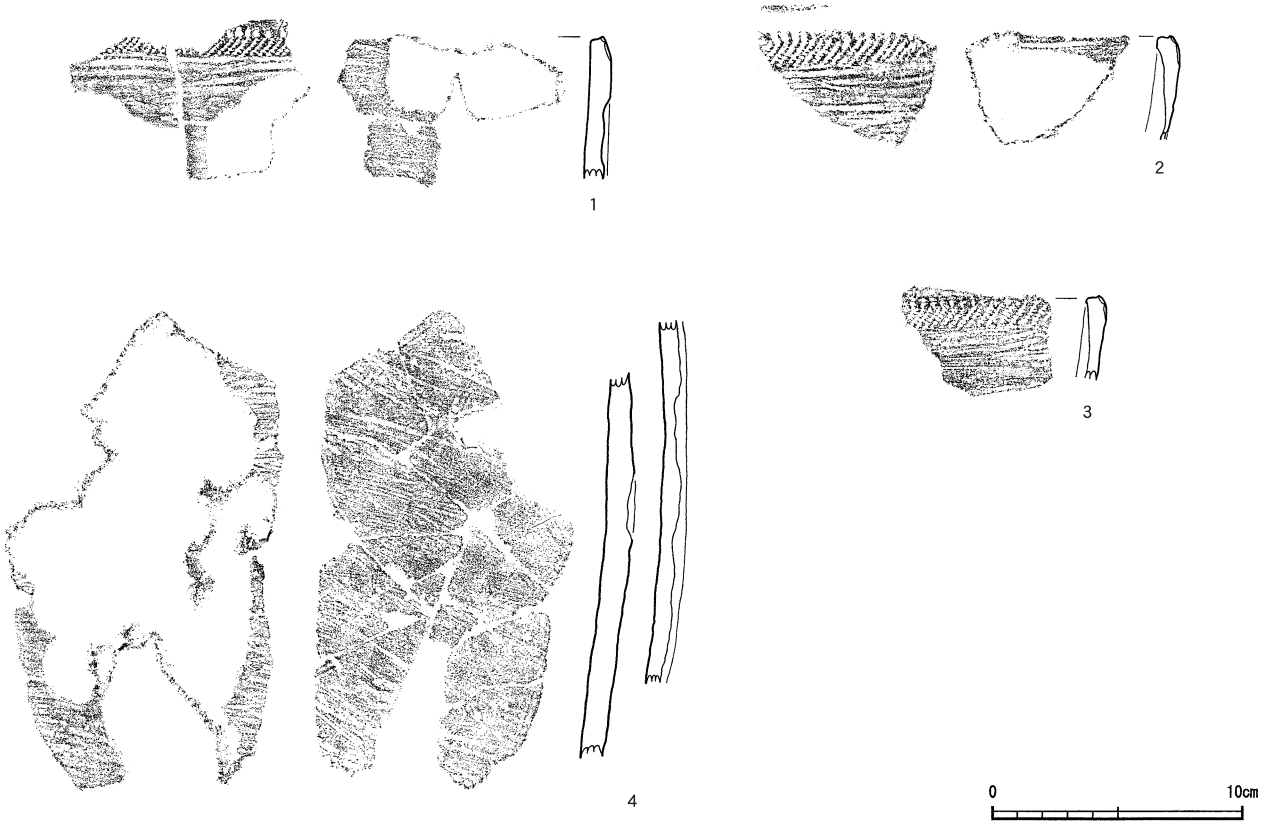
13～22はⅣ類土器である。13・14・16～19は口縁部片である。13・14は同一個体と考えられる。器壁が１㎝程の厚手の土器で，口縁部の外反する器形を呈する。全体的に摩滅しているが，口唇部は丸みをもち刻みが巡らされ，口縁部上端には羽状の貝殻刺突文が施されているのが確認できる。胴部には貝殻条痕文が綾杉状に施されている。内面の器面調整は口縁部付近ではナデ調整が行われている。胴部は摩滅が激しいため分かりにくいが口縁部と同様なナデ調整が行われていると考えられる。胎土に２，３㎜の白色の小礫を多量に含むのが特徴である。15は底部片であり，器面調整・胎土や色調から13・14と同一個体の可能性がある。外面には綾杉状の貝殻条痕文が施されているが，底部付近には横位の貝殻条痕文が施されている。底部は丁寧な工具ナデが行われている。胴部内面は丁寧な工具ナデが行われている。断面には底部と胴部の接合面の痕跡が確認できる。16は口縁部から胴部片，17は口縁部片であり，同一個体である。13・14と比較すると器壁が薄く，口唇部も平坦に整形された後に刻み目が施されるが，口唇部のみがやや肥厚するため，断面がカマボコ状にも見えるなど異なった特徴を持つが，器形・文様構成や施文原体などは13・14と同様である。16の内面は剥落が目立つが，器面調整はナデが行われている。18・19は口縁部片であり，同一個体である。口縁部上端には斜位の貝殻刺突文が１列施されており，胴部

には貝殻条痕文が綾杉状に施されている。器形は16・17に類似している。20は胴部片であり，貝殻条痕文が綾杉状に施されている。21・22は底部片である。横位の貝殻条痕文が施されており，底部に接する外面最下部にキザミが施されている。22は内面に底部片との接合面が確認でき，外面には剥落が見られる。

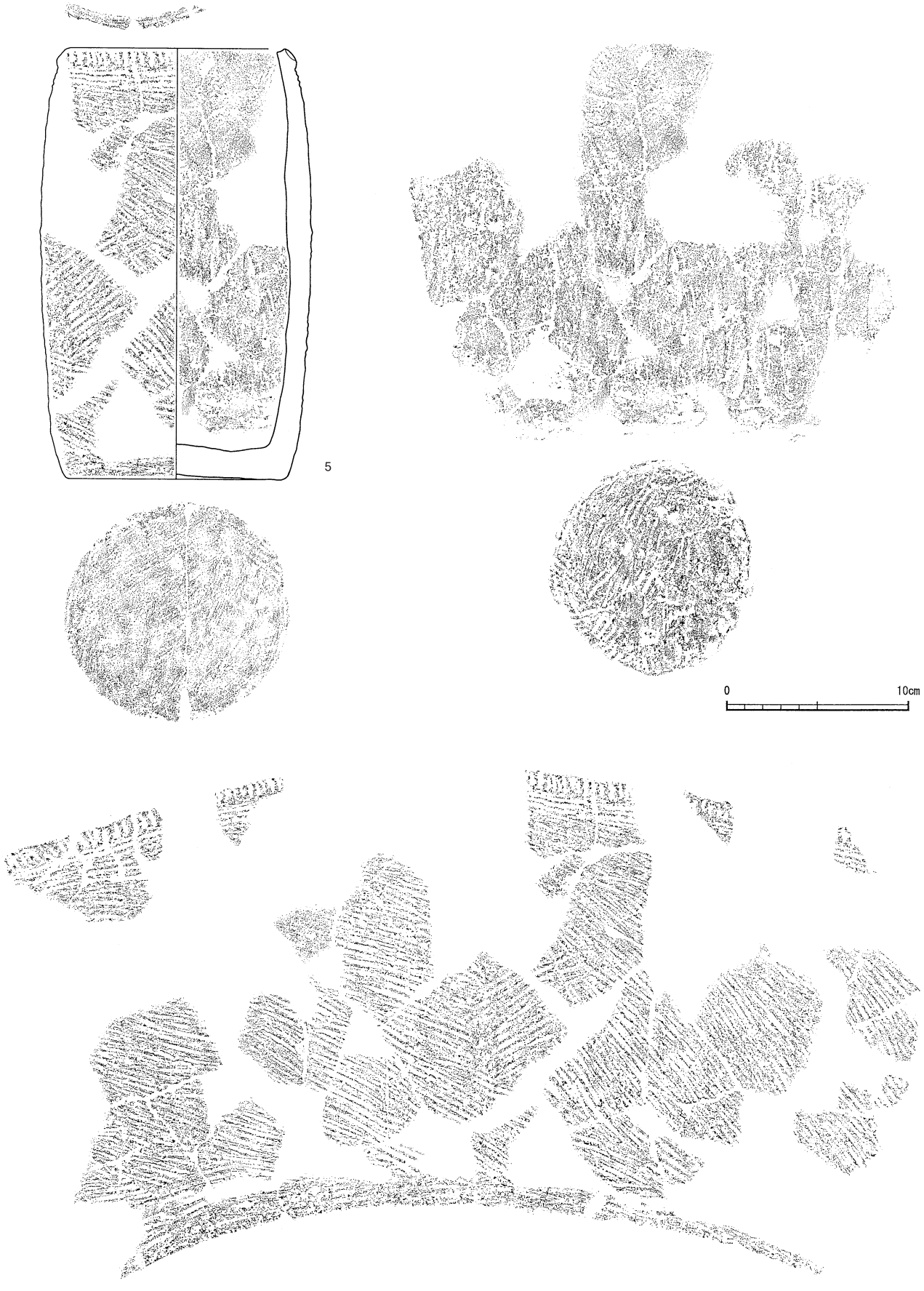
23・24はⅤ類土器であり，同一個体と考えられる。底部に近い部分の胴部片と考えられ，この部分には文様が確認できない。器面調整は外面はナデ調整，内面はケズリ後ナデ，もしくはナデ調整が行われている。

25～27はⅥａ類土器であり，同一個体と考えられる。やや外傾して立ち上がる断面カマボコ状の口縁部を呈する。外面には縦位の貝殻条痕調整が行われており，その上から斜位の貝殻条痕文が斜位方向に交差するように施されている。また，口唇端部には貝殻を用いたキザミの様に見える押圧文が施されている。内面は貝殻を用いた粗いケズリが行われており，口縁部付近や部分的にはケズリ後ナデが行われている。部分的には貝殻条痕の痕跡がきれいに残っている。外面にはほぼ全体に炭化物が付着している。

28～34はⅥｂ類に分類される。28～30は同一個体である。28・29は口縁部片で，内傾する口唇部は完全ではないが平坦な面を持ち，外面側の端部にキザミの様に見える貝殻を用いた押圧文もしくは刺突文が施されている。口縁部上端から胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面は横位の貝殻条痕調整を行った後にナデ，もしくは工具ナデが行われている。30は胴部片である。28～30の外面には炭化物の付着が見られる。31は胴部片である。外面は粗いナデ調整の上から綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面はナデ調整が行われている。胎土には２，３㎜の白色の小礫を多量に含むのが特徴である。32・33は同一個体と考えられる。32は口縁部片である。口唇部は平坦に整形され内傾し，外面端部にはキザミが施されている。内面端部には明確な稜は作られていない。胴部には縦位の貝殻条痕調整が行われており，口縁部上端のみ横位の貝殻条痕調整が施されている。口唇部及び内面はナデ調整が行われている。33は胴部片である。縦位の貝殻条痕調整の上からやや曲線的な斜位方向の貝殻条痕調整が行われており，内面はナデ調整が行われている。35～38は底部片である。35は平底で，底部から胴部までは，ほぼ垂直に立ち上がる器形をしていると考えられる。器面調整は外面はナデ調整，内面は剥落しており不明である。器形・胎土や色調から，Ⅱ類土器の底部である可能性が高い。36・37は底部から胴部にかけ緩やかに立ち上がる平底の土器の底部であり，文様は確認できない。36は外面は底部を含めてナデ調整が行われている。内面は凹凸が激しく一見すると剥落の様にも見えるが，粗いナデ調整が行われているようである。37は内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。36・37はⅤ類土器の底部と考えられる。38は器壁が厚手の底部である。外面は底部を含めてナデ調整が行われている。

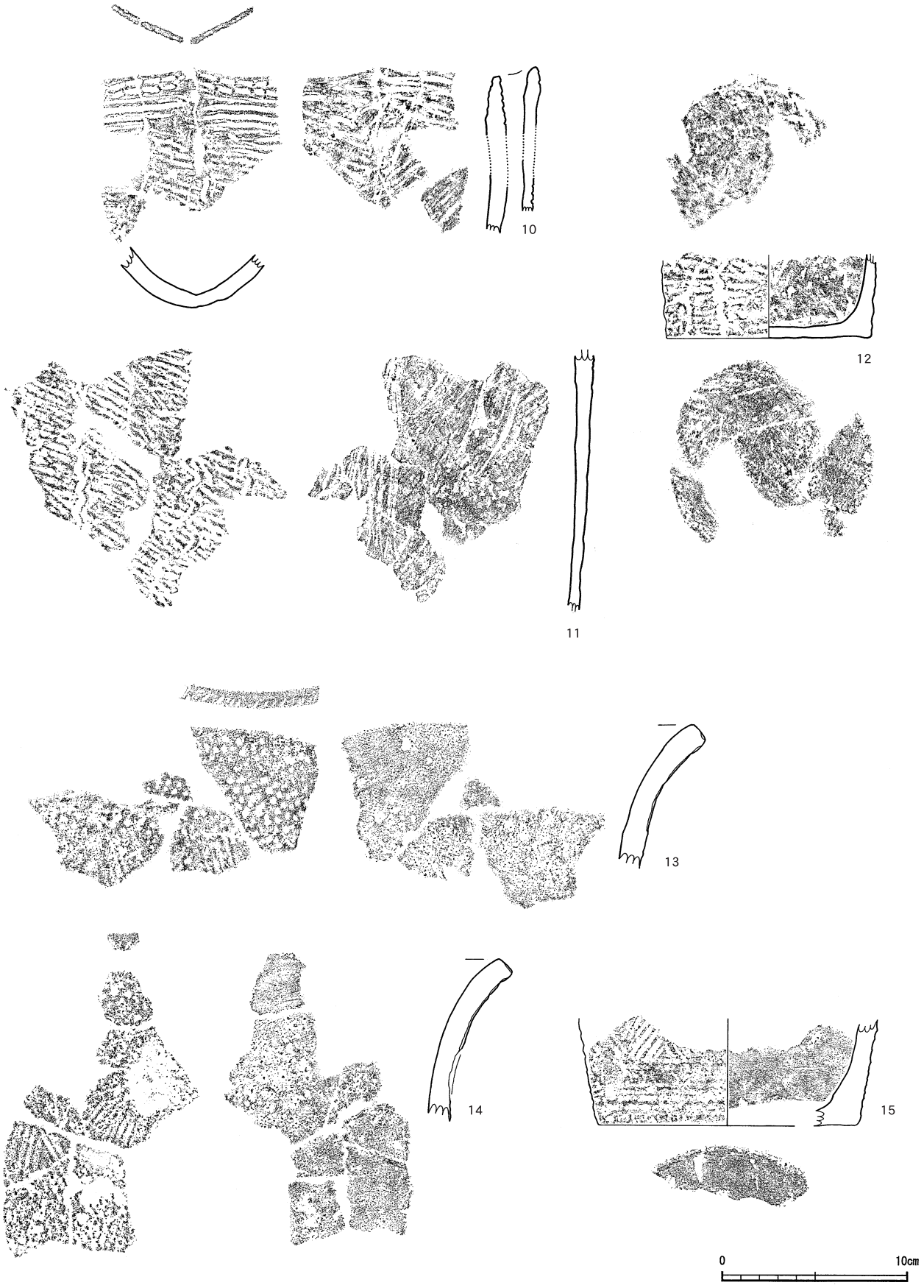


第20図　石綘遺跡縄文時代早期土器１

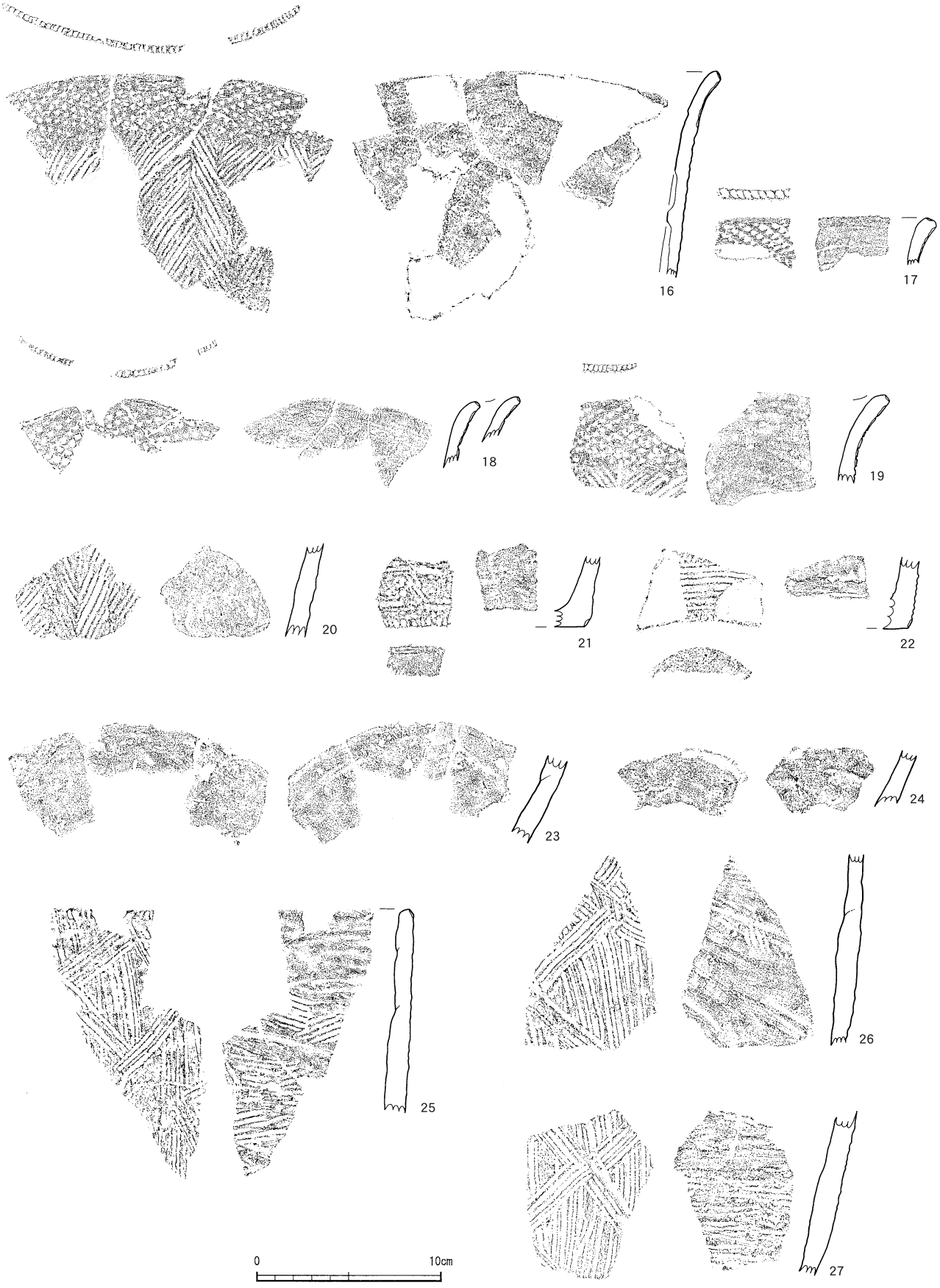


第21図　石綘遺跡縄文時代早期土器 2

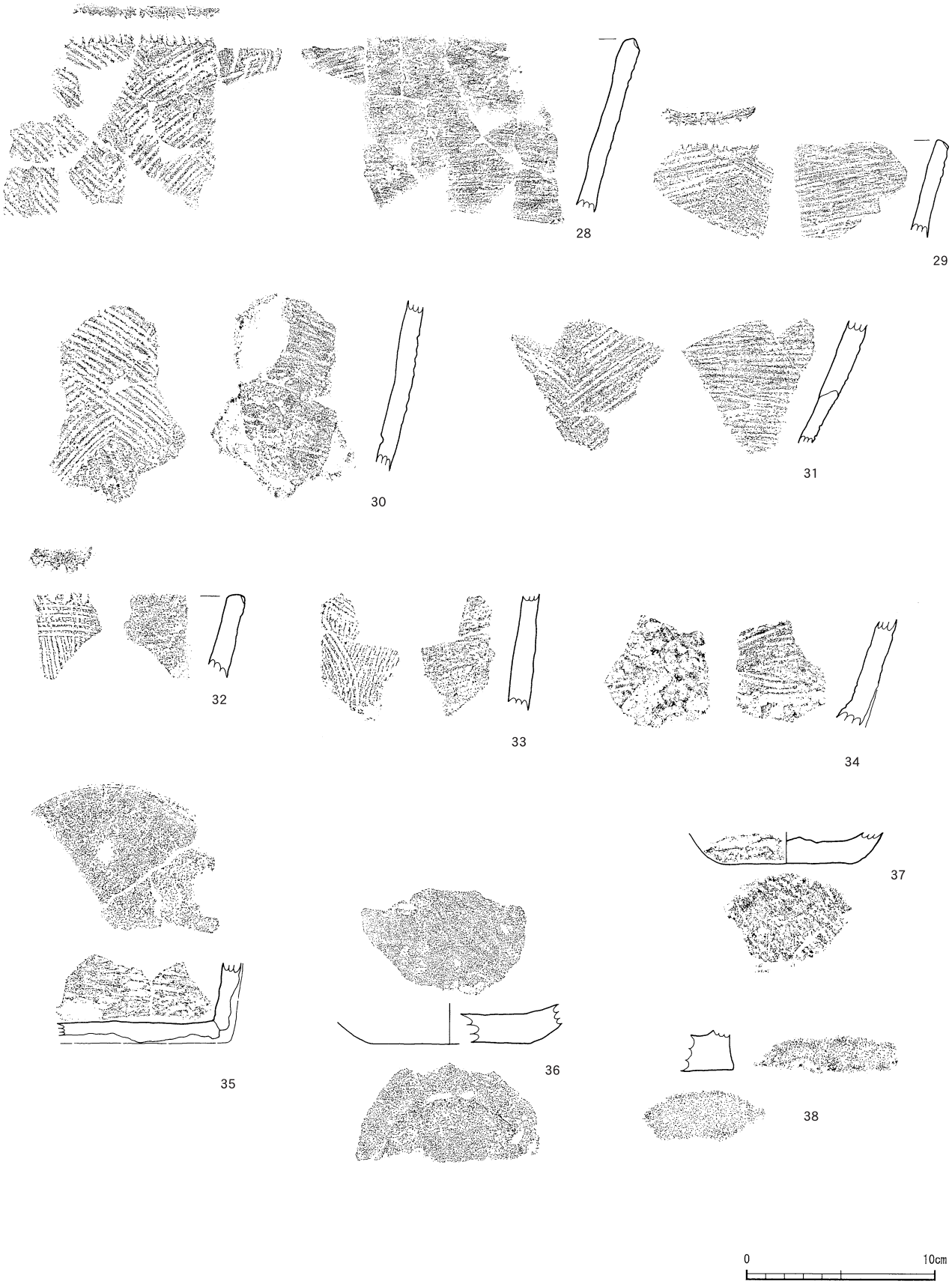
第22図　石綘遺跡縄文時代早期土器 3



第23図　石綘遺跡縄文時代早期土器４



第24図　石綘遺跡縄文時代早期土器 5



第25図　石綘遺跡縄文時代早期土器 6

第５表　石綰遺跡縄文時代早期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	出土層位	分類	部位	文様	器面調整		胎土				色調		焼成	標高	取上番号	備考
							外面	内面	石英	長石	黒色鉱物	その他	外面	内面				
20	1	E－28 8 T	Ⅳb	Ⅰ類	口縁部	貝殻刺突文 貝殻条痕	貝殻条痕	貝条→ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	135.63	222・297 1483	内外面剥落あり 2・3・4と同一固体
	2	E－29	Ⅳb		口縁部	貝殻刺突文 貝殻条痕	貝殻条痕	不明		○	○		橙	にぶい橙	良	不明	不明	内面剥落あり 1・3・4と同一固体
	3	E－29	Ⅳb		口縁部	貝殻刺突文・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ		○	○		橙	にぶい橙	良	136.115	1738	内面剥落あり 1・2・4と同一固体
	4	E－28	Ⅳb		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○	赤色鉱物	にぶい橙	橙	良	135.56	1465など	外面が大きく剥落している 1・2・3と同一固体
21	5	E－28・8 T	Ⅳb	Ⅱa類	完形品	貝殻刺突・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ	○	○	○		にぶい橙	橙	良	135.97	72など	
22	6	E－25	Ⅳb	Ⅱb類	口縁部	ヘラ状工具刺突 貝殻刺突文	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		にぶい黄橙	浅黄橙	普	134.549	1068	7・8と同一固体
	7	E－24	Ⅳb		口縁部	ヘラ状工具刺突 貝殻刺突文	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	134.502	1058・1062	6・8と同一固体
	8	E－24	Ⅳc		底部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	134.68	134など	6・7と同一固体
	9	E－24	Ⅳb	Ⅲ類	口縁部	貝殻押引文・流水文	貝殻条痕	ケズリ		○	○		橙	橙	良	135.545	132など	10・11・12と同一固体
23	10	6 T	Ⅳb	Ⅲ類	口縁部	押引文・貝殻条痕 流水文	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ		○			橙	橙	良	134.58	112・117 128など	9・11・12と同一個体
	11	6 T	Ⅳb		胴部	貝殻条痕・流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○			橙	黒褐色	普	134.69	104など	9・10・12と同一個体
	12	E－24・6 T	Ⅳb		底部	貝殻条痕・流水文	貝殻条痕	ナデ		○	○	赤色鉱物	橙	橙	普	134.68	144など	9・10・11と同一個体
	13	G－25	Ⅳa	Ⅳ類	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ		○		赤色鉱物	にぶい褐色	にぶい橙	良	134.725	5071・5073	胎土：白色小礫 14と同一個体
	14	G－25	Ⅳa		口縁部	貝殻刺突・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ		○			橙	橙	良	135.045	5080・5081	胎土：白色小礫 13と同一個体
	15	G－25	Ⅳa		底部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○		赤色鉱物	橙	にぶい黄褐	良	134.59	5122	胎土：白色小礫 13・14と同一固体
24	16	G－24・25	Ⅳa	Ⅳ類	口縁部	貝殻刺突・貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ	○	○			橙	橙	良	135.14	5088・5103	内面に剥落あり　胎土：白色小礫 17と同一固体
	17	G－25	Ⅳb		口縁部	貝殻押圧文・貝殻刺突	ナデ	工具ナデ		○	○	赤色鉱物	橙	橙	良	134.325	5059	胎土：雲母が極少含まれている 16と同一固体
	18	G－24・25	Ⅳa		口縁部	貝殻押圧文・貝殻刺突	ナデ	ナデ		○	○	赤色鉱物	橙	にぶい赤褐	良	134.89	5099など	スス付着 19と同一固体
	19	G－25	Ⅳa		口縁部	貝殻押圧文・貝殻刺突	ナデ・貝殻条痕	ナデ		○	○		にぶい橙	橙	良	134.98	5087	スス付着 18と同一固体
	20	G－25	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		明赤褐	暗赤灰	良	134.92	5096	
	21	G－25	Ⅳa		底部	貝殻条痕 ・キザミ	貝殻条痕	工具ナデ		○		赤色鉱物	にぶい黄橙	橙	良	135.09	5066	
	22	G－25	Ⅳa		底部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○	○		橙	明赤褐色	良	134.95	5092	外面に剥落あり
	23	E－29	Ⅳb	Ⅴ類	胴部	なし	ナデ	ナデ		○	○		橙	にぶい黄橙	良	136.445	1701	24と同一個体
	24	E－29	Ⅳb		胴部	なし	ナデ	ナデ		○	○		橙	にぶい黄橙	良	136.23	1687	23と同一個体
	25	D－25	Ⅳa	Ⅵa類	口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕		○	○		黄褐	にぶい黄褐	良	134.783	1014など	スス付着 26・27と同一固体
	26	E－24	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕		○	○		橙	にぶい黄褐	良	134.856	1008	スス付着 25・27と同一固体
	27	E－24	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕		○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	134.925	1011	25・26と同一固体
25	28	E－29	Ⅳa	Ⅵb類	口縁部	キザミ・ 貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○		雲母	黒褐色	褐色	良	136.508	1293など	胎土：白色小礫　スス付着 29・30と同一固体
	29	E－29	Ⅳa		口縁部	キザミ・ 貝殻条痕	貝殻条痕	貝条→ナデ				雲母	黒褐色	灰褐色	良	136.448	1327	胎土：白色小礫　スス付着 28・30と同一固体
	30	E－29	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	136.507	1324・1328	胎土：白色小礫 28・29と同一固体
	31	F－30	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝条→ナデ		○	○	雲母	灰褐色	にぶい黄褐色	良	136.895	1721など	胎土：白色小礫　スス付着
	32	E－25	Ⅳa		口縁部	キザミ・貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○			褐色	褐色	良	135.685	1165	胎土：白色小礫 33と同一固体
	33	E－26	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	工具ナデ		○		雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	良	135.49	1155・1158	胎土：白色小礫 32と同一固体
	34	F－30	Ⅳa		胴部	貝殻条痕	貝殻条痕工具ナデ	貝殻条痕		○		雲母	にぶい褐色	黄褐色	良	136.645	1719	胴部最下部底部付近 胎土：白色小礫
	35	E－28 8 T	Ⅳb	Ⅱ類 Ⅴ類	底部	不明	不明	貝条→ナデ 工具ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄橙	橙	良	135.8	206・234 312など	外面の剥落が激しい Ⅱ類の可能性が高い
	36	F－30	撹乱		底部	不明	ナデ	ナデ	○			雲母	黒褐	褐	良	136.368	撹乱一括	
	37	E－29	Ⅳa		底部	不明	ナデ	不明		○			褐色	にぶい黄褐	良	134.58	1264	胎土：白色小礫 Ⅴ類の可能性が高い
	38	E－25	Ⅳa		底部	不明	ナデ	不明	○	○	○		橙	明褐	良	136.425	1235	胎土：白色小礫 Ⅴ類の可能性が高い

石器（第27～29図：39～77）

石縄遺跡の包含層は縄文時代早期（Ⅳa～ｃ層）と弥生時代（Ⅱ層）の二つに分けられており，本遺跡で出土した石器は全て縄文時代早期の包含層から出土している。石器の器種は磨製石鏃・打製石鏃・打製石斧等があり，39点を図化した。石材は黒曜石・水晶・玉髄・チャート・安山岩・頁岩・粘板岩・ホルンフェルス等が使用されている。石縄遺跡の石材は特徴から以下のように分類した。

黒曜石（ＯＢ）

１類　黒色を呈し，やや透明感があり不純物を多く含むもの。三船の原産地資料に類似する。

２類　黒色を呈し，透明感が無くやや不純物を含むもの。表面に風化が見られる。

３類　飴色から黒色を基調とする。不純物をあまり含まない良質なものでえびの市の桑ノ木津留，大口市の上青木の原産地資料に類似する。

４類　灰色を呈し，透明感があるもの。姫島の原産地資料に類似する。

５類　青灰色を呈し，不純物の少ないもので，淀姫等の西北九州の原産地資料に類似する。

安山岩（ＡＮ）

１類　白色から青灰色を基調とする。ハリ質が強く斜長石が殆ど含まれない。

２類　黒色を呈し，１類と比較するとハリ質が弱く斜長石が殆ど含まれない。

頁岩（ＳＨ）

１類　灰色や黒色を呈し線上の節理が発達している。珪質の頁岩である。

２類　薄茶色を呈し，粒状感がある。

玉髄（ＣＣ）

１類　白色を呈し，比較的珪質分に富んだもの。

２類　赤色を呈し，比較的珪質分に富んだもの。

チャート（ＣＨ）

１類　灰白色を呈し，やや透明感があるもの。

２類　深緑色を呈し，透明感がないもの。

３類　薄灰色を呈し，やや透明感のあるもの。

４類　黒色を呈し，やや透明感があり節理が発達するもの。

ホルンフェルス（ＨＦ）

１類　赤色を呈し，白の純模様が入る。頁岩質のホルンフェルスである。

２類　灰色を呈し，やや節理が発達するもの。粒子が粗い頁岩質のホルンフェルスである。

水晶（ＣＲ）

１類　無色透明なもの。

２類　透明感が無く節理の発達するもの。

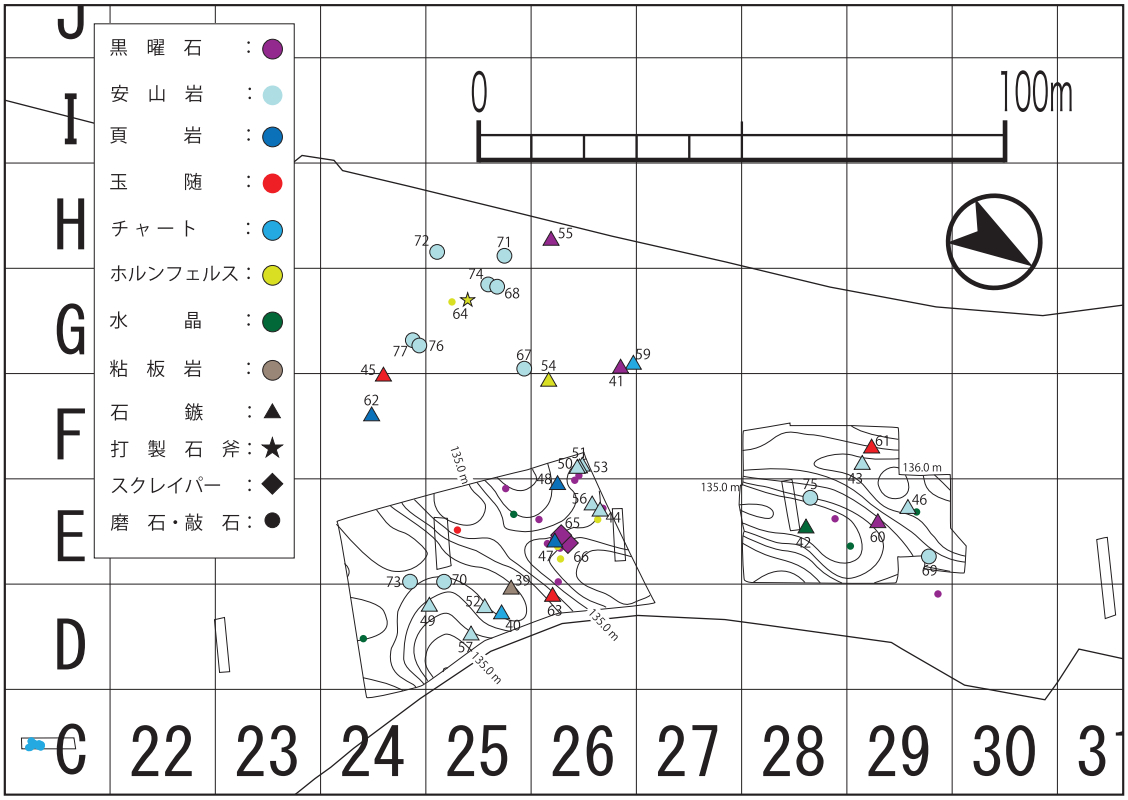
３類　やや透明感があり，節理の発達するもの。

粘板岩（ＣＬ）

薄緑色を呈し，やや粒状感があるもの。

磨石・敲石等の分類（十三塚遺跡と共通）

１類　表・裏面に磨面があり，顕著な敲打痕のないもの。（磨石）



第26図　石縄遺跡石器出土分布図

2類　表・裏面に磨面があり，敲打痕が見られるもので，周縁部及び表・裏面上に敲打痕があるものを2A類，主に丸みのある突出した端部に敲打痕が見られるものを2B類とした。（磨・敲石）

3類　明瞭な磨面をもたず，側縁・表裏面上に敲打痕があるもの。（敲石）

4類　表面・裏面上にくぼみを持つもの。面央部の敲打による浅い窪みをもつものを含む。（凹石）

5類　1～4類に該当しない不定形な礫を素材とした。（敲石・磨石）

磨製石鏃（第27図：39）

39は全体形が正三角形に近い形状を呈する磨製石鏃で，やや鋭く作出した基部に抉りが施されないものである。最大長は1.7㎝程度で粘板岩を素材としており，研磨面は全体に及んでいる。

打製石鏃（第27・28図：40～63）

40～63は打製石鏃で総数は24点出土している。40～42は全体形が正三角形に近い形状を呈するもので，基部に浅い三角形状の抉りが施され，脚部がやや鋭く作出されるものである。40はチャート1類を素材とし，最大長1.6㎝で比較的小型の製品である。41は黒曜石2類を素材とするもので，右脚部の先端が欠損している。42は水晶製で3点中では最も大きく最大長2.1㎝である。

43～50は深い抉りを施す大型の石鏃で，いわゆる鍬形鏃に類するものである。43・44は一部に欠損が見られるが，やや幅広の製品であり，いずれも安山岩2類を素材としている。比較的大きめの調整剥離の後，側縁に微細な調整剥離を連続して施している。47・48は全体形がやや二等辺三角形を呈すもので，頁岩1類を素材としている。2点とも極めてよく似た形状を呈するが，47は側縁が先端部から中央部にかけて内湾している。48は側縁がほぼ直線的な形状を呈し，左脚部が欠損している。2点とも最終段階で側縁に微細な調整剥離が施されており，製作技法としては43・44とに共通点が見られる。

45は玉髄2類を素材とし，右脚部を丸く作出しており，左脚部は欠損している。2号集石の近くで出土した。

46・49・50はやや二等辺三角形を呈するものである。側縁に細かな調整剥離が見られないのが特徴で，石材はいずれも安山岩1類を素材としている。46は脚部がやや鋭く作出されている。49は脚部が丸く作出され，大きめの調整剥離が見られ，一部自然面を残している。50は先端部と脚部に欠損が見られる。

51～54は浅い抉りを施す大型の石鏃である。51～53は安山岩1類を素材とするもので，脚部はやや鋭く作出され，52は先端部が欠損し，53は脚部が欠損している。

54はホルンフェルス1類を素材とするものである。側縁が鋸歯状を呈し，基部に浅い三角状の抉りが施され，脚部がやや鋭く作出されている。先端部に細かな調整剥離が施されており，一部に研磨面が見られる。

55は側縁に鋸歯状の加工を施す大型の石鏃である。黒曜石2類を素材とするもので，基部に深い抉りを施し，脚部がやや鋭く作出されたものである。

56・57は小型の石鏃で安山岩1類を素材としている。56は基部に抉りが見られない石鏃である。57は全体形が正三角形に近い形状を呈するもので，基部に浅い抉りが施されている。

58は浅い抉りを施す小型の石鏃で，外湾する側縁は鋸歯状を呈する。チャート1類を素材としており，側縁に細かい調整剥離を施している。

59はほとんど抉りを施されず，脚部が鋭く作出されるものである。チャート2類を素材とし，側縁に細かい調整剥離が施されている。

60は比較的扁平な石鏃で基部に浅い抉りが施され，脚部がやや鋭く作出されている。黒曜石1類を素材とし，先端部と脚部に欠損が見られる。

61・62は側縁が外湾する石鏃である。61は玉髄1類を素材とし基部に浅い抉りが見られる。側縁はやや外湾し形状は帖地形石鏃に類似する。62は頁岩2類素材とし，表面と裏面に研磨面が見られる。基部に浅い抉りが見られ，先端部が欠損している。

63は二等辺三角形の石鏃の先端部である。玉髄2類を素材とし全体的に細かい調整が見られる。

打製石斧（第28図：64）

64はホルンフェルス2類を素材とする打製石斧で，縦9.5㎝，横6.8㎝，厚み2.7㎝を計る。表面が若干風化しており右側縁に軽い抉りが作られている。

スクレイパー（第28図：65・66）

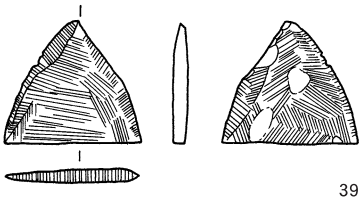
65・66は削器類のスクレイパーで，黒曜石1類を素材とするものである。65は円形を呈し，下部に刃部を有するもので，66は右側縁から下部にかけて刃部を有するものである。

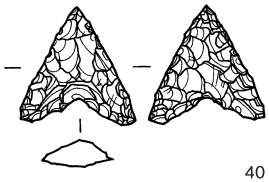
磨石・敲石（第29図：67～77）

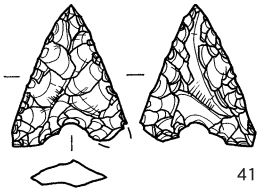
67・68は1類である。67は小型の石で裏面に磨面がある。下面図左よりの擦痕は発掘調査時についた痕跡と考えられる。68は裏面に磨面があり，上下の側面が火熱によって剥離している。

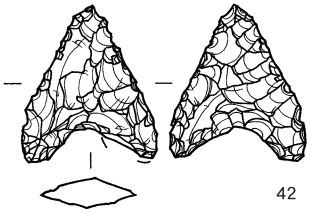
69～76は2類である。69～71は表裏に磨面があり，上下の側面に敲打痕がみられる。71は右側面にも敲打痕がみられる。72は裏面に磨面があり，下・右の側面に敲打痕がみられる。73は表・裏に磨面があり，上下左右の側面に敲打痕がみられる。74は上面に磨面あり，下面に敲打痕がみられる。75は表裏に磨面が形成され，上下の側面と表面に敲打痕がみられる。76は表面に磨面があり，下面と表面に敲打痕がみられる。

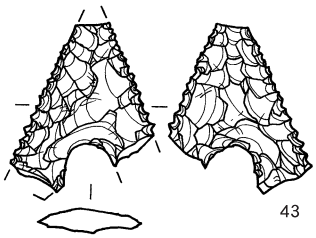
77は3類である。表裏に磨面がなく，上下の側面と裏面に敲打痕がみられる。

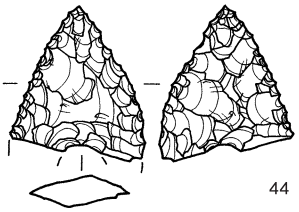

39

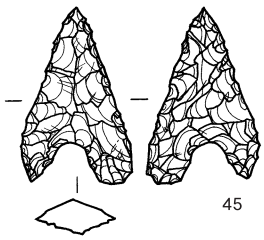

40

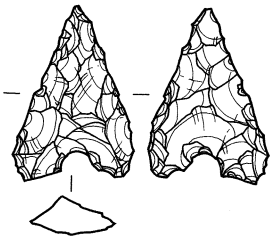

41

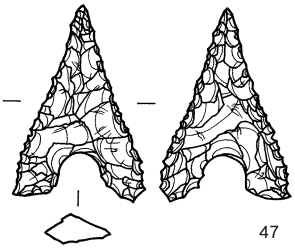

42

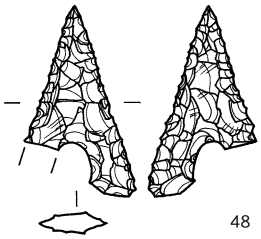

43

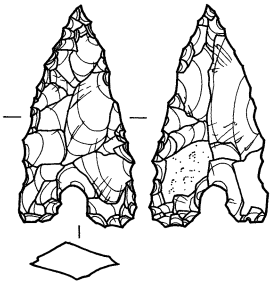

44

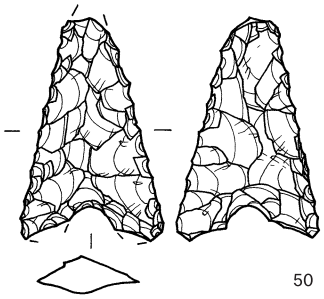

45

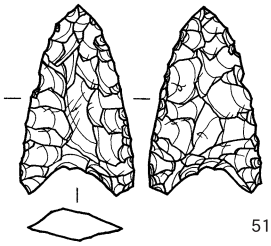

46

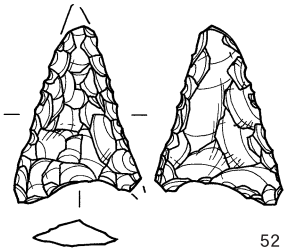

47

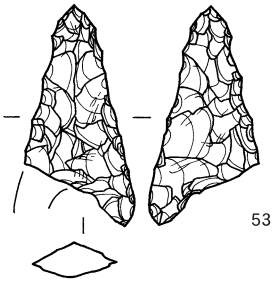

48

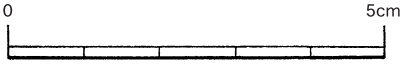

49


50

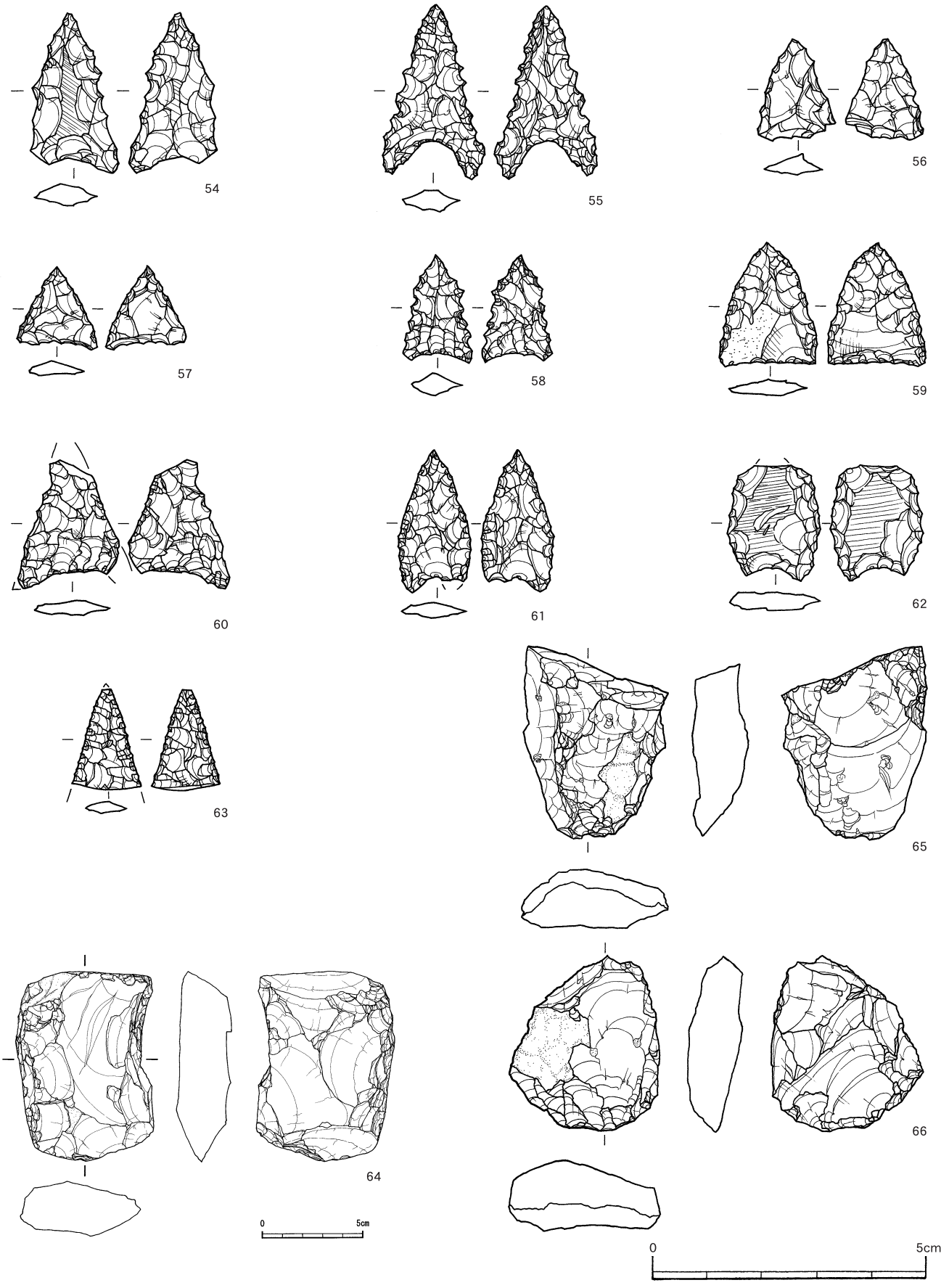

51


52

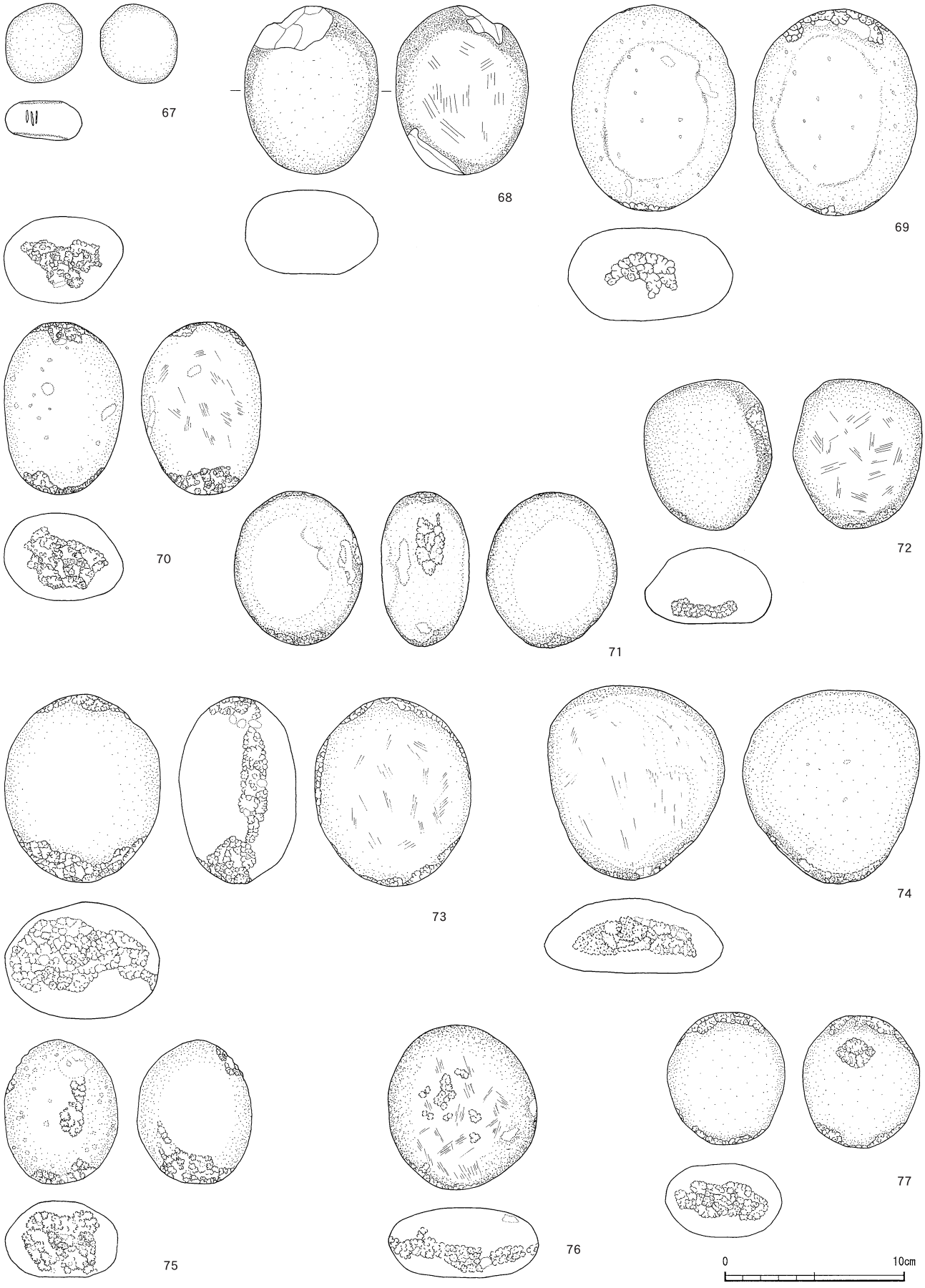

53



第27図　石縄遺跡縄文時代石器 1



第28図　石綘遺跡縄文時代石器 2



第29図　石縄遺跡縄文時代石器 3

第６表　石綴遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	区	層	遺構	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
27	39	磨製石鏃		D-25	Ⅳb		粘板岩	1.7	1.9	0.2	0.62	1250	
	40	打製石鏃		D-25	Ⅳa		チャート１類	1.6	1.5	0.4	0.56	1203	
	41	打製石鏃		G-26	Ⅳb		黒曜石２類	1.9	1.5	0.3	0.65	5052	
	42	打製石鏃		E-28	Ⅳb		水晶	2.1	1.8	0.4	1.07	1615	
	43	打製石鏃		F-29	Ⅳb		安山岩２類	2.3	1.9	0.3	1.11	1559	
	44	打製石鏃		E-26	Ⅳb		安山岩２類	2.1	1.7	0.4	1.3	1217	
	45	打製石鏃		G-24	Ⅳb	集石２	玉髄２類	2.3	1.4	0.5	1.02	－	
	46	打製石鏃		E-29	Ⅳa		安山岩１類	2.3	1.6	0.5	1.1	1366	
	47	打製石鏃		E-25	Ⅳa		頁岩１類	2.6	1.7	0.4	1.04	1183	
	48	打製石鏃		E-26	Ⅳa		頁岩１類	2.5	1.4	0.3	0.62	1159	
	49	打製石鏃		D-25	Ⅳa		安山岩１類	2.9	1.5	0.5	1.68	1075	
	50	打製石鏃		F-26	Ⅳa		安山岩１類	2.9	1.9	0.5	2.06	1162	
	51	打製石鏃		F-26	Ⅳa		安山岩１類	2.5	1.5	0.4	1.4	1163	
	52	打製石鏃		D-25	Ⅳa		安山岩１類	2.3	1.7	0.3	1.06	1206	
	53	打製石鏃		F-26	Ⅳa		安山岩１類	2.9	1.4	0.5	1.42	1164	
28	54	打製石鏃		F-26	Ⅳb		ホルンフェルス１類	2.9	1.6	0.4	1.63	5415	
	55	打製石鏃		H-26	Ⅳa		黒曜石２類	3.2	1.9	0.4	1.54	5417	
	56	打製石鏃		E-26	Ⅳa		安山岩１類	1.9	1.4	0.4	0.74	1175	
	57	打製石鏃		D-25	Ⅳa		安山岩１類	1.5	1.4	0.2	0.43	1069	
	58	打製石鏃		10T	Ⅳ		チャート１類	1.9	1.2	0.4	0.77	－	
	59	打製石鏃		G-26	Ⅳb		チャート２類	2.2	1.7	0.3	1.19	5051	
	60	打製石鏃		E-29	Ⅳc		黒曜石１類	2.1	1.7	0.3	1.67	1634	一部研磨
	61	打製石鏃		F-29	Ⅳb		玉髄１類	2.6	1.4	0.3	0.94	1560	
	62	打製石鏃		F-24	Ⅳb		頁岩１類	2.3	1.8	0.3	0.89	5398	未製品
	63	打製石鏃		D-26	Ⅳa		玉髄２類	1.8	1.2	0.2	0.46	1247	
	64	打製石斧		C-25	Ⅳb		ホルンフェルス２類	9.5	6.8	2.7	240.23	5281	
	65	スクレイパー		E-26	Ⅳa		黒曜石１類	3.5	2.7	1.1	8.6	1142	
	66	スクレイパー		E-26	Ⅳa		黒曜石１類	3.2	2.8	1.3	9.02	1094	
29	67	磨石・敲石	1	G-25	Ⅳb		安山岩	4.4	4.3	2.2	55	5054	
	68	磨石・敲石	1	－	－	集石７	安山岩	9.4	7.3	4.7	490	集石７-24	
	69	磨石・敲石	2	E-29	Ⅳa		安山岩	11.4	9.1	5.2	730	1770	
	70	磨石・敲石	2	D-25	Ⅳa		安山岩	9.6	6.6	4.8	460	1072	
	71	磨石・敲石	2	H-25	Ⅳb		安山岩	8.5	7.2	4.9	430	5311	
	72	磨石・敲石	2	－	－	集石６	安山岩	8.3	7.1	4.2	330	集石６- ６	
	73	磨石・敲石	2	E-24	Ⅳa		安山岩	10.4	8.6	6.5	795	1026	
	74	磨石・敲石	2	－	－	集石７	安山岩	10.8	9.8	4.1	550	集石７-13	
	75	磨石・敲石	2	E-28	Ⅳb		安山岩	8.0	6.3	4.2	260	1500	
	76	磨石・敲石	2	G-24	Ⅳb		安山岩	9.1	8.2	3.9	410	5177	
	77	磨石・敲石	3	G-24	Ⅳb		安山岩	7.3	6.5	4.1	280	5146	

第２節　弥生時代の調査と成果

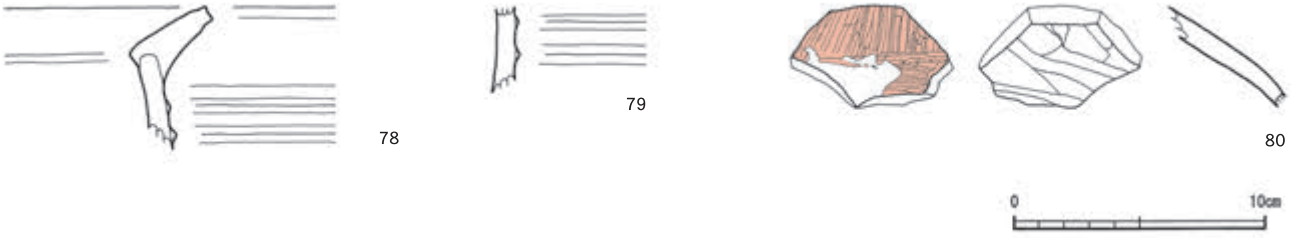
１　調査の概要

弥生時代の包含層はⅡｂ～ｄ層である。石綴遺跡は現代の削平によりその多くは削られていた。本調査はⅣ層，縄文時代早期のみの調査であり，遺構は検出されていない。確認調査などで少量ではあるが弥生時代の遺物が出土している。

２　調査の成果〈遺物〉（第30図：78～80）

弥生時代の遺物は多くが山ノ口式土器の破片であるが，須玖式土器と思われる土器片も１点出土している。それらの中から３点を図化した。78，79は甕形土器である。78は「く」の字状に外反する口縁部片で，内面の屈曲部分は少し突き出る。胴部外面には貼り付け突帯が２条残っている。貼り付けられている位置がやや高く，山ノ口式の中では新しい段階の特徴を持つ。79は胴部片で外面に２条の貼り付け突帯が残っている。

80は壺形土器である。一部の破片であるが肩部の破片と考えられる。外面は赤色顔料が塗られており，縦位と横位のミガキが施されている。



第30図　石綴遺跡弥生時代土器

第７表　石綴遺跡弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
30	78	12T		甕	口縁部	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	一括	
	79	12T		甕	胴部	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	一括	
	80	D-26	Ⅱe	壺	胴部	浅黄	黄灰	ミガキ	ナデ	○	○				岩片	良	1215	外面丹塗り

第５章　十三塚遺跡の調査と成果

第１節　縄文時代の調査と成果

１　調査の概要

本遺跡は，平成19年度に15箇所に確認トレンチを設定し，確認調査を行った。調査は重機で表土を除去し，その後人力による掘削を行った。その結果，４つのトレンチより，Ⅱ層から弥生時代中期の土器が，Ⅳ層からは縄文時代早期の土器が出土した。

十三塚遺跡の本調査は，石縊遺跡と同じく，東九州自動車道建設予定地のセンター杭ＳＴＡ２＋80とＳＴＡ３を基準に両遺跡をはさむように設定した。十三塚遺跡は，Ｅ～Ｗ，１～20区を調査区域とした。

調査の結果，Ⅲ層～Ⅳ層より縄文時代早期，後～晩期の土器，Ⅱ層より弥生時代中期の竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑等の遺構を検出し，土器，石器，鉄製品等が出土した。また，Ⅱ層上面より中世以降と考えられる道跡を検出した。また，Ⅲ層（アカホヤ火山灰層）より下位の層については確認トレンチによる調査をふまえ，遺物包含層が広がる部分の全面調査を行った。

２　調査の成果

⑴　遺物の分類

十三塚遺跡では縄文時代の遺構は検出されていない。縄文時代の土器は早期中葉，中期末～後期さらに晩期の土器が出土している。出土量は石縊遺跡と同様に少ないが，特に中期末から後期にかけて良好な資料が出土している。以下は十三塚遺跡で出土した縄文土器の分類である。

縄文土器の分類

Ⅰ類土器

器形　口縁部が緩やかに外反し平底を呈する。

文様　口唇部に貝殻による刺突文が施されている。口縁部には羽状の貝殻刺突文が施されていると考えられる。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されるが，底部付近は無文に近い状態である。

器面調整　外面はナデ調整が行われている。底部は丁寧なナデが行われている。内面はナデ調整が行われている。

土器型式　石坂式土器

Ⅱ類土器

器形　波状口縁の口縁部が若干外反し平底を呈する。

文様　胴部上半に棒状の施文具により凹線文が施されている。

器面調整　内外面共に貝殻条痕調整後に粗いナデ調整

土器型式　岩崎上層式土器・宮之迫式土器

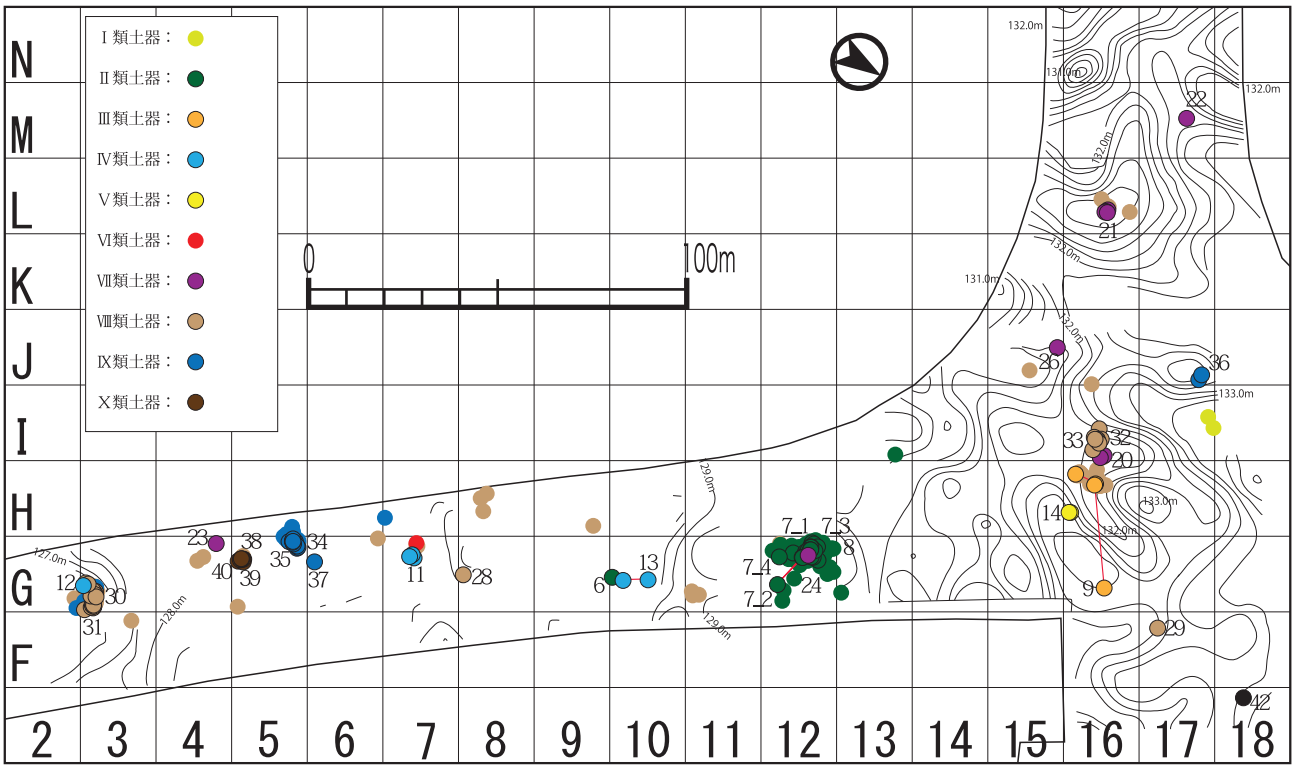
Ⅲ類土器

器形　波状口縁を呈する口縁部が大きく「く」の字に外反する。

文様　大きく外反した口縁部の内面に刺突文や凹線文が施されている。

器面調整　外面は貝殻条痕調整がナデ調整，内面は丁寧なナデ調整が行われている。

土器型式　松山式土器（市来式土器よりは古い様相）



第31図　十三塚遺跡縄文時代土器出土状況図

Ⅳ類土器

器形　深鉢形土器と台付皿形土器が出土している。

文様　貝殻や棒状工具による刺突文が施されている。

器面調整　丁寧なナデが行われているが，内面に貝殻条痕の残るものも見られる。

土器型式　草野式土器（市来式土器の範疇）

Ⅴ類土器

器形　波状口縁の口縁部が若干外反する。

文様　口縁部上端に２列の貝殻刺突文が施される。

器面調整　外面は貝殻条痕後粗いナデ，内面はケズリ

土器型式　丸尾式土器

Ⅵ類土器

器形　小破片のため不明

文様　棒状施文具や貝殻による刺突文や，横位の沈線文，磨消縄文が施されている。

器面調整　内外面共にナデ調整が行われている。

土器型式　西平式土器

Ⅶ類土器

器形　口縁部が「く」の字状に若干内湾する。

文様　口縁部に沈線文が施されている。

器面調整　内外面共に丁寧なナデが行われている。

土器型式　三万田式土器

Ⅷ類土器

器形　胴部が屈曲する深鉢形土器が出土している。

文様　胴部に刺突文や沈線文が施されている。

器面調整　内外面共にヘラ状工具によるナデ調整。

土器型式　中岳式土器

Ⅸ類土器

器形　胴部に「く」の字状の屈曲をもつ浅鉢形土器

文様　無文である。

器面調整　外面の口縁部のみ貝殻条痕が残る。

土器型式　入佐式土器

Ⅹ類土器

器形　底部資料のため不明

文様　なし。ただし，底部に組織痕が残っている。

土器型式　晩期該当底部

⑵　遺物

縄文土器・石器（第32～37図：１～42）

１～５はⅠ類土器であり，同一個体と考えられる。口縁部上端に斜位の貝殻刺突文が１列施され，２を見るとその下位には横位の貝殻刺突文が１～２条施されているようである。胴部には貝殻条痕が綾杉状に施されている。

６～８はⅡ類土器であり，６は口縁部上端に上から貝殻刺突文，２条の凹線文，貝殻刺突文の順に文様が施されている。７・８は同一個体と考えられ，まず細かな条痕の残る工具で器面調整が行われた後でナデ調整が行われており，その上から先端の丸い直径５㎜程の棒状工具で凹線文が施されている。胴部下半は無文である。底部は円盤状の底部パーツを胴部パーツに接合する方法がとられており，内面には２つのパーツを接合した時の指押さえの後が明確に残っている。また底部外面には網代痕が残っている。

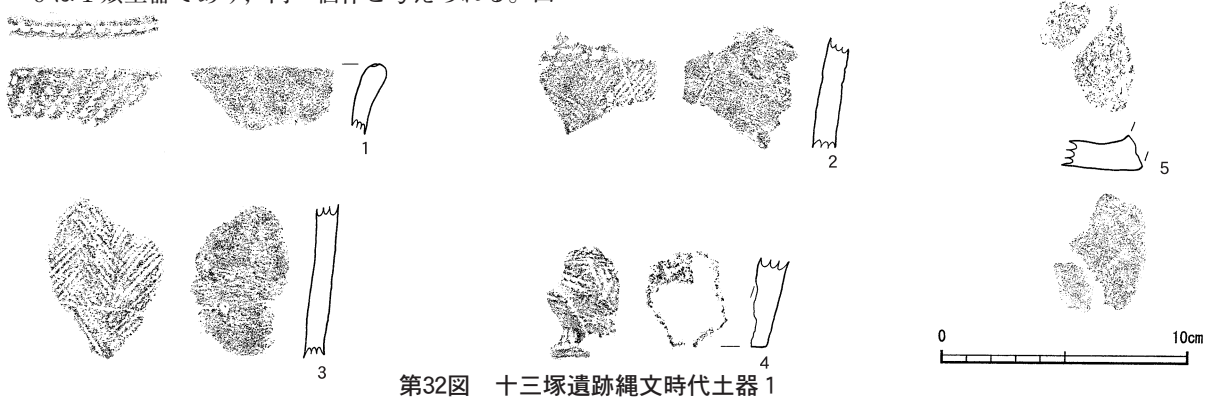
９・10はⅢ類土器である。９は口縁部の内面波頂部に抽象化した太陽の様な文様が刺突により施され，その両側に２条の凹線文が施されており，さらにそれらの周りに貝殻刺突文が施されている。10は口縁部に２条の沈線文が施されており，その上から縦位の貝殻刺突文が施されている。

11～13はⅣ類土器である。11は口唇部に二股に分かれた突起状のパーツが施されており，先端の尖った工具で刺突文が施されている。これと同じような突起は外面口縁部上端にも施されている。13は台付皿形土器であり，口唇部に先端が三角形状に尖った施文具で刺突文が施されている。

14はⅤ類土器である。口縁部上端に２列の縦位貝殻刺突文が粗く施されており，胴部は貝殻条痕後粗いナデ調整が行われている。内面は粗いケズリが行われている。

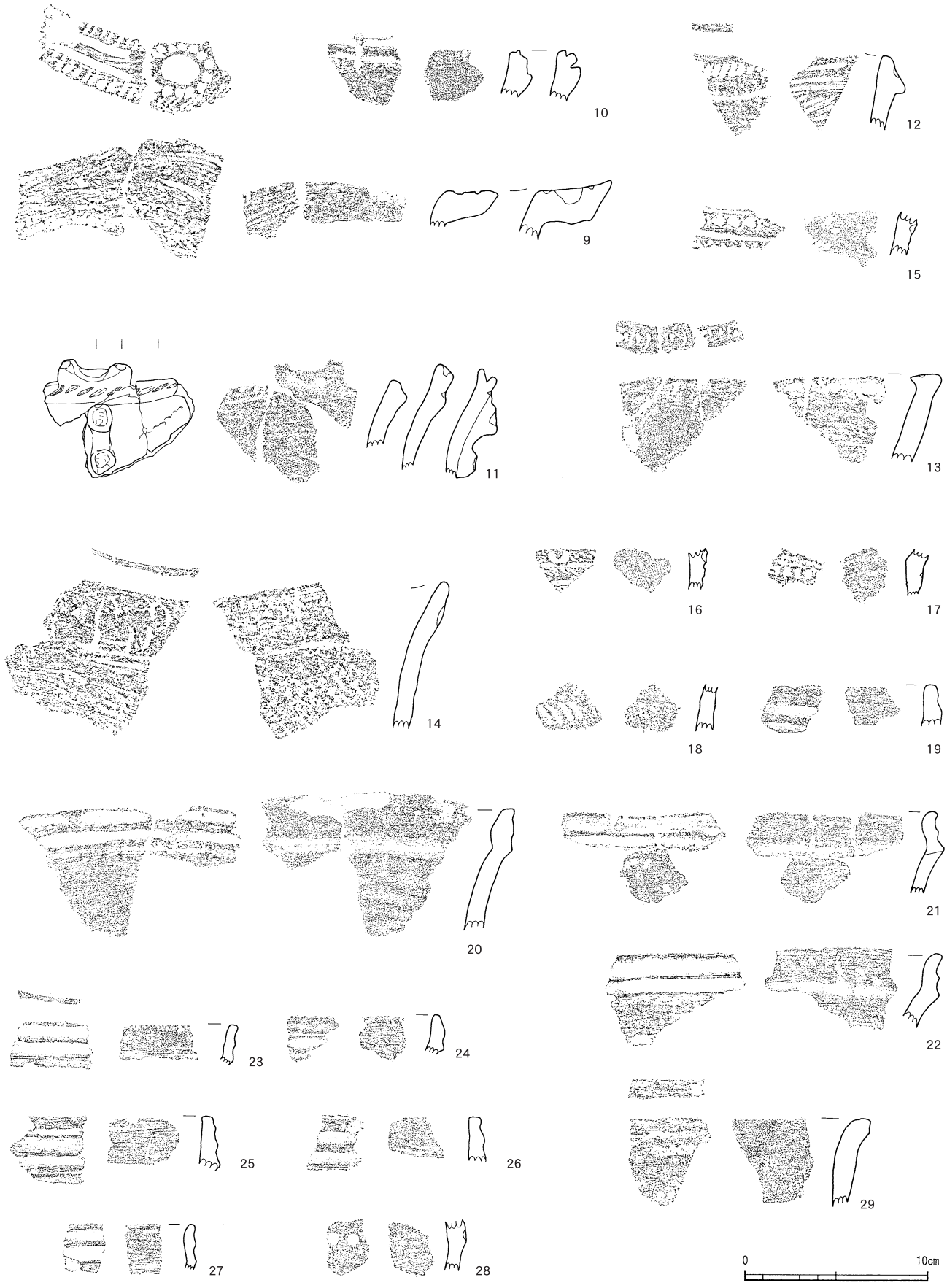
15～18はⅥ類土器である。磨消縄文の上から棒状工具による沈線文や刺突文が施されている。18は胴部に斜位方向の文様が施されており，これは貝殻ではなく先端の細い棒状工具で刻むように施された文様である。

19～27はⅦ類土器である。全て口縁部及び胴部上半までの資料となっている。28～33はⅧ類土器である。34～37はⅨ類土器である。38～41は圧痕の残る底部資料でありⅩ類土器とした。縄文晩期に該当すると考えられる。42はⅣ層出土の縄文時代早期の安山岩製のスクレイパーである。剥片の右側面から下辺にかけて調整が加えられている。

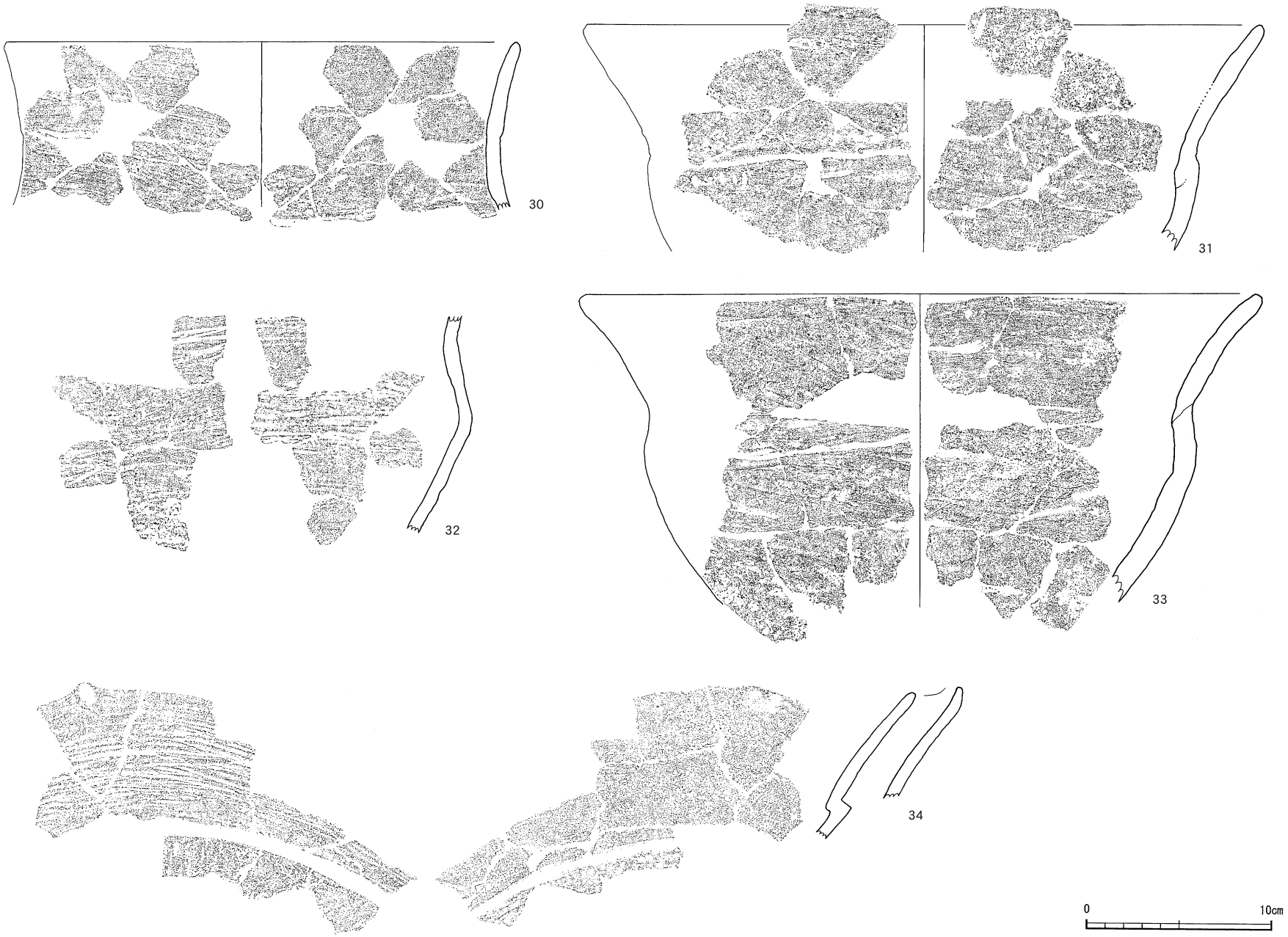


第32図　十三塚遺跡縄文時代土器１

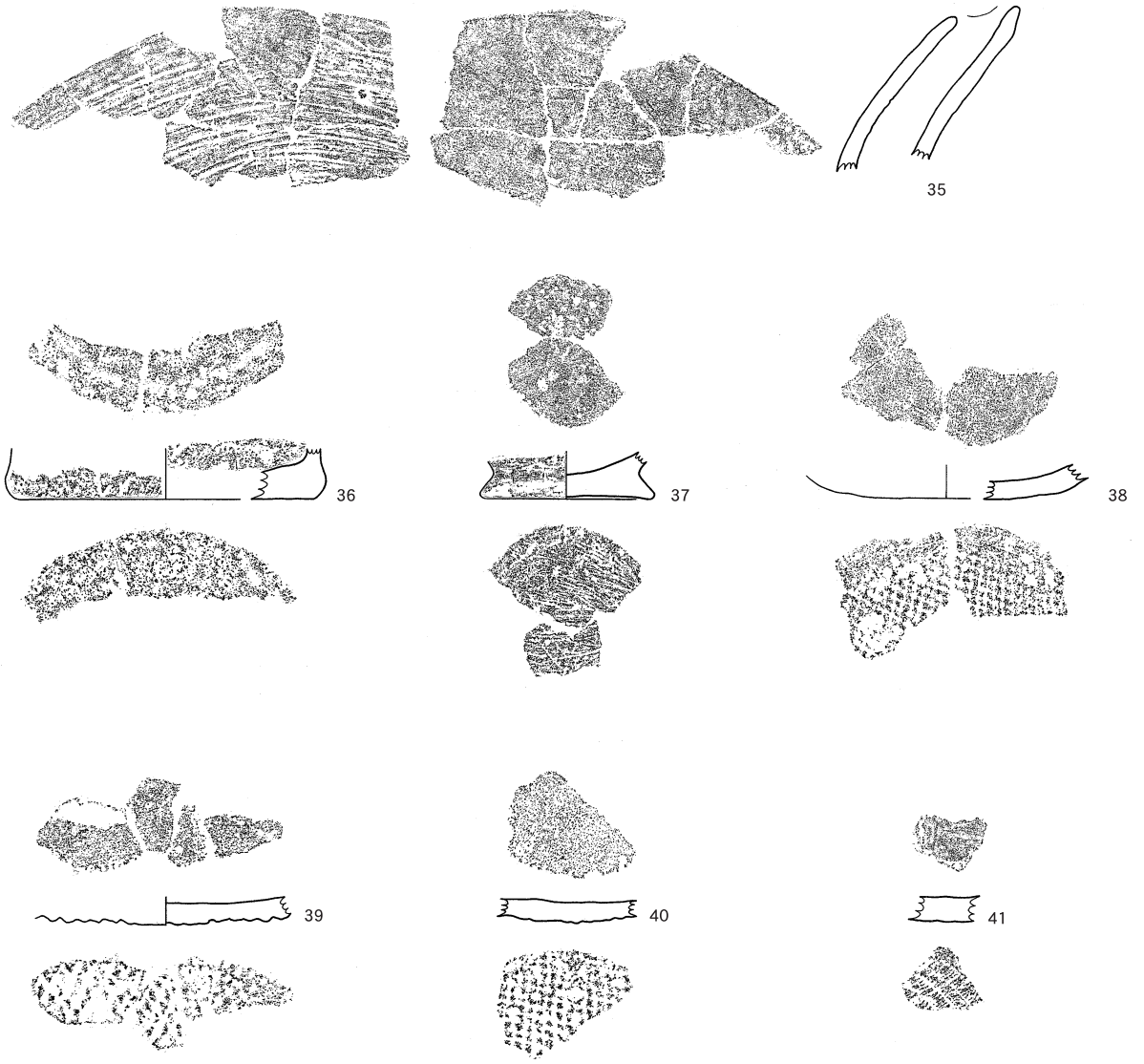
第33図　十三塚遺跡縄文時代土器 2



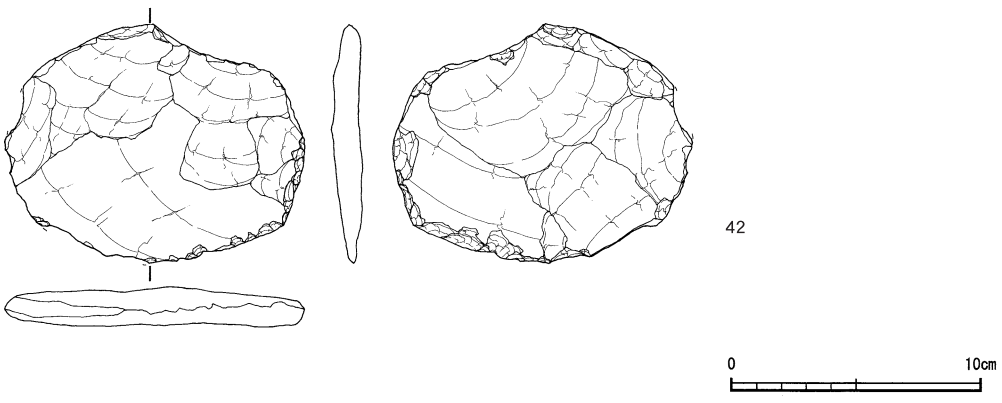
第34図　十三塚遺跡縄文時代土器 3



第35図　十三塚遺跡縄文時代土器 4



第36図　十三塚遺跡縄文時代土器 5



第37図　十三塚遺跡縄文時代石器

第８表　十三塚遺跡縄文時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	出土層位	分類	部位	文様	器面調整		胎土				色調		焼成	標高	取上番号	備考
							外面	内面	石英	長石	黒色鉱物	その他	外面	内面				
32	1	I-17	Ⅳb	Ⅰ類	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	にぶい黄橙	良	不明	一括	
	2	I-17	Ⅳb		胴部	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	にぶい褐色	良	不明	一括	文様：貝殻条痕
	3	I-17	Ⅳb		胴部	貝殻条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	赤色鉱物	橙	暗褐色	良	不明	一括	胎土：白色小礫
	4	I-17	Ⅳb		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄橙	橙	良	不明	一括	胎土：割と大きめの礫が混ざる
	5	I-17	Ⅳb		底部	貝殻条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	褐色	良	不明	一括	胎土：割と大きめの礫が混ざる
33	6	22T	Ⅱ	Ⅱ類	口縁部	貝殻刺突文・凹線文	ナデ	工具ナデ		○	○	金雲母	灰黄褐色	灰黄褐色	良	128.815	7615	胎土：白色小礫
	7	20T	Ⅱ		口縁~胴部	凹線文	貝条→ナデ	貝条→ナデ	○	○	○	赤色鉱物	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	129.905	524など	出土区：G-12　胎土：白色小礫
	8	20T	Ⅱ		底部	なし	ナデ	ナデ		○	○	赤色鉱物	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	130.025	530など	出土区：G-12　網代底
34	9	G-16	Ⅱe	Ⅲ類	口縁部	貝殻刺突文 棒状工具刺突文	貝条→ナデ	貝条→ナデ	△	○	○	金雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	良	132.86	5889など	内面文様：凹線文 胎土：白色小礫
	10	−	Ⅰ		口縁部	貝殻刺突文・沈線文	ナデ	ナデ	○	○	◎		暗赤褐色	黒褐色	良	不明	一括	胎土：黒色鉱物が多量に混ざる
	11	G-7	Ⅱd	Ⅳ類	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	工具ナデ		○	○	金雲母	明赤褐色	明赤褐色	良	130.275	11773など	文様：棒状工具刺突文
	12	G-3	Ⅱd		口縁部	貝殻刺突文	ナデ	貝条→ナデ		○	○	金雲母	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	128.84	12822	胎土：白色小礫
	13	22T	Ⅱ		口縁部	棒状工具刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良	128.825	720など	出土区：G-10　※種子痕あり？
	14	H-16	Ⅱe	Ⅴ類	口縁部	貝殻刺突文	貝条→ナデ	ケズリ		○		金雲母	赤褐色	暗褐色	良	132.53	5855など	
	15	−	表土	Ⅵ類	胴部	棒状工具刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○		暗褐色	にぶい黄褐	良	不明	一括	文様：沈線文
	16	−	表土		胴部	棒状工具刺突文	ナデ	ナデ	○	○	△		黒褐色	黒褐色	良	不明	一括	文様：沈線文　胎土：黒色鉱物少
	17	−	表土		胴部	棒状工具刺突文	ナデ	ナデ		○	○	白色小礫	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良	不明	一括	文様：沈線文
	18	−	表土		胴部	貝殻刺突文	ナデ	工具ナデ		○	○	白色小礫	明黄褐色	明褐色	良	不明	一括	胎土：紫色の特徴的な鉱物あり
	19	J-15	表土	Ⅶ類	口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	橙	橙	良	不明	一括	19～26までは同じような胎土
	20	I-16	Ⅱ		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	褐色	明褐色	良	132.106	1665など	
	21	L-16	Ⅱ		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい褐色	にぶい黄橙	良	131.585	3463など	
	22	M-17	Ⅱb		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	132.66	8326	
	23	G-4	Ⅱd		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良	129.77	12825	
	24	20T	Ⅱ		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	130.06	545	
	25	−	表土		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		灰黄褐色	にぶい褐色	良	不明	一括	
	26	J-15	Ⅱc		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		灰黄褐色	にぶい黄褐	良	132.021	2067	
	27	I-14	表土		口縁部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐色	褐色	良	不明	一括	※胎土・色調など特徴的である
	28	G-8	Ⅱd	Ⅷ類	胴部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	130.565	11813	
	29	F-17	Ⅱ		胴部	棒状工具刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	赤色鉱物	灰黄褐色	黒褐色	良	132.905	5471	胎土：金雲母
35	30	G-3	Ⅱc		口縁部	なし	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		明黄褐色	にぶい黄橙	良	129.105	12001など	
	31	G-3	Ⅱc		肩部	なし	工具ナデ	工具ナデ	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	129.125	12122など	
	32	I-16	Ⅱ		口縁部	沈線文	ナデ	ナデ		○	○	赤色鉱物	にぶい褐色	褐色	良	132.418	1374など	胎土：金雲母・白色小礫
	33	I-16	Ⅱ		口縁部	沈線文	ナデ	ナデ	○	◎	○	赤色鉱物	灰褐色	にぶい褐色	良	132.758	1343など	胎土：金雲母・白色小礫・長石多
	34	G-5	Ⅱd	Ⅸ類	口縁部	なし	粗い工具ナデ	ナデ	○	○	○	金雲母	黒褐色	褐色	良	129.655	12983など	
36	35	G-5	Ⅱd		口縁部	なし	粗い工具ナデ	ナデ	○	○	○	金雲母	黒褐色	暗褐色	良	129.735	12969など	
	36	J-17	Ⅱ		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	金雲母	にぶい黄褐	明赤褐色	良	133.126	1420など	胎土：様々な小礫が多量に混ざる
	37	G-6	Ⅱd		底部	なし	工具ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい黄褐	良	130.206	11893	
	38	G-5	Ⅱd	Ⅹ類	底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい褐色	灰褐色	良	129.75	12906など	組織痕土器
	39	G-5	Ⅱd		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄褐	灰黄褐色	良	129.795	12850など	組織痕土器
	40	G-5	Ⅱd		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○	白色小礫	にぶい黄褐	灰黄褐色	良	129.71	12950	組織痕土器
	41	I-13	表土		底部	なし	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	不明	一括	組織痕土器

第９表　十三塚遺跡縄文時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号	備考
37	42	スクレイパー	F-18	Ⅳb	安山岩	9.6	12.1	1.7	154.91	6210	縄文時代早期

第２節　弥生時代の調査と成果

１　調査の概要

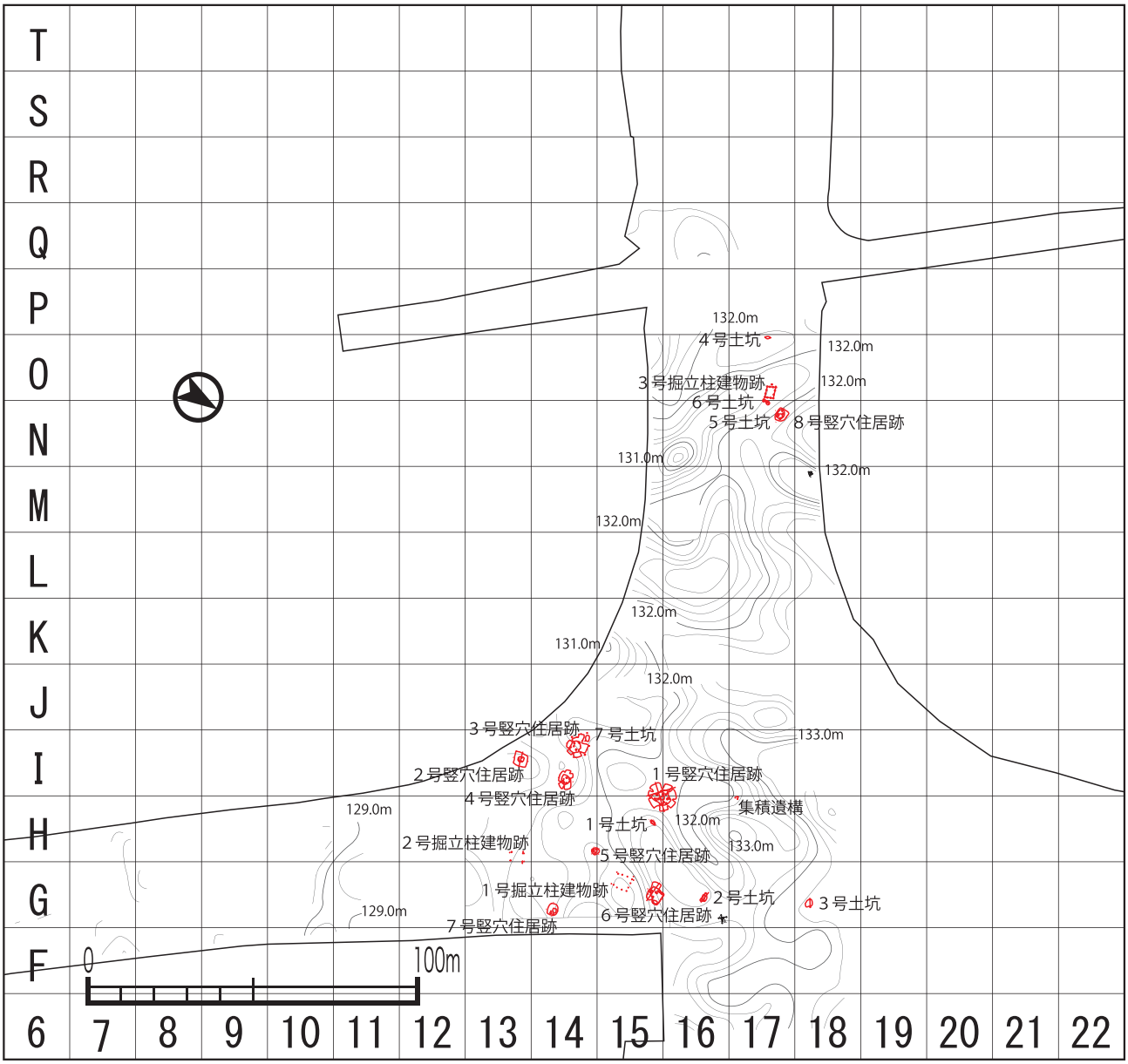
十三塚遺跡発掘調査のメインとなるのが弥生時代中期の調査であった。第３章の第２節で記述したが，Ⅱ層は全体的に黒褐色を呈する土層であり，弥生時代から縄文時代中期・後期までの遺物包含層としている。それを６つに分層した。そのうちⅡｂ層とⅡｄ層の，いわゆる遺物包含層から多くの遺物が出土している。この２つの層は時間差の表れとして把握できるものと考えた。しかし，実際は，混在して出土しているものもあることから，本報告書での記載は，Ⅱｂ層を弥生時代中期該当層，Ⅱｄ層を縄文時代中期・後期の遺物包含層とするが，出土土器については層位ごとではなく，従来の土器編年を基準としながら，土器型式ごととすることにした。

石器については，どの土器型式に伴うものかが不確定であることから，層位ごとの記載とした。土器は型式ごと，石器は層位ごとと，遺物によって記載が異なることになるが，遺物観察表を参照していただきたい。

２　調査の成果

⑴　遺構（第38～92図）

弥生時代中期の遺構としては，竪穴住居跡８軒，掘立柱建物跡３棟，土坑７基であった。これらは山ノ口式土器など，中期とされる土器段階のものと考える。



第38図　十三塚遺跡弥生時代中期遺構配置図

ア　竪穴住居跡（第39～75図）

竪穴住居跡は８軒検出された。これらは全てが単独に検出されている。

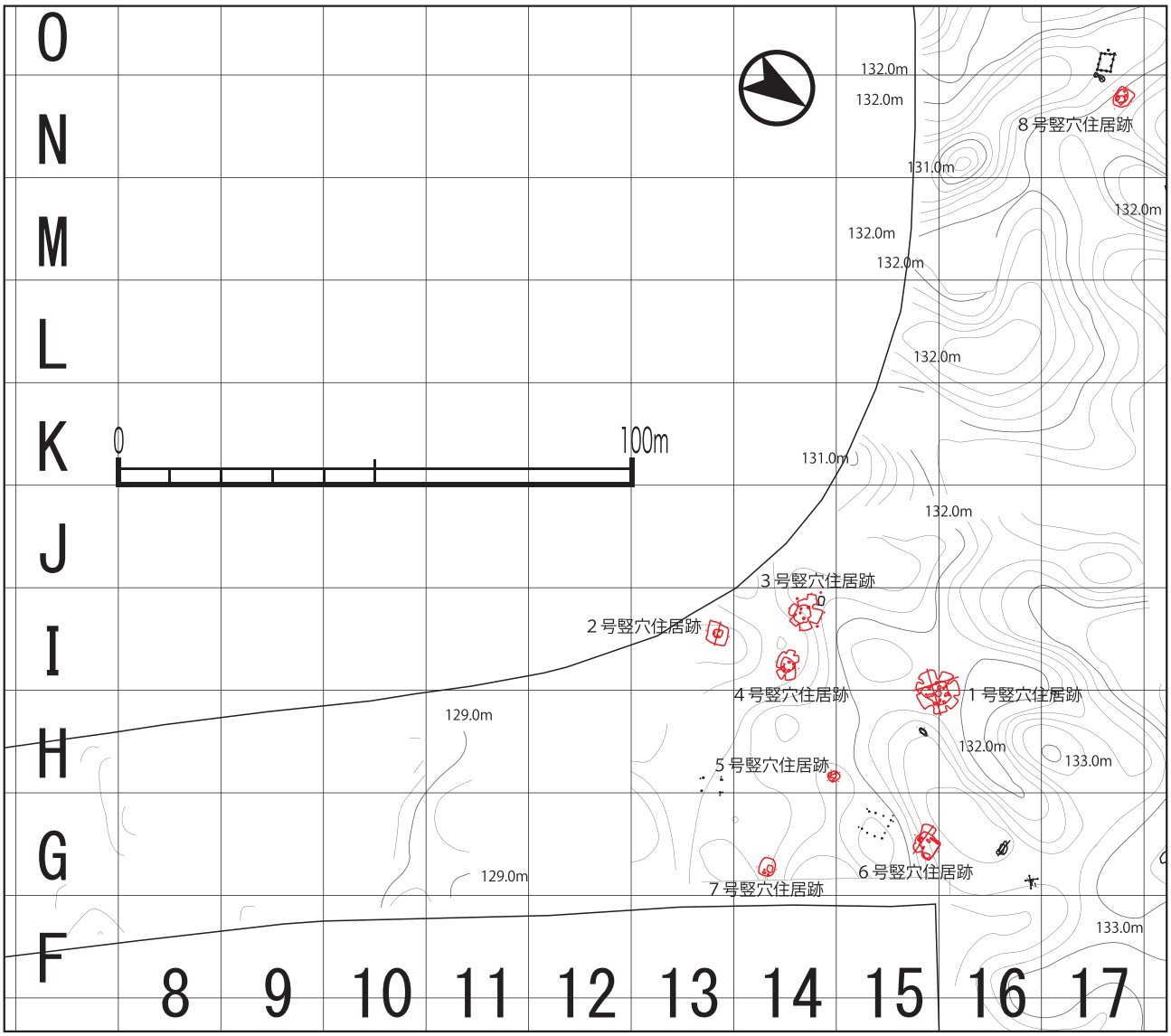
形状　検出面の形状は隅丸方形と思われるものが半数の４軒と最も多く，次に花弁形，隅丸方形に張り出しをもつものとなっている。建物内部の構造は，ベッド状になっているものが４軒あった。これは花弁形および張り出しを持つ住居跡に見られている。ピットについては１号住居跡が19基と最も多く，２～８号住居跡については明確な深いピットが２基，浅いピットが２基ずつ，計４基ずつ検出されいる。

規模　検出面積が最大のものが63.85㎡，最小のものが３.99㎡，平均値が23.53㎡であった。30㎡以下の遺構が６基と，全体の75％を占める。最大値を示すのは１号住居跡であり，２位の３号住居跡の39.35㎡を大きく離している。これは他の住居跡よりかなり広いことから，大型の部類として捉えておきたい。

検出状況　前述の通り，８基全てが単独で検出されている。検出面は，Ⅱｄ層，またはⅡｆ層上面であった。

調査区内は，ゴボウのトレンチャーでかなり掘削を受けており，検出は困難を極めた。その中で，Ⅱｄ層あたりからはトレンチャーの影響も少なくなり，埋土の違いから検出できたものもある。また，池田降下軽石が広がるⅡｆ層上面で池田降下軽石がない部分からプランを検出できた場合もあった。

分布　竪穴住居跡の分布を見ると，Ｎ－17区に１軒，Ｇ～Ｉ－13～16区に７軒と，Ｇ～Ｉ区に集中していることが分かる。Ｈ・Ｉ－15・16区の１号大形住居跡を取り囲んでいるようにも見える。Ｎ－17区の８号住居においては，１号～７号住居とは100ｍほど離れており，隣接して掘立柱建物跡や大量の土器，土製勾玉等も出土していることから，別の集落が存在していたのではという考え方も考慮しておきたい。



第39図　十三塚遺跡弥生時代中期竪穴住居跡配置図

１号竪穴住居跡(第40～46図)

検出状況　Ｈ・Ｉ－15・16区にかけて検出された。検出面はⅡｄ層の茶褐色土であった。その茶褐色土の中にⅡ層上面にあると思われる黒褐色土が土坑のようなプランとして微かに見えたことから遺構と判断し，中央部と思われる部分にミニトレンチを入れ床面を検出し，その後床面から壁を検出していく方法を用いて調査を行った。

形状と規模　基本となる平面プランは円形に張り出しを７箇所持つ花弁形である。長軸は7.2m，短軸は6.1ｍを測る。検出面からの深さは，浅い部分で，約４～６㎝，中央部の掘り込み面と思われる部分で約78～80㎝であった。浅い部分に関しては，検出面がかなり低かったことによるものと考えられる。検出面から埋土を掘り下げていくと，硬く締まった貼り床と思われる部分を確認できた。これは当時使用していた床面であろうと判断した。

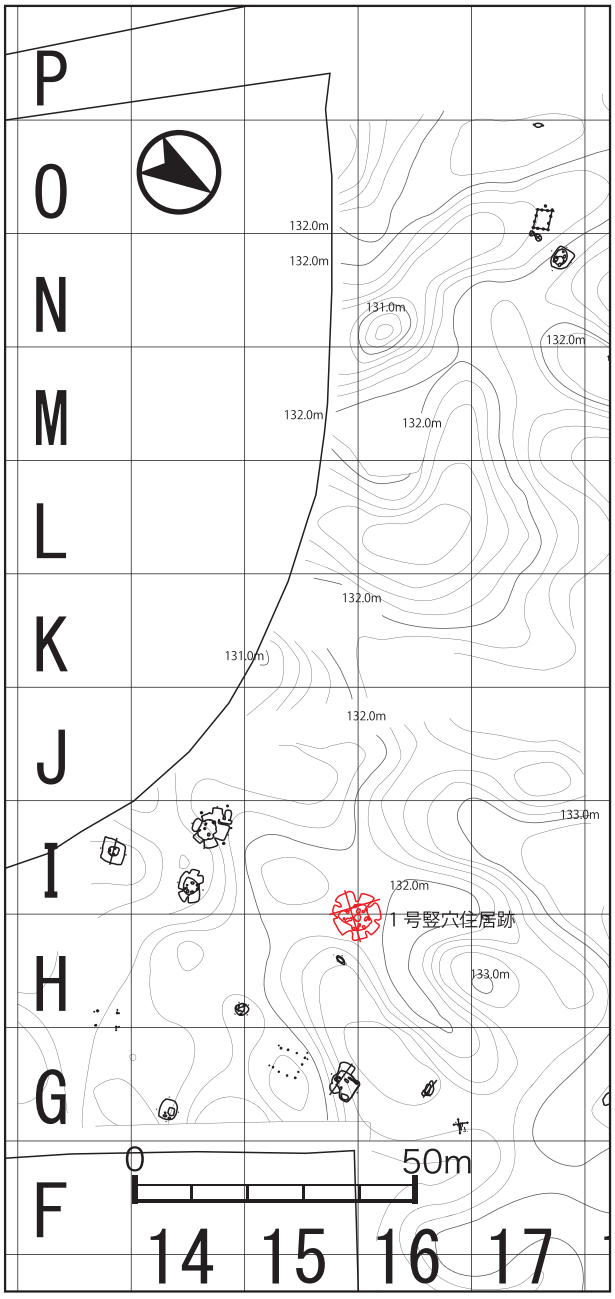
この住居跡からは，19基のピットが検出された。これらのピットのほとんどは，住居内の円形部分に沿うように位置していることから，これらのピットはこの住居に伴う柱穴ではないかと考える。

埋土　埋土は茶褐色土層を基本とし，オレンジ色のパミスをごく少量含む。床面と思われる中央部は，４～６㎝のアカホヤパミスがブロック状に混ざり，かなり硬質であり，貼床を形成していると思われる。また，下位には黒橙褐色の土も見られた。ピット内の埋土はⅡ層の黒色土であると思われる。かなり柔らかい。

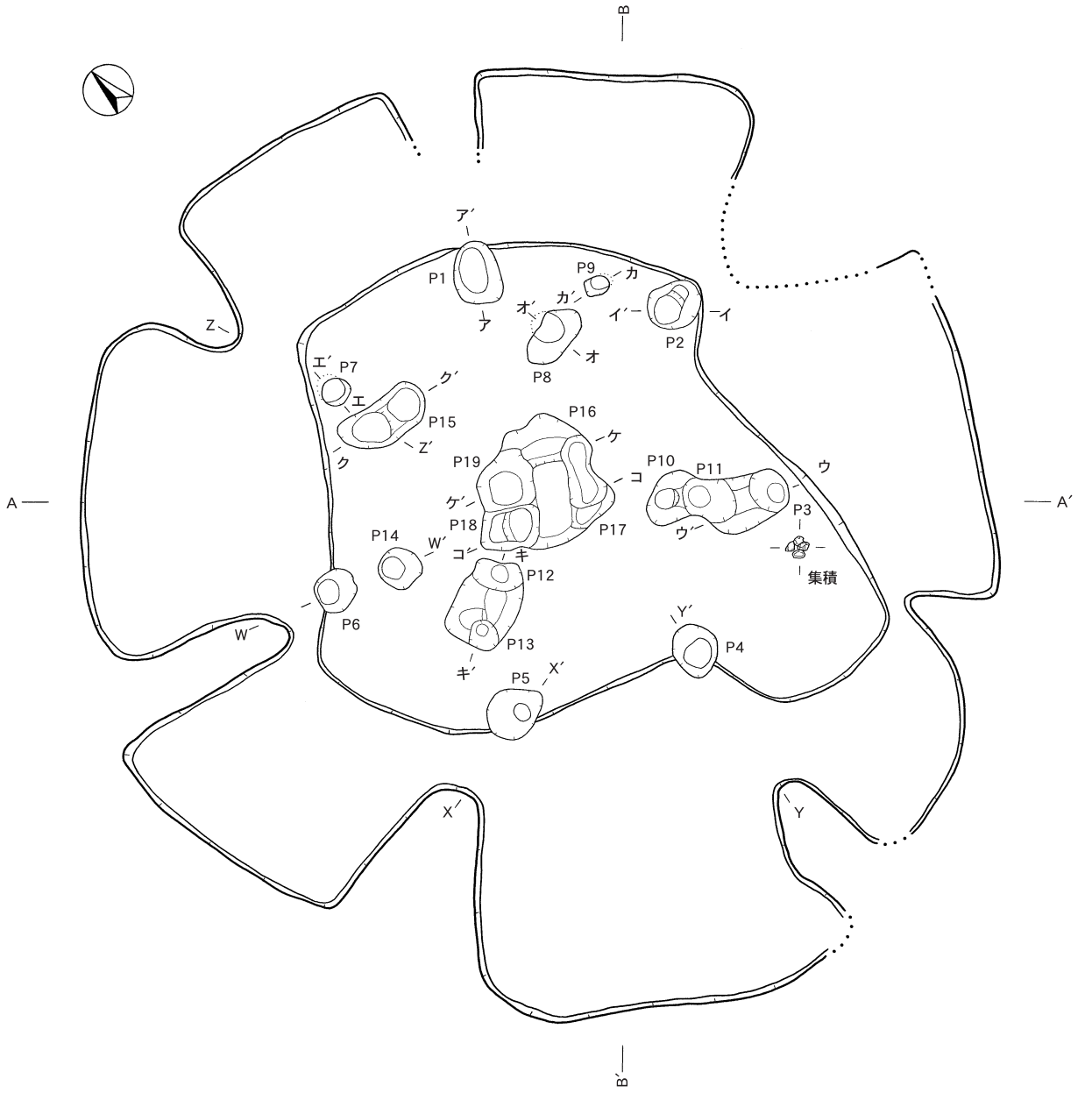
出土遺構･遺物　竪穴住居跡から出土した遺物は103点で，うち12点を図化した。

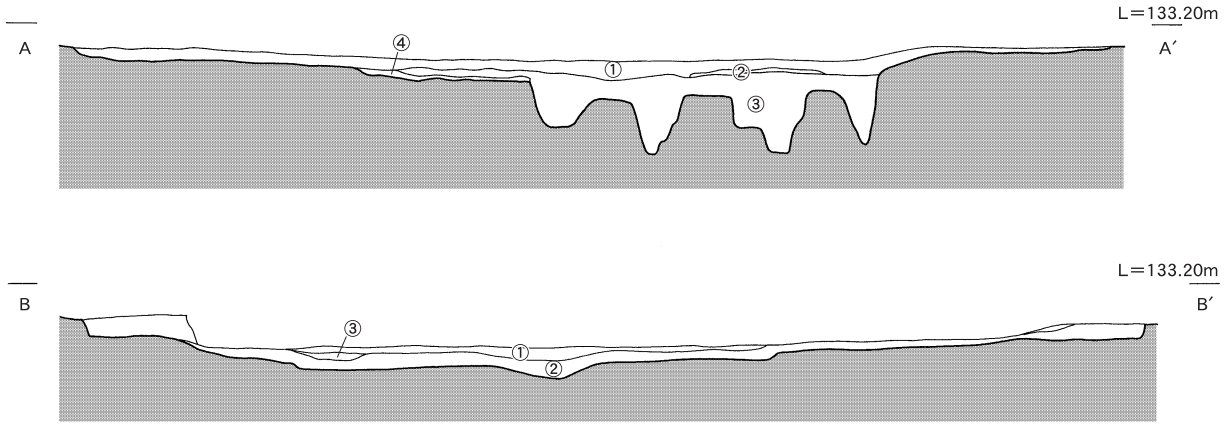
住居内遺構：集積遺構（第44図）　住居内の南東側で検出した。床面より数㎝上部で検出された。礫が３個，軽石が１個並べられたような状態で出土した。敲打痕等は確認されず，自然石と思われる。このような出土状況から人為的に置かれたものではないかと考えられる。

遺物（第45・46図：43～54）住居内の遺物は土器や石器等，多彩である。出土土器は壺，甕，鉢などである。石器は軽石製品，棒状叩具等，そのほか機種は不明であるが，鉄製品も出土している。43は甕形土器の口縁～胴部である。内湾気味の口縁部でくの字状に外反する。一条の断面三角形貼付突帯を巡らす。44は甕形土器の口縁～胴部である。直口気味の口縁部でくの字に外反し，口縁部端面は凹む。肩部には三条の断面三角形貼付突帯を巡らす45は壺形土器の胴部～底部であると思われる。充実した脚台で外方へ直線的に立ち上がる器形になると思われる。46は高坏の口縁部と思われる。口縁は大きく内湾し，口唇部から屈接部にかけて三条の断面三角形貼付突帯を巡らしている。47～49は安山岩を石器の素材とした磨石であるが，側縁に敲打痕も見られ敲石としても利用している。50は打製石鏃である。黒曜石を石器の素材として用いた石鏃である。二等辺三角形状を呈しており，先端部は欠損している。両面ともに交互剥離により調整されている。51は砂粒の砂岩を用いた棒状を呈した叩具である。ほぼ中央部で半分に折れており，先端部分及び片側付近は敲打によるためか，凹凸を認める。基部付近は握手部分を認める。握手部分には研磨を認める。 52は安山岩を石器の素材として用いた磨製石斧である。幅広で厚みを有しており，円刃をなす部分に入念な研磨がなされている。一部に敲打痕も残している。53と54は軽石製品である。ともに中央部が凹み，使用痕を認める。また，水晶の原石が２点出土している。３㎝程の小さなもので，１点は破砕されている。２点とも表面に煤が付着している。



第40図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡位置図

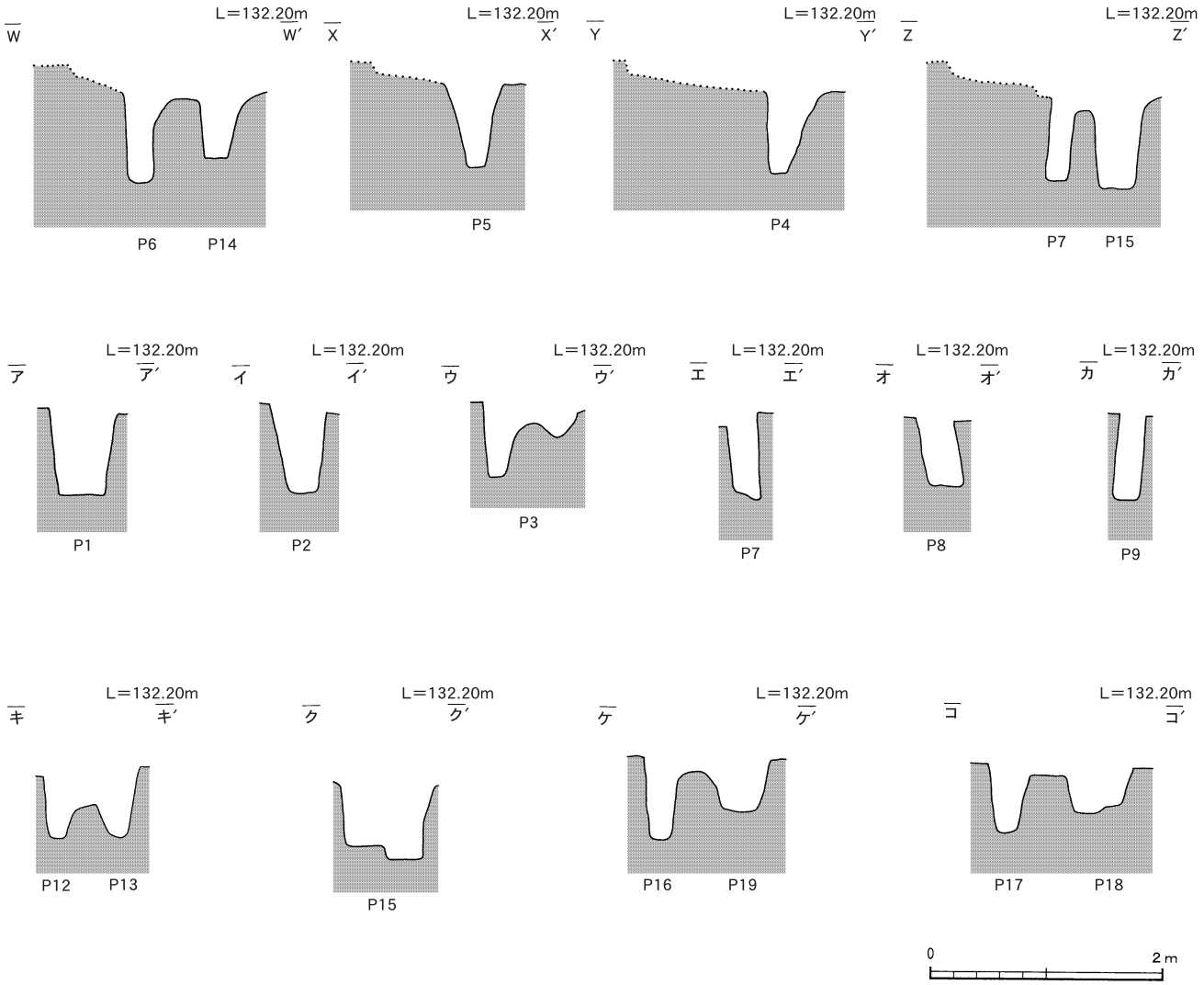




①茶褐色土　オレンジパミス混土
②茶褐色土　オレンジパミス混土硬化面
③黒褐色土　アカホヤ
④黒褐色土　アカホヤ硬化面

0　2m

第41図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡１

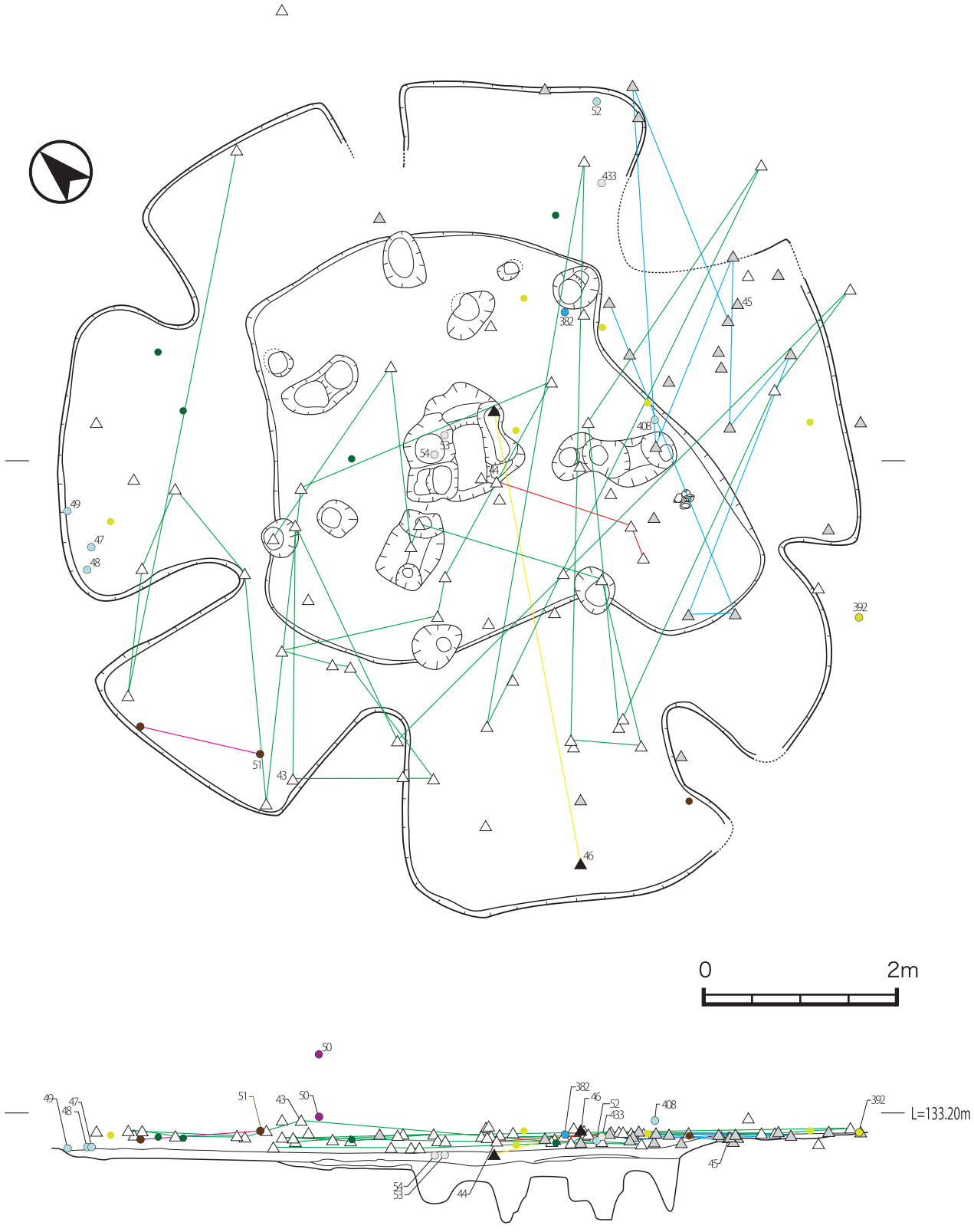


第42図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡２

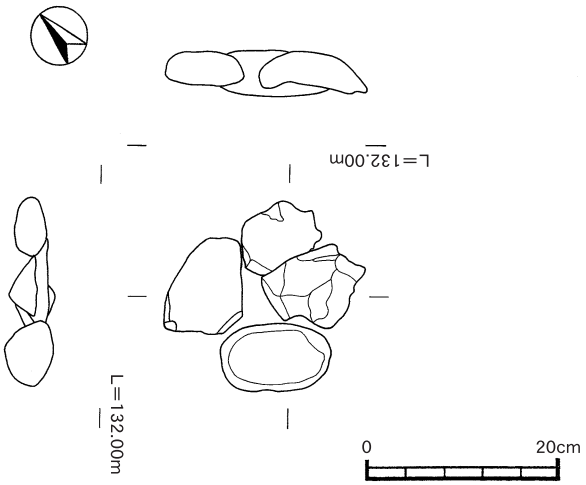
第10表　十三塚遺跡１号竪穴住居跡柱穴計測表

ピットNo.	短軸（cm）	長軸（cm）	深さ（cm）	ピットNo.	短軸（cm）	長軸（cm）	深さ（cm）
P１	40	56	72	P11	−	−	72
P２	40	50	72	P12	−	−	54
P３	−	−	64	P13	−	−	60
P４	42	48	70	P14	18	42	52
P５	44	56	72	P15	18	84	64
P６	38	40	76	P16	−	−	70
P７	24	24	72	P17	−	−	58
P８	30	60	56	P18	−	−	38
P９	18	22	72	P19	−	−	44
P10	−	−	54				

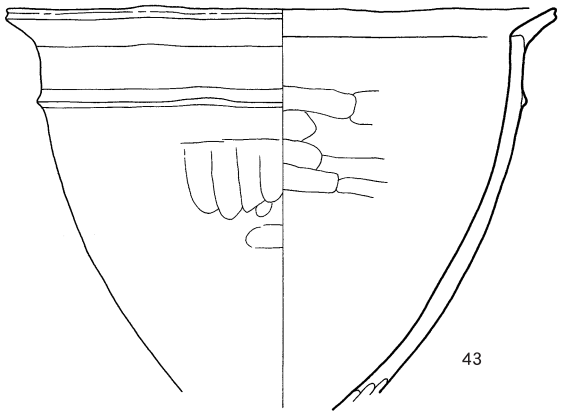
主な柱穴間の長さ	（cm）	主な柱穴間の長さ	（cm）
P１～P２	180	P５～P６	204
P２～P３	195	P６～P７	186
P３～P４	162	P７～P１	168
P４～P５	168		

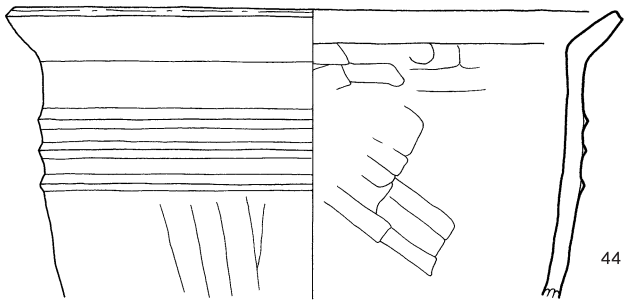


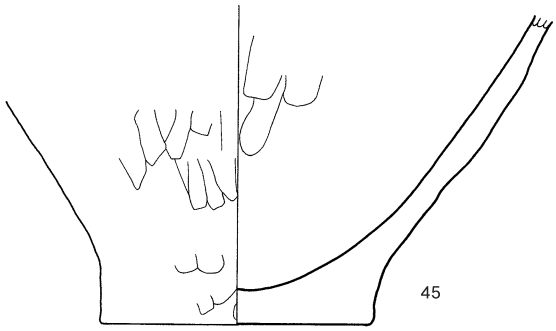
第43図　十三塚遺跡 1 号竪穴住居跡遺物出土状況図

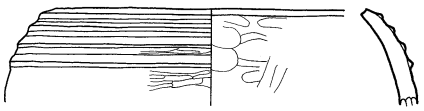


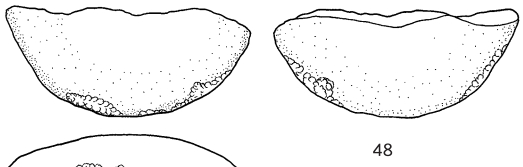
第44図　十三塚遺跡 1 号竪穴住居跡住居内集積遺構

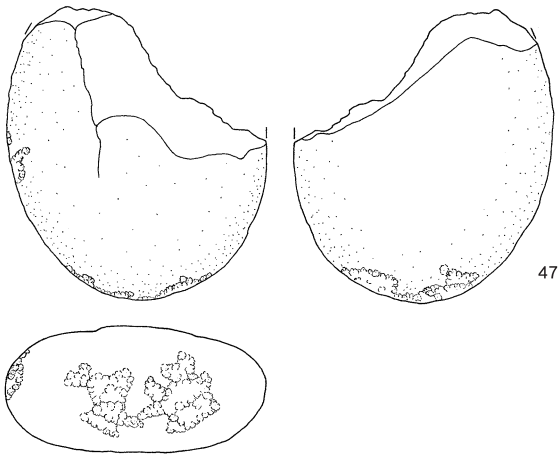


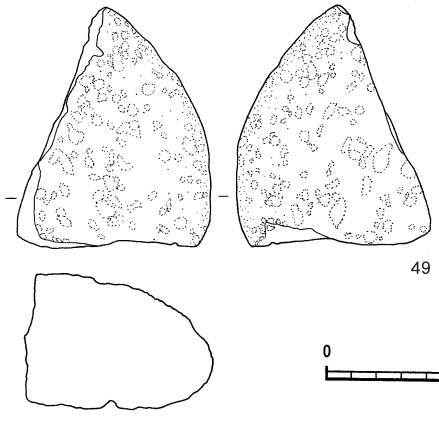


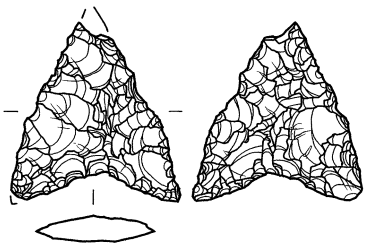


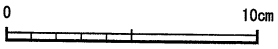


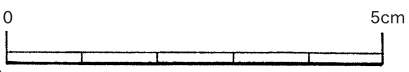




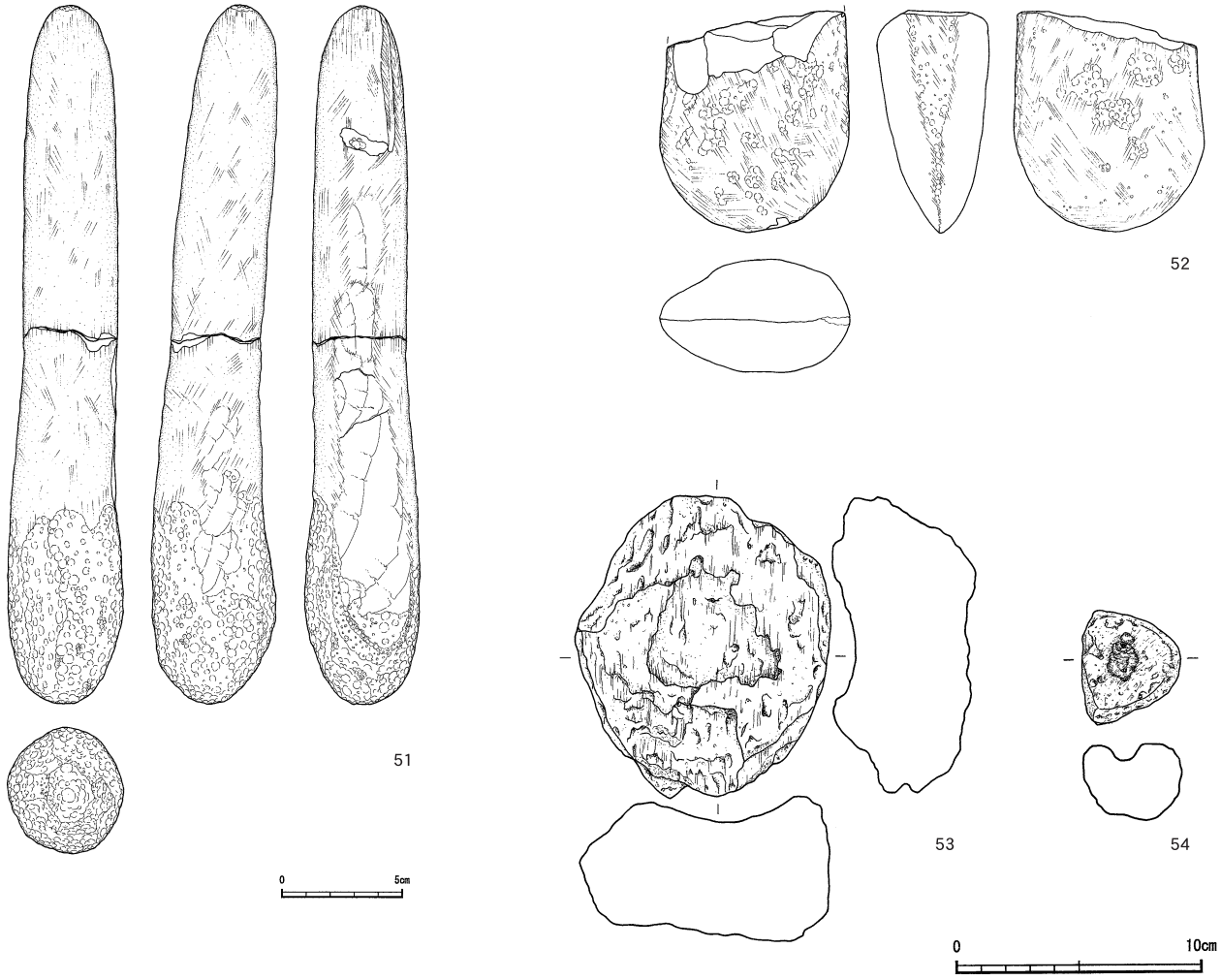








第45図　十三塚遺跡 1 号竪穴住居跡出土遺物 1



第46図　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土遺物２

第11表　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
45	43	鉢	口縁～胴部	21.7	—	—	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○	○	○			良	
	44	甕	口縁～胴部	24.5	—	—	明褐	橙	ナデ	ナデ		○	○	○			良	
	45	壺	胴部～底部	—	10.9	—	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ		○		○			良	
	46	高坏	口縁部	12.2	—	—	黒	黒	ミガキ	ナデ		○	○	○			良	

第12表　十三塚遺跡１号竪穴住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号
45	47	磨石・敲石	安山岩	11.6	10.3	5.0	820	3612
	48	磨石・敲石	安山岩	9.6	4.4	5.4	260.94	3614
	49	磨石・敲石	安山岩	9.5	7.7	5.4	425	3615
	50	打製石鏃	黒曜石	2.4	2.2	0.4	1.3	3073
46	51	棒状敲具	砂岩	28.9	4.8	5.2	830	1573・1574と接合
	52	磨製石斧	安山岩	9.2	7.9	4.7	410	3618
	53	軽石加工品	軽石	12.3	10.4	5.9	234.56	3606
	54	軽石加工品	軽石	4.0	4.7	3.2	15.32	3607

２号竪穴住居跡（第47～50図）

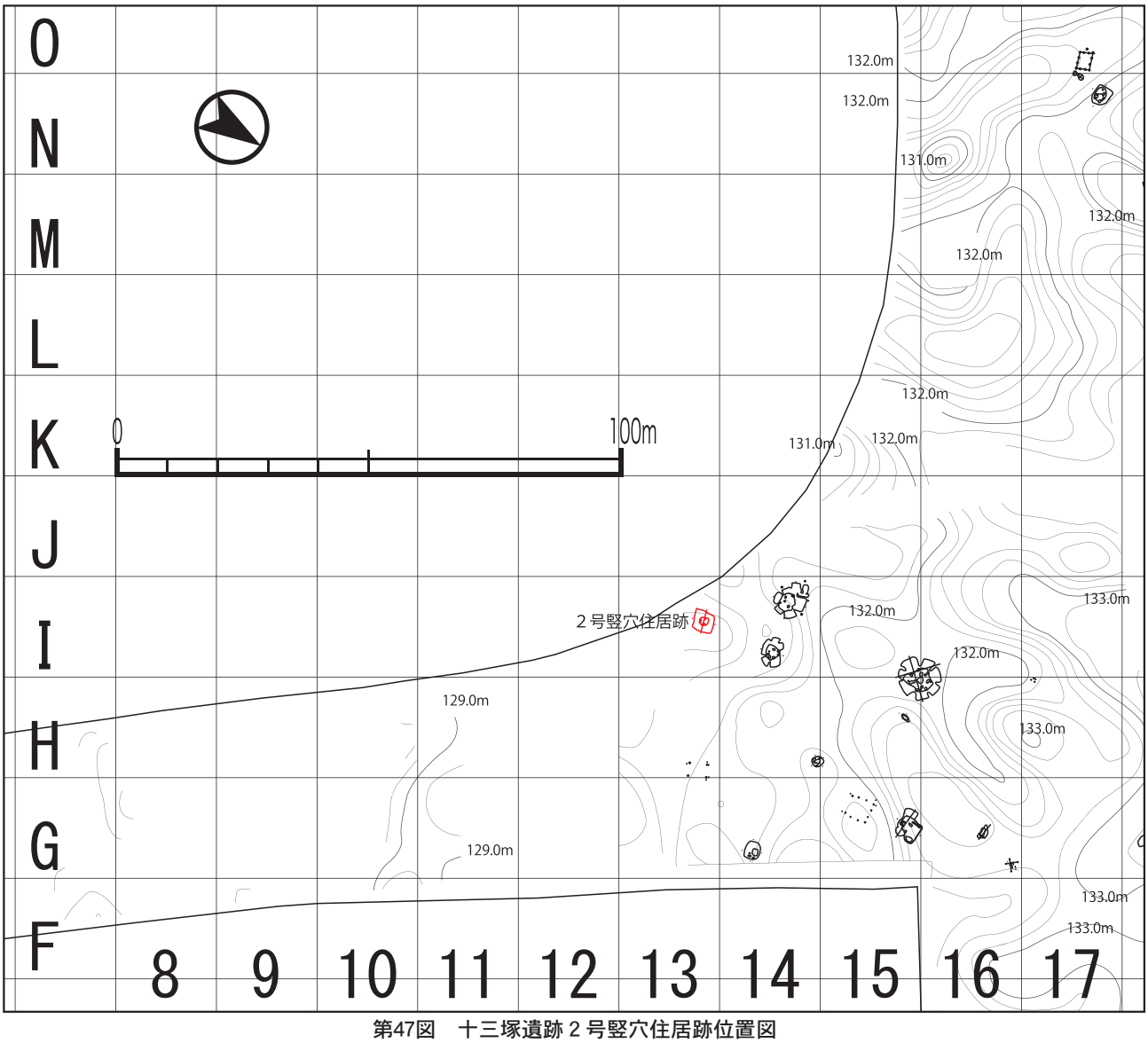
検出状況　Ⅰ－13区にかけて検出された。検出面はⅡｆ層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。この層は，池田降下軽石が薄く堆積しているのだが，検出面はこの軽石が方形状に堆積していなかったことから遺構と判断し，１号住居跡と同様にミニトレンチを設定して掘り下げていく方法を用いて調査を行った。

形状と規模　基本となる平面プランは，隅丸方形で，長軸は4.0m，短軸は3.96mを測り，正方形度がかなり高い。検出面からの深さは，浅い部分で約９～12㎝であり，床面の中央部は一段深く掘り下げられて掘りコタツ状になる。床面からさらに約30㎝深くなる。深い部分はⅢ層のアカホヤ火山灰層まで掘り抜かれていた。浅い部分に関しては，やはり検出面が低かったことによるものと考えられる。

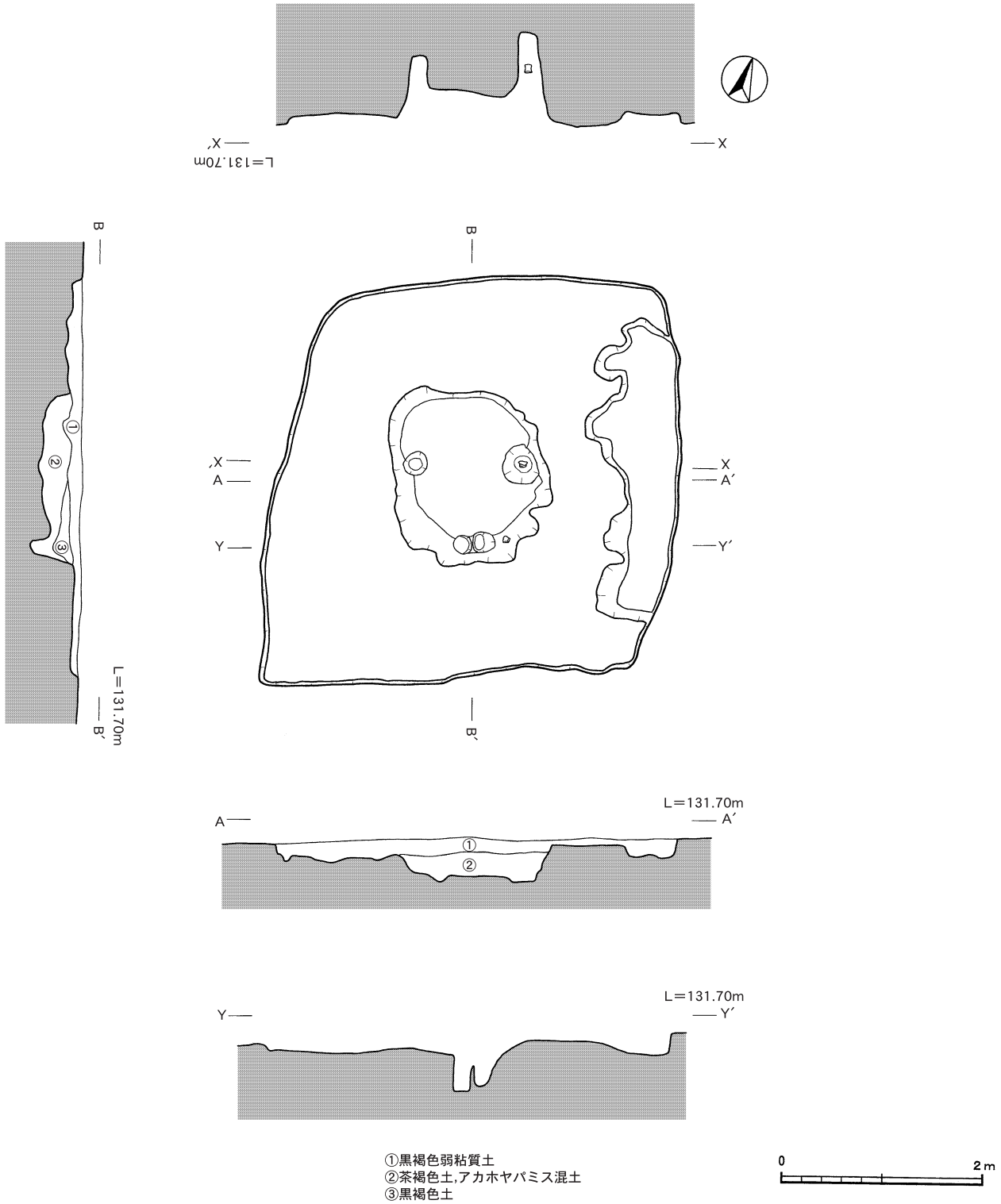
この住居跡からは４基のピットが検出され，住居の中央部に２基，南側に２基配列されている。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約150㎝，Ｐ３→Ｐ４が約20㎝である。これらのピットの断面の形状をみると，下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは，Ｐ１が約55㎝，Ｐ２が約90㎝，Ｐ３・Ｐ４が約30～35㎝である。このようなことから，これらのピットは，この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土　埋土は茶褐色土層を基本とし，オレンジ色のパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，アカホヤパミスがブロック状に混ざっている。下部には黒橙褐色の土もみられた。

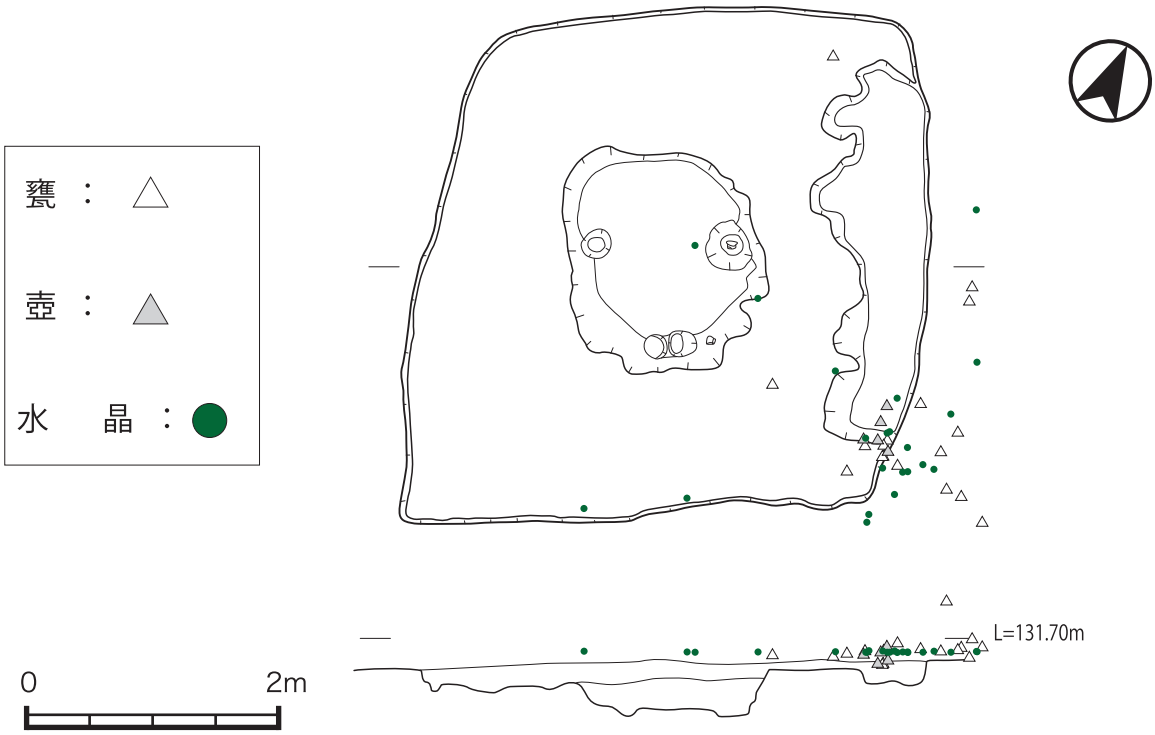
出土遺物（第50図：55・56）　竪穴住居跡から出土した遺物は44点であり，２点を図化した。55は甕形土器の底部である。Ｐ２より立った状態で出土した。平坦な平底を呈し，内・外面ともにナデ調整が行われている。また，56は頁岩を素材に用いた砥石である。これも直立状態で出土している。基部付近は四面ともに研磨を認め，非常に滑らかである。また，37点の水晶のチップも出土している。石材の種類は１類が２点，２類が32点，３類が３点である。



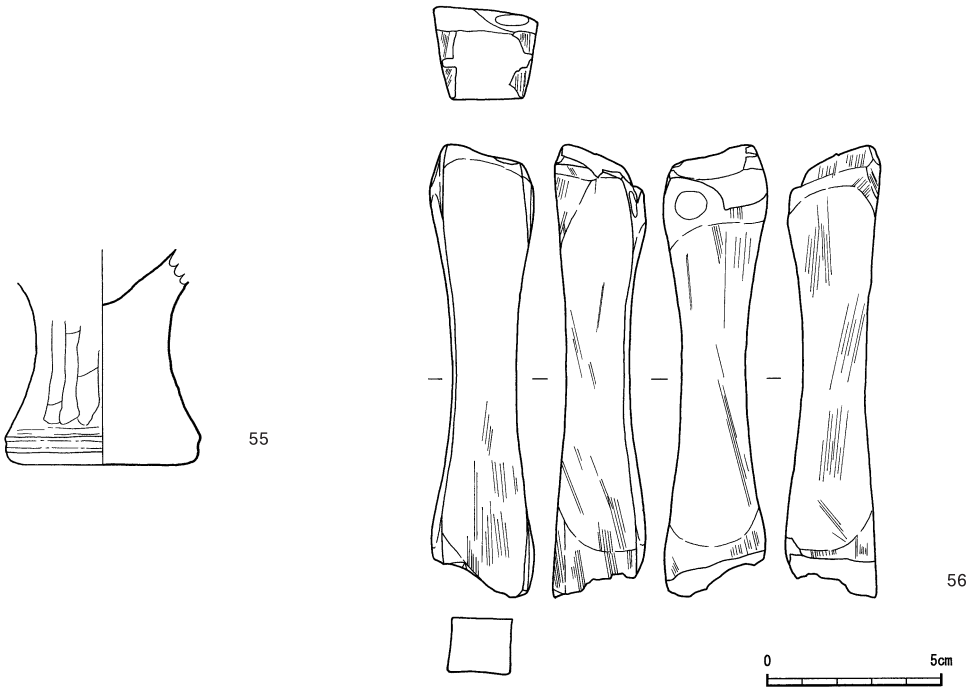
第47図　十三塚遺跡２号竪穴住居跡位置図



第48図　十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡



第49図　十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡遺物出土状況図



第50図　十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡出土遺物

第13表　十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
50	55	甕	脚部	—	7.6	—	浅黄	黒褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	

第14表　十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号
50	56	砥石	頁岩	13	2.9	2.7	116.71	2285

３号竪穴住居跡（第51～54図）

検出状況　Ⅰ－14区で検出された。検出面は２号と同じくⅡｆ層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。この層は，池田降下軽石が薄く堆積しているのだが，青紫色の硬質砂質層が直径約５ｍの範囲でリング状に検出された。本遺跡の埋土層にはなかったものである。精査をかけて，硬質砂質層が消えてきたところで張り出し部と思われるプランを検出し，遺構と判断し，遺構中央部からミニトレンチを設定して掘り下げていく方法を用いて調査を行い，住居跡と判断した。

形状と規模　基本となる平面プランは円形に張り出しを７箇所持つ，いわゆる花弁形である。長軸は7.2m，短軸は4.98ｍを測る。検出面からの深さは，浅い部分で，約20㎝，中央部で約50㎝であった。中央部の深い部分はⅢ層のアカホヤ火山灰層まで掘り抜かれていた。浅い部分に関しては，やはり検出面が低かったことによるものと考えられる。

この住居跡からは４基のピットが検出され，２号住居と同じく，住居の中央部に２基，南側に２基配列されている。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約240㎝，Ｐ３→Ｐ４が約90㎝である。これらのピットの断面の形状をみると，下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは，Ｐ１・Ｐ２が約70㎝，Ｐ３・Ｐ４が約50～55㎝である。このようなことから，これらのピットは，この住居に伴う，柱穴の可能性が高いと考える。

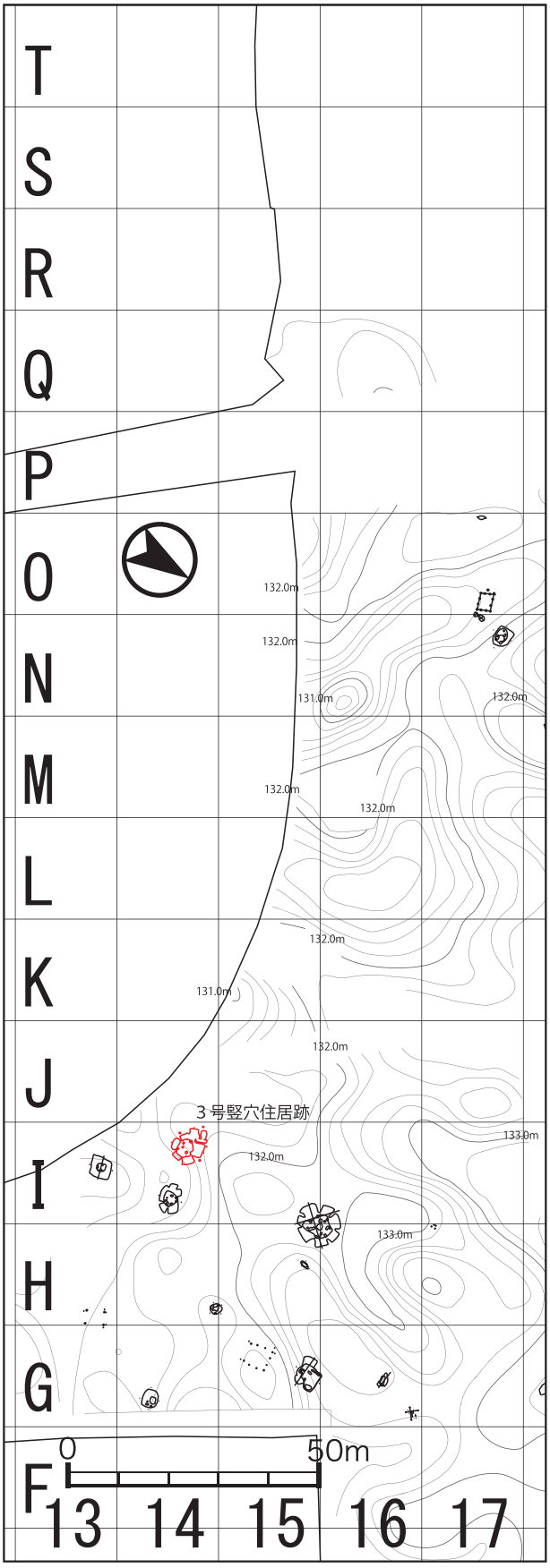
また，住居跡外側の北側，西側，南側にも４基のピットが検出されている。深さは10㎝～20㎝と浅い。埋土は住居内のピットと同じくⅡ層黒色土と思われる柔らかい土であり，住居に伴うピットの可能性もあると考える。

また，この住居の西側に近接するように土坑が検出されている。途中をイモ穴で削平されており，住居の張り出し部ではないかとの検討も行ったが，土坑と住居までの間に明確な掘り込みは断定できず，土坑と判断した。

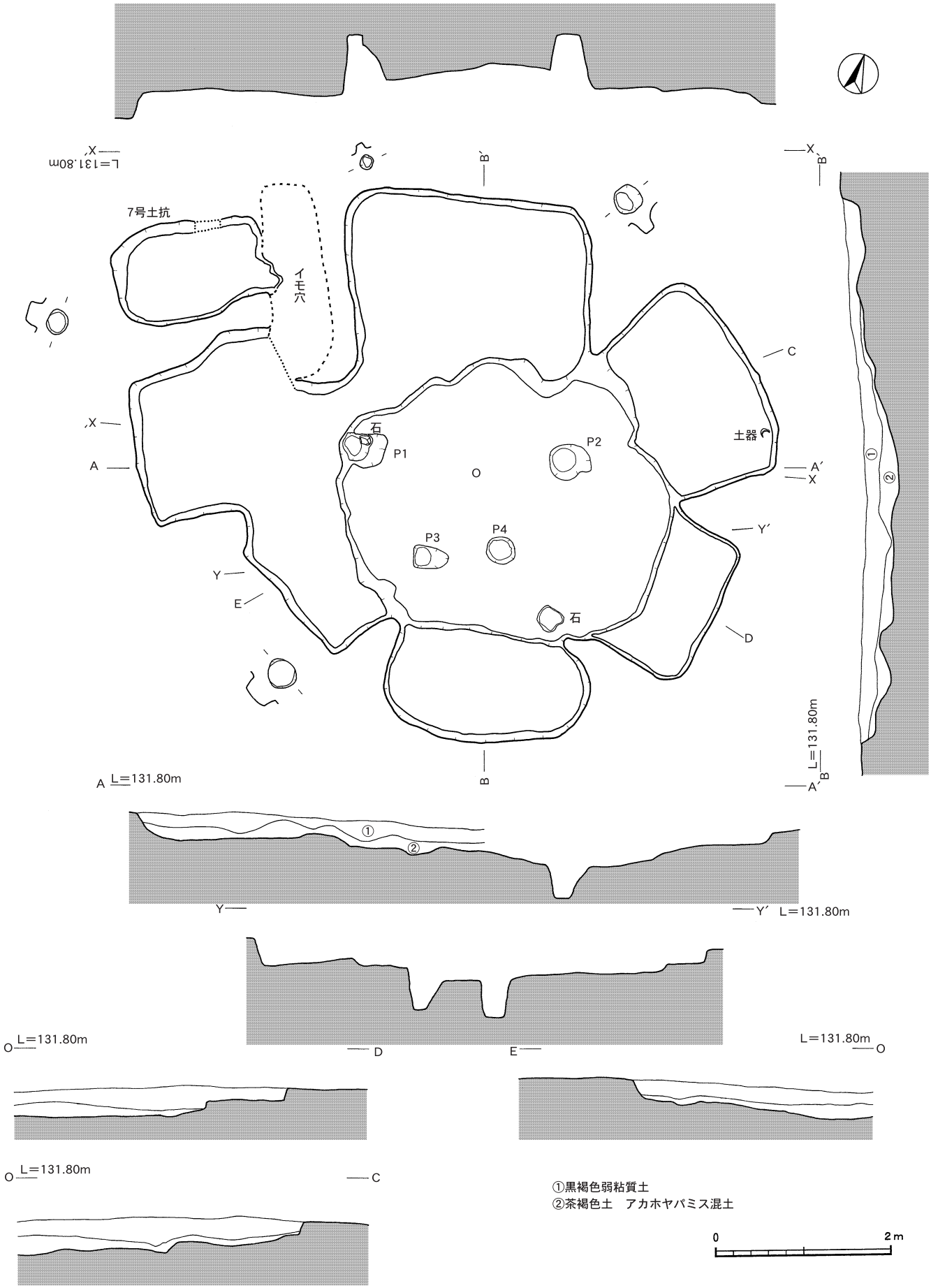
埋土　埋土は茶褐色土層を基本とし，オレンジ色のパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，アカホヤパミスがブロック状に混ざっている。下部には黒橙褐色の土もみられた。

出土遺物（第54図：57～59）　竪穴住居跡から出土した遺物は20点であり，３点を図化した。

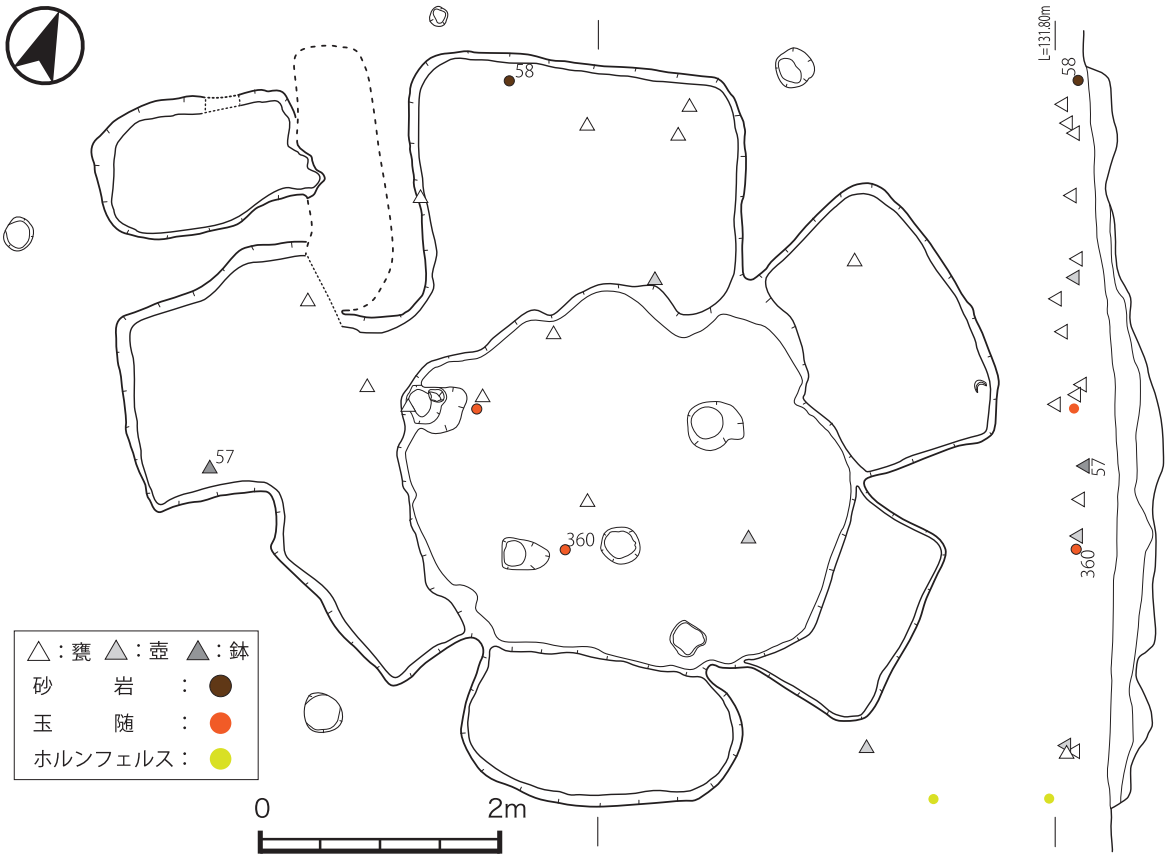
57は鉢形土器の完形品である。張り出し部際より出土した。底部は平底で外方へやや開きながら口縁部をつくる。口唇部は丸みを帯びている。58は砥石である。頁岩を素材に用い，部分的に研磨を認める。59は平坦面を持った大型の石器で平坦面は滑らかである。石皿あるいは台石的な使用等が考えられる石器である。



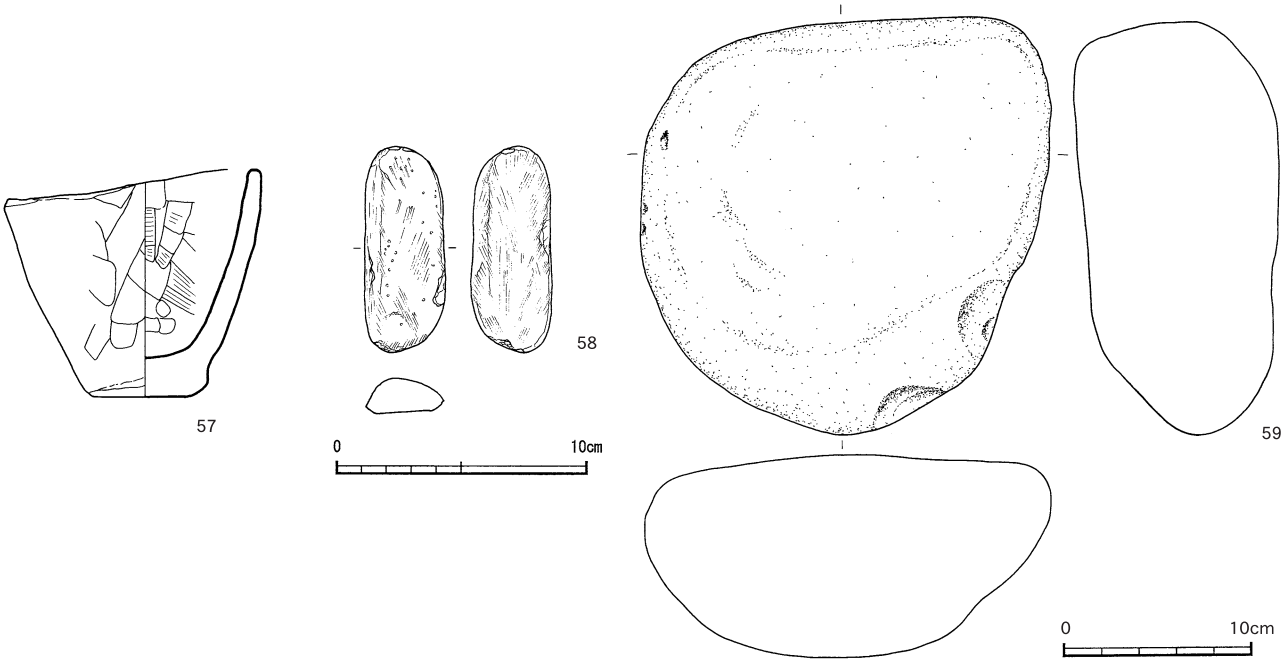
第51図　十三塚遺跡３号竪穴住居跡位置図



第52図　十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡



第53図　十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡遺物出土状況図



第54図　十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡出土遺物

第15表　十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
54	57	鉢	完形	10.25	4.0	9.0	明黄褐	橙	ナデ	工具ナデ	○	○	○				良	スス付着

第16表　十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
54	58	砥石	頁岩	8.2	3.3	1.5	63.98	2221
	59	台石	安山岩	23.2	19.8	11.2	7000	

４号竪穴住居跡（第55～58図）

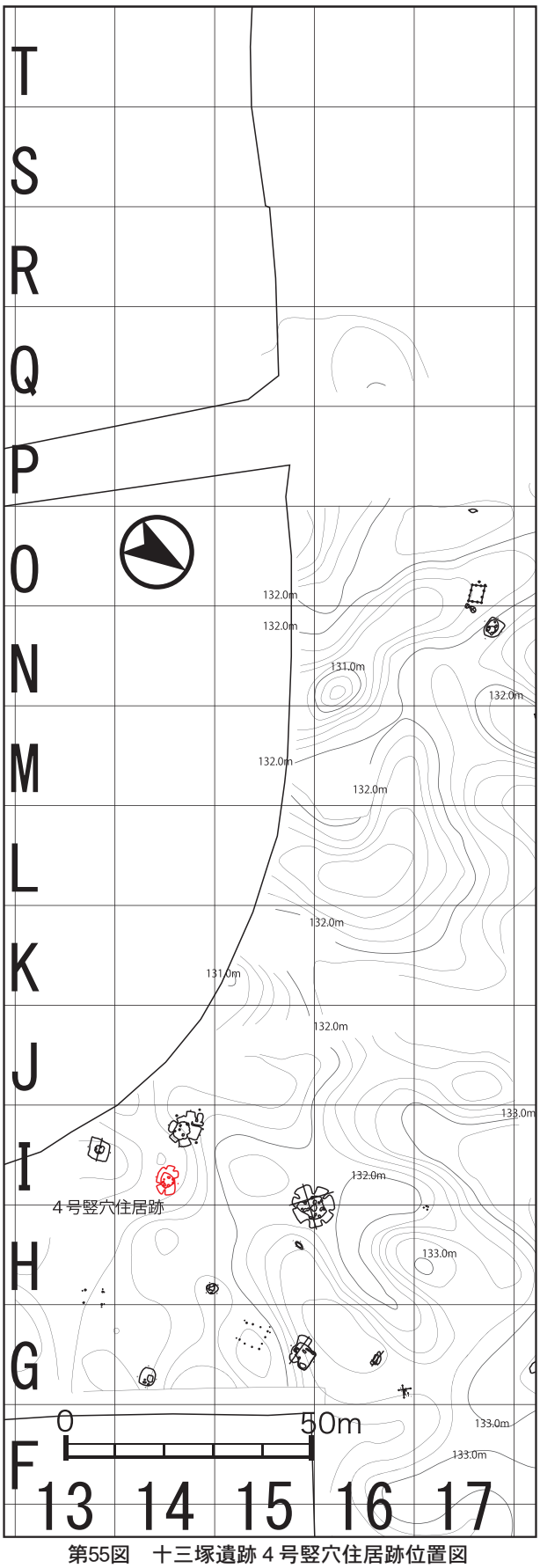
検出状況　Ⅰ－14区，３号住居跡東側約５ｍ程のところで検出された。検出面はⅡｄ層及びⅡｆ層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。南側は地層の横転部分があり，その横転部分の横から花弁形のようなプランを検出できた。北側においてはⅡｄ層部分では明確なプランが確認できず，Ⅱｆ層上面での検出となった。プランの形状から遺構と判断し，中央部分と思われる部分にミニトレンチを設定し，床面を検出し，壁を追いかける調査方法をとった。

形状と規模　基本となる平面プランは円形に張り出しを５～６箇所持つ，いわゆる花弁形である。５～６箇所という表現は北側部分の張り出し部を明確に確認できなかったためである。長軸は5.3m，短軸は3.4ｍを測る。検出面からの深さは，浅い部分で約10㎝，深い部分で約24㎝であった。浅い部分に関しては，検出面が低かったことによるものと考えられる。

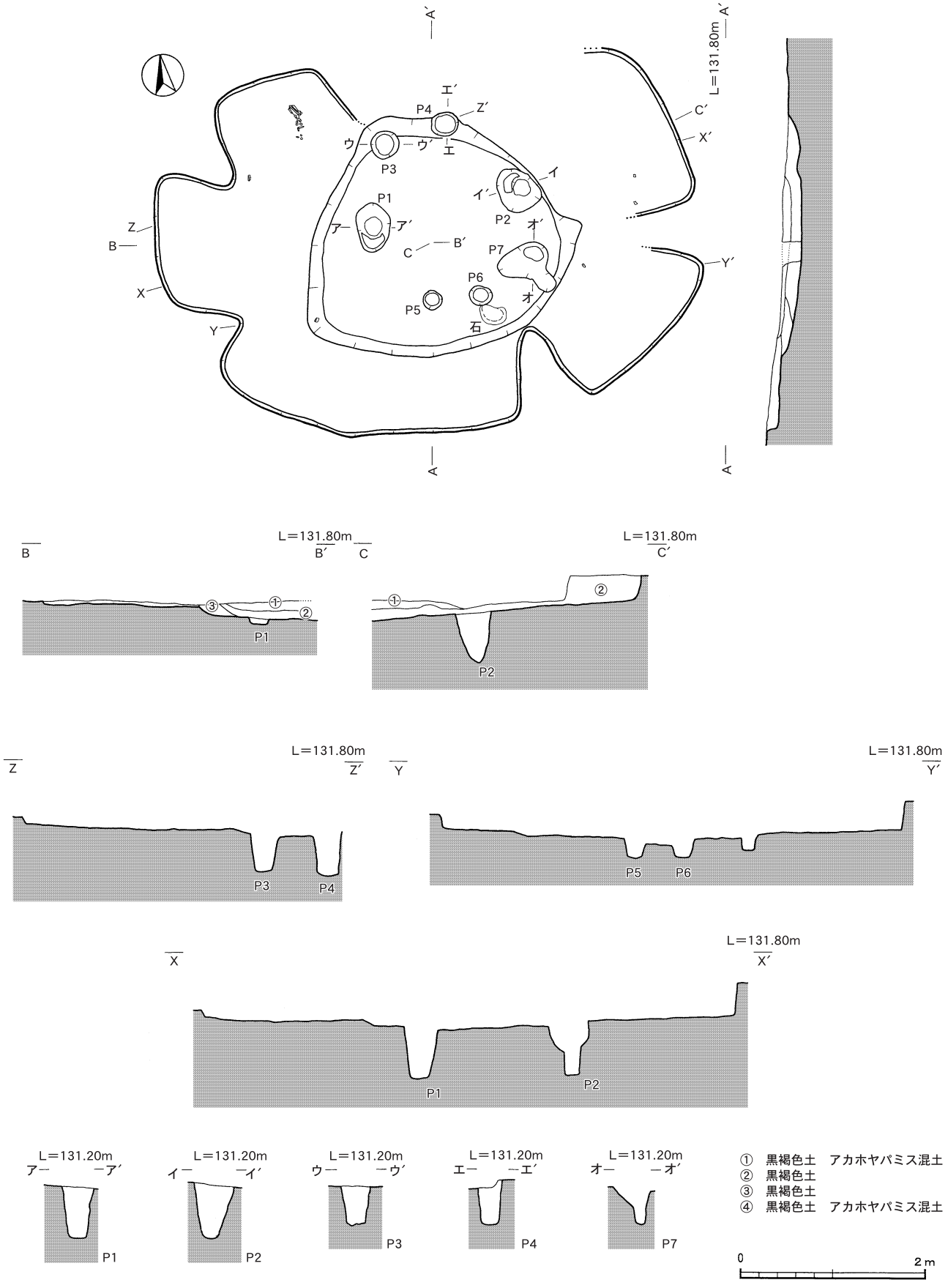
この住居跡からは７基のピットが検出され，住居の中央部に２基，北側及び南側にそれぞれ２基配列されている。Ｐ７に関しては，他のピットと違う掘り込みをしており，樹痕の可能性もある。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約160㎝，Ｐ３→Ｐ４が約70㎝である。Ｐ５→Ｐ６は約52㎝であり，Ｘ→Ｘ'を軸にした垂直の距離はＰ３までが約82㎝，Ｐ４までが約86㎝，Ｐ５までが約94㎝，Ｐ６までが約102㎝であり，Ｐ１・Ｐ２を中心に対称的に配置されてるように見える。これらのピットの断面の形状をみると，下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは，Ｐ１が約55㎝，Ｐ２が約60㎝，Ｐ３・Ｐ４が約40㎝，Ｐ５・Ｐ６は約20ｍである。このようなことから，これらのピットは，この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，アカホヤのパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，アカホヤパミスがブロック状に混ざっており，貼床を形成していると思われるが，そこまで明確ではない。下部には黒橙褐色の土もみられた。

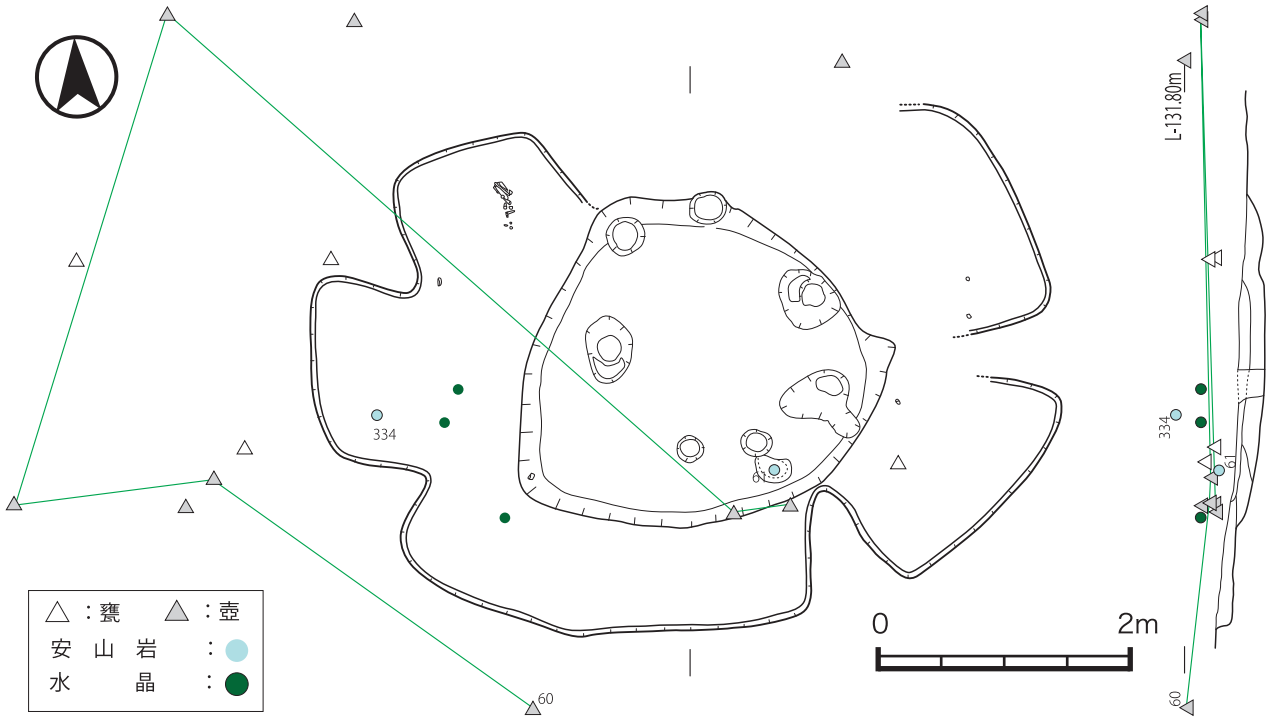
出土遺物（第58図：60・61）　竪穴住居跡から出土した遺物は19点であり，２点を図化した。60は壺の口縁部である。垂れ下がり気味に外反し，口縁部端面は凹む。また，61は石皿である。住居の南東側から出土している。図化はできなかったが鉄製品も出土した。錆化のため器種等は確認できなかった。また，張り出し部の北東側より炭化物も出土した。最終掘り込み面より上部５㎝程で検出しているが，床着の可能性が高い。



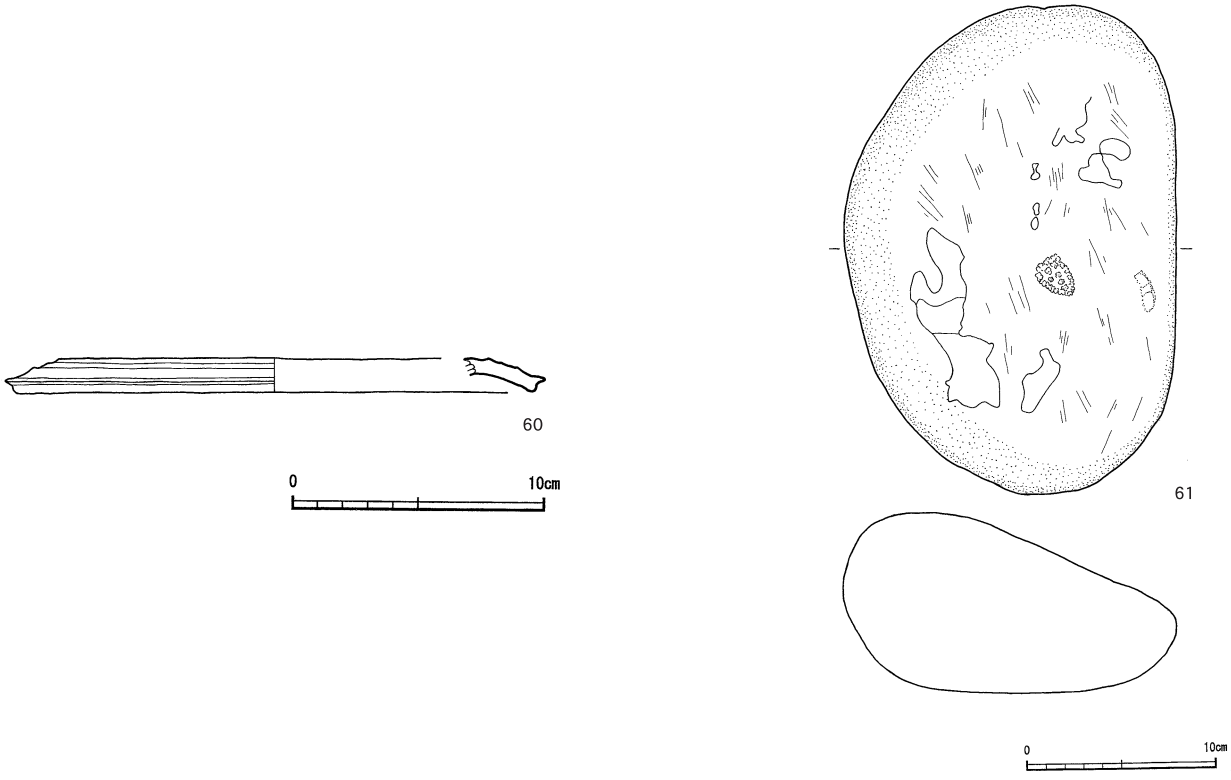
第55図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡位置図



第56図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡



第57図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡遺物出土状況図



第58図　十三塚遺跡４号竪穴住居跡出土遺物

第17表　十三塚遺跡４号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
58	60	壺	口縁部	21.5	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○			○		岩片	良	

第18表　十三塚遺跡４号竪穴住居跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
58	61	石皿	安山岩	26	18	8.8	5000	

５号竪穴住居跡（第59～61図）

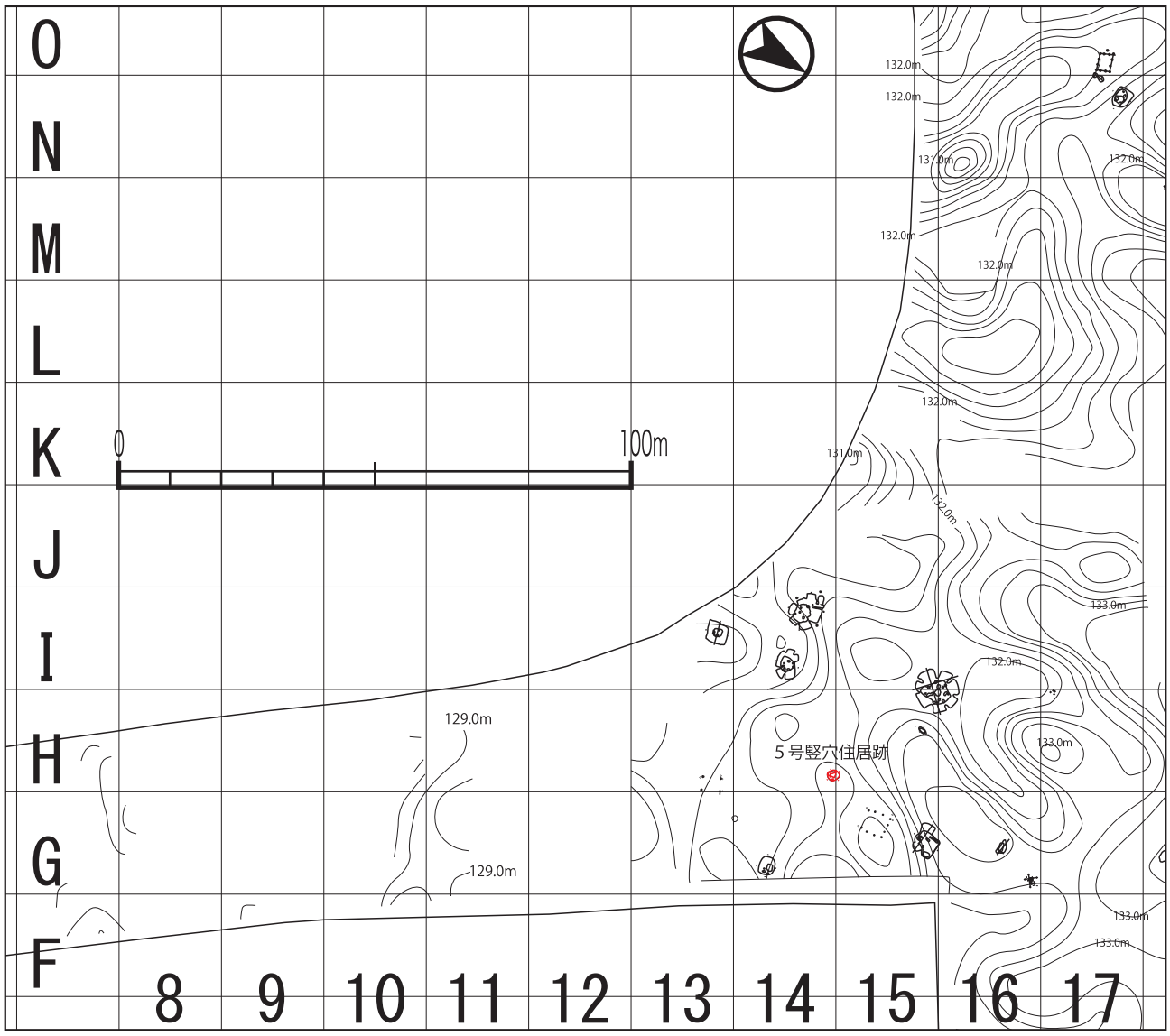
検出状況　Ｈ－14・15区，３号住居跡東側約５ｍ程のところで検出された。検出面はⅡｆ層上面の黒褐色黄橙パミス混土であった。ゴボウのトレンチャーが縦横に走る状況で，Ⅱｅ層までは明確な土色の変化が確認できなかった。Ⅱｆ層上面まで掘り下げたところ，約２ｍの範囲にわたり池田降下軽石が確認できない部分があり，トレンチャーの部分を除去したところ，掘り込みと思われる部分を検出した。この時点においてこれは遺構であると判断し，トレンチャーを全て除去し，プラン及び掘り込みを追いかける調査方法をとった。

形状と規模　基本となる平面プランは円形である。長軸は2.12m，短軸は1.88mを測る。検出面からの深さは，浅い部分で約10㎝，深い部分で約20㎝であった。全体的に浅いのはトレンチャーで削平を受けていたこと，検出面が低かったことによるものと考えられる。

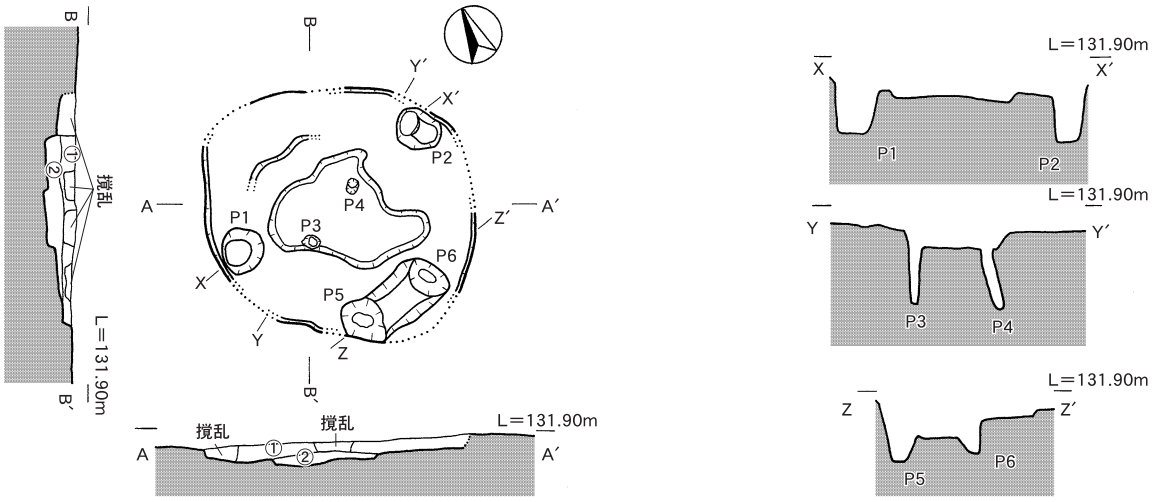
この住居跡からは６基のピットが検出され，住居の中央部壁側に２基，南側に２基，中央部に２基位置している。検出面からの深さはＰ１が約35㎝，Ｐ２が約40㎝，Ｐ３・Ｐ４が30㎝，Ｐ５・Ｐ６は約55～60㎝である。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約170㎝，Ｐ３→Ｐ４が約60㎝である。Ｐ５→Ｐ６は約55㎝であり，これらのピットは，この住居に伴う，柱穴の可能性が高いと考える。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，アカホヤのパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，４㎝～６㎝のアカホヤパミスがブロック状に混ざっており，貼床を形成していると思われるが，そこまで明確ではない。下部には黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土はⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

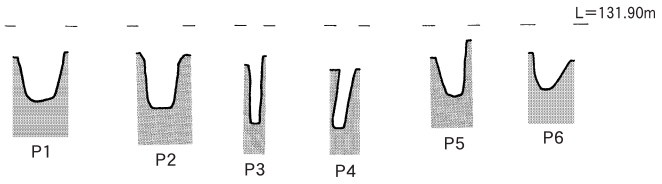
出土遺物　竪穴住居跡から出土した遺物は４点であった。



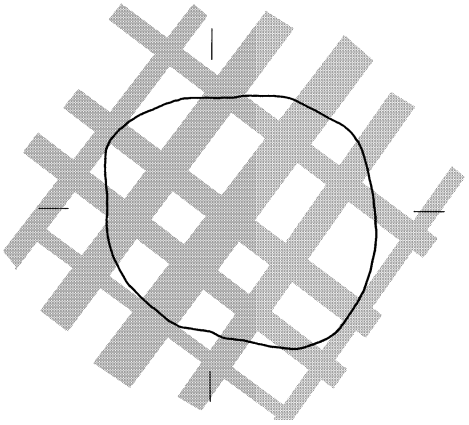
第59図　十三塚遺跡５号竪穴住居跡位置図



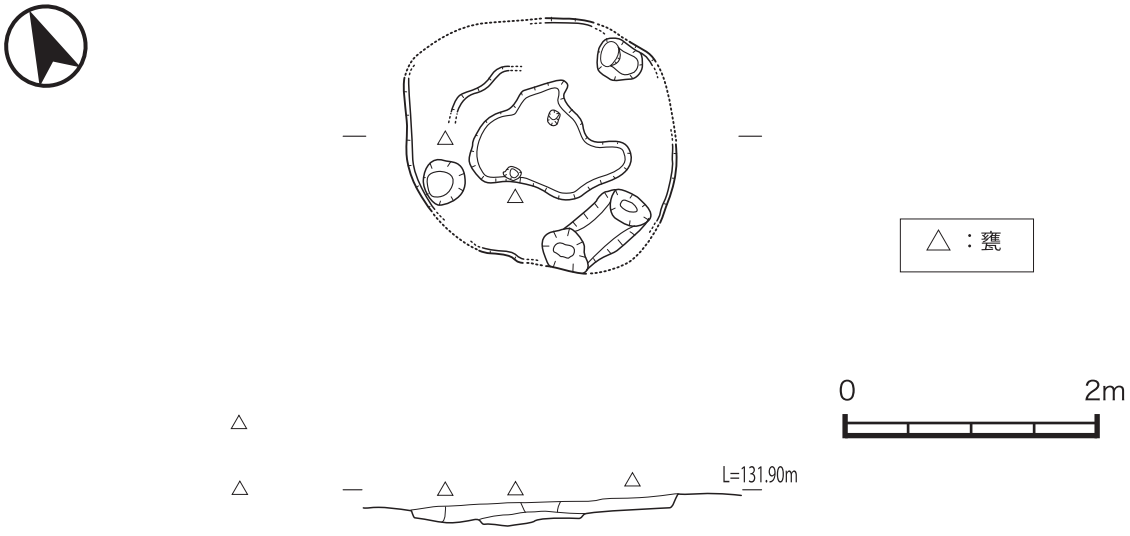
① 黒褐色粘質土
② 茶褐色土　アカホヤブロック混土　硬化面



第60図　十三塚遺跡 5 号竪穴住居跡



※　網フセ部はトレンチャー跡



第61図　十三塚遺跡 5 号竪穴住居跡遺物出土状況図

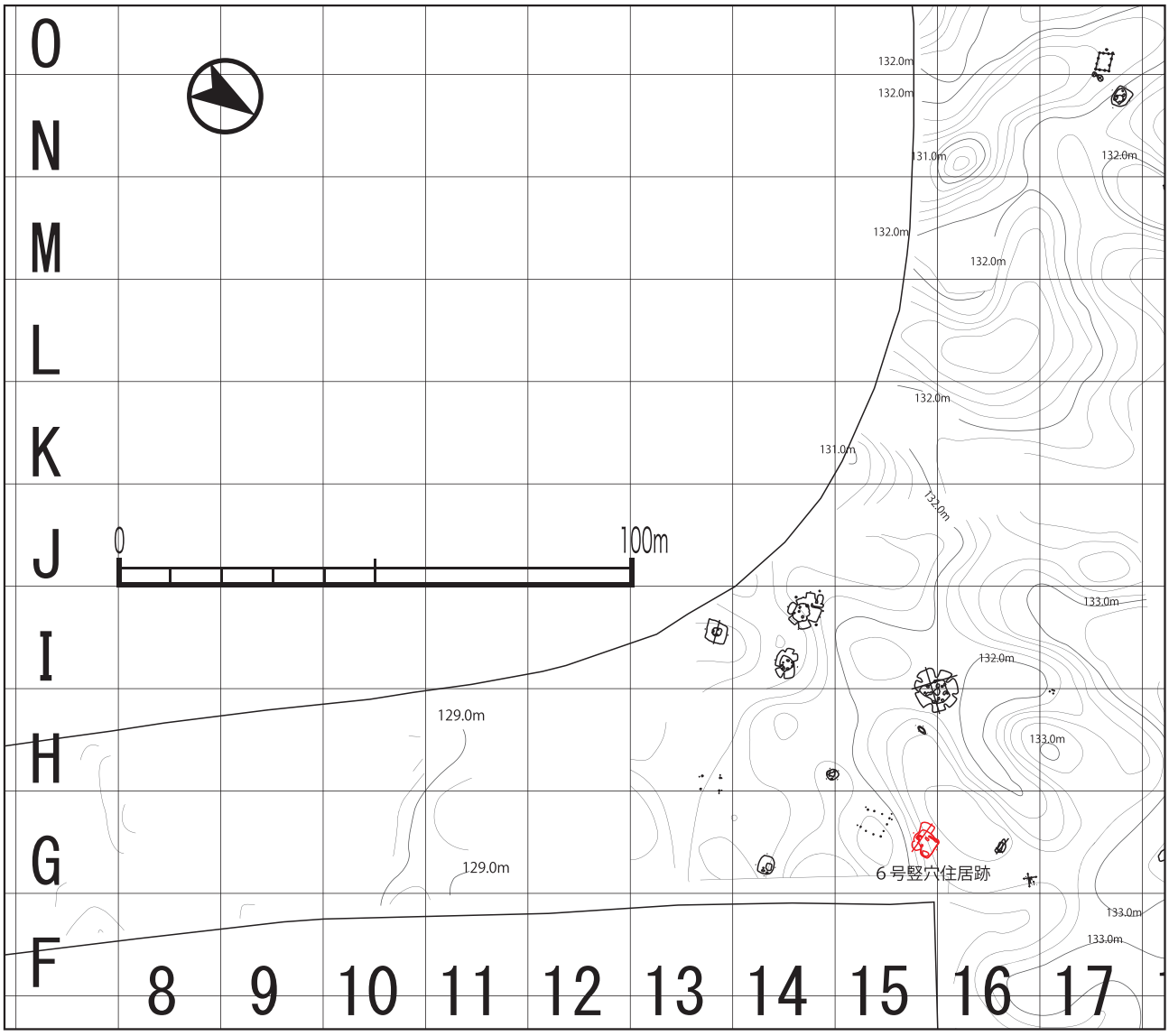
６号竪穴住居跡（第62～65図）

検出状況　Ｇ－15区，検出面はⅡｄ層の茶褐色黄橙パミス混土であった。ここも３号住居跡と同じく青紫色の硬質砂質層が直径約５ｍの範囲でリング状に検出された。この区もゴボウのトレンチャーが斜横に走っている状況であったが，硬質砂質層の際で土色の違う部分も若干確認できた。そこで，その近辺のトレンチャー部分を除去したところ，掘り込みと思われる部分をトレンチャーの断面で検出できたので，この時点で遺構であると判断し，中央部にベルトを残してプラン及び掘り込みを追いかける調査方法をとった。

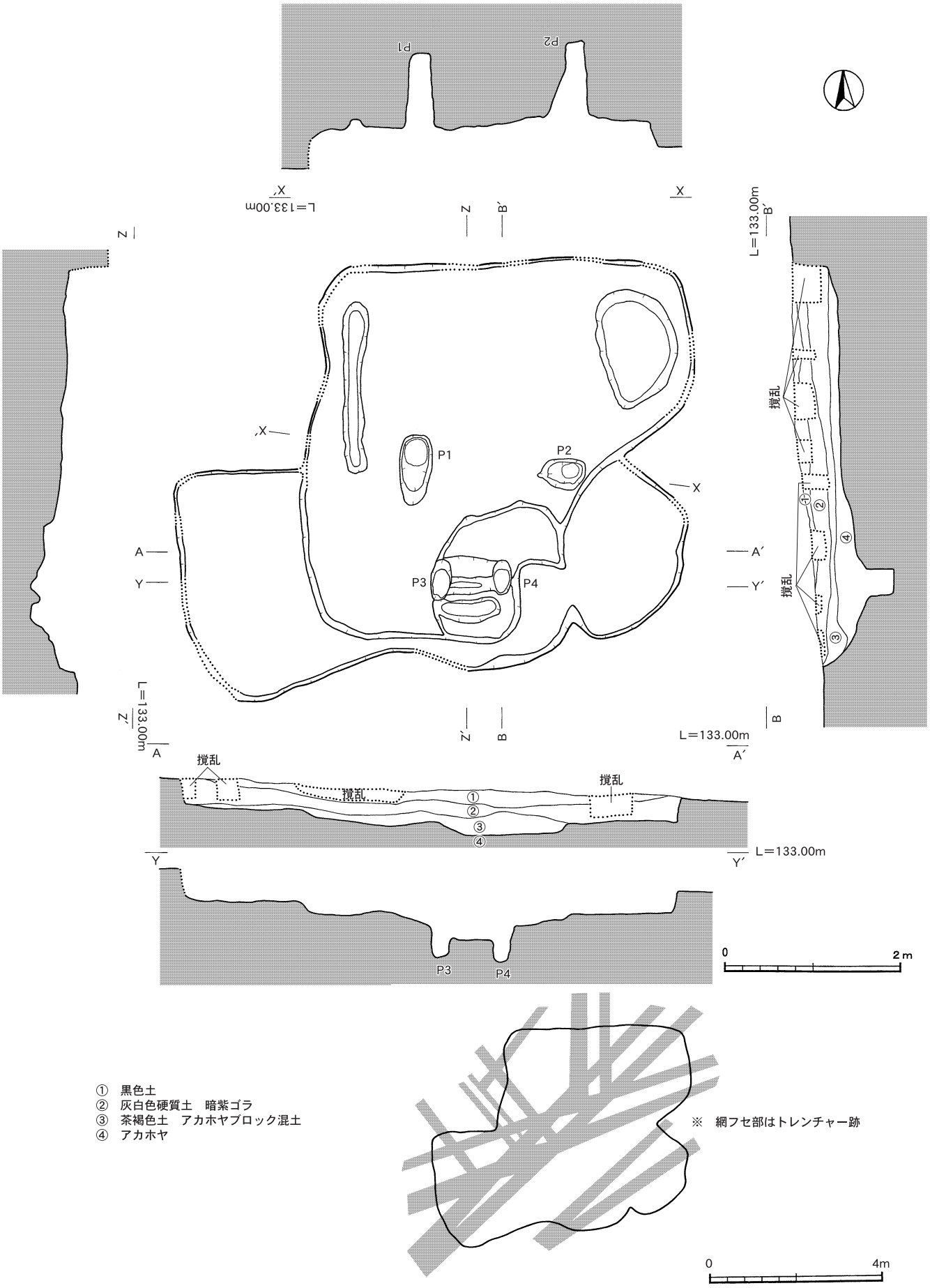
形状と規模　基本となる平面プランは隅丸方形を基調とし，張り出しをもつ。長軸は5.7m，短軸は4.6mを測る。検出面からの深さは，浅い部分で約30㎝，深い部分で約50㎝であった。この住居跡からは４基のピットが検出された。住居の中央部壁側に２基，南側に２基位置している。検出面からの深さはＰ１・Ｐ２→約85㎝，Ｐ３及びＰ４→約40～45㎝である。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約180㎝，Ｐ３→Ｐ４が約75㎝である。これらのピットは，この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土　埋土は先述の通り，上部には灰白色砂質硬質土が覆っており，中央部に多く堆積している。その下部は黒褐色土を基本とし，アカホヤのパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，４～６㎝のアカホヤパミスがブロック状に混ざっており，貼床を形成していると思われるが，そこまで明確ではない。下部はアカホヤで，黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土はⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

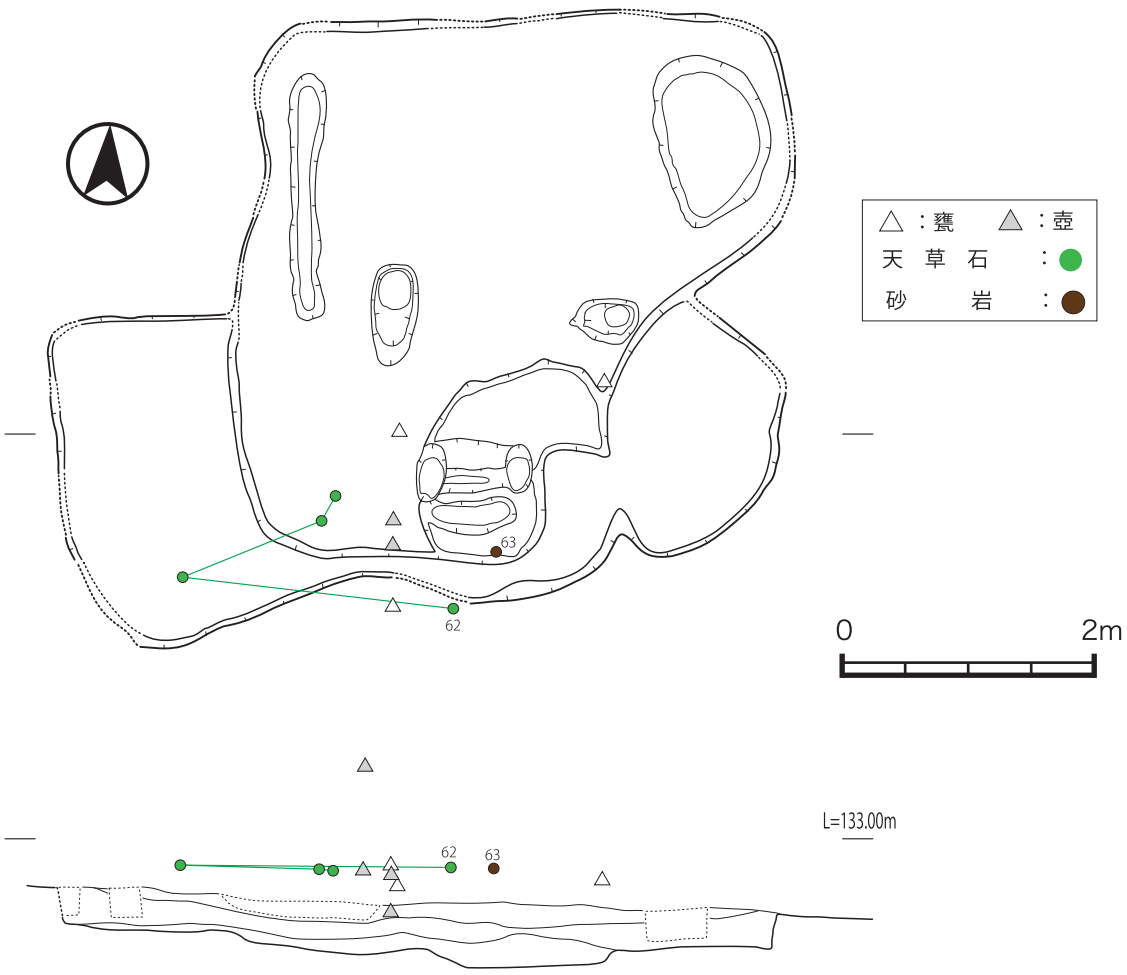
出土遺物（第65図：62・63）　竪穴住居跡から出土した遺物は13点で，うち２点を図化した。62は天草石と呼ばれる石を石器の素材とした砥石で，一部を欠損する。四面に研磨を認め，非常に滑らかである。63は頁岩を石器の素材とした砥石で，端部を欠損する。かなり扁平で，非常に滑らかである。図化はできなかったが，中央部と思われる床面付近で炭火木も確認されている。（図版20に掲載）



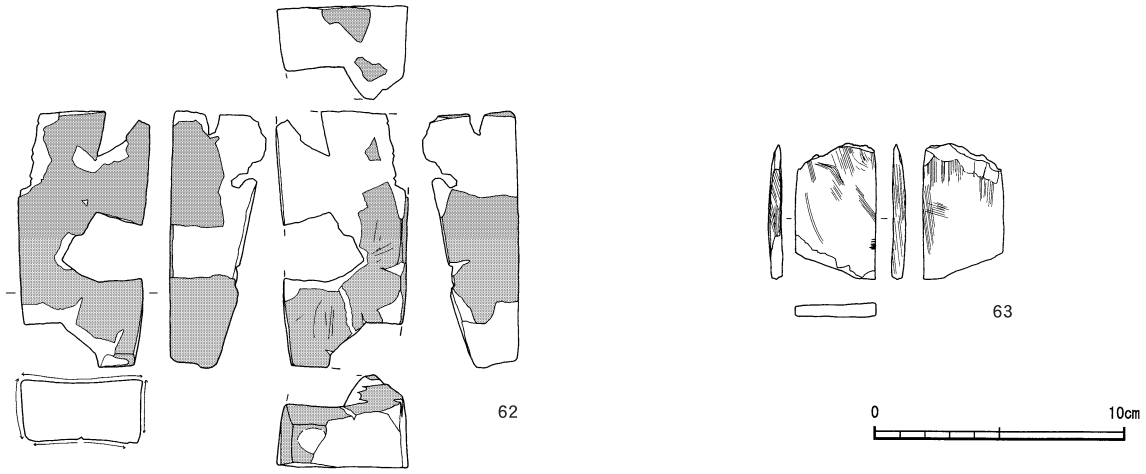
第62図　十三塚遺跡６号竪穴住居跡位置図



第63図　十三塚遺跡 6 号竪穴住居跡



第64図　十三塚遺跡 6 号竪穴住居跡遺物出土状況図



第65図　十三塚遺跡 6 号竪穴住居跡出土遺物

第19表　十三塚遺跡 6 号竪穴住居跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
65	62	砥石	天草石	10.3	5.25	3.9	151.72	5977・5978・5980・5982
	63	砥石	頁岩	5.4	3.25	0.55	12.61	5981

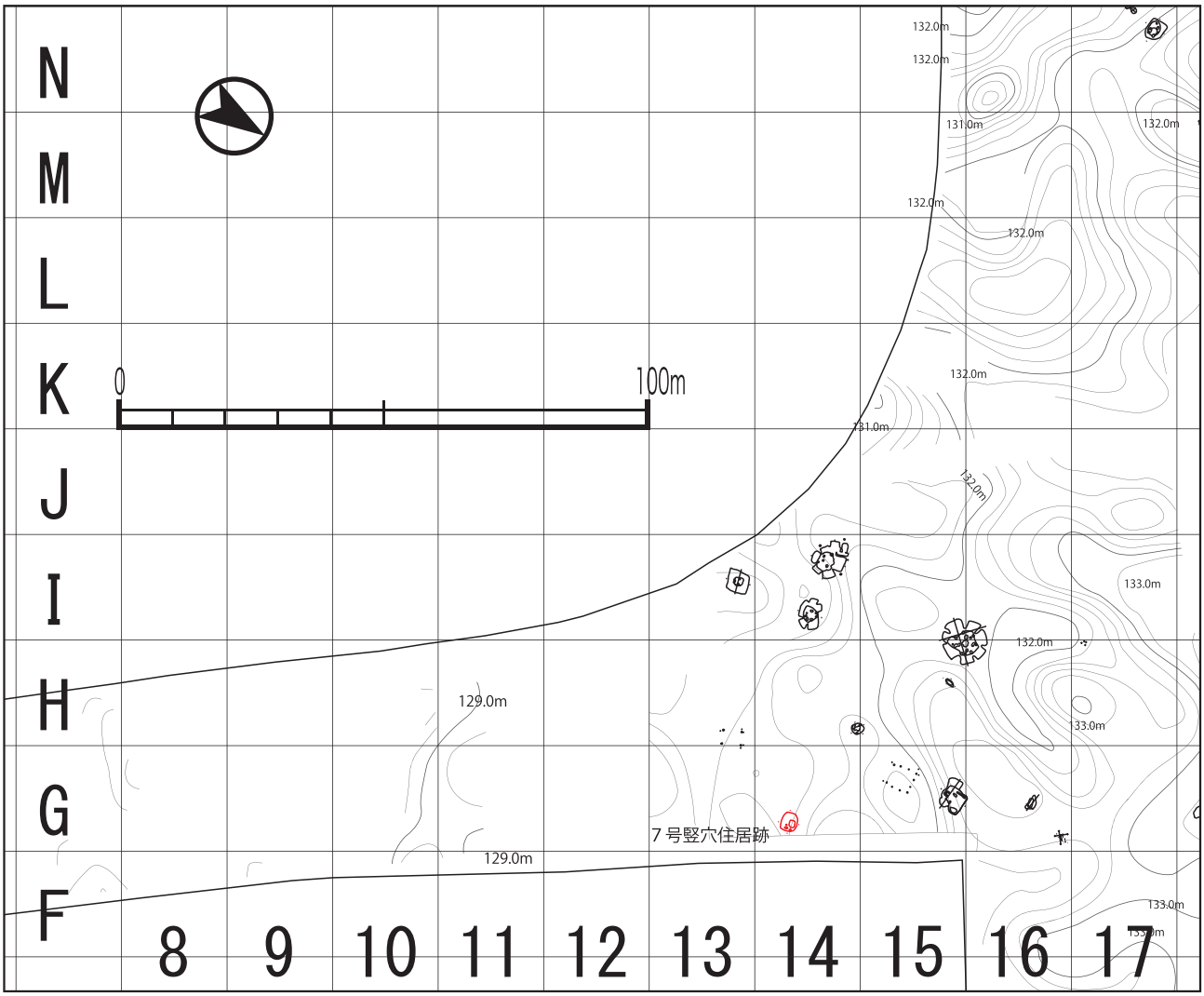
７号竪穴住居跡（第66～71図）

検出状況　Ｇ－14区，検出面はⅡｄ層の茶褐色黄橙パミス混土であった。ここも３号，６号竪穴住居跡と同じく青紫色の硬質砂質層が直径約２ｍの範囲でリング状に検出された。硬質砂質層の際で土色の違う部分を若干確認できた。一部にゴボウのトレンチャーがあり，その近辺のトレンチャー部分を除去したところ，掘り込みと思われる部分が検出できたので，遺構であると判断し，中央部と思われる部分にベルトを残してプラン及び掘り込みを追いかける調査方法をとった。

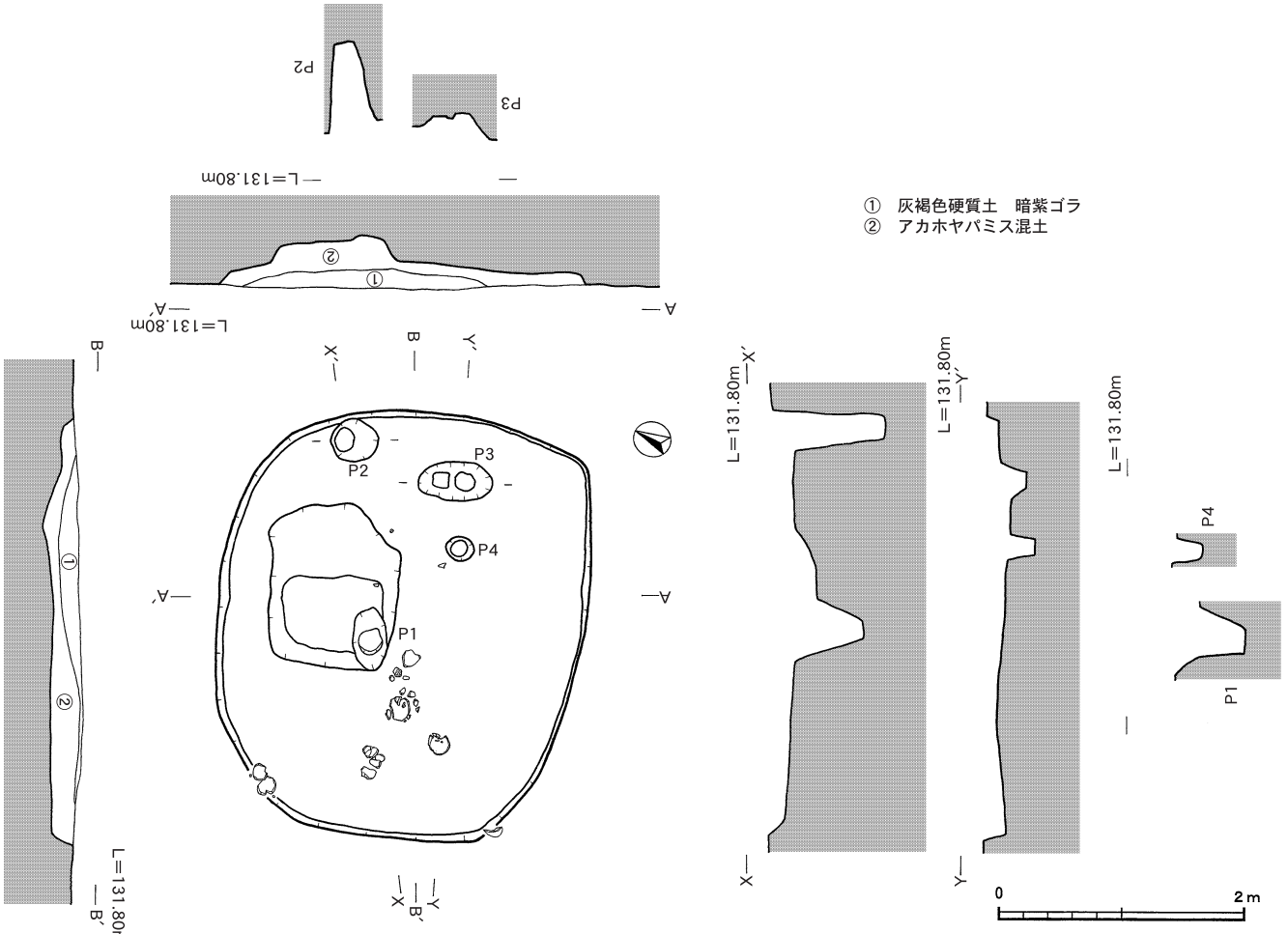
形状と規模　基本となる平面プランは隅丸方形を基調としている。長軸は3.58m，短軸は3.0mを測る。検出面からの深さは，浅い部分で約10㎝，深い部分で約45㎝であった。この住居跡からは４基のピットが検出された。住居の中央部東壁側に１基，ほぼ中央部に１基，南東側に２基位置している。検出面からの深さはＰ１・Ｐ２→約85㎝，Ｐ３・Ｐ４→約40～45㎝である。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約175㎝，Ｐ３→Ｐ４が約65㎝である。これらのピットは，この住居に伴う柱穴の可能性が高いと考える。

埋土　埋土は６号住居跡と同じく，上部には灰白色砂質硬質土が覆っており，中央部に多く堆積している。その下部は黒褐色土を基本とし，アカホヤのパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，４～６㎝のアカホヤパミスがブロック状に混ざっており，貼床を形成していると思われるが，そこまで明確ではない。下部はアカホヤで，黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土はⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

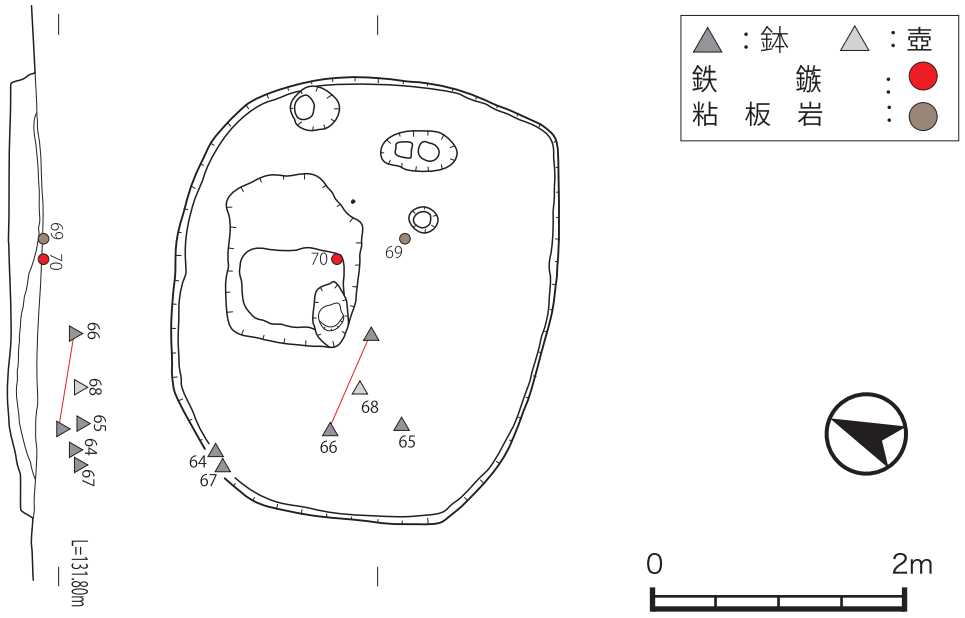
出土遺物（第70・71図：64～70）　竪穴住居跡から出土した遺物は82点で，７点を図化した。64と65，67は鉢の完形である。底部より外方へ開きながら立ち上がる器形で，口唇部は丸みを帯び，器壁は薄い。66は鉢の胴部である。おそらく球形に近い器体になると思われる。外面は緻密なミガキを施す。68は壺の肩部～胴部である。現存で肩部に五条の断面三角形貼付突帯を，胴部には一条の断面台形状突帯を廻らし，突帯端面は凹む。69は粘板岩を石器の素材とした磨製石鏃である。扁平で研磨を認め，端部は欠損している。70は鉄鏃である。先端部と端部は欠損している。矢柄装着痕が一部認められる。



第66図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡位置図

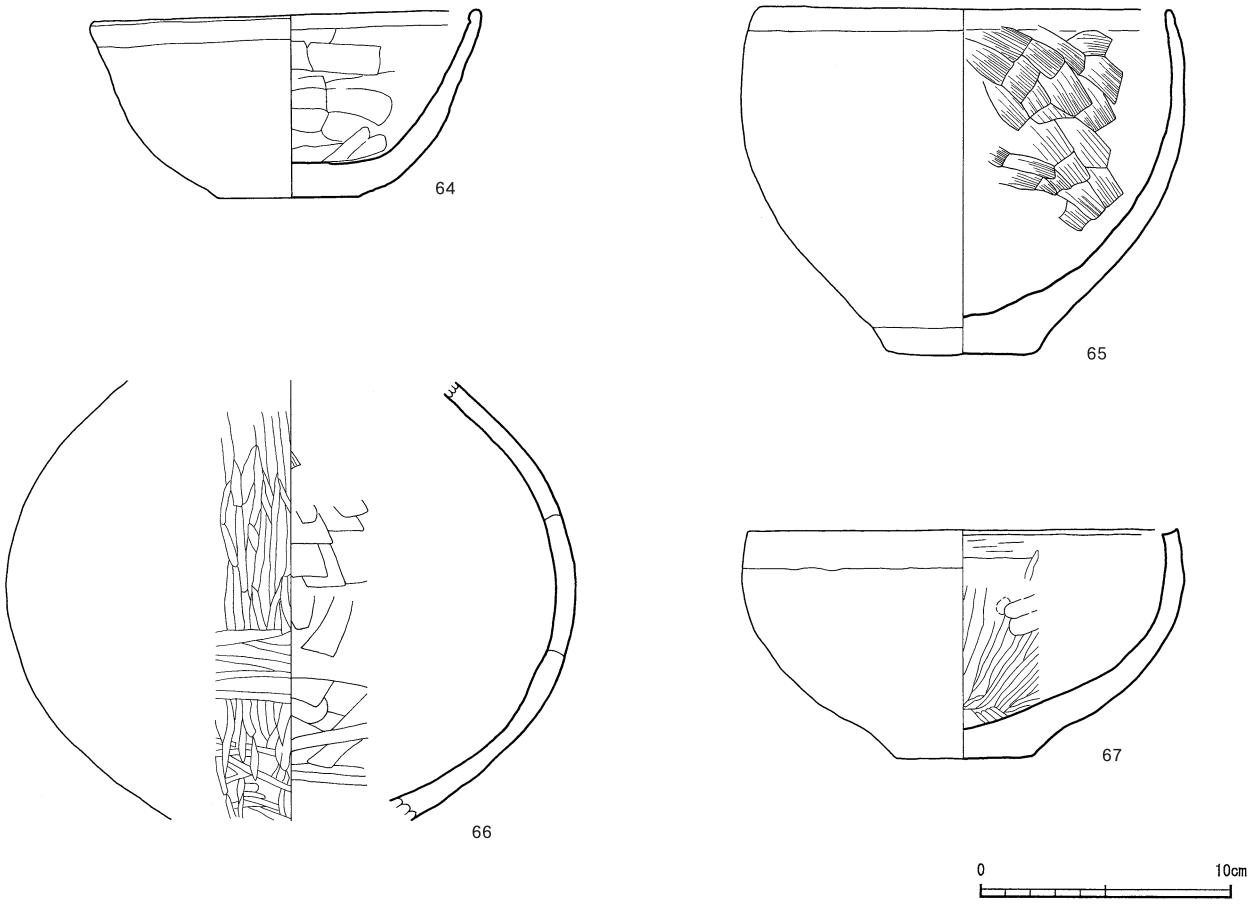


第67図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡

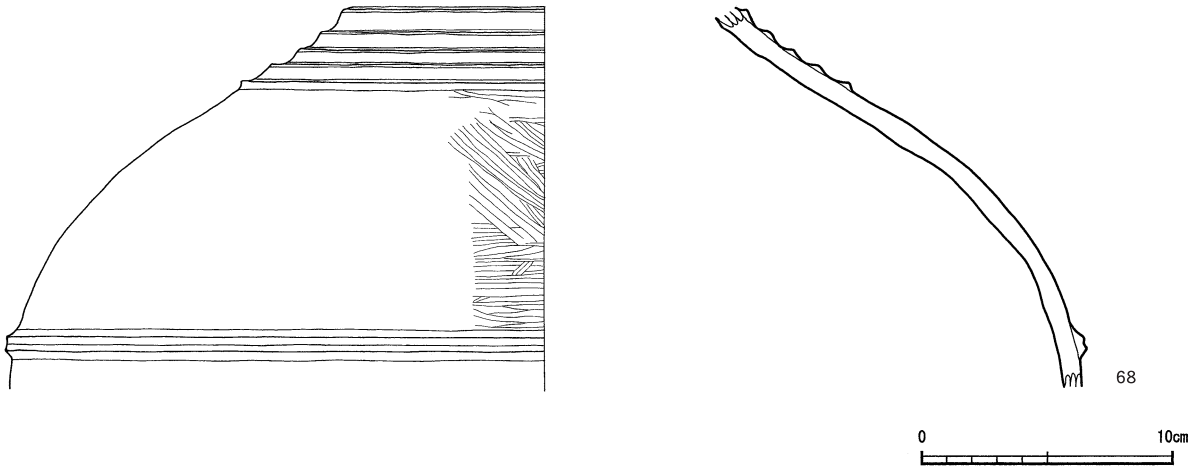


第68図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡遺物出土状況図

第69図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡出土遺物状況図



第70図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡出土遺物１



第71図　十三塚遺跡７号竪穴住居跡出土遺物２

第20表　十三塚遺跡７号竪穴住居跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
70	64	鉢	完形	15.6	5.6	7.5	橙	黒	ナデ	ナデ	○			○		岩片	良	スス付着
	65	鉢	完形	16.6	6.0	13.8	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	
	66	鉢	胴部	—	—	—	橙	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	胴部最大径22.7cm
	67	鉢	完形	17.2	5.4	9.0	橙	明褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	
71	68	壺	頸部～胴部				明赤褐	明赤褐	ミガキ	ナデ	○	○		○			良	スス付着

第21表　十三塚遺跡７号竪穴住居跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
71	69	磨製石鏃	粘板岩	4.35	2.6	0.3	3.47	

第22表　十三塚遺跡７号竪穴住居跡鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
71	70	鉄鏃	鉄	2.3	1.95	7.5	7.0	

８号竪穴住居跡（第72～75図）

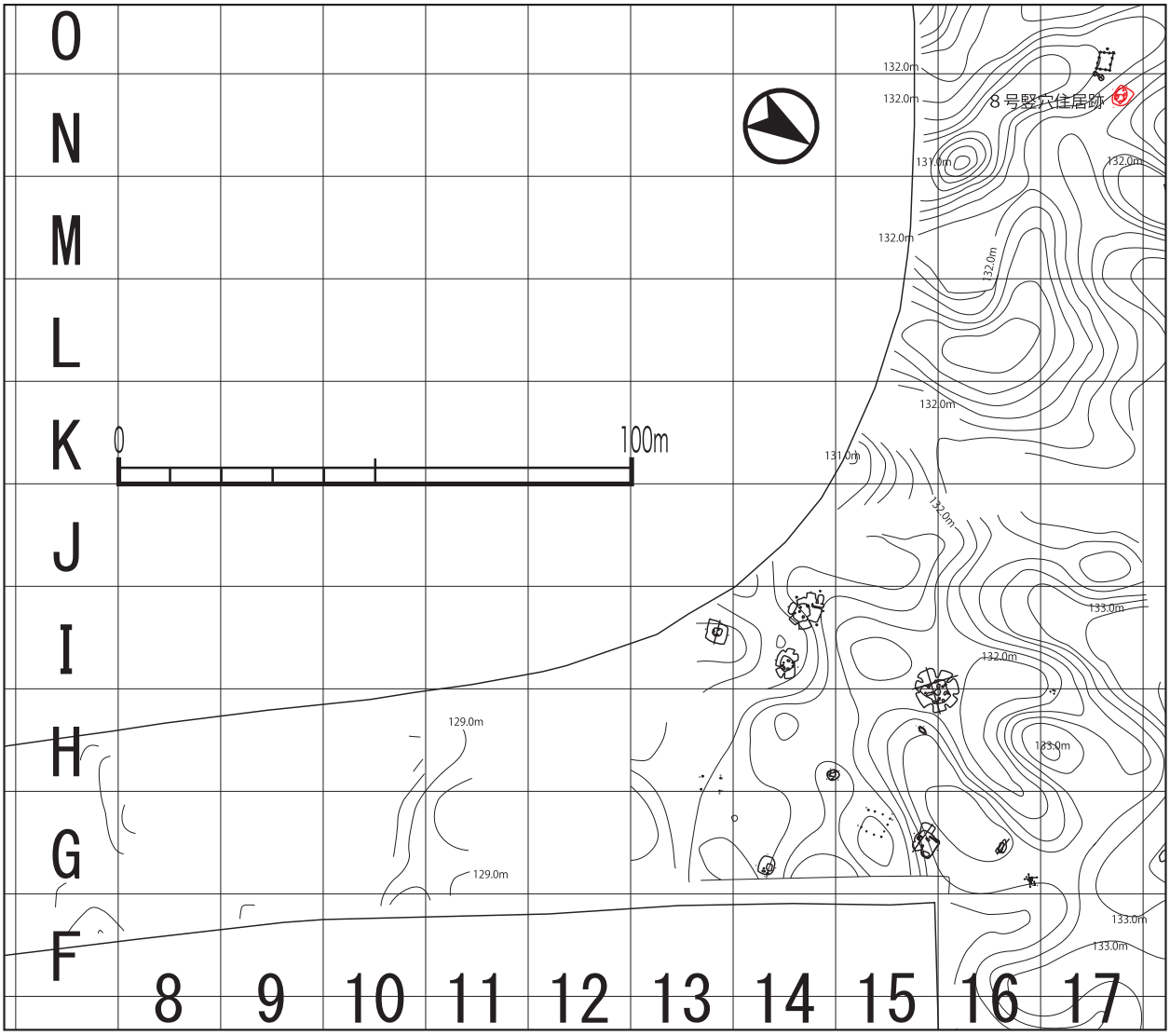
検出状況　Ｎ－17区，検出面はⅡｆ層であった。ここは２号住居と同じく，池田降下軽石層が方形状に確認できなかったことから遺構と判断し，２号住居跡と同様にミニトレンチを設定して掘り下げていく方法を用いて調査を行った。また，この住居跡から西側へ約６ｍほどの所に掘立柱建物跡３号と土坑５・６号も検出されている。

形状と規模　基本となる平面プランは，西側は隅丸方形状で，東側は若干円形状になっている。長軸は3.84m，短軸は3.2mを測り，正方形度はかなり高い。検出面からの深さは，浅い部分で約６～８㎝，深い部分で約20㎝であった。浅い部分に関しては，検出面が低かったことによるものと考えられる。

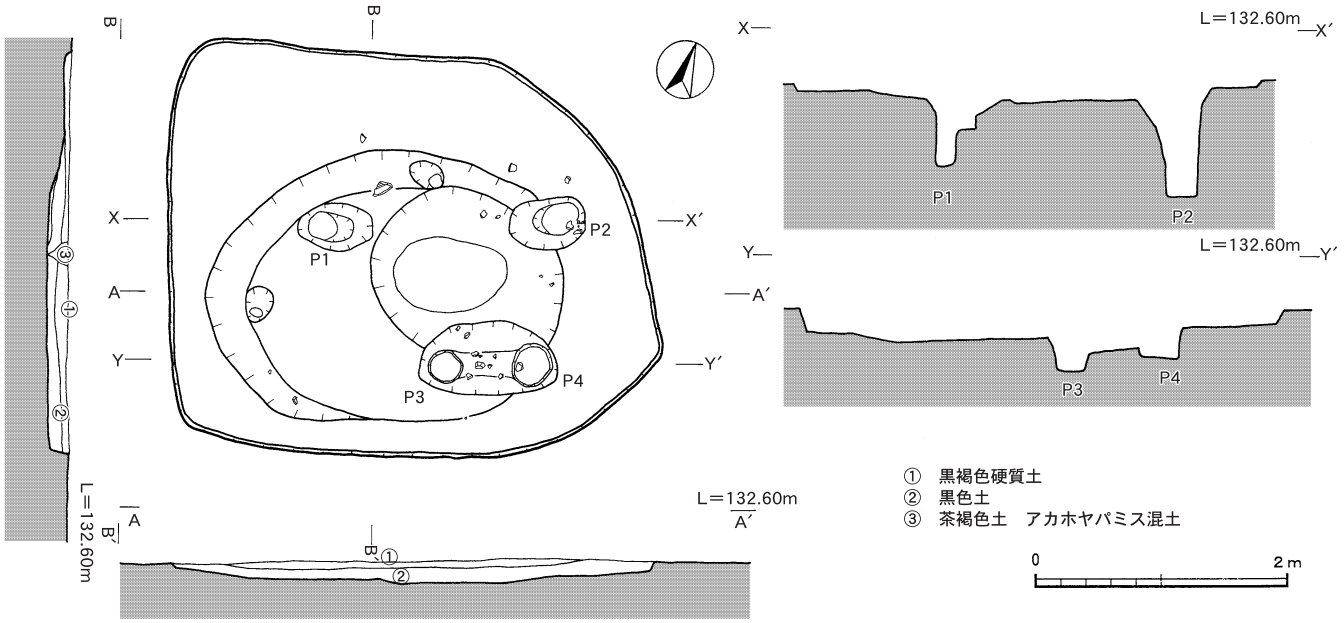
この住居跡からは４基のピットが検出され，住居の中央部に２基，ほぼ南側に２基配列されている。ピット間の距離は，Ｐ１→Ｐ２が約190㎝，Ｐ３→Ｐ４が約70㎝である。これらのピットの断面の形状をみると，下面部は底面になっている。それぞれのピットの検出面からの深さは，Ｐ１が約55㎝，Ｐ２が約85㎝，Ｐ３・Ｐ４が約25～35㎝である。このようなことから，これらのピットは，この住居に伴う，柱穴の可能性が高いと考える。

埋土　埋土はⅡ層と思われる茶褐色土層を基本とし，オレンジ色のパミスをごく少量含む。また，床面と思われる中央部は，アカホヤパミスがブロック状に混ざっており，若干堅めであり，貼床を形成していたものであると思われる。下部には黒橙褐色の土もみられた。ピット内の埋土は同じくⅡ層の土と思われる。かなり柔らかい。

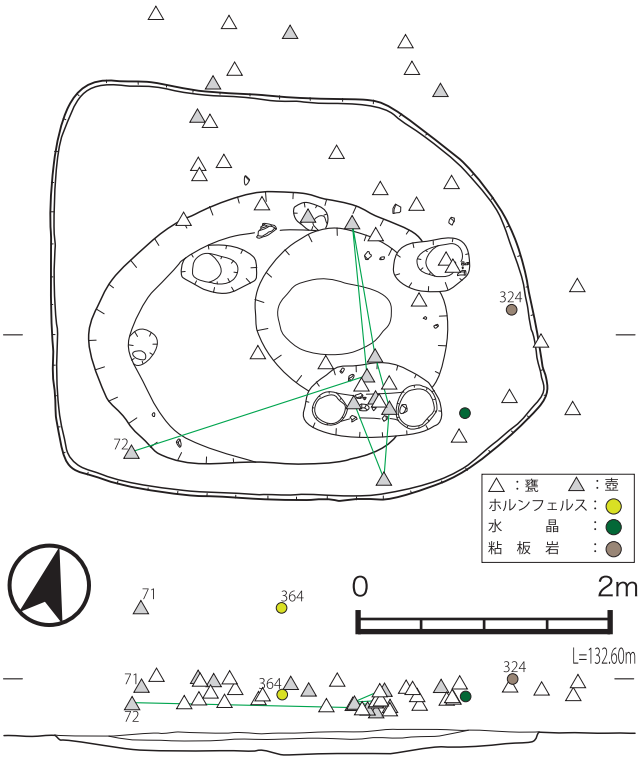
出土遺物（第75図：71・72）竪穴住居跡から出土した遺物は51点であり，復元できた遺物は２個体あり，２点を図化した。Ｐ３・Ｐ４付近でやや集中して出土している。71は鉢形土器の口縁部である。口径は22.4㎝，外面，内面ともに比較的丁寧なナデ調整を施している。色調，胎土観察より同一個体であると考える。両方ともほぼ床面と思われる地点から出土している。72は鉢形土器の胴部～底部である。底径は9.5㎝である。他にも肉眼で確認できた炭化物も出土している。また，水晶の原石が１点出土している。６㎝程の大きめの水晶で敲打痕等は確認できなかった。



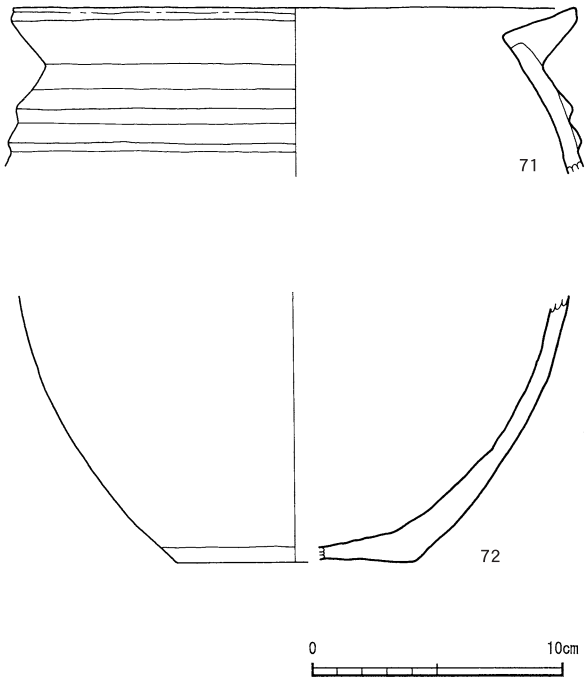
第72図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡位置図



第73図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡



第74図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡遺物出土状況図



第75図　十三塚遺跡８号竪穴住居跡出土遺物

第23表　十三塚遺跡８号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
第75図	71	壺	口縁部	22.4	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	
	72	壺	胴部～底部	—	9.5	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	

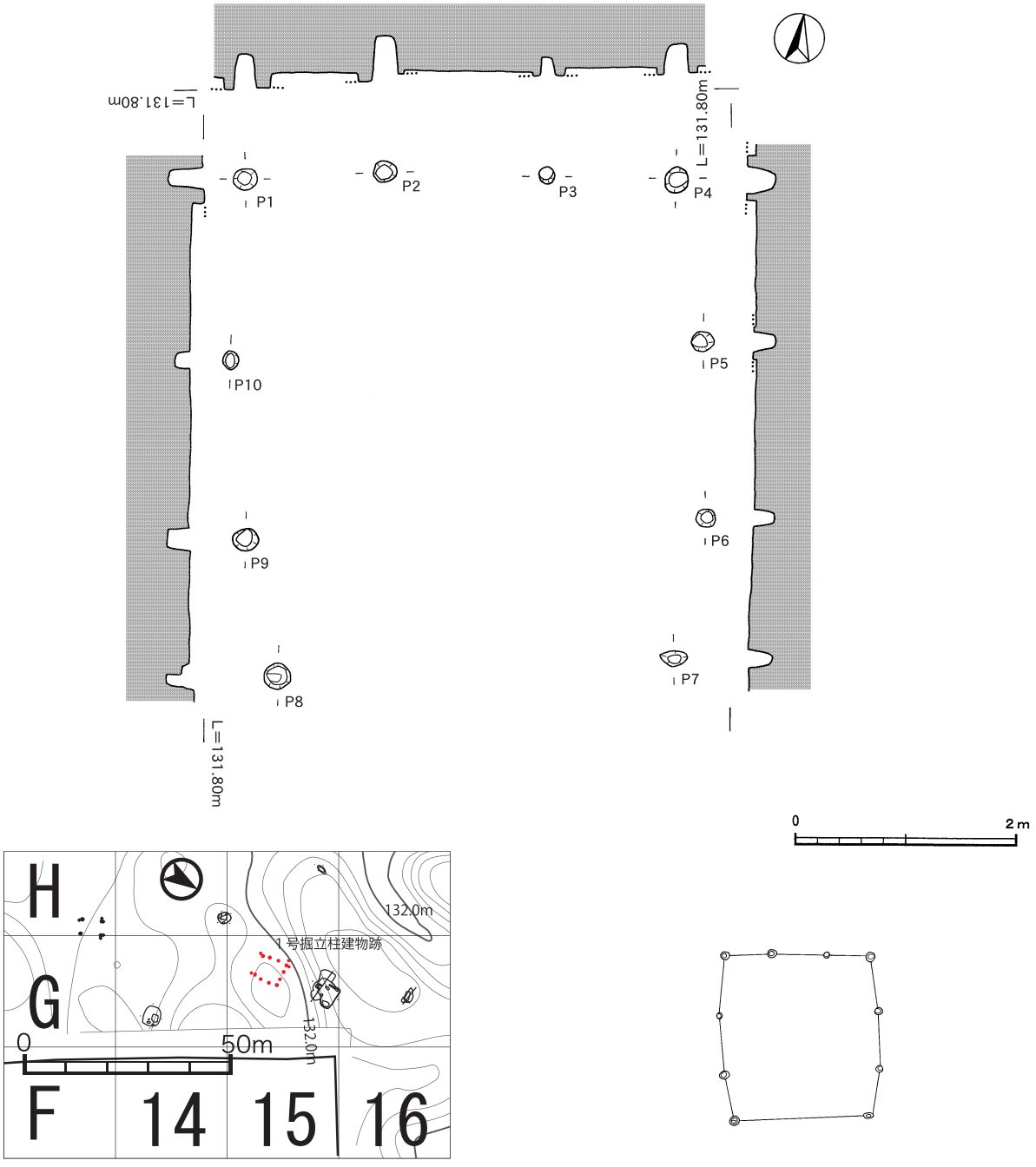
イ　掘立柱建物跡（第76～78図）

本遺跡からは堀立柱建物跡は３棟検出された。

１号掘立柱建物跡（第76図）

Ｇ－15区でⅡｆ層上面にて検出された。建物の規模は，３間×３間，10個のピットからなり，主軸は略南北方向である。桁行の平均は約4.5m，梁行の平均は約4.0mであり，柱間寸法の平均は桁行柱間が約1.5m，梁行柱間が約1.3mである。平面形はＰ７とＰ８がやや内側に入り込んでいるが，ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよそ18.0㎡である。周辺の土は堅く茶色っぽい黒褐色であり，池田降下軽石が含まれている。

ピットは，ほぼ円形を呈し，平均して径21.5×18.4㎝，深さ24㎝であり，ほぼ同規模であるが，Ｐ２が比較的深い。ピット中の埋土は黒褐色で柔らかく，アカホヤ層や白色石などの細粒も含まれる。Ｐ７とＰ８の間にピットがあるのではないかと検出を試みたが，確認できなかった。埋土中より出土遺物は確認できなかった。

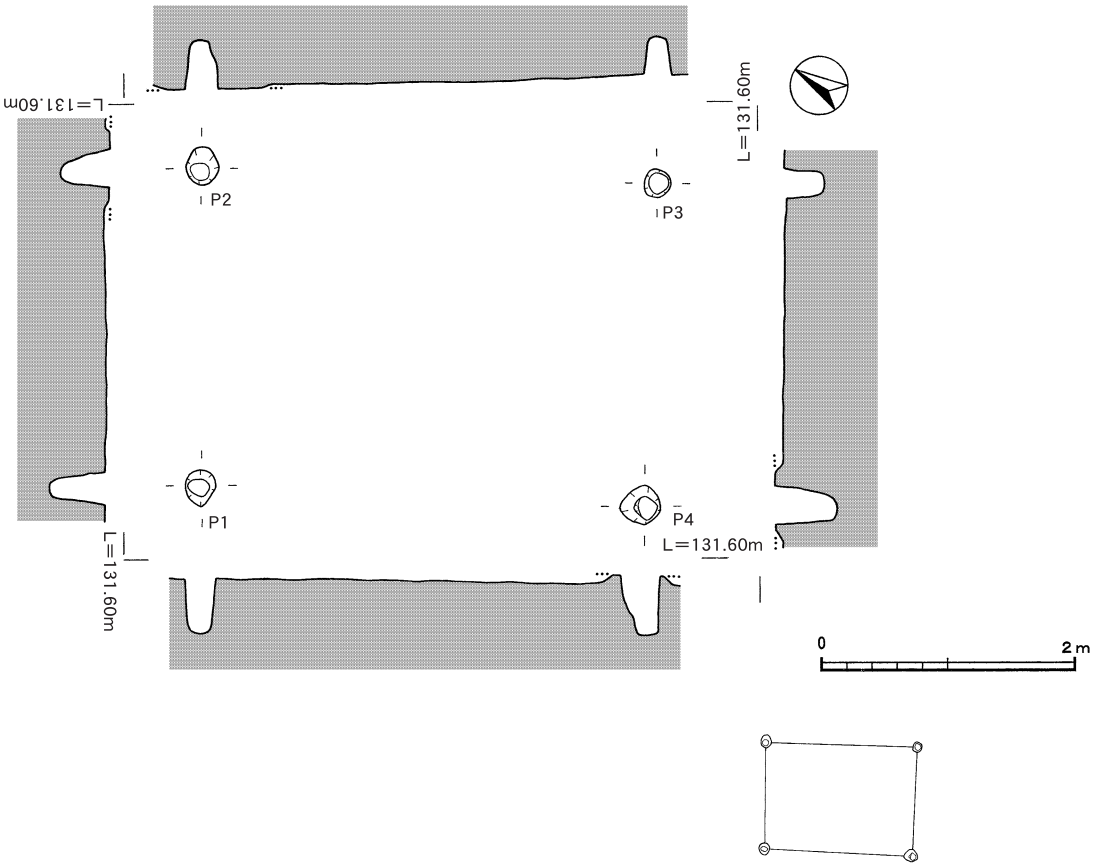


第76図　十三塚遺跡１号堀立柱建物跡

２号堀立柱建物跡（第77図）

Ｈ－13区，Ⅱｆ層上面で検出された。建物の規模は，１間×１間，４個のピットからなり，長軸方向は南北に近い形であり，桁行の平均は約3.6m，梁行の平均は約2.5mである。ほぼ長方形を呈しており，床面積はおよそ8.8㎡である。

ピットは平均して径28.5×25.8㎝，深さ41㎝のほぼ円形を呈している。ピット中の埋土は黒褐色で柔らかい。埋土中より出土遺物は確認されなかった。



第77図　十三塚遺跡２号堀立柱建物跡

第24表　十三塚遺跡１・２号堀立柱建物跡計測表

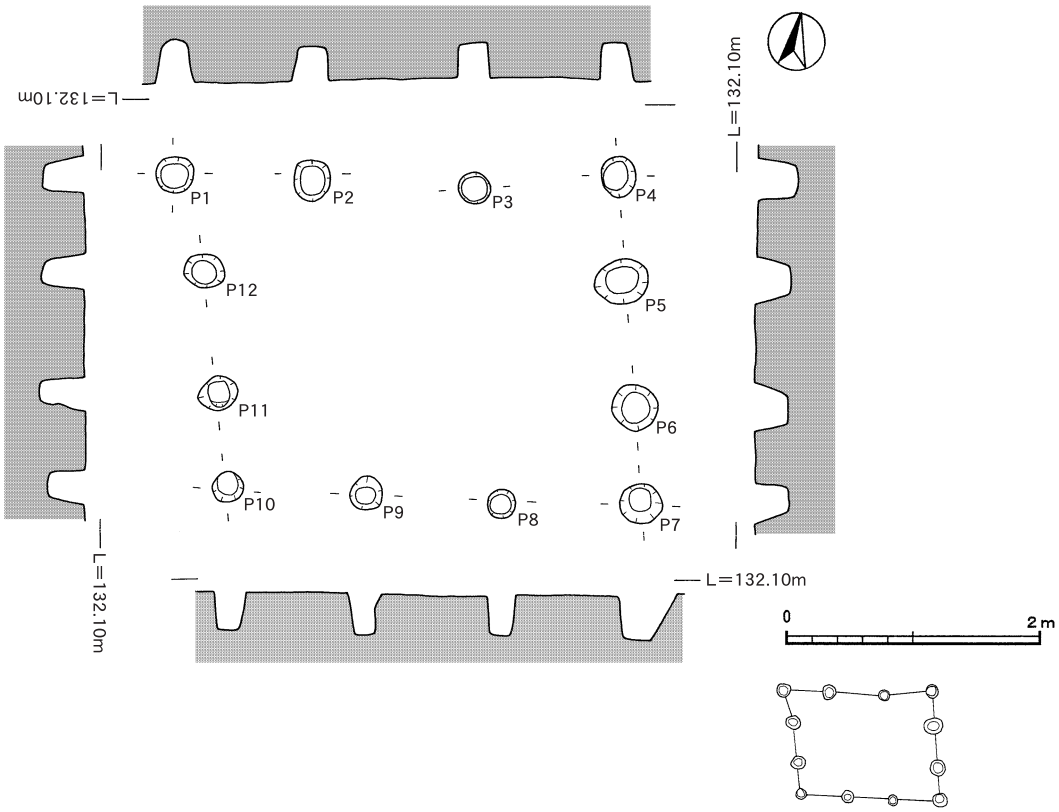
１号	主軸方向	南　北			
	桁　行（m）	P１-P８ 4.54		P４-P７ 4.37	
	梁　行（m）	P１-P４ 3.95	P５-P10 4.29	P６-P９ 4.22	P７-P８ 3.67
	桁行柱間（m）	P１-P10 1.68	P９-P10 1.63	P８-P９ 1.25	P４-P５ 1.52
		P５-P６ 1.60	P６-P７ 1.30		
	梁行柱間（m）	P１-P２ 1.28	P２-P３ 1.49	P３-P４ 1.18	P５-P10 4.29
		P６-P９ 4.22	P７-P８ 3.67		
２号	主軸方向	南　北			
	桁　行（m）	P１-P４ 3.50		P２-P３ 3.60	
	梁　行（m）	P１-P２ 2.52		P３-P４ 2.51	

ピットNo.	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
P１	22	19	33
P２	22	19	42
P３	16	14	17
P４	24	22	27
P５	21	18	21
P６	18	16	19
P７	27	15	22
P８	24	24	24
P９	24	21	22
P10	17	16	14
ピットNo.	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
P１	28	24	44
P２	30	27	39
P３	24	21	31
P４	32	31	50

３号掘立柱建物跡（第78図）

０－17区で土坑５・６号の西側に隣接するように検出された。建物の規模は３間×３間，12個のピットからなり，主軸は略南北方向である。桁行の平均は約2.5m，梁行の平均は約3.4mで桁間寸法の平均は桁行柱間が約1.3m，梁行柱間が約1.6mである。

ピットは平均して径31.9×29㎝，深さ31㎝のほぼ円形を呈しているが，長径25㎝と小さめのＰ８から，長径約43㎝とやや大きめのＰ５まであり，一定ではない。ピット中の埋土はやや砂質で，粒が細かい白色パミスが少し混ざっている。池田降下軽石もわずかに混ざっているが，流れ込んだものではないかと思われる。埋土中より出土遺物は確認されなかった。



第78図　十三塚遺跡３号堀立柱建物跡

第25表　十三塚遺跡３号掘立柱建物跡計測表

	主軸方向	南　北			
３号	桁　行（m）	P1-P10 2.53	P2-P9 2.54	P3-P8 2.52	P4-P7 2.57
	梁　行（m）	P1-P4 3.52	P5-P12 3.33	P6-P11 3.31	P7-P10 3.29
	桁行柱間（m）	P1-P12 0.83	P11-P12 0.98	P10-P11 0.73	P2-P9 2.54
		P3-P8 2.52	P4-P5 0.85	P5-P6 1.02	P6-P7 0.74
	梁行柱間（m）	P1-P2 1.10	P2-P3 1.28	P3-P4 1.15	P5-P12 3.33
		P6-P11 3.31	P7-P8 1.11	P8-P9 0.98	P9-P10 0.73

ピットNo.	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
P1	30	29	33
P2	34	29	28
P3	26	26	28
P4	33	28	30
P5	43	36	28
P6	39	38	27
P7	34	32	28
P8	25	22	32
P9	28	27	33
P10	26	25	30
P11	33	28	36
P12	32	28	34

ウ　土坑（第79～86図）

土坑は７基検出された。全て単独で検出された。うち３基は住居跡と同様，ゴボウのトレンチャーの削平を受けている。

１号土坑（第80図：73，第81図）

Ｈ－15区のⅡｅ層で検出された。平面形は，長楕円形を呈している。長径×短径は195×85㎝で，深さ33㎝である。埋土は黒褐色の砂質土であり，底部には池田降下軽石が確認できた。遺物は土坑内で15点，土坑に近い部分で９点の弥生土器計24点が出土した。73は壺の口縁部である。内・外面ともミガキが施されており，雲母を多く含む。

２号土坑（第81図）

Ｇ－16区のⅡｅ層で検出された。平面形は東西方向を長軸とした不定形なものであり，西側の方へ伸びている。長径×短径は300×145㎝で深さ42㎝である。埋土はアカホヤ混じりの黒褐色の密な砂質度（東側）や黒褐色粘質土である。検出層，埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。

３号土坑（第82図）

Ｇ－18区のⅡｆ層（池田降下軽石層）で検出された。底はⅣ層上面まで掘り込まれている。平面形は円に近い方形を呈している。長径×短径は217×212㎝，深さ66㎝で比較的深い。黒色の埋土中に池田降下軽石が入っている。柱穴を探したが，それらしいものは見つからなかった。検出層，埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中から出土した遺物はなかった。

４号土坑（第83図）

Ｏ－17区のⅡｆ層（池田降下軽石層）で検出された。平面形は楕円形を呈している。長径×短径は124×57㎝で，深さ35㎝である。埋土は黒色の堅い土で，床面は樹痕のため，でこぼこしている。検出層，埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中からの出土遺物はなかった。

５号土坑（第83図）

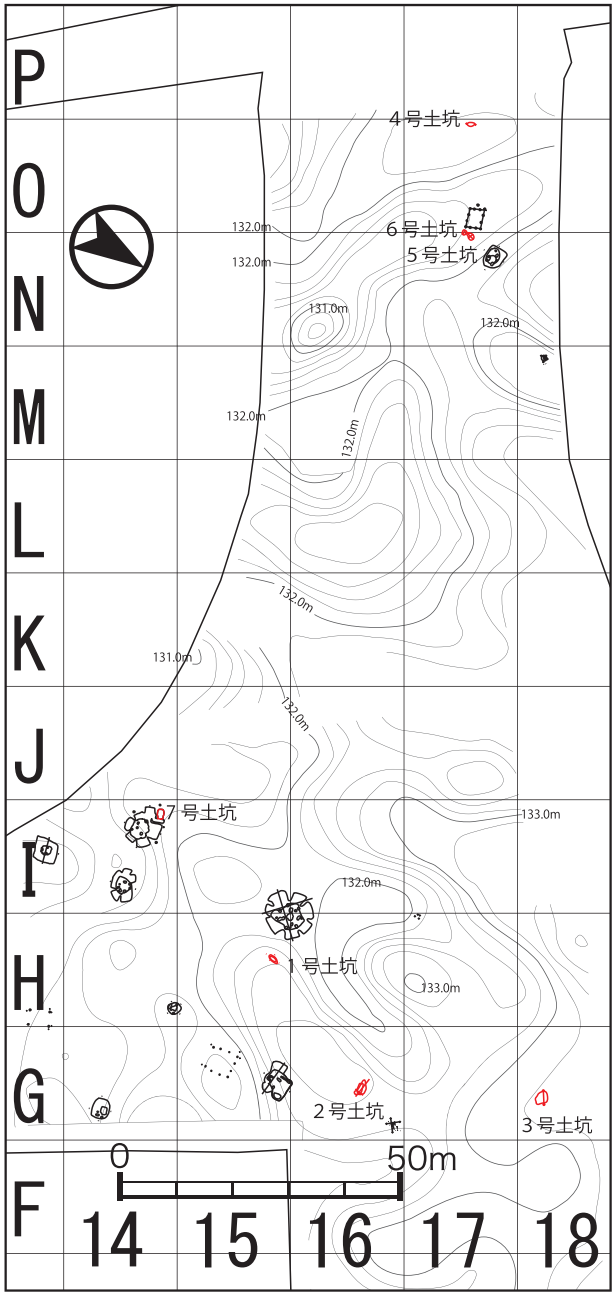
Ｎ－17区のⅡｅ層上面で検出された。６号土坑と隣接し，３号掘立柱建物跡と近接している。また，約３ｍ北には，８号竪穴住居跡も検出されている。平面形は楕円形を呈している。長径×短径は153×90㎝，深さは26㎝で，床面は平坦である。埋土は上面が暗茶褐色土，床面は上面がⅡｅ層で黒褐色の砂質土であり，粒が細かい白色パミスが少し混ざっている。土坑内から弥生土器が16点出土した。

６号土坑（第84・85図：74・75）

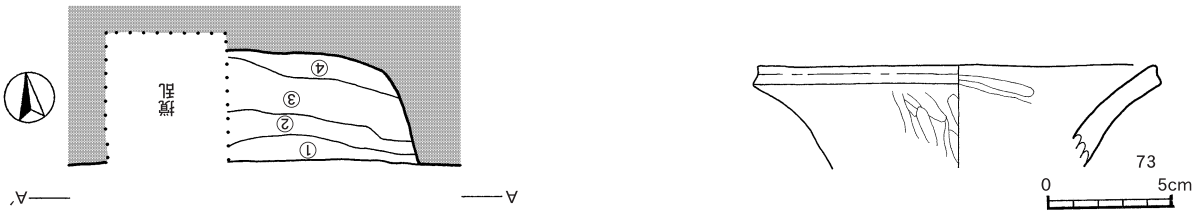
Ｎ・Ｏ－17区，Ⅱｃ層上面で検出された。５号土坑と隣接し，３号掘立柱建物跡と近接している。また，約３ｍ北には，８号竪穴住居跡も検出されている。平面形はほぼ円形に近い形を呈している。長径×短径は88×76㎝で，深さ29㎝で，ほかの土坑より小さい。床面は平坦である。埋土は上面が暗茶褐色土，床面はⅡｅ層で，黒褐色の砂質土であり，粒が細かい白色パミスが少し混じっている。土坑内から弥生土器が６点出土した。うち２点を図化した。74・75は外面は黒褐色系の色調でナデが施された壺形土器である。

７号土坑（第86図）

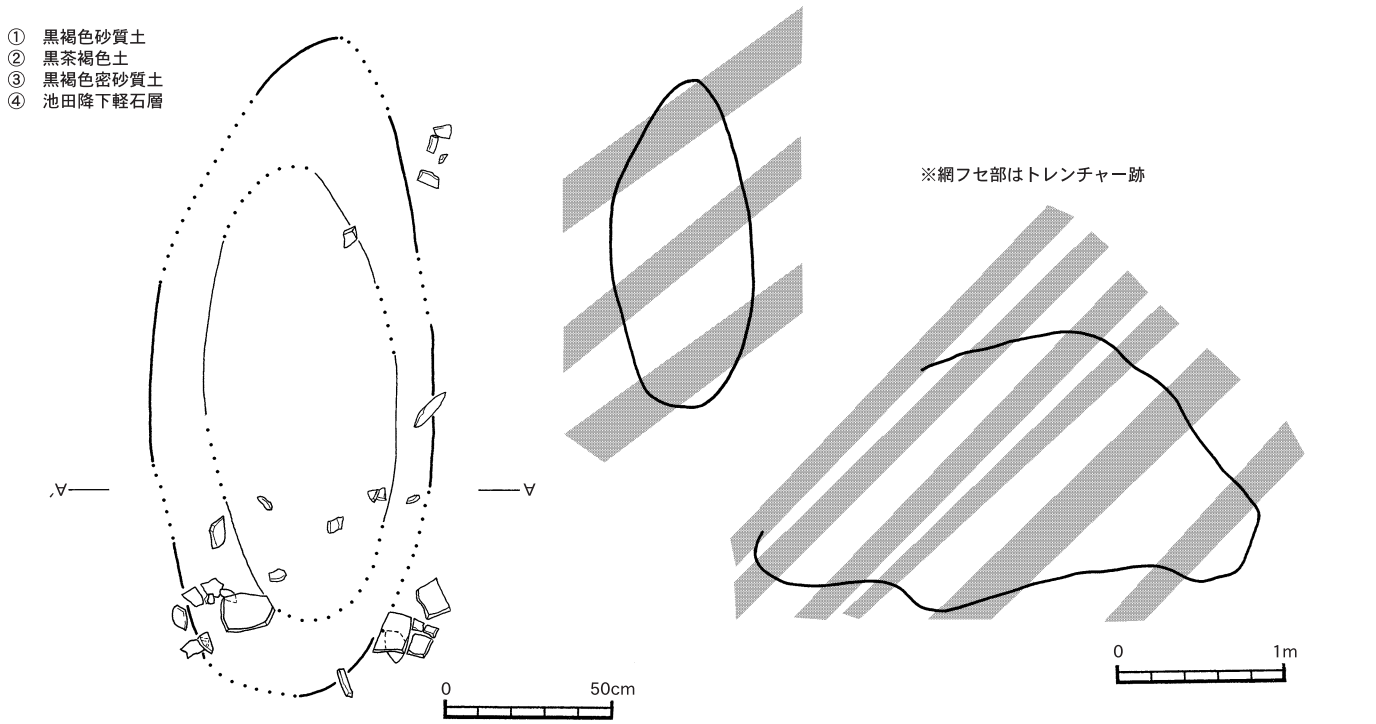
Ⅰ－14区のⅡｆ層（池田降下軽石層）上面で検出された。住居跡３号に隣接して検出された。住居と土坑の間に近世のイモ穴が切り合っており，住居の張り出しか，土坑なのか検討した結果，土坑と判断した。平面形は楕円形を呈している。長径×短径は167×114㎝で，深さ21㎝と，比較的浅い。埋土は上面が黒褐色の弱粘質土，底面はアカホヤ火山灰土混じりの茶褐色土である。検出層，埋土状況から弥生時代の遺構と判断した。埋土中から出土した遺物はなかった。

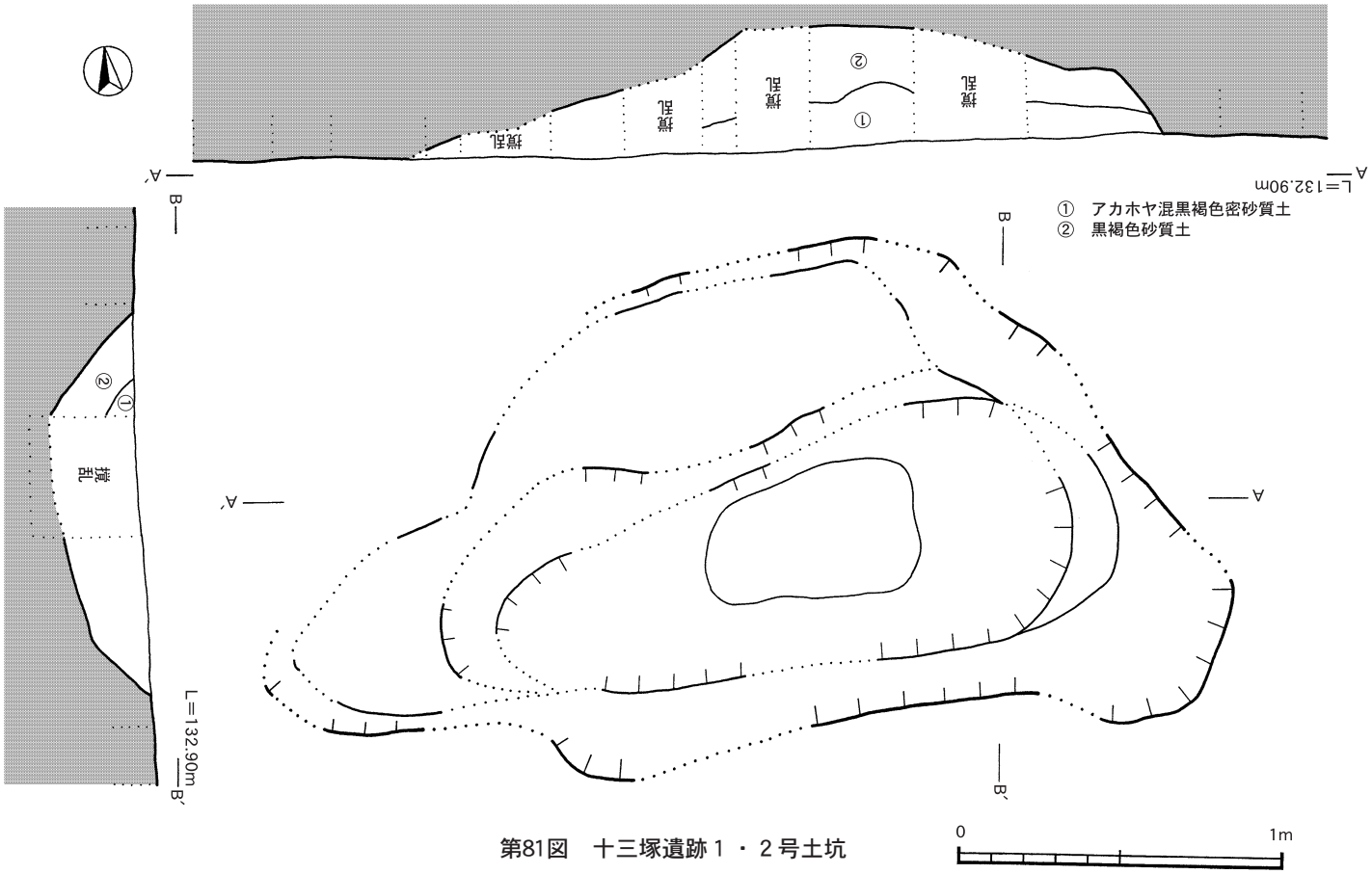


第79図　十三塚遺跡土坑位置図

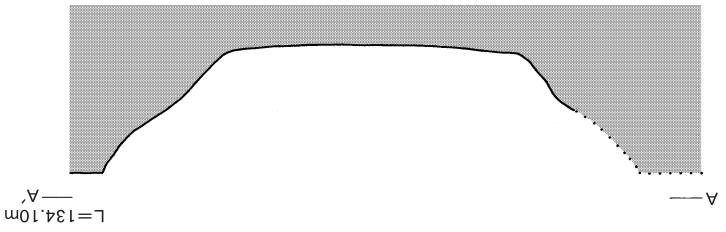


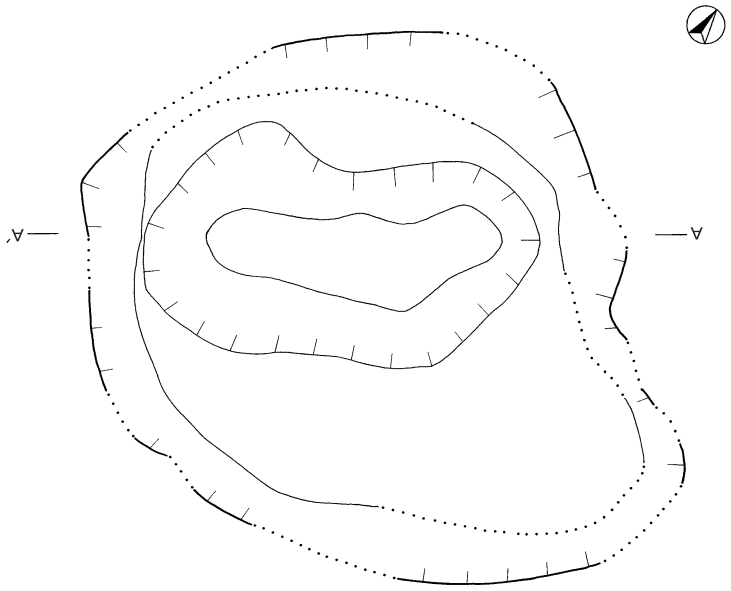
第80図　十三塚遺跡１号土坑出土遺物



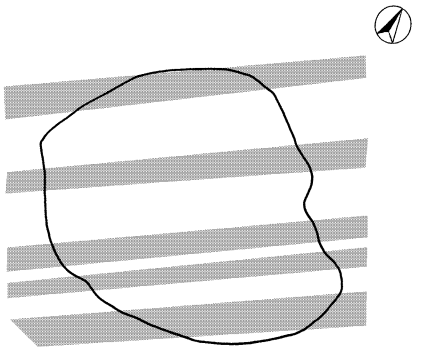


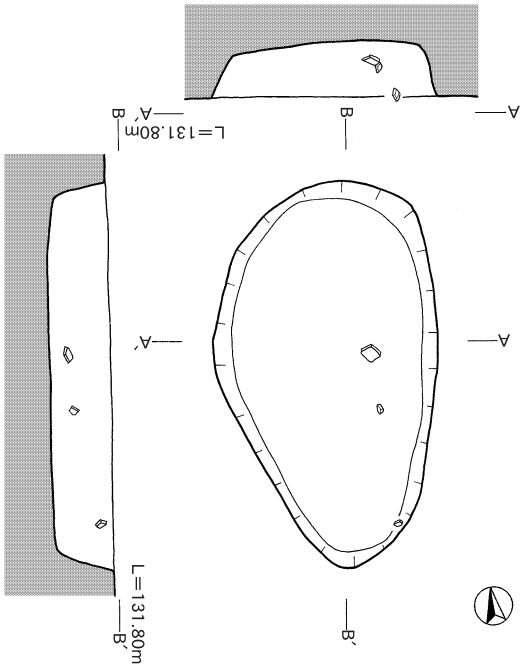
第81図　十三塚遺跡１・２号土坑

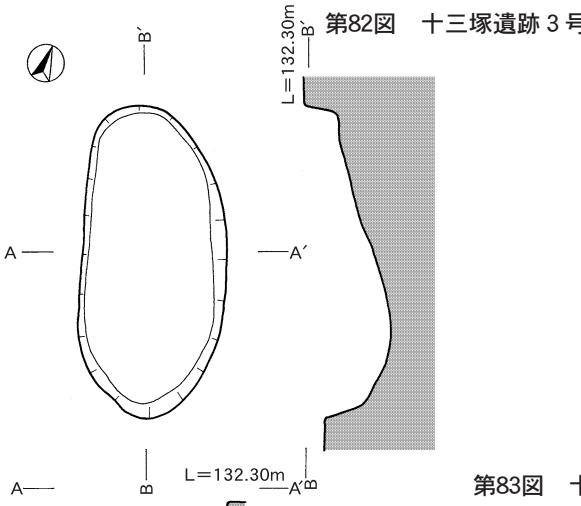




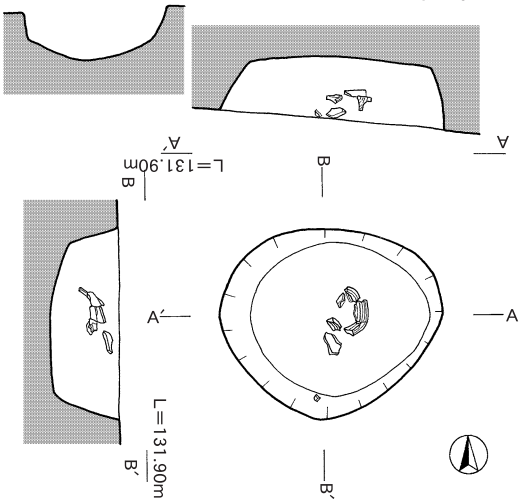
第82図　十三塚遺跡 3 号土坑



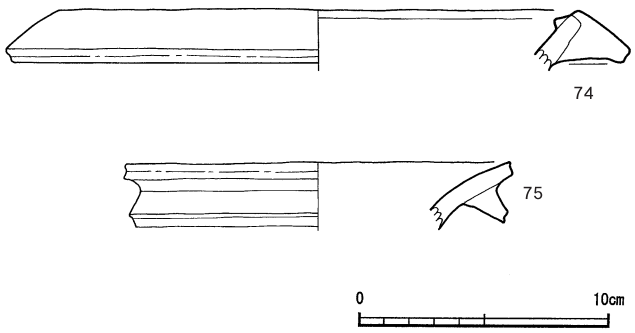




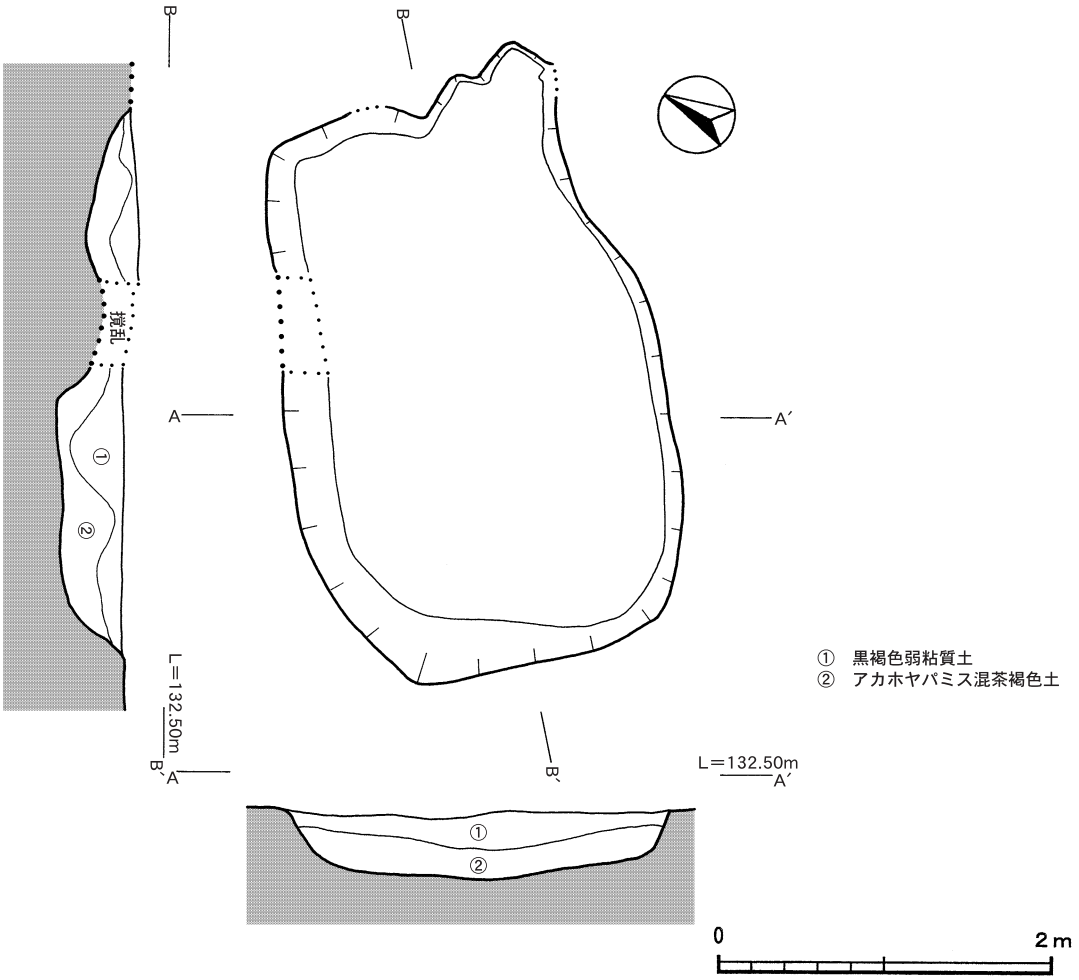
第83図　十三塚遺跡 4 ・ 5 号土坑



第84図　十三塚遺跡 6 号土坑



第85図　十三塚遺跡 6 号土坑出土遺物



第86図　十三塚遺跡７号土坑

第26表　十三塚遺跡土坑内出土遺物観察表

挿図	掲載番号	出土区	層	器種	部位	口縁部径(cm)	色調		器面調整		胎土						焼成	備考
							内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
80	73	H-15	Ⅰ	壺	口縁	15.6	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	土坑１号
85	74	N-17	Ⅱb	壺	口縁	24.4	黒褐	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	土坑６号
	75	N-17	Ⅱb	壺	口縁	15.4	暗褐	褐	ナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	土坑６号

第27表　十三塚遺跡土坑一覧表

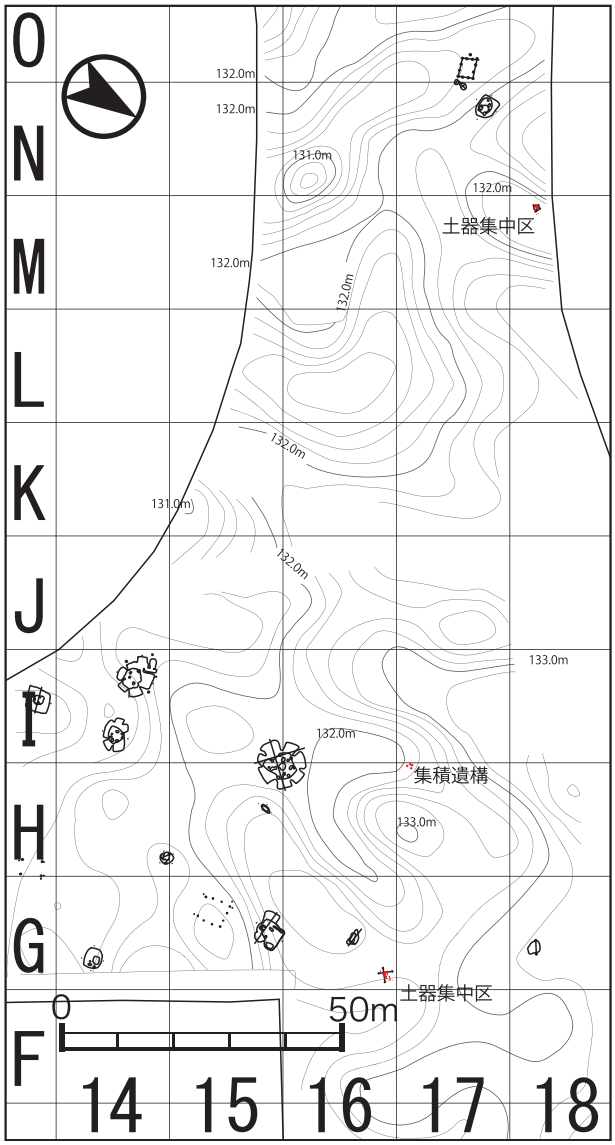
土坑番号	検出区	形　状	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	備　考
1	H－15	楕円形	195	85	33	
2	G－16	不定形	300	145	42	
3	G－18	不定形	217	212	66	
4	0 －17	楕円形	124	57	35	
5	N－17	楕円形	153	90	26	竪穴住居跡８号，土坑６号に隣接
6	N･0 －17	楕円形	88	76	29	竪穴住居跡８号，土坑５号に隣接
7	I－14	円形	167	114	21	竪穴住居跡３号に隣接

エ　集積遺構（第87・88図）

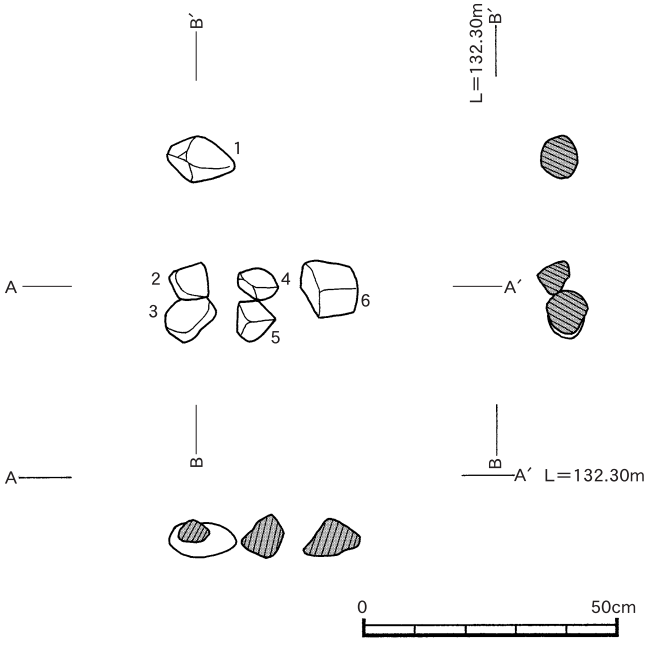
Ｈ－17区，Ⅱｂ層で検出された。拳大の石が長軸82㎝，短軸75㎝の中に，６個並列状に置かれたような状況で検出した。石材は安山岩，砂岩，凝灰岩等である。磨面，打痕等は確認できなかった。しかし，視覚的には意図的に置かれたものであると判断し，遺構と断定したが，遺構の性格は明確でなく，結論づけることはできない。今後の類例を待ちたい。

オ　土器集中区（第89・90図：Ｇ－16区，第91・92図：Ｍ－18区）

Ｇ－16区は，大甕の土器集中区である。Ⅱｂ層で出土した。ほぼ半分をトレンチャーによる掘削を受けている。Ｍ－18区は，壺の土器集中区が確認された。ここもⅡｂ層で出土している。どちらの土器集中区も掘り込み等，遺構の検出は確認できなかったが，甕，壺どちらも大型の土器であり，人為的に置かれたか，廃棄されたものではないかと考える。



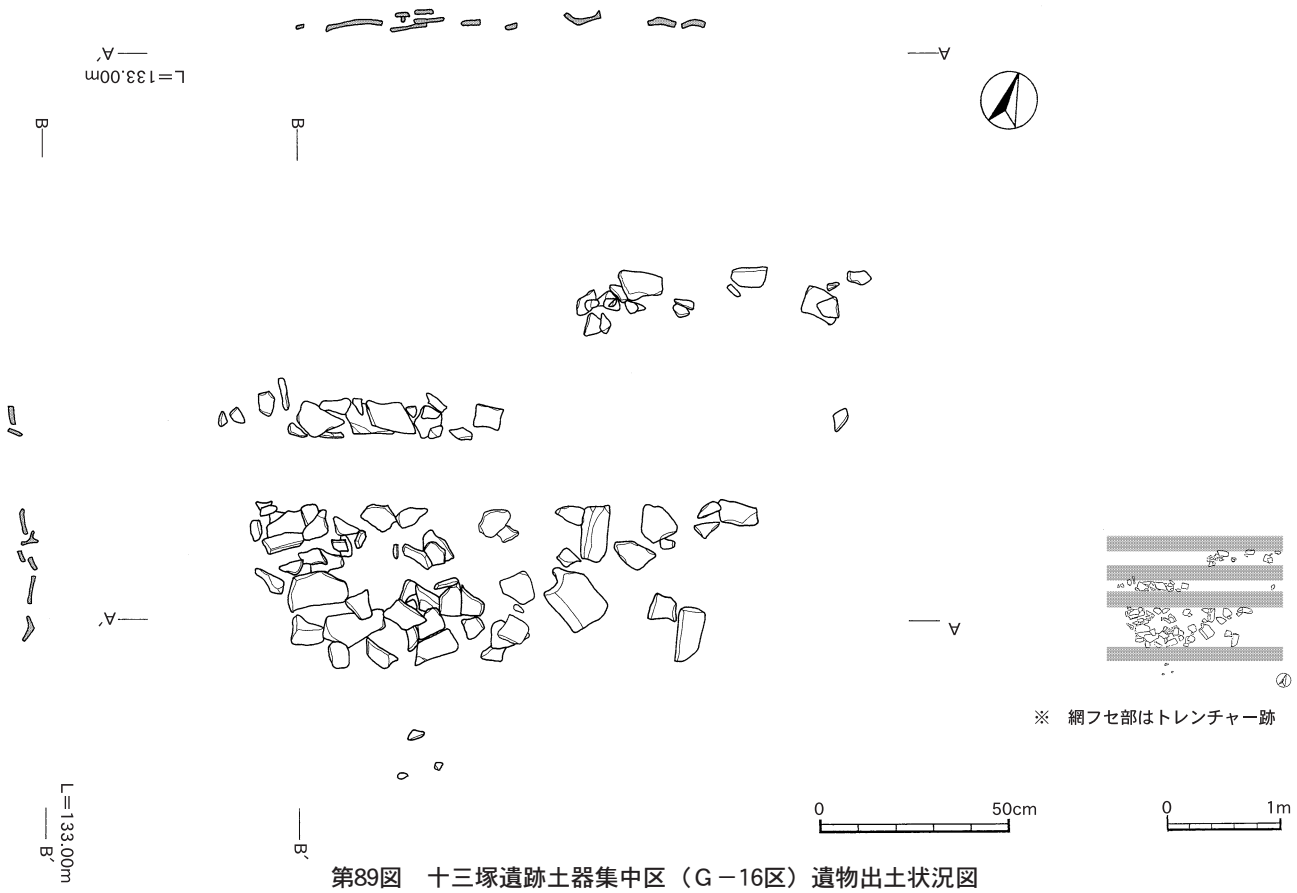
第87図　十三塚遺跡集積遺構・土器集中区位置図



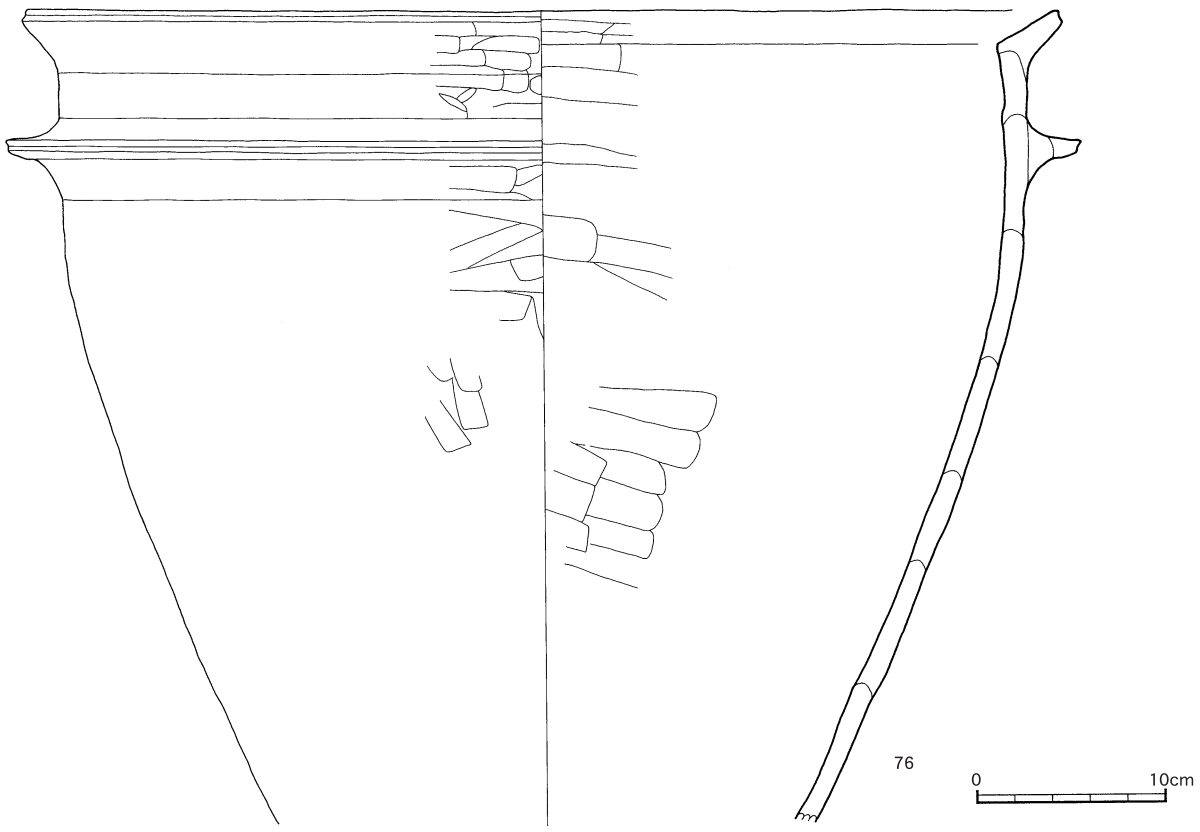
第88図　十三塚遺跡集積遺構

第28表　十三塚遺跡集積遺構石観察表

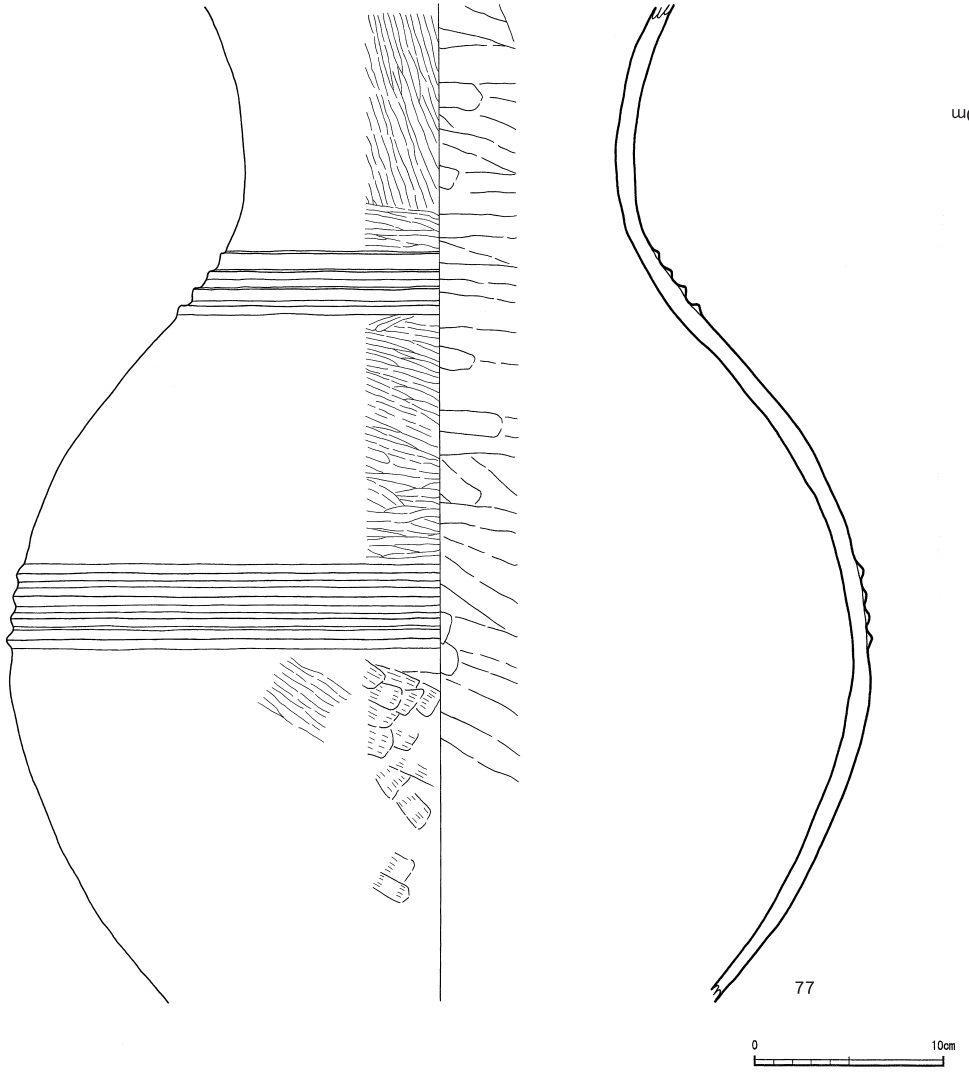
石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
安山岩	12.5	8.0	7.2	675	1
砂　岩	8.0	7.7	4.7	420	2
凝灰岩	10.1	7.8	6.7	850	3
安山岩	7.0	6.2	5.5	365	4
安山岩	7.4	7.0	6.0	390	5
安山岩	11.4	11.1	7.2	871	6



第89図　十三塚遺跡土器集中区（Ｇ－16区）遺物出土状況図



第90図　十三塚遺跡土器集中区（Ｇ－16区）土器



第92図　十三塚遺跡土器集中区（Ｍ－18区）土器

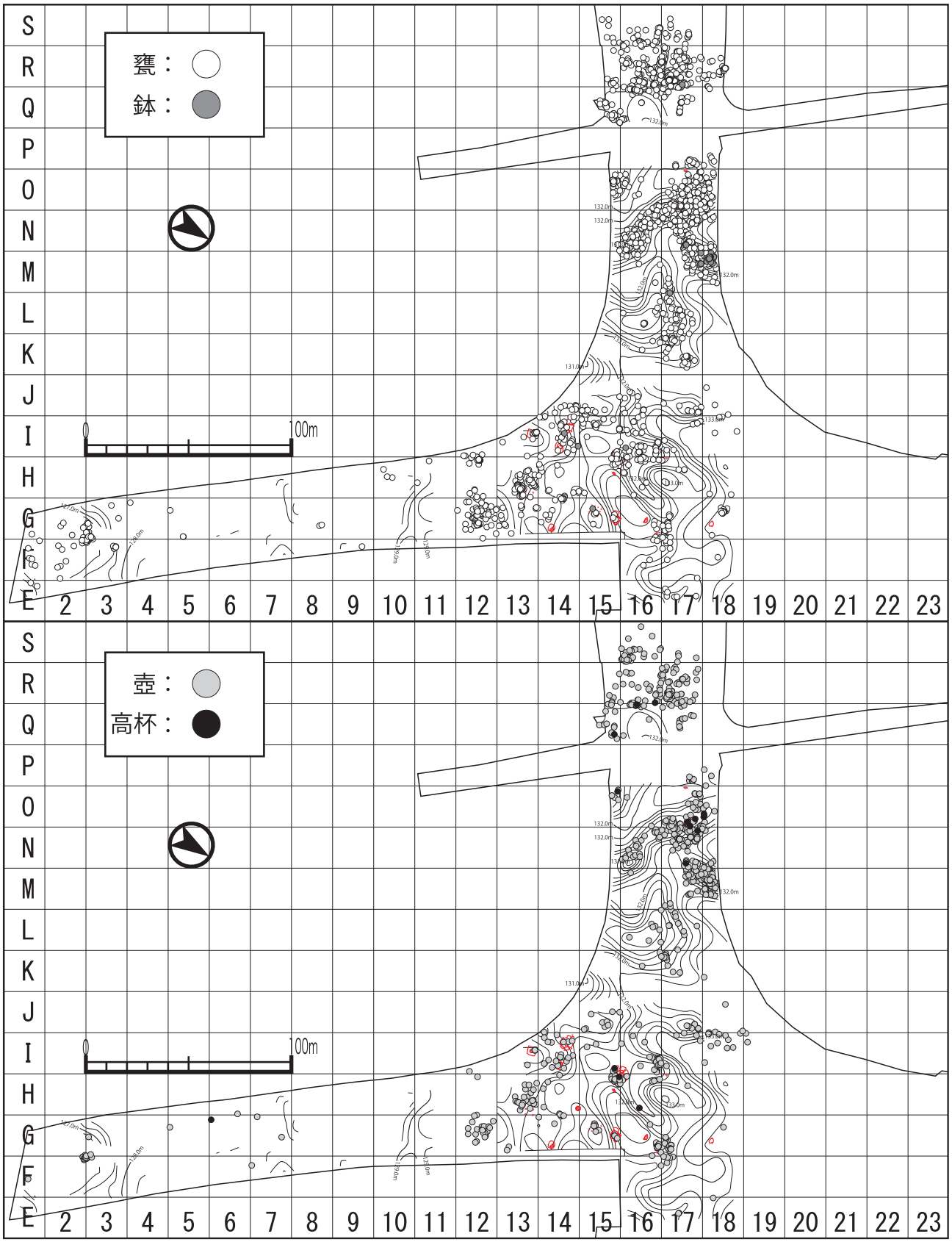
第91図　十三塚遺跡土器集中区（Ｍ－18区）遺物出土状況図

第29表　十三塚遺跡土器集中区　土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	器部					色調		器面調整		胎土						焼成	備　考
						部位	法量（cm）				外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
							口径	底径	胴部最大径	器高												
90	76	G-16	Ⅱ-b	—	大甕	口縁部～胴部	50.0	—	—	—	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		○		岩片	良	外方へ大きく立ち上がりながら内湾する口縁部で，くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には略台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は凹む。
92	77	M-18	Ⅱ-b	10839-1他	壺	頸部～胴部	—	—	45.2	—	赤褐	明赤褐	ミガキ	丁寧なナデ		○		○		岩片	良	肩部は張らず，頸部でしまり，外反して口縁部に至る器形と思われる。頸部及び胴部にはそれぞれ四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。

⑵　**遺物（第93図）**

弥生時代の遺物としては，中期を中心として，土器（甕・壺・鉢など），土製品（土製勾玉・円盤状土製品），石器（磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・磨石・凹石・敲石・砥石など），鉄器（鉄鏃・詳細不明品）が出土した。



第93図　十三塚遺跡弥生時代土器分類別出土状況図

弥生時代前期末～中期初頭の土器

ア　土器（第94・95図　78～111）

78～111は弥生時代前期末から中期初頭の特徴を持つ土器である。78～96は直口するか，やや内湾気味の口縁部に突帯がつき，刻目がつけられるものである。78～84は口縁部に2条の刻目のある突帯が張付けられている。80は胴部にも2条の刻目突帯が貼り付けられている。

85～90は口縁部に1条の刻目突帯が貼り付けられている。85は突帯が他よりも長い。88は胴部に1条の突帯が残る。90は口唇部内側に刻目がある。

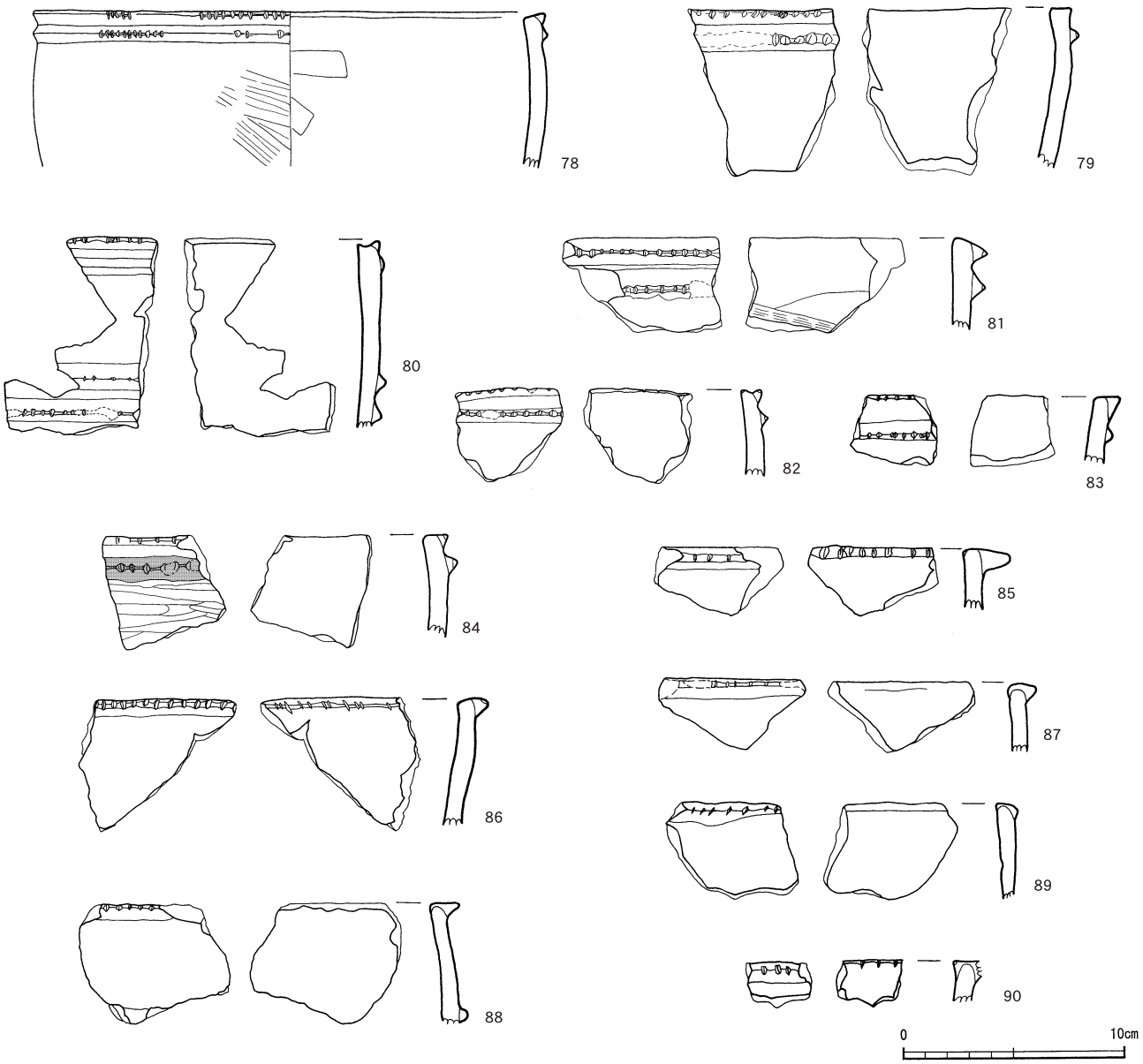
91～96は口縁部に刻目のない1条の突帯が貼り付けられている。93も口縁部に1条の突帯が貼り付けられているが，突帯の先端が削れており，刻目の有無は不明である。

97～102は胴部片で2条の刻目突帯が貼り付けられている。103・104は胴部に1条の刻目突帯が貼り付けられている。

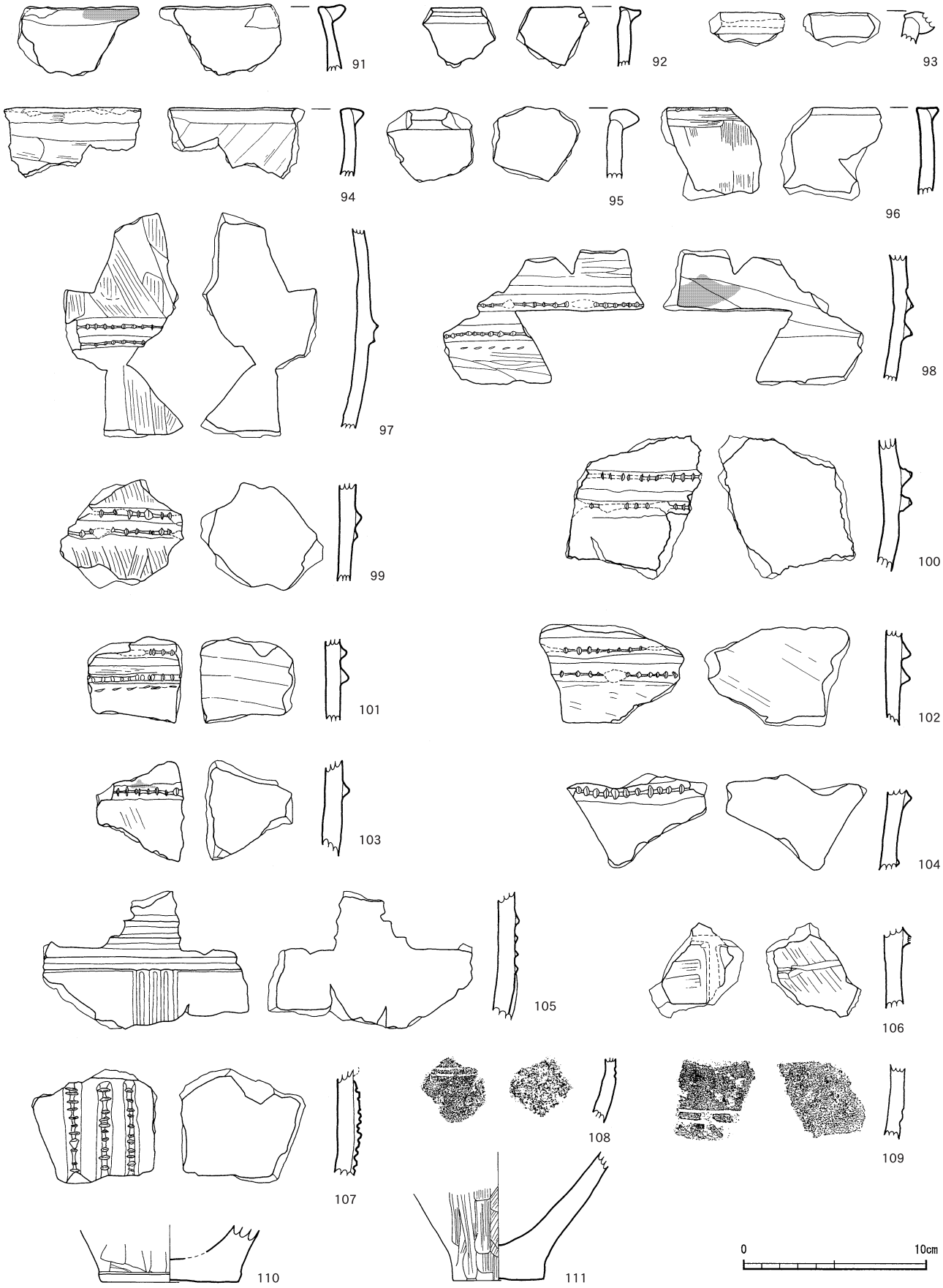
105は横位・縦位とも3条の突帯が貼り付けられている。106は横位・縦位とも1条の突帯が残るが，先端は削られている。107も胴部片で縦位の刻目突帯が3条貼り付けられており，その上には残存していないが，横位に突帯が貼り付けられていた痕跡が残っている。

108・109は壺の胴部片で外面に横位に2条の沈線が施されている。

110は壺の底部片で底部径は6.8㎝である。111は壺の底部片で底部径は5.0㎝である。厚めの底部から胴部は外に開く。器面調整は外面はハケメが，内面はナデが行われている。



第94図　十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器1



第95図　十三塚遺跡弥生時代前期末～中期初頭の土器 2

第30表　十三塚遺跡弥生時代前期～中期初頭土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量				色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
94	78	H－18	Ⅱb	甕	口縁	23.0	－	－	－	にぶい橙	橙	ハケメ	ナデ		○	○	○			良	5726他	外面にスス付着
	79	G－10	Ⅱa	甕	口縁	－	－	－	－	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○			良	11467	
	80	J－17	Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	1435	
	81	L－16	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい褐	ミガキナデ	ナデ	○	○	○				良	3191	
	82	I－16	Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	褐	灰	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	1682	
	83	O－17	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	9524	
	84	L－16	Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ミガキナデ	ナデ	○	○				岩片	良	3485	外面にスス付着
	85	H－16	Ⅱc	甕	口縁	－	－	－	－	褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	2074	
	86	G－3	Ⅱd	甕	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○				良	12495他	
	87	G－5	Ⅱd	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	橙	ナデハケメ	ナデ	○	○		○			良	12940	
	88	H－16	Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	1544	
	89	F－2	Ⅱc	甕	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	○	○				岩片	良	12304	
	90	L－16	Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	○	○	○				良	3486	
95	91	J－16	Ⅱc	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキナデ	ナデ	○	○				岩片	良	1759	外面にスス付着
	92	K－17	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○	○				良	11310	
	93	G－18	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○	○				良	5712	
	94	F－16	Ⅰ・Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	5423	
	95	G－18	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	5711	
	96	G－5	Ⅱd	甕	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ハケメ	ナデ	○	○		○			良	12902	
	97	M－17	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	○	○				岩片	良	10293	
	98	G－3	Ⅱd	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○	○				良	12511	外面にスス付着
	99	M－17	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメナデ	ナデ	○	○	○				良	10818	
	100	H－17	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○				良	6279	
	101	G－2	Ⅱc	甕	胴部	－	－	－	－	橙	橙	ミガキナデ	ナデ	○	○				岩片	良	11960	
	102	G－2	Ⅱd	甕	胴部	－	－	－	－	橙	橙	ミガキナデ	ナデ	○	○	○				良	11976	
	103	N－17	Ⅱc	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい橙	橙	ミガキ	ナデ	○	○	○				良	7633	外面にスス付着
	104	I－14	Ⅱc	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○				良	1892	
	105	F－16	Ⅱ	甕	胴部	－	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5437他	
	106	J－15	Ⅱa	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい黄橙	明黄褐	ミガキ	ミガキ	○		○			岩片	良	1816	
	107	J－15	Ⅱc	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○				良	1774	
	108	G－3	Ⅰ	甕	胴部	－	－	－	－	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	－	
	109	G－18	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	5677	
	110	G－7	Ⅱd	壺	底部	－	7.5	－	3.0	にぶい橙	橙	ハケメ	ナデ	○	○				岩片	良	11691	
	111	B－17	Ⅱb	壺	脚部	－	4.8	－	6.9	にぶい赤褐	にぶい褐	ハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	13212	

弥生時代中期後葉の土器（第96～110図：112～288）

大甕（第96・97図：112～117）

112～117は大甕の口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも口縁部は「く」の字状に折れ，胴部に口唇部同様先端が断面「M」字状の突帯が貼り付けられる。112・114・117は突帯がやや長い。口縁部の復元径は114と117が36.4㎝と38.0㎝と小さく，112と113は57.0㎝と51.6㎝と大きい。112の口縁端部には穿孔されたと考えられる孔がある。114は胎土・色調が他の土器と異なり，他の遺跡からの搬入品・粘土の採取地の違いといった可能性が考えられる。外面は火熱のためか剥落が激しい。

甕（第97～103図：118～193）

118～166は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部径は20～35㎝程度が多い。118～141は胴部に突帯が貼り付けられないタイプである。120・121は口唇部の調整が雑で同一個体の可能性も考えられる。125も口唇部の調整が雑で，先端の断面は「M」字状にならないものである。124は口縁部から胴部下半まで残り，胴部上半から下半へは張り出すことなく，すぼまっている。126は内外面とも調整が丁寧である。127は内外面とも器面調整はミガキが行われている。138～141は胴部上半が張り出している。

142・143は胴部に突帯が1条貼り付けられるタイプである。突帯の断面は三角形を呈する。144は残っている突帯は1条だが，その下に突帯がつく可能性もある。

145～163は出土している甕の中で最も多い胴部に突帯を3条貼り付けるタイプである。器面調整は多くが外面は口縁部から突帯の下まで，内面は口縁部がヨコナデを行い，その下に斜めのナデが行われるものが多い。198は胴部は内外面ともハケメである。

164～166は胴部に4条の突帯が貼り付けられるタイプである。164・165は胴部は張り出さないが，166は胴部が外に大きく張り出す。

167～193は甕の底部片である。多くは充実脚台で，底部径は6～8㎝が多い。充実脚台の多くは胴部から底部の境，もしくはそのやや下部にくびれ部があり，くびれ部から下端へ広がっていく。底部下端は断面「M」字状に面取りされている。180は他のものに比べ脚台が小さく，179・184・185はくびれ部があまり顕著ではない。

186・187は全体の形態は不明だが中空の脚台の破片の可能性も考えられる。189・190・192は上げ底状になっている。188は底外面が削れ，上げ底か平底かは不明である。191は中空の脚台で胴部の境の部分である。

壺（第104～110図：194～283）

194～231は壺の口縁部・口縁部から胴部にかけての破片である。194～216は「へ」の字状に垂れ下がる単一の口縁部をもつものである。口唇部は断面「M」字状に凹んでいる。194～199，201・203・205・207は口縁部内面に断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。194は口縁部から胴部にかけての破片で，頸部から胴部にかけての外面には突帯はつかず，ミガキが行われている。

195は直線的で長い頸部で，外面の頸部と肩部の境に1条の突帯が残っている。198は口縁部外面に鋸歯状の沈線が刻まれている。施文具は貝殻の先端が使用された可能性が考えられる。200・202・204・206・208～217は口縁部内面に突帯がつかないものである。216は一部しか残存せず，内面に突帯がつくかは不明である。外面には鋸歯状の沈線が刻まれている。

218～230は二叉状口縁の口縁部片である。口唇部とその下につく突帯の先端は断面「M」字状に凹んでいる。218・219は口縁部内面に断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。224などは外面にススが付着している。

231は口縁部片で短い口縁部から胴部へは「く」の字状に折れる。口唇部は「M」字状に凹んでいる。頸部外面には突帯がつく。

232は壺の胴部片である。最も張り出す部分に断面「M」字状の突帯が貼り付けられている。広口口縁壺と考えられる。

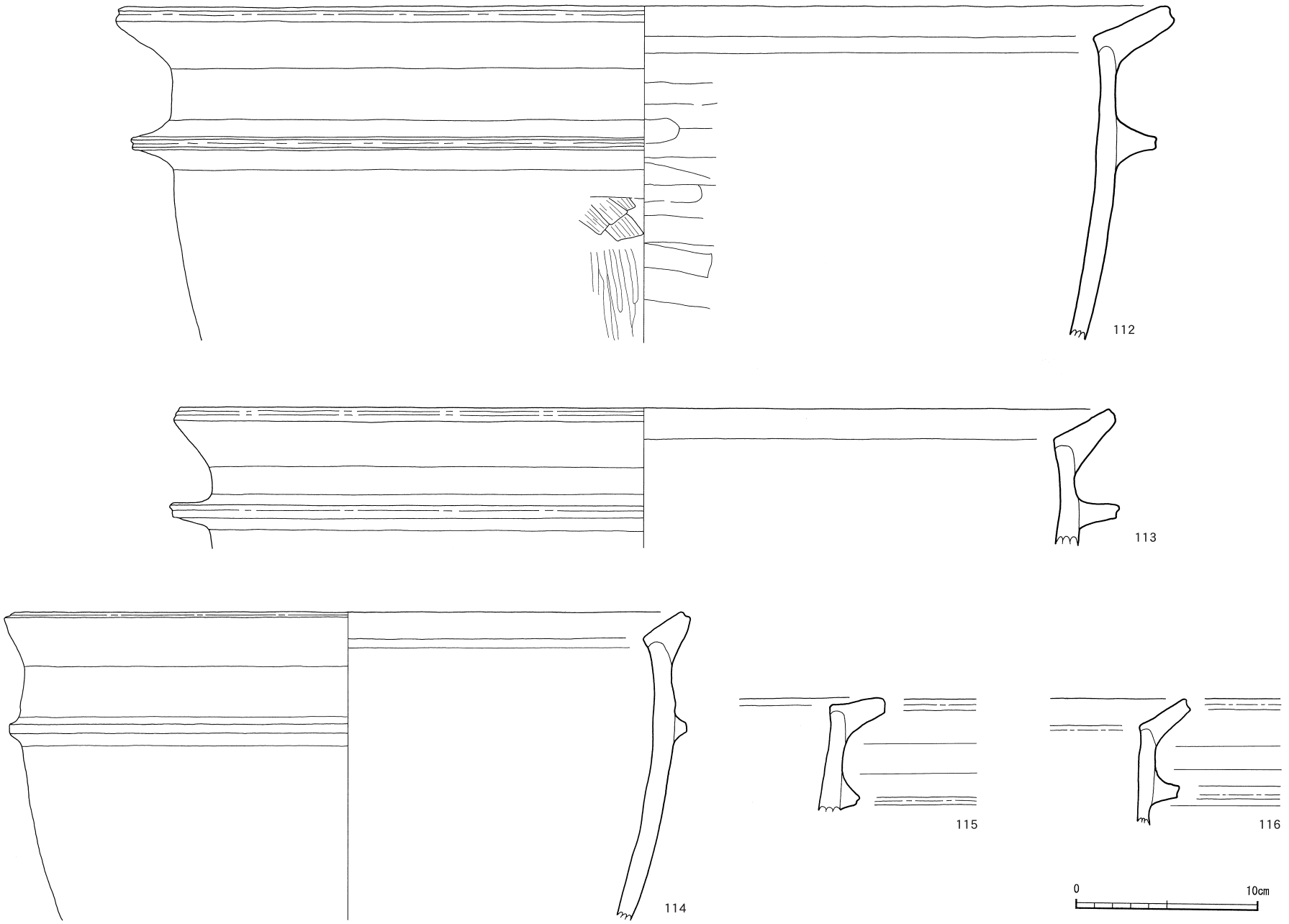
233～254は壺の頸部から胴部にかけての破片である。頸部から胴部にかけて外面には断面三角形の突帯が貼り付けられるものが多い。233は頸部と肩部の境に突帯が1条残り，頸部はあまり丸みをもたずに立ち上がる。

235～246は頸部から肩部にかけて突帯が3～6条貼り付けられている。247は肩部に突帯が3条残り，胴部上半に断面「M」字状の突帯がつく。249・251は肩部と胴部最大径となる部分に突帯が貼り付けられている。252は胴部片で他のものに比べ強く曲がっている。外面に突帯は貼り付けられていない。254は胴部最大径となる部分に断面「M」字状の突帯が貼り付けられている。

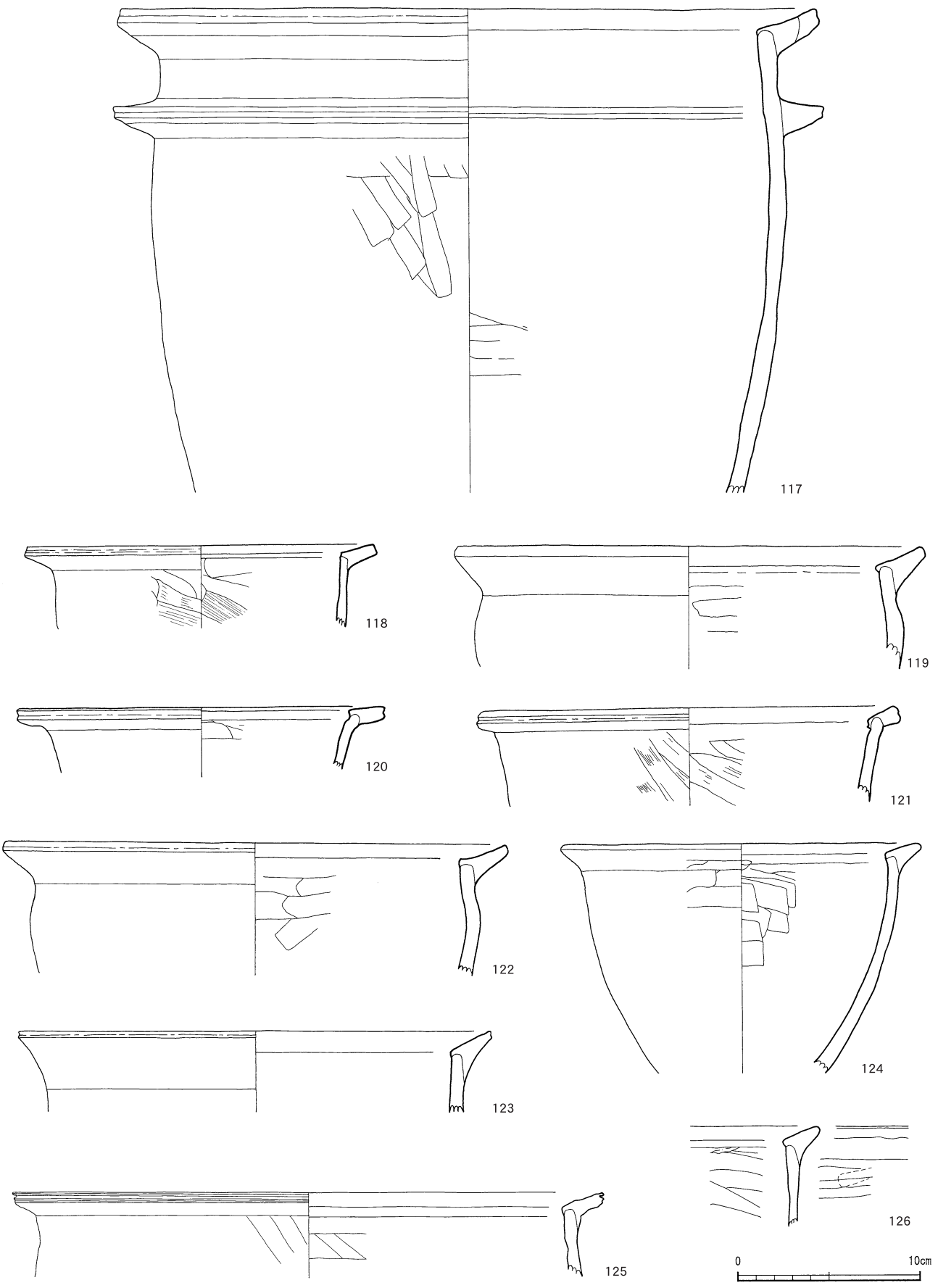
255～283は壺の底部片である。平底で多くは胴部が丸みを帯びて外に大きく開くものが多いが，255は他のものに比べ外に開く角度が小さく，直線的に立ち上がっている。270は火熱のためか器面が赤変している。281は外底面までミガキが行われている。283は他のものに比べ全体的に小さい。

鉢（第110図：284～288）

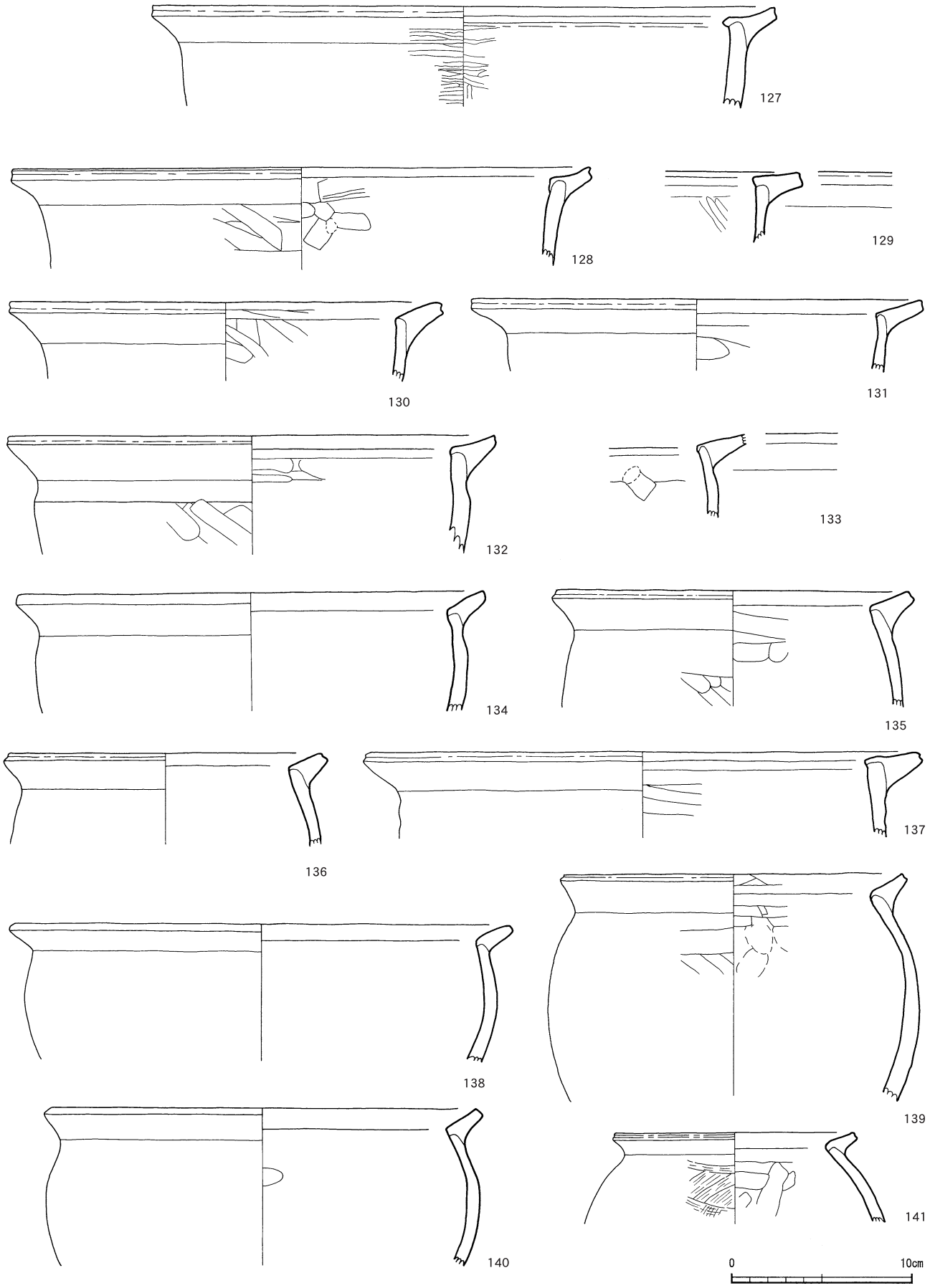
284・285は完形の鉢である。ともに底部は平底で口縁部は甕の口縁部と同じ形態である。284は胴部に断面「M」字状の突帯がつき，胎土は114と同様の特徴を持ち，搬入品・粘土の採取地の違いが考えられる。285は胴部に突帯は付かない。外面はミガキが，内面はナデが行われている。286～288は鉢の口縁部片である。286・287は口唇部が断面「M」字状に凹んでおり，口縁部外面には「M」字状突帯が貼り付けられている。288は口唇部は凹まず，口縁部外面に突帯はつかない。口縁部はやや内湾気味である。



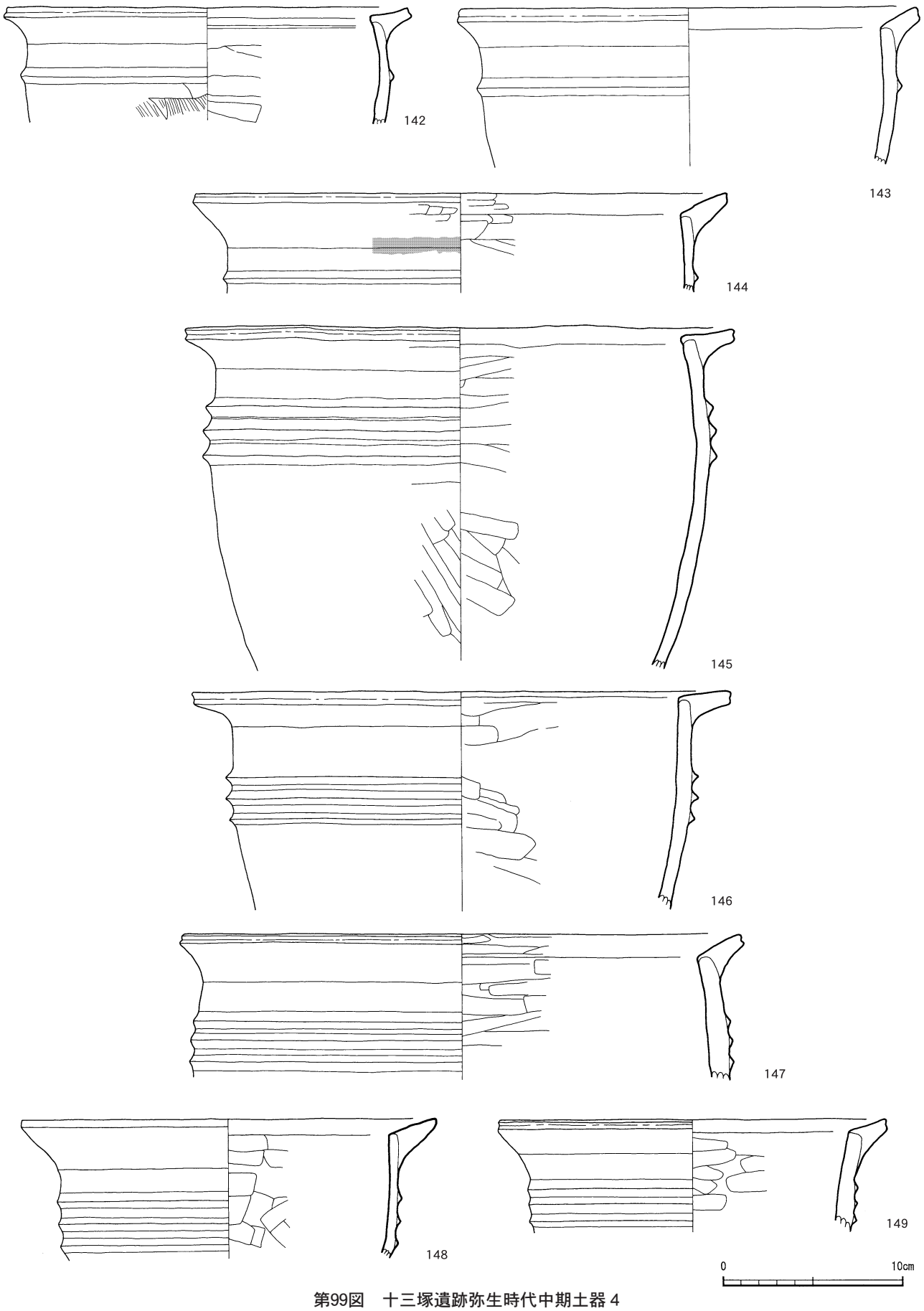
第96図　十三塚遺跡弥生時代中期土器１



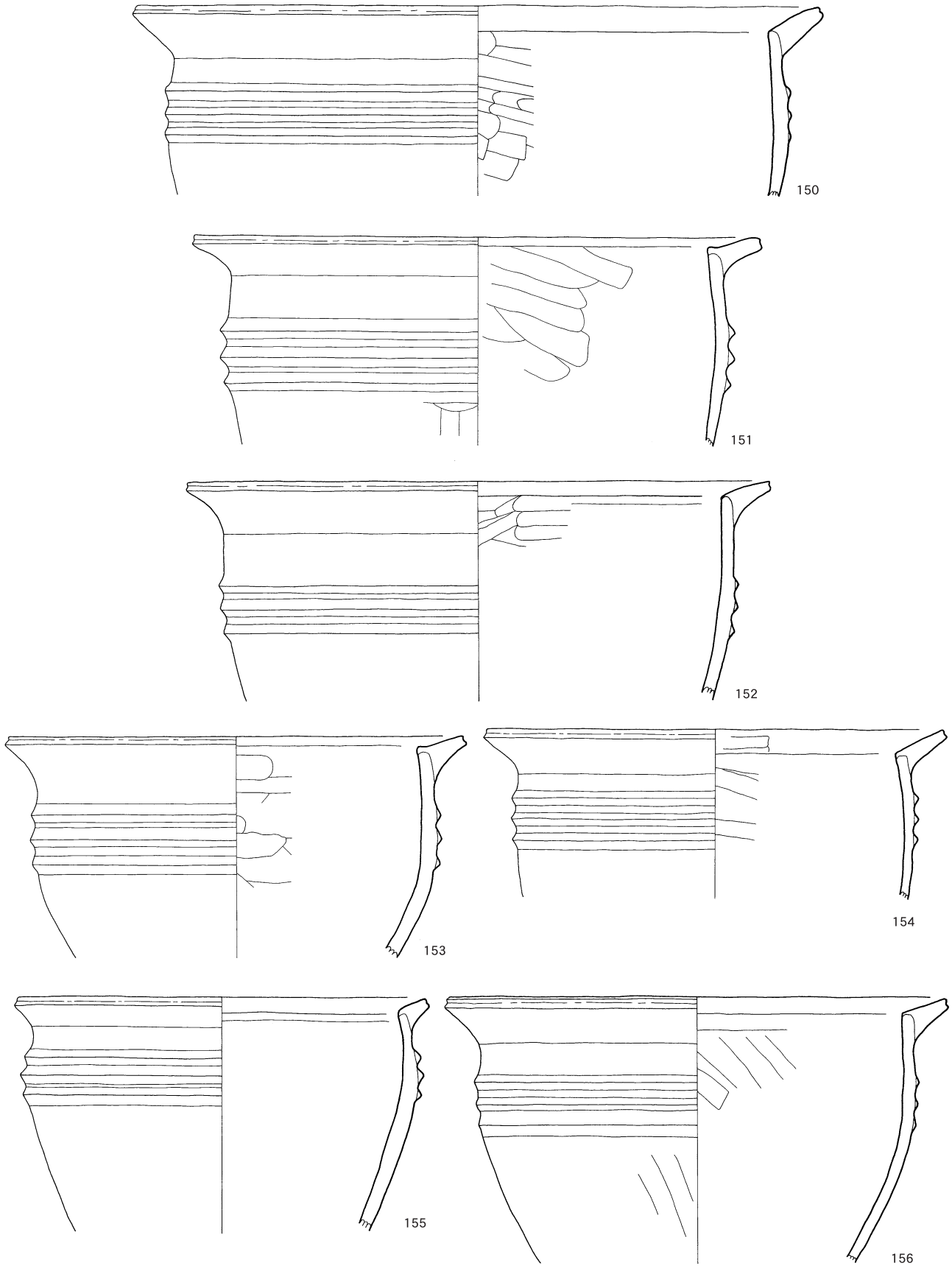
第97図　十三塚遺跡弥生時代中期土器 2



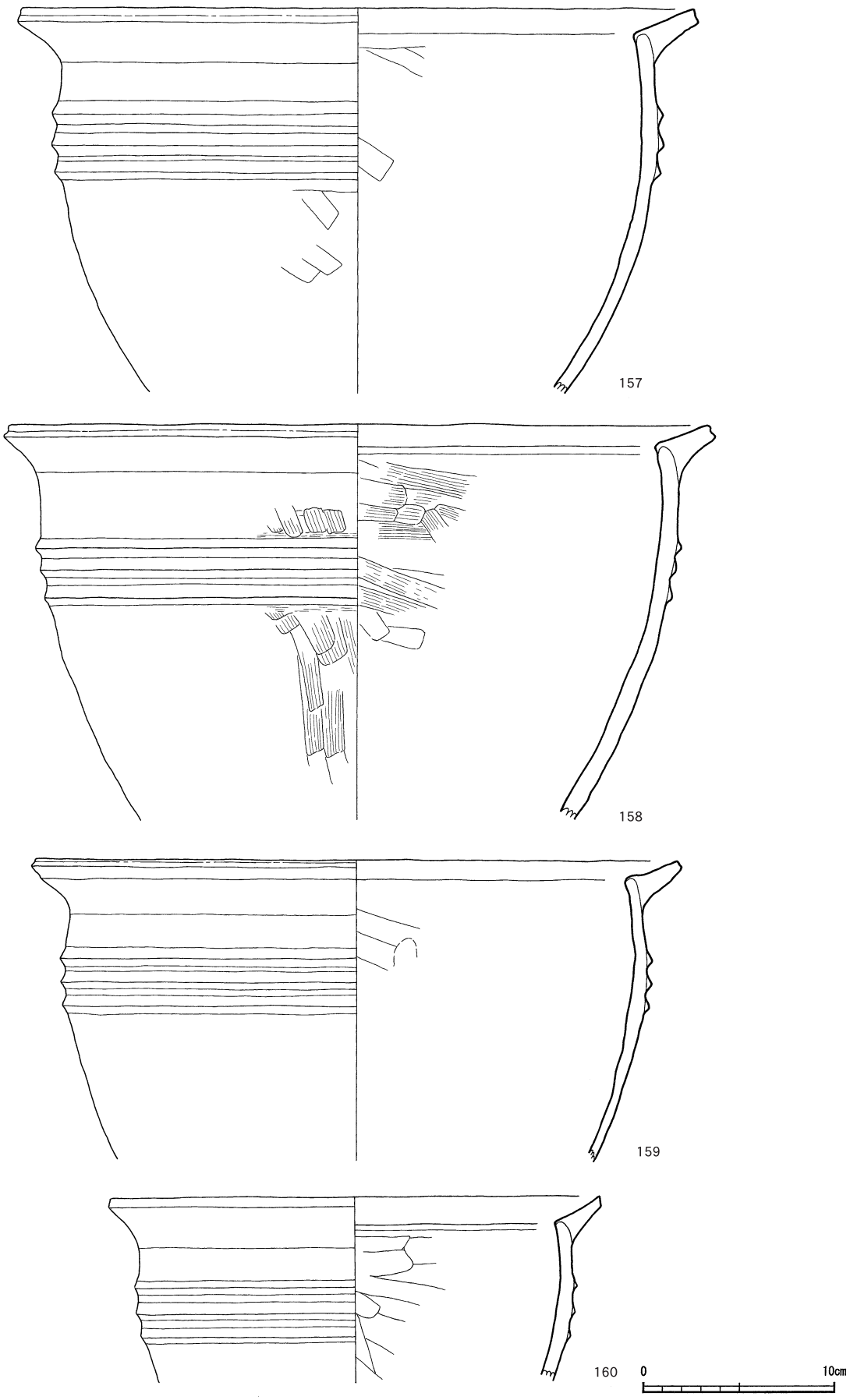
第98図　十三塚遺跡弥生時代中期土器 3



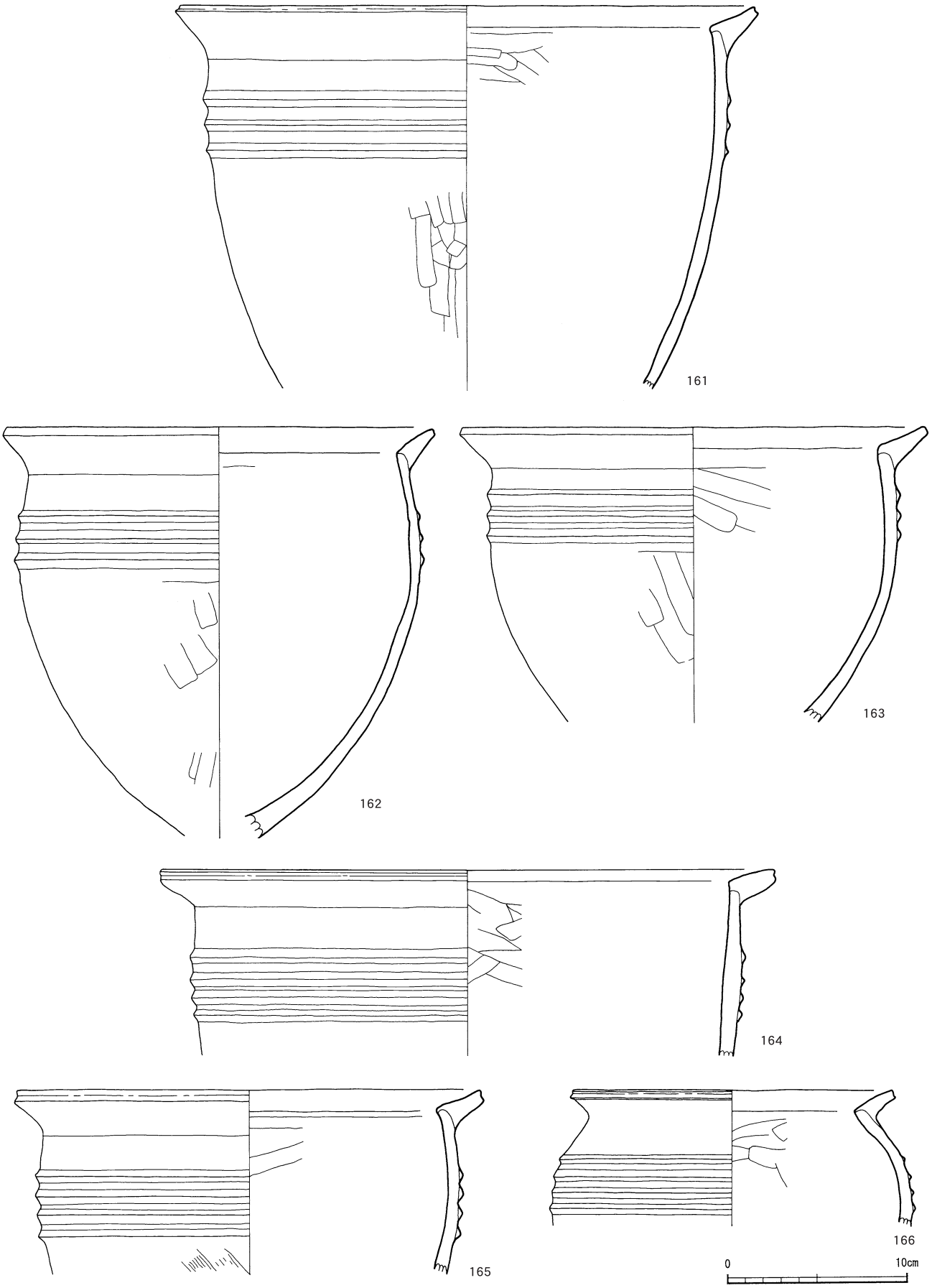
第99図　十三塚遺跡弥生時代中期土器４



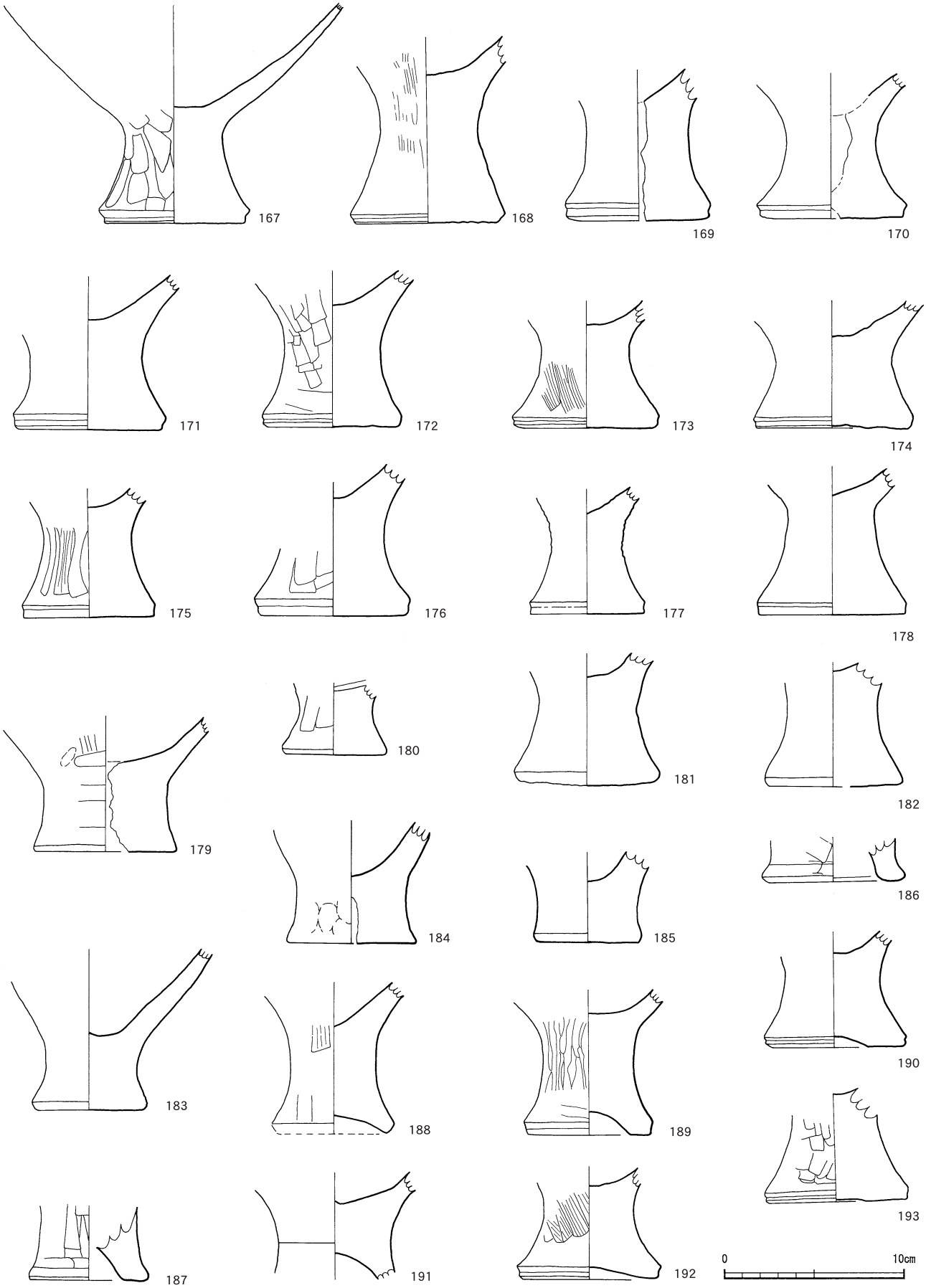
第100図 十三塚遺跡弥生時代中期土器５



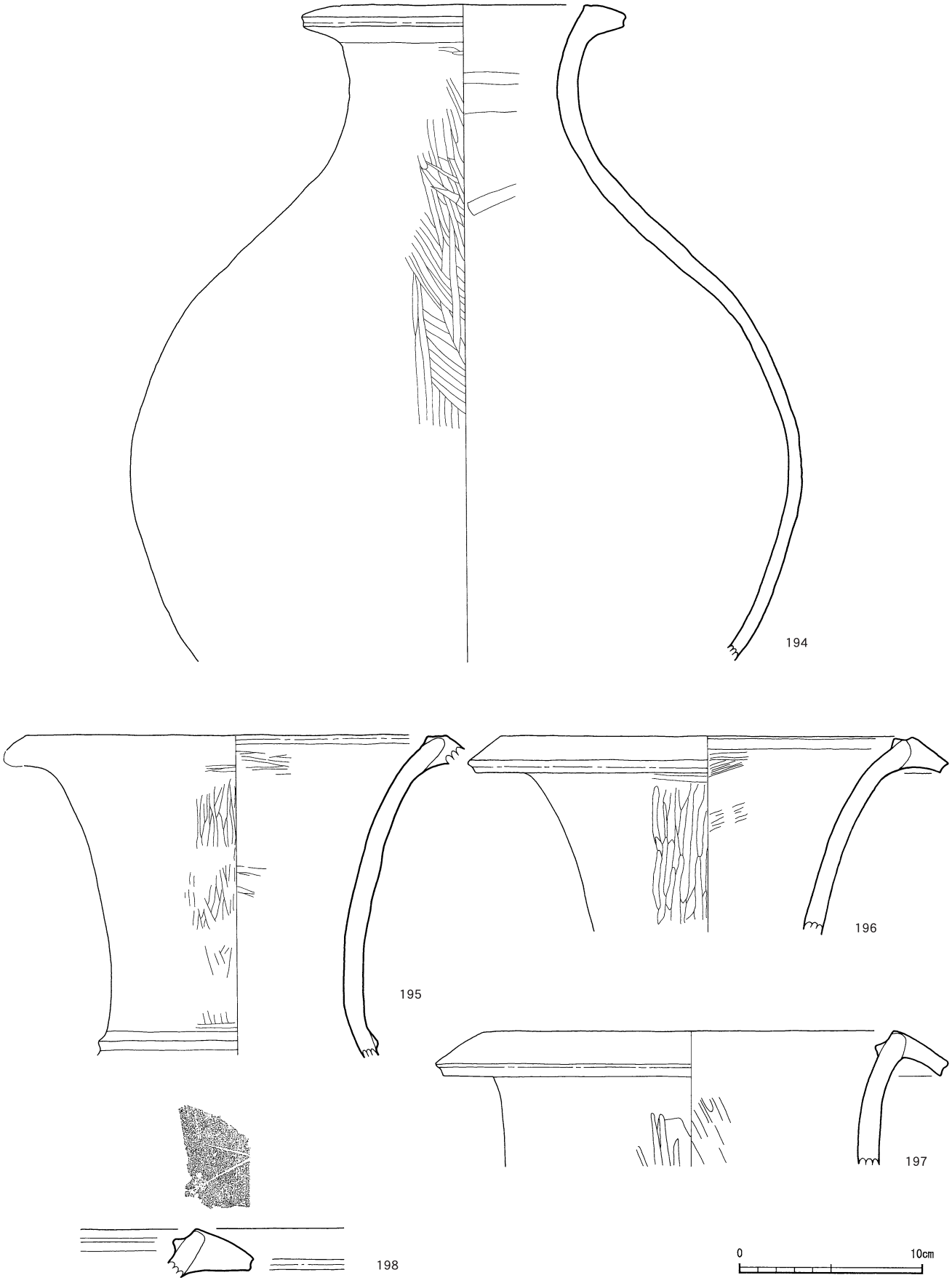
第101図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 6



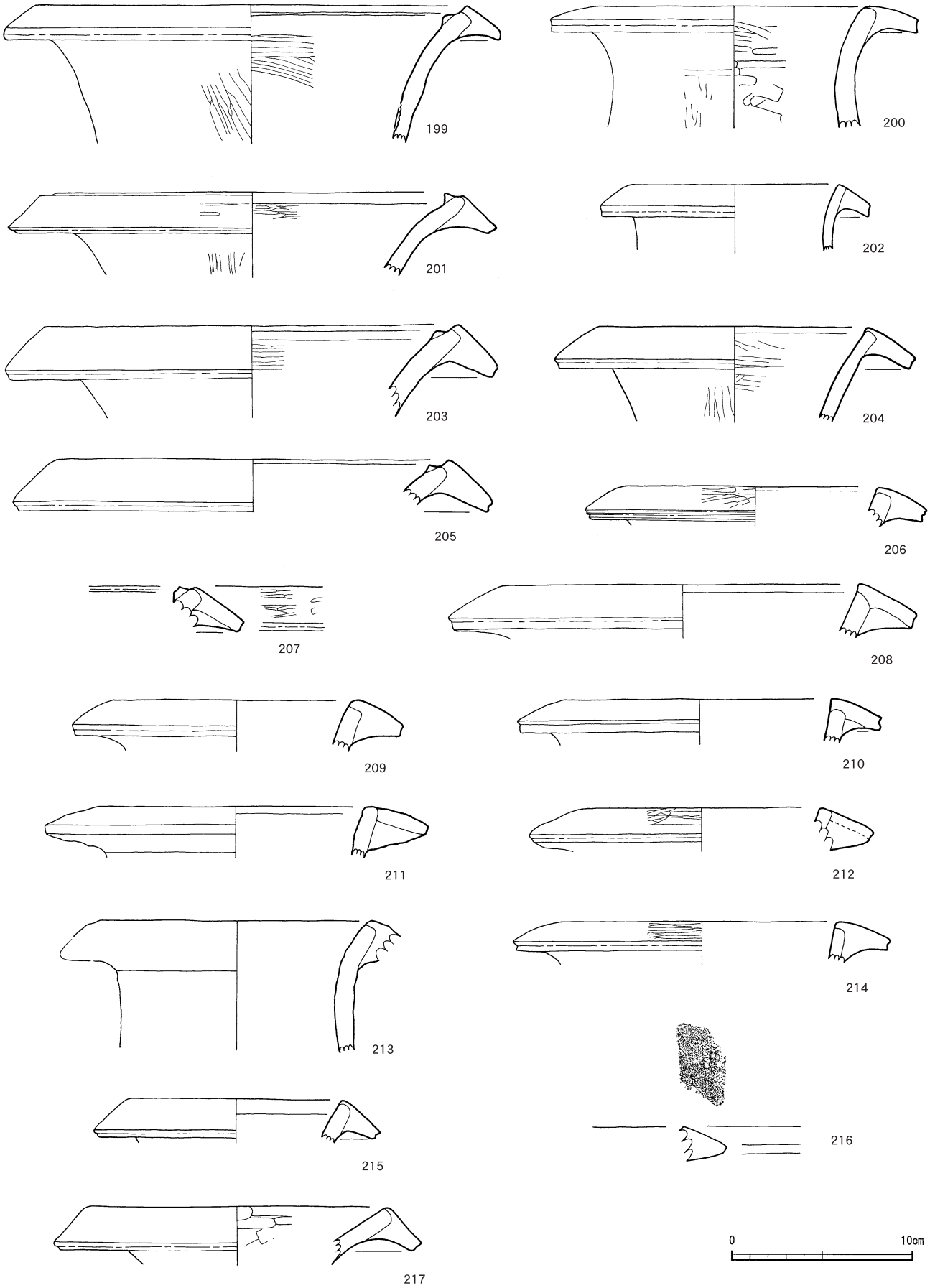
第102図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 7



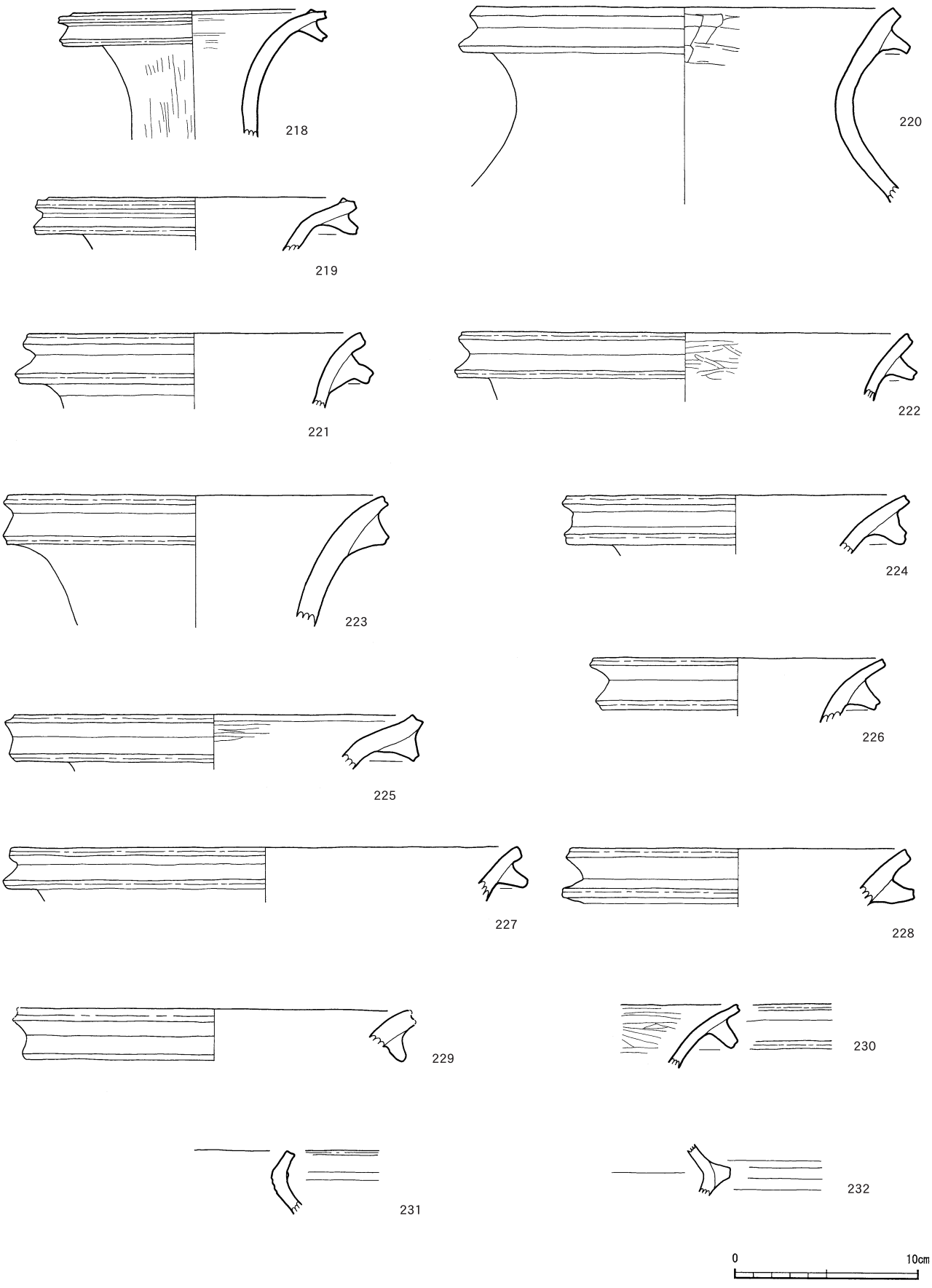
第103図 十三塚遺跡弥生時代中期土器８



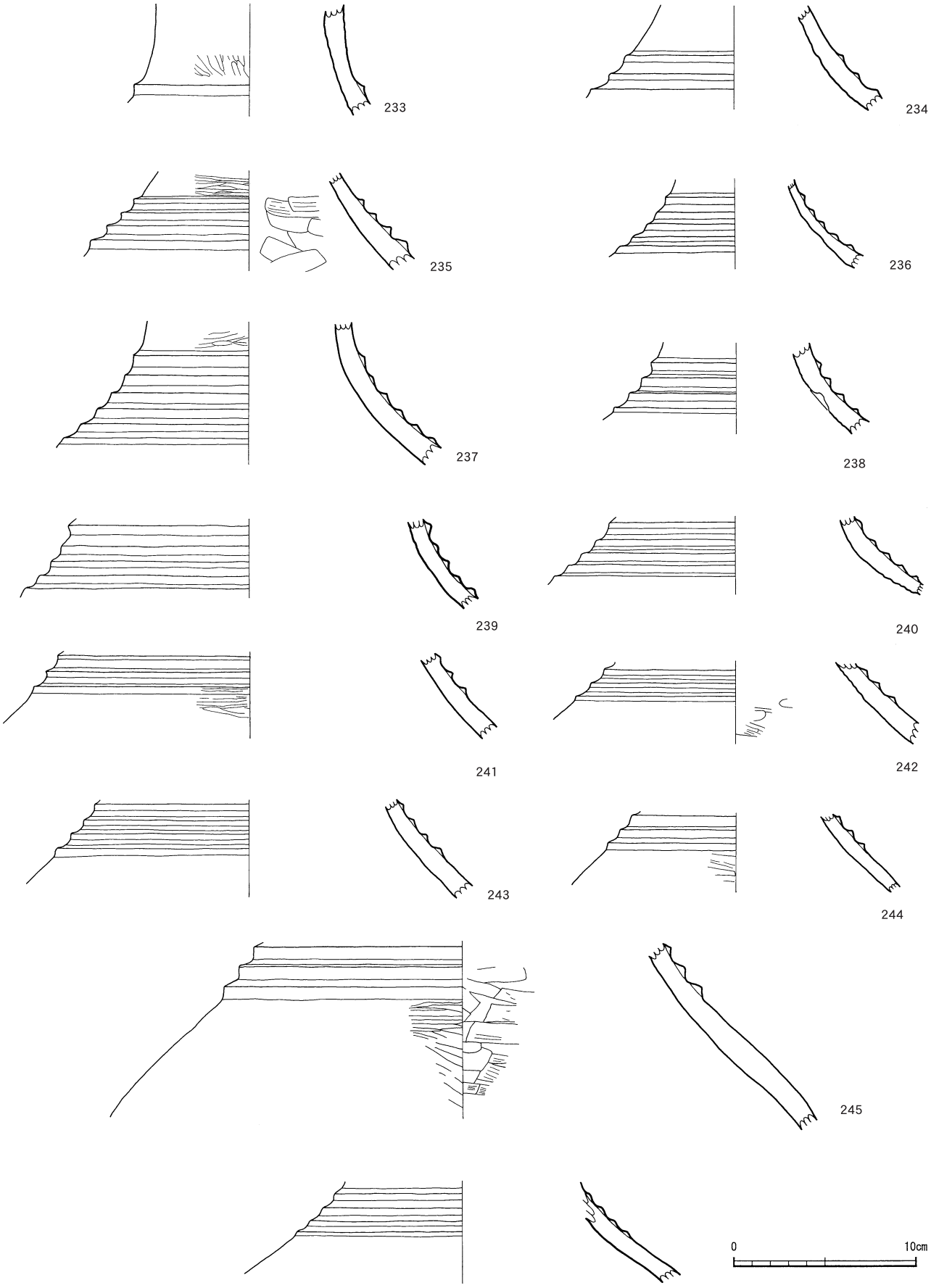
第104図 十三塚遺跡弥生時代中期土器 9



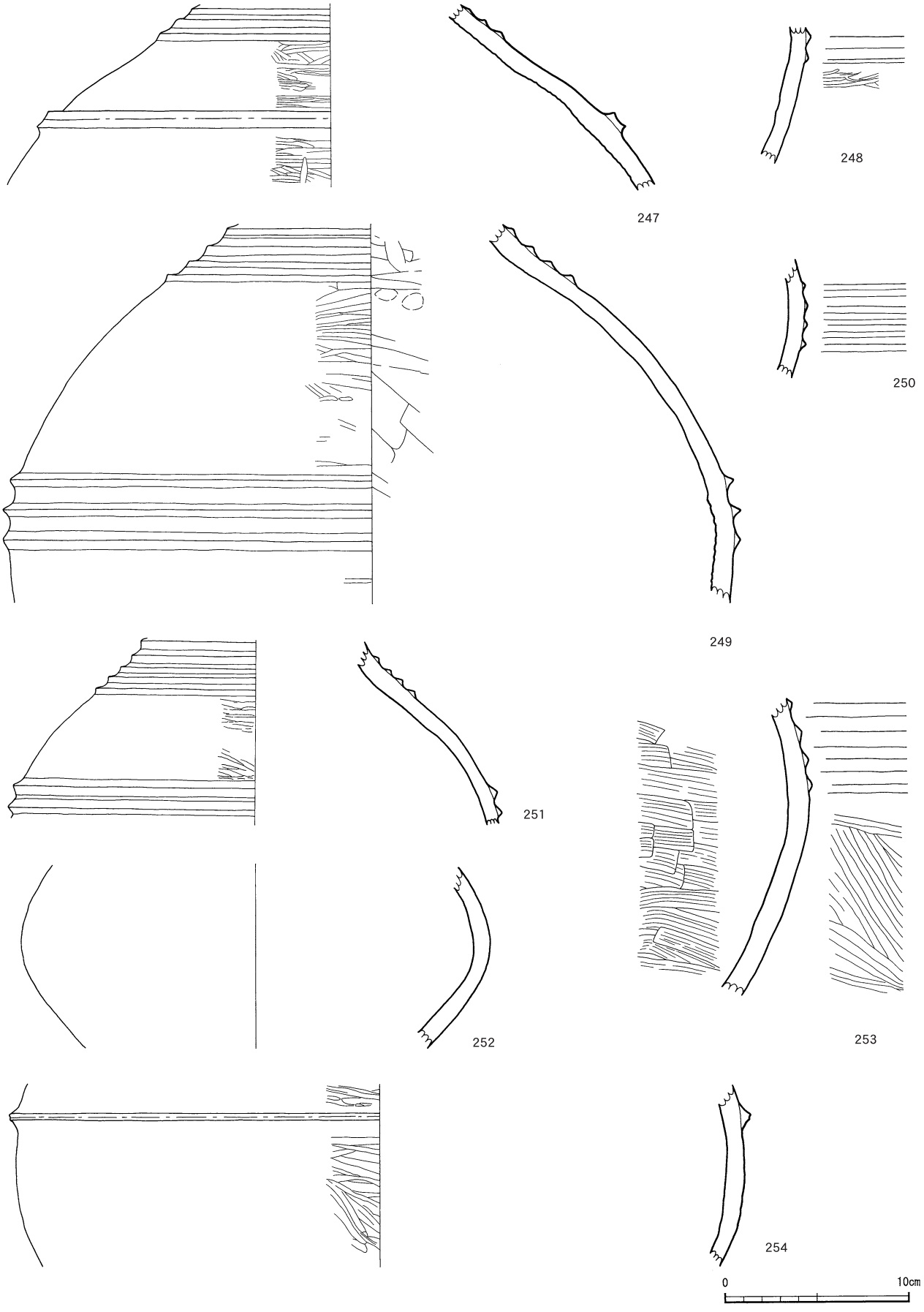
第105図 十三塚遺跡弥生時代中期土器10



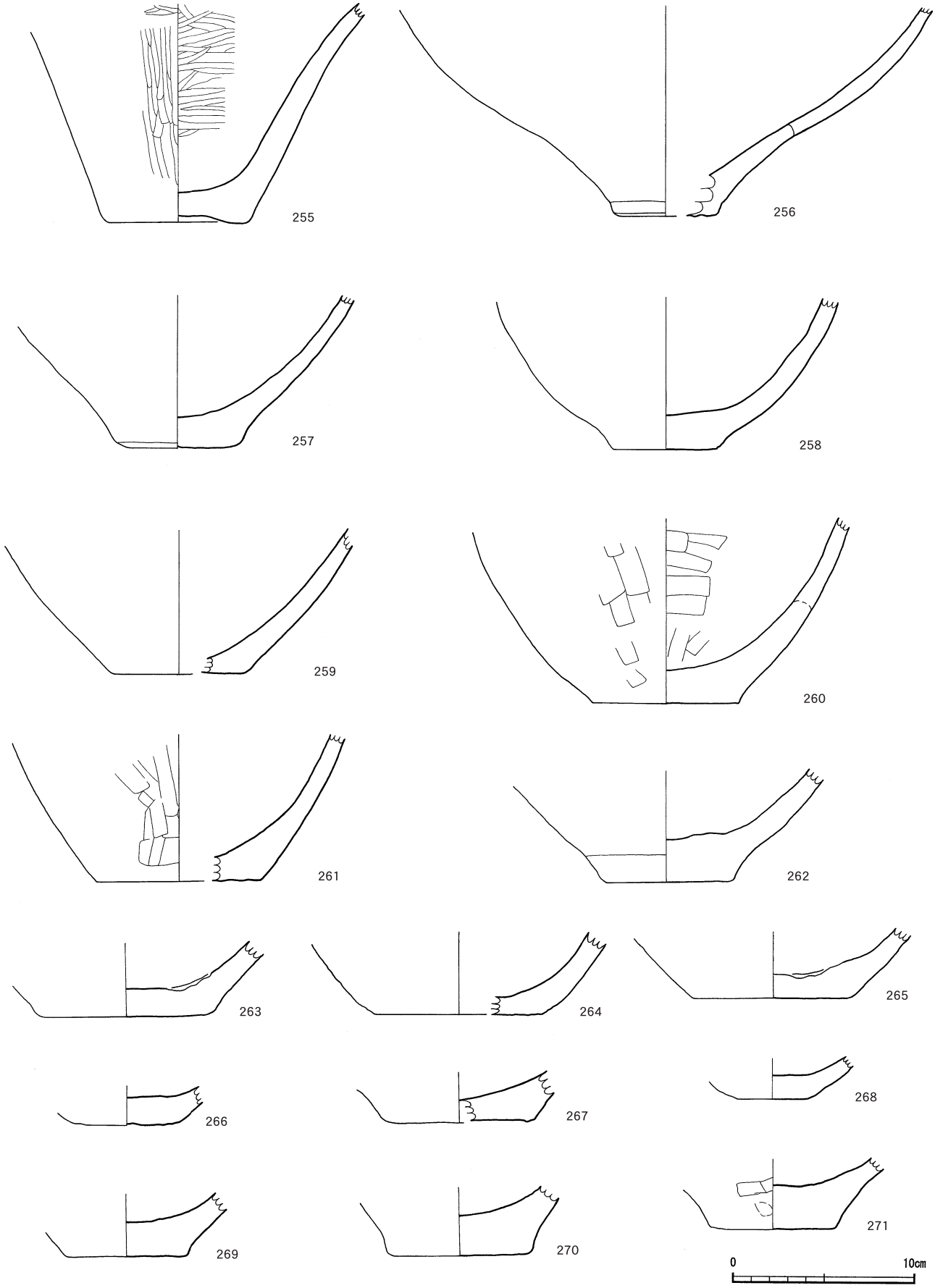
第106図 十三塚遺跡弥生時代中期土器11



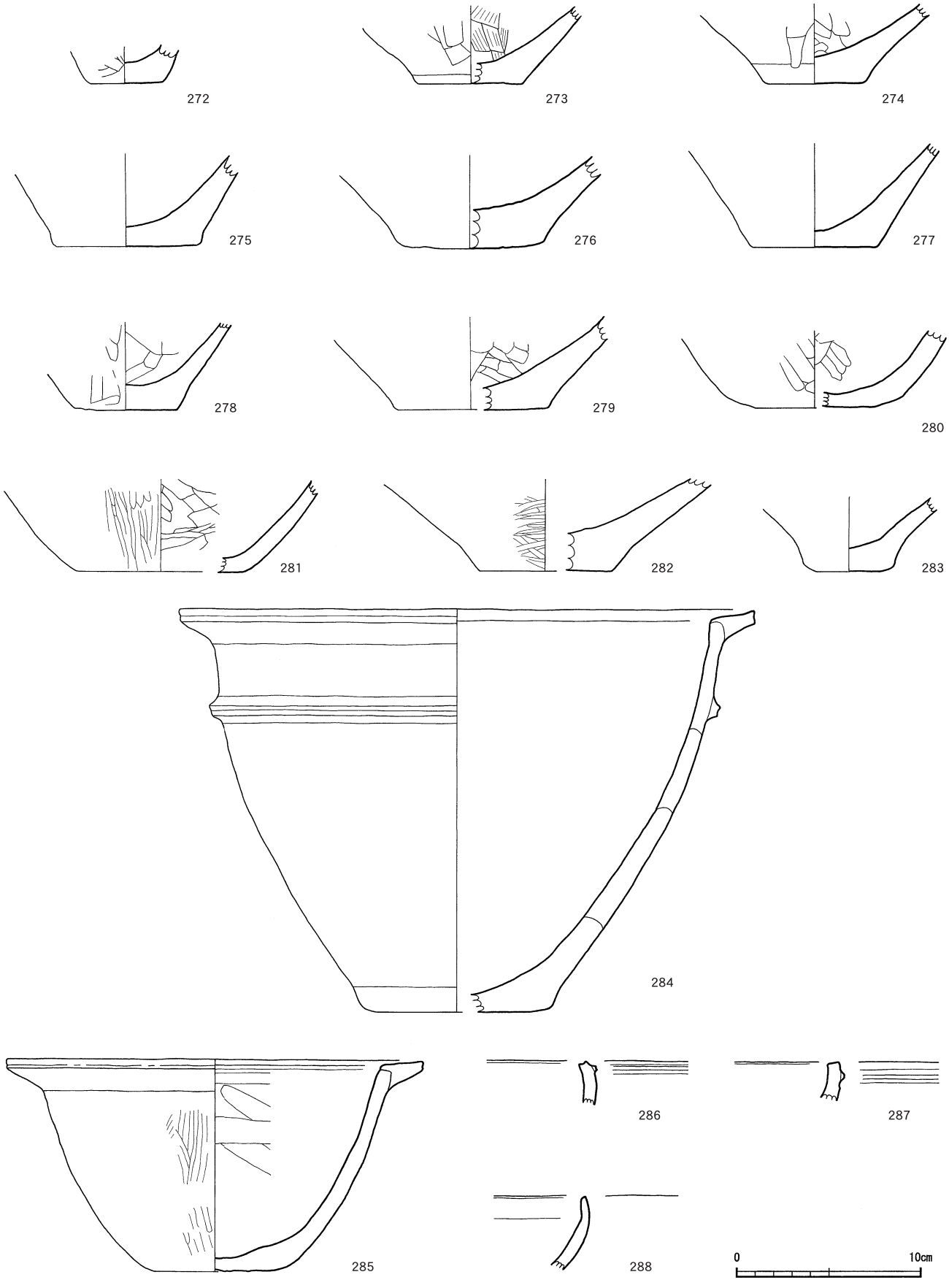
第107図 十三塚遺跡弥生時代中期土器12



第108図 十三塚遺跡弥生時代中期土器13



第109図 十三塚遺跡弥生時代中期土器14



第110図 十三塚遺跡弥生時代中期土器15

第31表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表１

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量				色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
96	112	N－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	57.0	－	－	－	明赤褐	橙	ナデ工具ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	10216他	外面にスス付着
	113	－	－	甕	口縁～胴部	51.6	－	－	－	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		○	○	○			良	－	
	114	J－15	Ⅱc	甕	口縁～胴部	36.4	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	1769他	
	115	K･L－15･16	表採	甕	口縁～胴部	－	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	116	L－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	－	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11238	
97	117	R－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	38.0	－	－	－	橙	黒褐	ヨコナデナデ	ナデ	○			○		岩片	良	13355他	
	118	H－14	表採	甕	口縁	19.0	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	119	G－13	表採	甕	口縁	25.4	－	－	－	にぶい橙	黒	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	一括	
	120	H－14	表採	甕	口縁	20.2	－	－	－	にぶい橙	明褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	121	J－16	Ⅱ	甕	口縁	23.2	－	－	－	明褐	にぶい褐	ハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	1239他	外面にスス付着
	122	G－14	－	甕	口縁	27.4	－	－	－	にぶい黄橙	黒	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	一括	
	123	G－18	Ⅱb	甕	口縁	26.8	－	－	－	明赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5641他	
	124	F－3	Ⅱb	甕	口縁～胴部	19.4	－	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12490	
	125	G－12	Ⅱc	甕	口縁	32.4	－	－	－	明赤褐	橙	ヨコナデナデ	ナデ		○		○		岩片	良	2712他	外面にスス付着
	126	F－3	Ⅱd	甕	口縁	－	－	－	－	黒	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12490	
98	127	G－3	Ⅱc	甕	口縁	34.4	－	－	－	橙	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	12164他	
	128	G－12	Ⅱc	甕	口縁	32.0	－	－	－	褐	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	2651他	
	129	N－17	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	7311他	
	130	G－13	表土	甕	口縁	24.0	－	－	－	橙	橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	131	N－16	Ⅱb	甕	口縁	24.8	－	－	－	黒褐	明赤褐	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6522	外面にスス付着
	132	G－14	－	甕	口縁	27.0	－	－	－	にぶい橙	黒	ナデ	ナデ	○	○	○				良	一括	
	133	R－16	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14810	外面にスス付着
	134	C－13	Ⅱb	甕	口縁	25.8	－	－	－	橙	暗黄褐	ミガキ	ミガキ	○	○		○			良	12677	
	135	M－14	Ⅱd	甕	口縁	19.4	－	－	－	橙	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5222	
	136	H－14	Ⅱd	甕	口縁	17.2	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ		○		○		岩片	良	5225	
	137	N－17	Ⅱb	甕	口縁	30.0	－	－	－	赤褐	明赤褐	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6790他	外面にスス付着
	138	G－18	Ⅱb	甕	口縁～胴部	27.4	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○	○	○		岩片	良	12696他	
	139	H－14	Ⅱd	甕	口縁～胴部	18.8	－	－	－	橙	黒褐	ナデ	ナデ指頭圧痕		○		○		岩片	良	5225他	外面にスス付着
	140	G－13	Ⅱb	甕	口縁～胴部	24.4	－	－	－	橙	明黄褐	ナデ	ナデ		○	○	○			良	12562	
	141	R－16	Ⅱb	甕	口縁～胴部	13.6	－	－	－	にぶい橙	にぶい赤褐	ハケメ	ナデ		○	○	○			良	14760	
99	142	R－17	Ⅱb	甕	口縁～突帯	－	－	－	－	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	13690	
	143	J－17	Ⅱ	甕	口縁～突帯	25.6	－	－	－	橙	にぶい黄橙	ミガキナデ	ナデ		○		○		岩片	良	1435	
	144	H－14	Ⅱd	甕	口縁	29.4	－	－	－	橙	明赤褐	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5225	外面にスス付着
	145	F－12	Ⅱb	甕	口縁～胴部	30.0	－	－	－	橙	橙	ヨコナデナデ	ナデ	○	○		○			良	2497他	外面にスス付着
	146	F－12 H－13	Ⅱb	甕	口縁～胴部	29.8	－	－	－	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○		○	○			良	2431他	外面にスス付着
	147	H－15	Ⅱb	甕	口縁～突帯	30.8	－	－	－	にぶい橙	にぶい褐	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	土坑外
	148	H－14	Ⅱb	甕	口縁～突帯	23.0	－	－	－	明赤褐	明褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5226他	外面にスス付着
	149	H－14	表採	甕	口縁～突帯	21.4	－	－	－	にぶい褐	にぶい橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
100	150	G－15	表採	甕	口縁～突帯	36.4	－	－	－	橙	にぶい橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	151	Q－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	30.4	－	－	－	橙	橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	13218	外面にスス付着
	152	Q･R－16	Ⅱb	甕	口縁～胴部	31.4	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		○			良	14674他	外面にスス付着
	153	G－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	24.2	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6090	外面にスス付着
	154	H－13	Ⅱb	甕	口縁～胴部	24.5	－	－	－	橙	橙	ヨコナデ	ナデ	○	○		○			良	12646他	外面にスス付着
	155	G－13･14	表採	甕	口縁～胴部	22.0	－	－	－	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	－	外面にスス付着
	156	R－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	26.5	－	－	－	暗赤褐	橙	ヨコナデナデ	ナデ	○	○				岩片	良	13547他	外面にスス付着
101	157	Q－16	Ⅱb	甕	口縁～胴部	34.0	－	－	－	明赤褐	橙	ヨコナデナデ	ナデ	○	○		○			良	14434他	外面にスス付着
	158	R－17	Ⅱb	甕	口縁～胴部	35.0	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ヨコナデハケメ	ナデハケメ		○	○	○			良	13346他	
	159	M－18	Ⅱb	甕	口縁～胴部	32.4	－	－	－	橙	橙	ヨコナデナデ	ナデ	○	○				岩片	良	7832他	外面にスス付着
	160	M－18	Ⅱb	甕	口縁～突帯	24.8	－	－	－	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○		○	○			良	8241他	外面にスス付着

第32表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表２

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量				色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
102	161	J－17	Ⅱ	甕	口縁～胴部	31.8	－	－	－	橙	明褐	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○		○			良	1411他	
	162	H－14	Ⅱd	甕	口縁～胴部	23.4	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○	○	○			良	5225	外面にスス付着
	163	H－13･14	Ⅱb	甕	口縁～胴部	25.2	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ ナデ	ナデ	○	○		○			良	12613他	外面にスス付着
	164	H－12	Ⅱb	甕	口縁～胴部	34.0	－	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11650他	外面にスス付着
	165	M－18	Ⅱb	甕	口縁～胴部	25.4	－	－	－	橙	にぶい赤褐	ヨコナデ	ナデ		○	○	○			良	7877他	外面にスス付着
	166	H－13	Ⅱb	甕	口縁～突帯	17.6	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12644他	
103	167	I－16	Ⅱ	甕	底部	－	8.4	－	－	にぶい黄褐	にぶい橙	ナデ	－		○		○		岩片	良	1641	
	168	O－17	Ⅱb	甕	底部	－	8.0	－	－	橙	橙	工具ナデ	－		○		○		岩片	良	7217	
	169	K･L－15･16	Ⅰ	甕	底部	－	7.9	－	－	灰黄褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	170	K･L－15･16	Ⅰ	甕	底部	－	8.0	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	171	R－17	Ⅰ	甕	底部	－	8.2	－	－	橙	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	172	H－17	Ⅱa	甕	底部	－	7.2	－	－	明赤褐	明赤褐	工具ナデ	－		○		○		岩片	良	7725他	
	173	P－17	Ⅱb	甕	底部	－	8.1	－	－	橙	明赤褐	ハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	7271	
	174	Q－15	Ⅱb	甕	底部	－	8.6	－	－	褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	13997	
	175	N－17	Ⅱb	甕	底部	－	7.0	－	－	橙	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	7782	
	176	N－17	Ⅱb	甕	底部	－	8.2	－	－	橙	にぶい橙	工具ナデ	－		○		○		岩片	良	8178	外面にスス付着
	177	R－17	Ⅱb	甕	底部	－	6.4	－	－	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14084	
	178	H－16	Ⅱb	甕	底部	－	8.0	－	－	橙	にぶい褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5852	
	179	H－13	Ⅱb	甕	底部	－	7.8	－	－	にぶい橙	黒褐	丁寧なナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12566	
	180	M－17	Ⅱb	甕	底部	－	5.3	－	－	明赤褐	－	ナデ	－		○		○		岩片	良	8340	
	181	G－2	Ⅱc	甕	底部	－	8.1	－	－	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11983	
	182	H－11	Ⅱb	甕	底部	－	7.2	－	－	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11491	
	183	G－14	Ⅱb	甕	底部	－	6.2	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5197	
	184	N－18	Ⅱb	甕	底部	－	7.0	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	10652	
	185	H－13	Ⅱb	甕	底部	－	5.4	－	－	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5048	
	186	Q－16	Ⅱb	甕	底部	－	7.8	－	－	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14448	
	187	R－16	－	甕	底部	－	－	－	－	にぶい橙	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14693	
	188	R－16	Ⅱb	甕	底部	－	6.0	－	－	橙	橙	工具ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	15238	
	189	I－15	Ⅱ	甕	底部	－	7.2	－	－	橙	明褐	工具ナデ	工具ナデ		○		○		岩片	良	5006他	
	190	M－18	Ⅱb	甕	底部	－	7.4	－	－	橙	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	7814	
	191	G－17	Ⅱb	甕	底部	－	－	－	－	にぶい黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6011	
	192	M－17	Ⅱb	甕	底部	－	7.4	－	－	橙	黒	ハケメ ナデ	－		○		○		岩片	良	8321	
	193	O－17	Ⅱb	甕	底部	－	7.6	－	－	橙	黒	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	9209	
104	194	G－15	Ⅱb	壺	口縁～胴部	17.4	－	－	－	にぶい赤褐	にぶい褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	5287他	
	195	F－17	Ⅱ	壺	口縁～頸部	23.0	－	－	－	黒褐	暗赤褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	5483他	
	196	G－17	Ⅱb	壺	口縁～頸部	22.4	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	6003他	
	197	O－17	Ⅱb	壺	口縁～頸部	22.0	－	－	－	橙	にぶい褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	7518	
	198	Q－17	Ⅱb	壺	口縁	－	－	－	－	黒褐	赤褐	ミガキ ヨコナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	13236	
105	199	G－13･14	表採	壺	口縁～頸部	23.8	－	－	－	明褐	褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	一括	
	200	G－13･14	表採	壺	口縁～頸部	20.2	－	－	－	橙	明赤褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ		○		○		岩片	良	－	
	201	G･F－17	Ⅰ	壺	口縁	23.4	－	－	－	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	－	

第33表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表３

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量				色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
105	202	J－15	Ⅱc	壺	口縁	11.4	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	1816	
	203	F－17	Ⅱ	壺	口縁	22.6	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5477他	
	204	Q－17	Ⅱb	壺	口縁	14.6	－	－	－	橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	10065他	
	205	G－17	Ⅱb	壺	口縁	21.6	－	－	－	にぶい褐	橙	ミガキ ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6018	
	206	O－17	Ⅱb	壺	口縁	14.0	－	－	－	赤褐	明赤褐	ミガキ ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	9901	
	207	－	表採	壺	口縁	－	－	－	－	明褐	明褐	ミガキ	－		○		○		岩片	良	－	
	208	N－17	Ⅱb	壺	口縁	19.6	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ		○		○		岩片	良	6695	
	209	L－16	Ⅱb	壺	口縁	13.0	－	－	－	にぶい褐	橙	ヨコナデ	ヨコナデ		○		○		岩片	良	3644	
	210	P－17	Ⅱb	壺	口縁	14.6	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ミガキ ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	7270	
	211	19T	Ⅱ	壺	口縁	14.6	－	－	－	橙	橙	剥落	剥落		○		○		岩片	良	500	
	212	O－18	Ⅱb	壺	口縁	13.2	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	8846	
	213	I－15	Ⅱc	壺	口縁～頸部	14.6	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	2131	
	214	O－15	Ⅱb	壺	口縁	15.0	－	－	－	褐	橙	ミガキ ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6641	
	215	R－16	Ⅱb	壺	口縁	11.4	－	－	－	明赤褐	橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14241他	
	216	G－6	表採	壺	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ヨコナデ	－	○	○		○			良	－	
	217	N－16	Ⅱb	壺	口縁	16.6	－	－	－	褐	暗褐	ヨコナデ	ヨコナデ		○		○		岩片	良	6743	
106	218	G－17	Ⅱb	壺	口縁～頸部	13.2	－	－	－	明褐	明褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6016	
	219	G－17	Ⅱb	壺	口縁	16.0	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6007	
	220	J－15他	Ⅱc	壺	口縁～頸部	22.6	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ハケメ		○		○		岩片	良	1761他	
	221	F－16	Ⅰ	壺	口縁	18.2	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	222	I－16	表採	壺	口縁	23.4	－	－	－	橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	－	
	223	H－15	表採	壺	口縁～頸部	20.4	－	－	－	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	224	28T	表採	壺	口縁	19.0	－	－	－	橙	明褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	－	外面にスス付着
	225	M－17	Ⅱb	壺	口縁	22.8	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	10952	
	226	H－14	表採	壺	口縁	14.0	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	227	J－17	Ⅱ	壺	口縁	27.6	－	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	1452	
	228	R－17	Ⅱb	壺	口縁	18.2	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	13752	
	229	O－17	Ⅱb	壺	口縁	20.6	－	－	－	赤褐	赤褐	ナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	7495	
	230	J－17	Ⅱ	壺	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ		○		○		岩片	良	1435	
	231	E－17	表採	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい褐	褐	ナデ	ナデ		○	○	○			良	—	
	232	N－17	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	褐	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	9391	外面にスス付着
107	233	G－13･14	表採	壺	肩部	－	－	－	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	234	S－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	明黄褐	明黄褐	剥落	剥落		○		○		岩片	良	14285	
	235	I－16	Ⅱ	壺	肩部	－	－	－	－	橙	にぶい橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	1492他	
	236	R－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	明褐	橙	ヨコナデ	ナデ		○		○		岩片	良	15254	
	237	R－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	14156他	
	238	S－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	橙	橙	摩滅	摩滅		○		○		岩片	良	14166	
	239	R－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	14139	
	240	I－17	表採	壺	肩部	－	－	－	－	にぶい橙	にぶい褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	241	N－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	明赤褐	黒褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	7098	
	242	R－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	明赤褐	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	14309	
	243	N－17	表採	壺	肩部	－	－	－	－	にぶい赤褐	黒褐	ナデ	ナデ		○	○	○			良	－	
	244	Q－16	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	橙	にぶい橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	14419他	
	245	M－18	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	にぶい赤褐	黒褐	ミガキ	ナデ ハケメ		○		○		岩片	良	1913他	
	246	G－17	Ⅱb	壺	肩部	－	－	－	－	橙	橙	摩滅	ナデ		○		○		岩片	良	6049他	

第34表　十三塚遺跡弥生時代中期土器観察表４

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量				色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
108	247	O－17	Ⅱb	壺	肩～胴部	－	－	－	－	赤褐	明赤褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	7427	
	248	R－17	－	壺	胴部突帯	－	－	－	－	橙	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	249	G－15	Ⅱb	壺	肩～胴部	－	－	40.0	－	にぶい黄橙	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	5289	
	250	M－16	Ⅱb	壺	胴部突帯	－	－	－	－	明赤褐	褐灰	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	6397	
	251	Q－17	Ⅱb	壺	肩～胴部	－	－	－	－	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ		○	○	○			良	13541他	
	252	O－17	Ⅱb	壺	胴部	－	－	25.4	－	橙	灰褐	ナデ	ナデ		○	○	○			良	10386	外面にスス付着
	253	H－18	Ⅱb	壺	胴部突帯	－	－	－	－	明赤褐	黒褐	ミガキ	ハケメ		○		○		岩片	良	1069他	
	254	G－17	Ⅱb	壺	胴部突帯	－	－	39.6	－	明赤褐	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	6123他	外面にスス付着
109	255	R－17	Ⅱb	壺	底部	－	7.7	－	－	明赤褐	にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ		○		○		岩片	良	13855	
	256	O－17	Ⅱb	壺	胴～底部	－	6.0	－	－	明赤褐	橙	ナデ	ナデ	○	○		○			良	7456他	外面にスス付着
	257	Q－17	Ⅱb	壺	底部	－	5.6	－	－	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	15436他	
	258	H－14	Ⅱb	壺	底部	－	5.6	－	－	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5225他	
	259	J－17	Ⅱ	壺	底部	－	7.0	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	1463	
	260	M－18	Ⅱb	壺	底部	－	8.0	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	8308他	外面にスス付着
	261	Q－17	Ⅱb	壺	底部	－	9.0	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	13215	
	262	I－18	Ⅱ	壺	底部	－	6.8	－	－	赤褐	橙	ナデ	ミガキ		○	○	○			良	1077	
	263	O－18	Ⅱb	壺	底部	－	8.2	－	－	明褐	褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	10590	
	264	H－16	Ⅱ	壺	底部	－	9.0	－	－	橙	橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	1550	
	265	G－14	表採	壺	底部	－	8.6	－	－	橙	黒	ナデ	摩滅		○		○		岩片	良	－	
	266	N－17	Ⅱb	壺	底部	－	4.3	－	－	褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	8799	
	267	M－17	Ⅱb	壺	底部	－	8.0	－	－	明赤褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	11174他	
	268	I－14	表採	壺	底部	－	4.0	－	－	にぶい黄橙	黒	摩滅	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	269	H－13	Ⅱb	壺	底部	－	6.7	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	12598	
	270	Q－16	Ⅱb	壺	底部	－	7.2	－	－	赤褐	赤褐	ナデ	工具ナデ		○		○		岩片	良	14676他	
	271	N－17	Ⅱb	壺	底部	－	7.0	－	－	明赤褐	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	8579	
110	272	N－18	Ⅱb	壺	底部	－	3.6	－	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	8796	
	273	N－17	Ⅱb	壺	底部	－	5.6	－	－	明赤褐	黒褐	ナデ	ハケメ		○		○		岩片	良	9316他	
	274	O－17	Ⅱb	壺	底部	－	5.4	－	－	明赤褐	明赤褐	ハケメ	ナデ		○		○		岩片	良	8185	
	275	G－12	Ⅱc	壺	底部	－	7.8	－	－	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ						岩片	良	2532他	
	276	G－14	－	壺	底部	－	8.0	－	－	赤褐	にぶい黄褐	摩滅	摩滅		○		○		岩片	良	一括	
	277	L－17	Ⅱb	壺	底部	－	6.8	－	－	橙	灰黄褐	ナデ	ナデ		○	○	○			良	11295他	
	278	O－17	Ⅱb	壺	底部	－	5.6	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	7437	
	279	K－16	Ⅱb	壺	底部	－	8.0	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	3181	
	280	I－16	Ⅱ	壺	底部	－	6.6	－	－	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	5004	
	281	H－16	Ⅱ	壺	底部	－	9.0	－	－	明赤褐	褐	ミガキ	ミガキ	○	○		○			良	1583	外面にスス付着
	282	J－17	Ⅱ	壺	底部	－	7.2	－	－	にぶい褐	にぶい褐	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	1390	
	283	I－16	表採	壺	底部	－	4.8	－	－	明赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	284	M－18	Ⅱb	鉢	完形	31.0	10.0	－	21.7	橙	橙	ナデ	ナデ		○	○			岩片	良	10340他	
	285	I－16	Ⅱb	鉢	完形	22.4	－	－	11.5	橙	橙	ミガキナデ	ナデ		○		○		岩片	良	1515	
	286	I－14	Ⅱc	鉢	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○					良	2138	
	287	I－16	表採	鉢	口縁	－	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		○			良	－	
	288	N－17	Ⅱb	鉢	口縁	－	－	－	－	赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	9316	

土器（その他）（第111・112図：289～313）

289～295は山ノ口式土器の甕形土器の破片と考えられるが，典型的な甕の特徴と異なる土器である。290～292は口縁部の外面がユビオサエにより波状を呈している。289・293・294は口縁部が嘴状に突出する。295は内外面とも突出しているが，外面の突出部は削れている。

296は壺の口縁部片で口縁部外面に突帯がつき，口唇部に沈線が施されている。内面には串のようなものを突き刺した穴が縦位に2列つけられている。

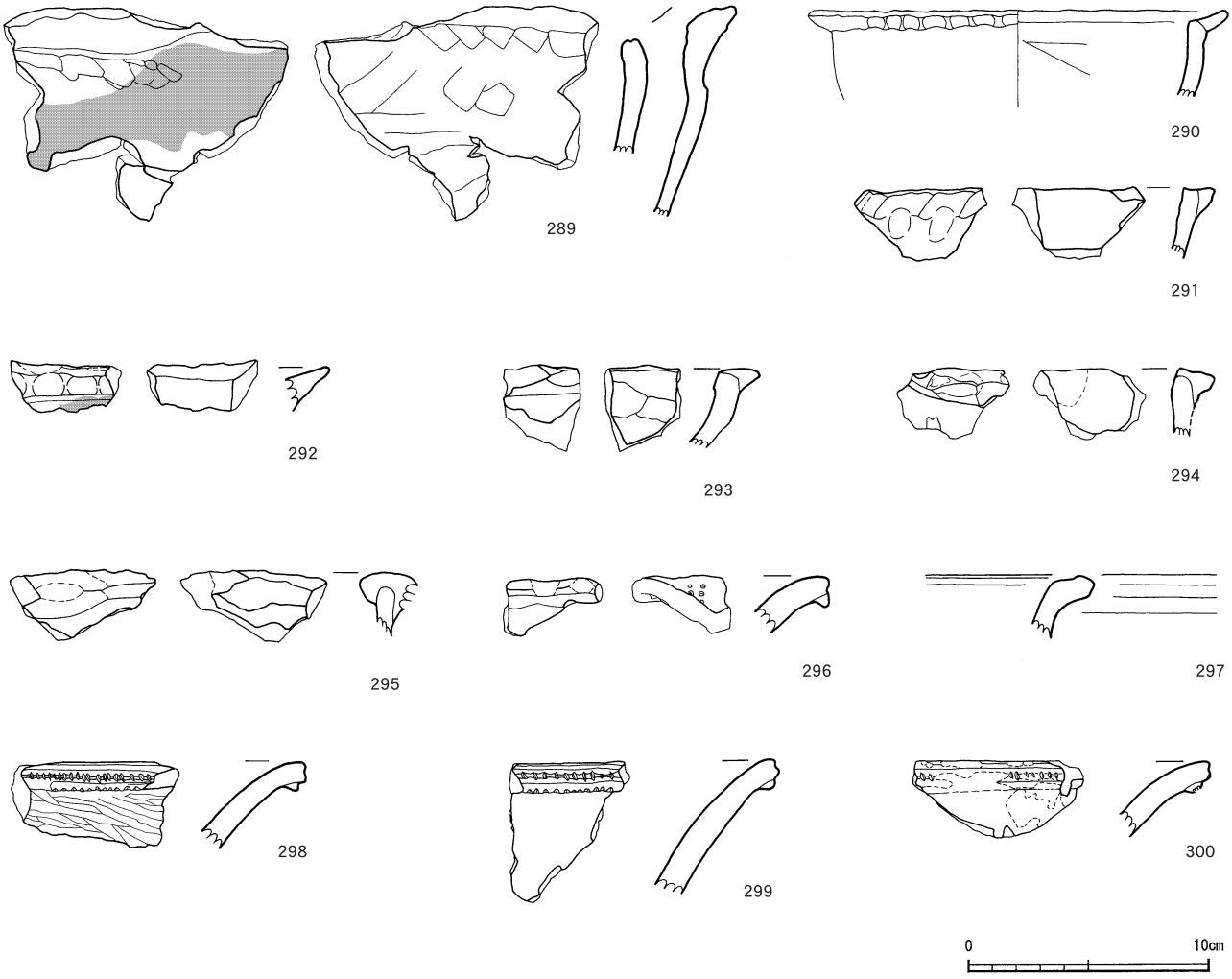
297は壺の口縁部片で横方向に伸びる口縁部から屈曲して頸部へとつながる。口縁部内面は途中で段を作っている。298～300は壺の口縁部片で，口唇部を「M」字状に凹ませ，外面に突帯を貼り付けている。「M」字状の突出部の下側と突帯に刻目を施している。301は壺の外反する口縁部片で，口唇部は「M」字状に凹ませており，内面端部に断面「M」字状の突帯がつく。302～304は壺の胴部片で外面に櫛描文が施されている。305のみが波状の文様で，他は鋸歯状である。

306・309は壺の口縁部と肩部の破片である。口縁部は外に開き，肩部は断面三角形の突帯が2条つく。胎土は白っぽく，小石が多く入り，宮崎の土器の胎土と同じ特徴を持つ。

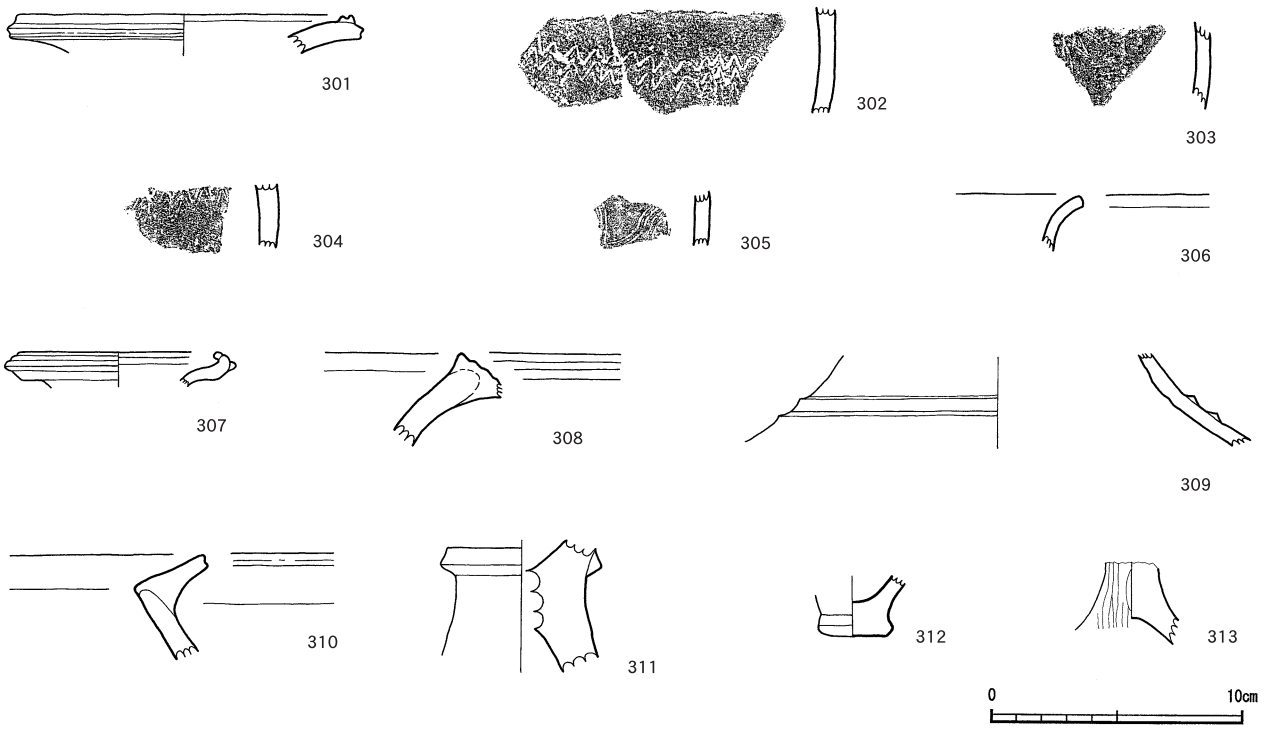
307・308は壺の口縁部片で，口縁部外面に凹線文と考えられる文様が施されている。307は口縁部が一度外に開いた後内側に折れており，その外面に凹線文が施されている。

310は甕の口縁部片である。口縁部から胴部へは「く」の字状に強く屈曲し胴部は外に開く。胎土は白く，黒髪式系統の土器と考えられる。

311は底部片で外面には断面三角形の突帯が1条つき，中空の脚台がつく。器種は脚台付鉢と考えられる。312は底部片で鉢などの小型の器種と考えられる。底部端はやや盛り上がり，胴部は外に開く。313は上部が残っていないが，脚台付鉢もしくは高坏などの器種の底部片と考えられる。胴部と脚台の境はかなり細くなっており，脚台は外に開く。



第111図 十三塚遺跡弥生土器（その他） 1



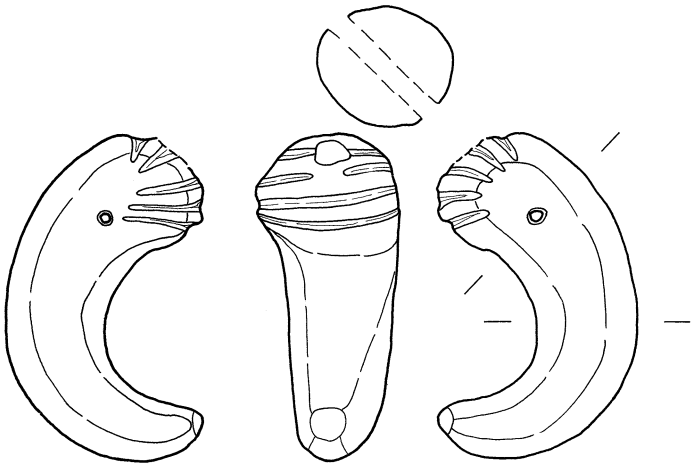
第112図 十三塚遺跡弥生土器（その他） 2

第35表　十三塚遺跡弥生時代土器（その他）観察表

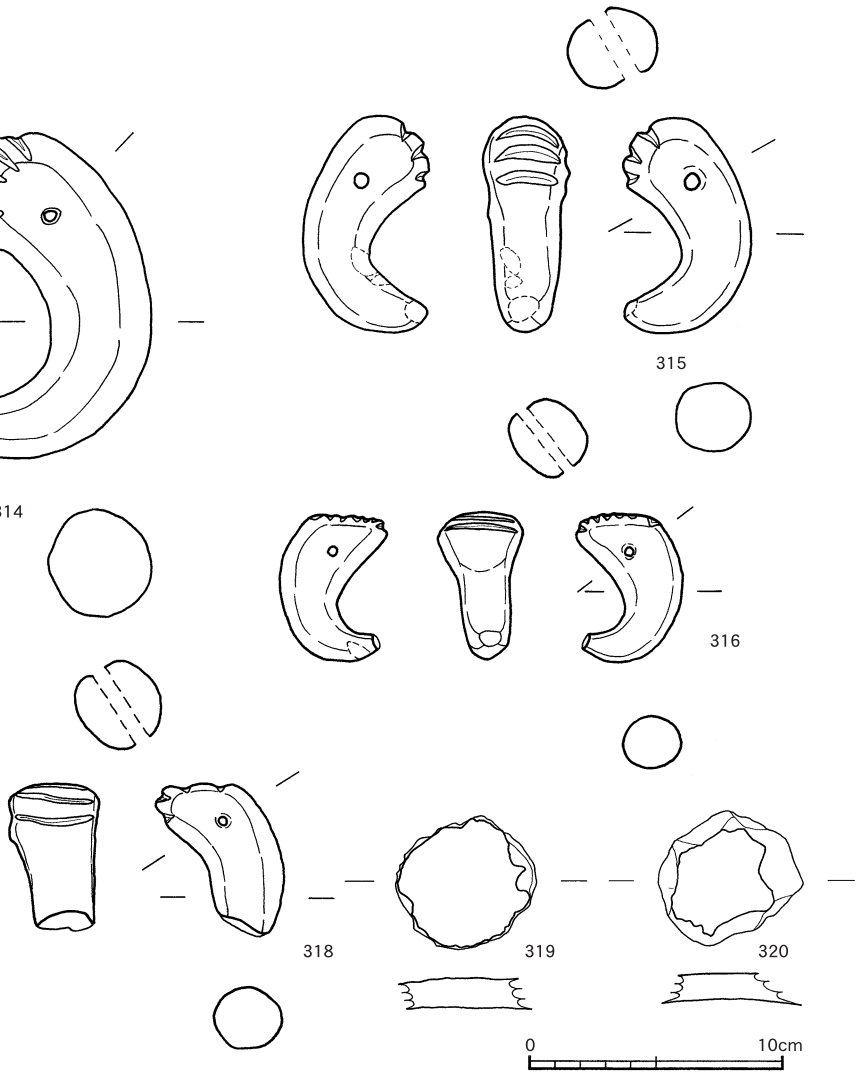
挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量 口縁部径(cm)	法量 底径(cm)	法量 胴部最大径(cm)	法量 器高(cm)	色調 外面	色調 内面	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 輝石	胎土 その他	焼成	取上番号	備考
111	289	I－15	Ⅱc	甕	口縁	－	－	－	－	黒褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	1845他	外面にスス付着
	290	G－17	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○			良	6038	
	291	I－14	Ⅱc	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄褐	明赤褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	1988	
	292	O－17	Ⅱb	甕	口縁	－	－	－	－	褐	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	8519	外面にスス付着
	293	I－15	表採	鉢	口縁	－	－	－	－	黒褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○	○				良	－	
	294	Q－15・16	Ⅰ	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい褐	黒褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	295	O－17	表採	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい橙	明褐	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	－	
	296	G－ 5	Ⅱc	不明	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○				良	12863	
	297	R－16	Ⅱb	壺	口縁	－	－	－	－	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	14976	外面にスス付着
	298	M－17	Ⅱc	壺	口縁	－	－	－	－	灰黄褐	黒褐	ミガキ	ナデ	○			○		岩片	良	10626	
	299	I－16	表	壺	口縁	－	－	－	－	にぶい褐	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	○	○		○			良	－	
	300	O－18	Ⅰ	壺	口縁	－	－	－	－	にぶい褐	にぶい橙	ミガキ	ナデ	○	○		○			良	－	
112	301	G－14	—	壺	口縁	13.2	－	－	－	にぶい橙	橙	ナデ	ミガキ	○	○		○			良	－	
	302	N－18	Ⅰ・Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	褐	褐	丁寧なナデ	ナデ	○			○		岩片	良	8595	外面にスス付着
	303	M－18	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	褐	褐	ナデ	ナデ	○			○		岩片	良	10810	外面にスス付着
	304	O－17	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○		○	○			良	9623	櫛描波状文外面にスス付着
	305	O－16	Ⅰ	甕	胴部	－	－	－	－	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	○		○	○			良	－	
	306	J－17	Ⅱ	壺	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	1354	
	307	O－16	Ⅰ	壺	口縁	7.8	－	－	－	褐	褐	丁寧なナデ	丁寧なナデ		○	○	○			良	－	
	308	H－ 6	Ⅱd	壺	口縁	－	－	－	－	橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	11712	
	309	L－16	Ⅱ	壺	肩部	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	3489他	
	310	I－17	Ⅱ	甕	口縁	－	－	－	－	にぶい黄橙	浅黄	ナデ	ナデ	○			○			良	1448	
	311	O－17	Ⅱb	脚台付鉢	底部	－	－	－	－	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○			○		岩片	良	10256	
	312	Q－16	Ⅱb	甕	底部	－	2.6	－	－	灰褐	橙	ナデ	ナデ		○		○		岩片	良	14418	
	313	O－15	Ⅱb	高坏	脚部	－	－	－	－	にぶい褐	にぶい橙	ミガキ	ナデ		○		○		岩片	良	6344	

土製品（第113図：314～318，　第114図：319・320）

本遺跡出土の土製品には，土製勾玉と円盤状土製品がある。勾玉の総数は5点，円盤状土製品は2点である。314はやや大型の勾玉で，丁字頭を持つ。頸部はやや丸みを帯び5条の沈線を認める。両面から穿孔されている。胎土にはやや砂粒を含み，焼成は良好である。315はやや小型の勾玉で，丁字頭を持つ。やや丸みを帯び，3条の沈線を認め，片面からの穿孔である。316は小型の勾玉で，丁字頭を持ち，頸部は水平で，6条の沈線を認める。片面から穿孔されている。317は大半が欠損している。3条の沈線を認めるが，総数は判断できない。318は丁字頭を持ち，4条の沈線を認めるが，鮮明さに欠ける。頸部は水平で尾部を欠損しており，両面から穿孔されている。319・320は円盤状土製品である。調整は両方とも内・外面ともにナデが施されている。胎土には雲母が多く含まれる。



第113図 十三塚遺跡土製勾玉



第114図 十三塚遺跡円盤状土製品

第36表　十三塚遺跡土製勾玉計測表

挿図番号	掲載番号	出土位置	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	特徴	取上番号
113	314	M-17	勾玉	4.3	2.3	1.9	15.7	丁字頭・完形	7662
	315	P-17	勾玉	2.8	1.5	1.1	3.73	丁字頭・完形	9855
	316	N-17	勾玉	1.9	1.2	1.1	1.81	丁字頭・完形	7775
	317	M-17	勾玉	2.3	1.7	1.2	4.51	丁字頭	7676
	318	M-17	勾玉	1.9	1.35	1.2	2.7	丁字頭	11407

第37表　十三塚遺跡円盤状土製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	器部				色調		器面調整		胎土						焼成	備考
			部位	法量（cm）			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他		
				口径	底径	器高												
114	319	円盤	－	－	－	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○			良	
	320	円盤	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○		○			良	

ウ　石器（第115～125図：321～434）

十三塚遺跡の石器は主としてⅡｂ～Ⅱｄ層から出土しており，縄文時代後・晩期や弥生時代中期の所産と考えられる。しかしながら層序による明確な時期判別が困難なことから，本報告では弥生時代の石器の頁で取り扱うことにする。よってこれらの中には縄文時代後・晩期の石器が含まれている可能性がある。石器の器種としては磨製石鏃・打製石鏃・スクレイパー・石錐・打製石斧・磨石・石皿・砥石等の石器が出土している。なお，十三塚遺跡の石材は特徴から以下のように分類した。

黒曜石（ＯＢ）

1類　黒色を呈し，やや透明感があり不純物を多く含むもの。三船の原産地資料に類似する。

2類　黒色を呈し，透明感がなく不純物をあまり含まないもの。上牛鼻の原産地資料に類似する。

3類　飴色から黒色を呈し，不純物をあまり含まない良質なもの。えびの市の桑の木津留，大口市の上青木の原産地資料に類似する。

4類　青灰色を呈し，不純物の少ないもの。淀姫等の西北九州の原産地資料に類似する。

5類　黒色を呈し，風化が著しいもの。

安山岩（ＡＮ）

1類　黒灰色から青灰色を呈し，ハリ質が強く斜長石がほとんど含まれないもの。

2類　黒灰色から灰色を呈し，比較的ハリ質が弱く斜長石がほとんど含まれないもの。

3類　黒灰色を呈し，やや光沢があるもの。

4類　輝石を多く含み，斑晶組織を有するもの。

砂岩（ＳＡ）

灰色を呈し，粒子の粗いもの。

頁岩（ＳＨ）

1類　黒色から灰色を呈し，粒子が細かく節理が発達するもの。

2類　黒灰色を呈し，粒子が細かく節理が余り発達しないもの。

3類　茶色系を呈し，粒子が粗いもの。

4類　白色を呈し，粒子が粗く珪質分が含まれるもの。

玉髄（ＣＣ）

1類　白色を呈し，やや珪質なもの。

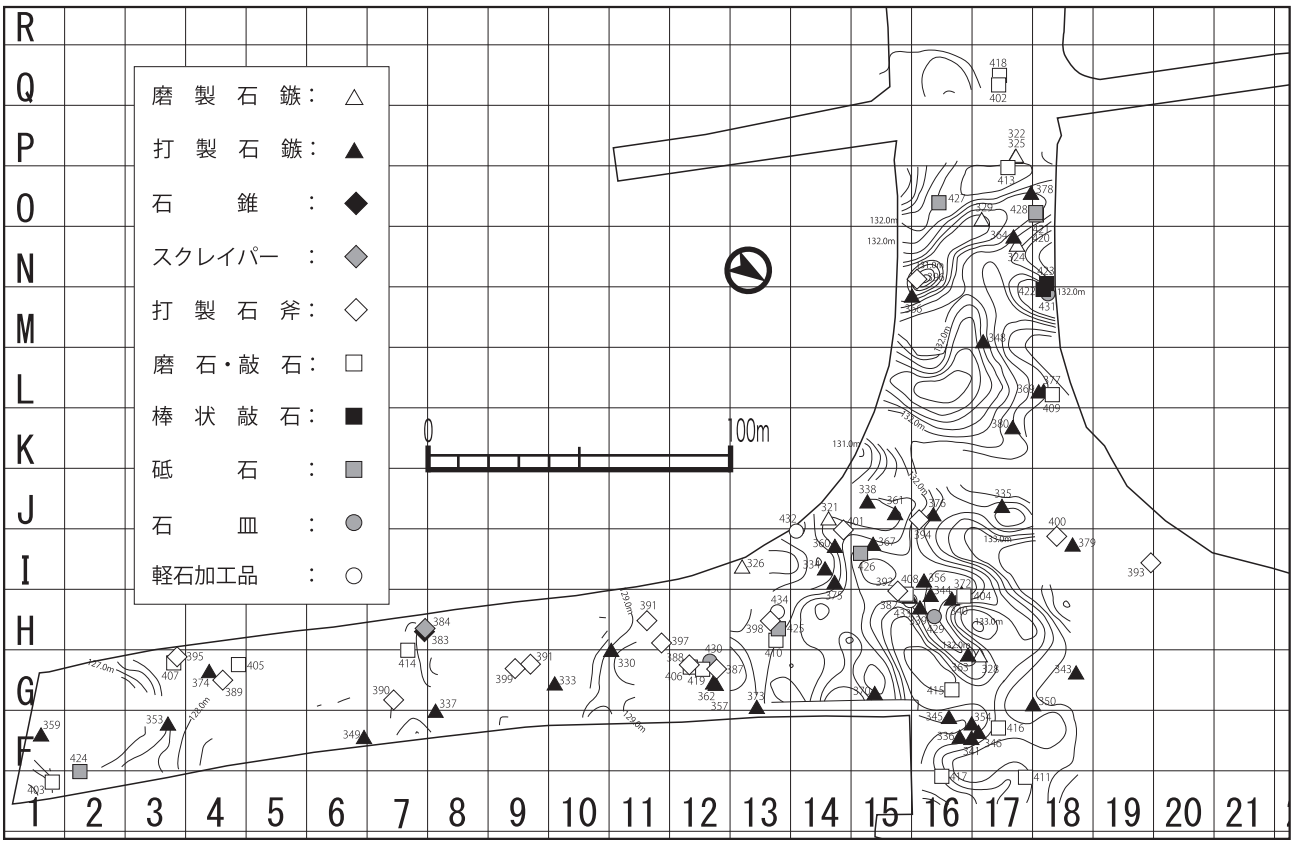
2類　赤色を呈し，やや珪質なもの。

チャート（ＣＨ）

1類　灰色を呈し，やや透明感があり節理が発達するもの。

2類　黒色を呈し，透明感がなくやや節理が発達するもの。

3類　灰白色を呈し，やや透明感があり節理が発達するもの。



第115図 十三塚遺跡石器出土状況図

4類　黒色を呈し，やや透明感があり節理が発達するもの。

ホルンフェルス（ＨＦ）

1類　灰色からベージュ色を呈し，やや節理が発達するもの。粒子が粗い頁岩質のホルンフェルスである。

2類　灰色を呈し，やや節理が発達するもの。安山岩質のホルンフェルスである。

3類　黒色を呈し，粒子が細かいもの。節理は余り発達しない。

4類　灰色を呈し，粒子が細かく節理が発達するもの。

水晶（ＣＲ）

1類　透明感がなく，節理が発達しないもの。

2類　やや透明感があり，節理が発達するもの。

3類　無色透明なもの。

4類　水晶の原石。

粘板岩（ＣＬ）

緑色系を基調とし，粒子が細かいもの。

磨製石鏃（第116図：321～329）

321～325は磨製石鏃で粘板岩を素材とするものである。Ｏ・Ｐ－17区とＧ－17区にほとんど集中して出土しており，326～329は未製品である。

打製石鏃（第117～119図：330～382）

330～382は打製石鏃で，総数59点中53点図化した。打製石鏃は全体形の形状と基部の作りから5類に分類している。

330～337は全体形が正三角形に近い形状を呈する平基式の石鏃である。330～334は安山岩を素材とするものである。330・331は比較的小型の製品である。330は側縁に細かな調整を施しており，器体の中央に素材面を残している。331は330に類似するが，押圧剥離は器体の中央部まで及んでいる。332は側縁が外湾している。333は先端部の近くに浅い抉りが施されている。334は側縁に突起が作られており，右側基部近くに浅い抉りが見られる。335・336はチャートを素材とするもので，335は側縁に突起が作られている。336は側縁に細かな調整が施されており，裏面の中央に素材面を残している。337は全体形が丸みを帯びた正三角形に近い形状を呈しており，水晶を素材とするものである。大きめの押圧剥離が目立ち，裏面の中央に素材面を残している。

338～352は全体形が二等辺三角形に近い形状を呈する平基式の石鏃である。338～341は頁岩を素材とするものである。338・339・341は側縁が突起状を呈しているもので，338は全体的に押圧剥離が施されており，339・341は器体の中央に素材面を残している。340は側縁に浅い抉りが施されており，基部に細かな調整が見られる。342～344・346～348は側縁に突起を作るもので，チャートを素材とするものである。342は裏面の中央に素材面を残し，側縁に細かな調整が見られる。343は基部の近くに突起を作っており，側縁に細かな調整が見られる。344と347は突起状を呈する側縁に浅い抉りを施している。346は側縁に細かな調整が見られ，基部に僅かな抉りが見られる。348は側縁が僅かに突起状を呈し，側縁に浅い抉りが見られる。345・349・350は安山岩を素材とするもので，345・349は側縁がわずかに突起状を呈するものである。345は側縁に細かな調整が見られ，基部の作りに346との共通点が見られる。350は側縁が先端部から外湾しており，大きめの押圧剥離が目立つ。351・352は黒曜石を素材とするもので，突起が作られた側縁に浅い抉りが見られる。351は大きめの押圧剥離が目立ち，基部の裏面に細かな調整が見られる。352は器体の中央に素材面を残している。

353～359は全体形が正三角形に近い形状を呈する石鏃に浅い抉りを施すものである。353～356は安山岩を素材とするもので，353～355は基部に三角形状の抉りを施し，脚部を丸く作出するものである。353・354は器体に素材面が残る。356は側縁に浅い抉りが見られる。357はチャートを素材とするもので，側縁に浅い抉りが見られる。358・359は黒曜石を素材とするもので，358は側縁に細かな調整が見られる。359は裏面に素材面が残る。

360～374は基部に深い抉りを施す石鏃である。360～367は脚部を丸く作出したもので，360・361・364は基部に三角形状の抉りを施すものである。360は玉髄を素材とし，361は珪質に富んだ頁岩を素材としている。360は側縁に細かな調整を施している。364はホルンフェルスを素材とするもので，器体の中央に素材面を残し側縁に細かな調整が見られる。362は玉髄を素材とするもので，押圧剥離を施す打製石鏃だが，全体的に摩滅している。363は水晶を素材とするものである。365～367は黒曜石を素材とするもので，365・367は側縁に細かな調整が見られる。368～374は全体形が二等辺三角形に近い形状を呈するものである。368～370・372・373は基部に円形の抉りを施すもので，368～370は安山岩を素材とするものである。368は全体的に研磨を施した後に側縁に調整を施しており，369・370は器体に素材面が残る。372は黒曜石を素材とし，側縁に浅い抉りを施している。373は頁岩を素材とし，薄い素材の周縁に加工を施している。371・374は脚部を丸く作出したものである。371はホルンフェルスを素材としたもので，4号住居付近で出土している。374は薄めの黒曜石を素材としたもので，側縁に浅い抉りが見られる。

375～382は脚部を三角形状に作出した基部に深い抉りを施す石鏃である。375～377は黒曜石を素材とするものである。375は全体形が正三角形に近い形状を呈しており，比較的小型な製品である。全体的に細かい押圧剥離

がなされている。376は側縁に突起を作っており，裏面の中央に素材面を残している。377は全体形が二等辺三角形に近い形状を呈している。376と同じ小型の製品で，側縁に細かな調整が見られる。378は安山岩を素材とするもので，外湾した側縁に細かな調整が施されている。379～382はチャートを素材とするもので，379・380・382は側縁が突起状を呈している。381は全体形が二等辺三角形に近い形状を呈するものである。

スクレイパー（第119図：383）

383は削器類のスクレイパーで安山岩を素材とするものである。薄素材の縁辺に刃部加工を施している。

石錐（第119図：384）

384は石錐で安山岩を素材とするものである。厚みのある素材に押圧剥離を施しており，錐部には欠損が見られる。

打製石斧（第121・122図：385～401）

385～401は打製石斧で385～399は頁岩質のホルンフェルスを素材とするものである。385～389は石斧の基部から胴部の部分で，側縁に浅い抉りが見られる。390は刃部で形状から389と同一個体の可能性がある。391～394は石斧の器体の幅が基部から刃部にかけて広がるもので，392・393は器体に自然面が残る。395は石斧の基部から刃部に向けて幅が広がり，間に段を持つものである。396～399は側縁に深い抉りを施すもので397～399は風化の著しい石材を使用している。400は石斧の刃部の部分で黒色を呈するホルンフェルスを素材としている。401は石斧の胴部の部分で安山岩質のホルンフェルスを素材としている。向かって幅が広くなる形状を呈する。どの石斧も扁平な素材の周縁に剥離加工を施すのみで，器体に素材面が多く残っている。形態に違いはあるが，製作技術には共通点が見られる。

磨石・敲石（第123・124図：402～421）

402は1類に分類した。円礫で敲打痕はみられず，裏面に磨面がある。

403～413は2類に分類した。403は花崗岩製の円礫で表裏に平坦な磨面があり，上下左右の側面に全体的に敲打痕がみられる。404は裏面に磨面があり，裏面と上下左右の側面に敲打痕がみられる。405は表裏に平坦な磨面があり，上下左右の側面に敲打痕がみられる。406は表裏に磨面があり，下・左右の側面に敲打痕がみられる。407・408・409は裏面に磨面がある。407は円礫で上下の側面に，407・408は楕円礫で下面に敲打痕がみられる。410は小型の円礫で裏面に磨面があり，下・右の側面に敲打痕がみられる。411は裏面に磨面があり，左側面に敲打痕がみられる。412は裏面に磨面があり，上下左右の側面に敲打痕がみられる。413は表裏に磨面があり，表面に敲打痕がみられる。上面は火熱により一部剥離している。

414～417は3類に分類した。414は表裏と下・左の側面に敲打痕がみられる。415は表面と左下・右の側面に敲打痕がみられる。416・417は磨面がなく，下面に敲打痕がみられる。

418は4類に分類した。扁平な楕円礫で磨面はなく，表裏に敲打痕がみられる。

419～421は5類に分類した。419は不定形な楕円礫で下・左側面に敲打つぶれが顕著にみられる。420は平面が逆台形で断面が六角形の礫で表裏に敲打痕がみられる。421は不定形な楕円礫で左側面に敲打痕がみられる。

棒状敲石（第125図：422・423）

422・423ともに細長い棒状の石で，422は下面の端部に敲打痕がみられる。423は上下の端部に剥離が，上面端部に敲打痕がみられる。

砥石（第125図：424～428）

424は正面と両側面の途中までが残る砥石の破片で，使い込まれており，上方が細くなっている。425は細長い棒状の砥石で一部欠損している。四面に磨面があり，角は磨られて面取りされたような形状である。426は四面に磨面があり，使い込まれたため中央が細くなっている。表面と左側面の角は敲打で潰れている。427は破片で表面と両側面の途中までが残る。いずれも磨面があり，角は面取りされている。表面上端には擦痕が残る。428は破片で断面が不定形である。表面には磨面が2面に分かれてあり，稜をなしている。稜の上方に敲打痕があり，左側面にも敲打痕のようなものがあるが明瞭でない。

石皿（第125図：429～431）

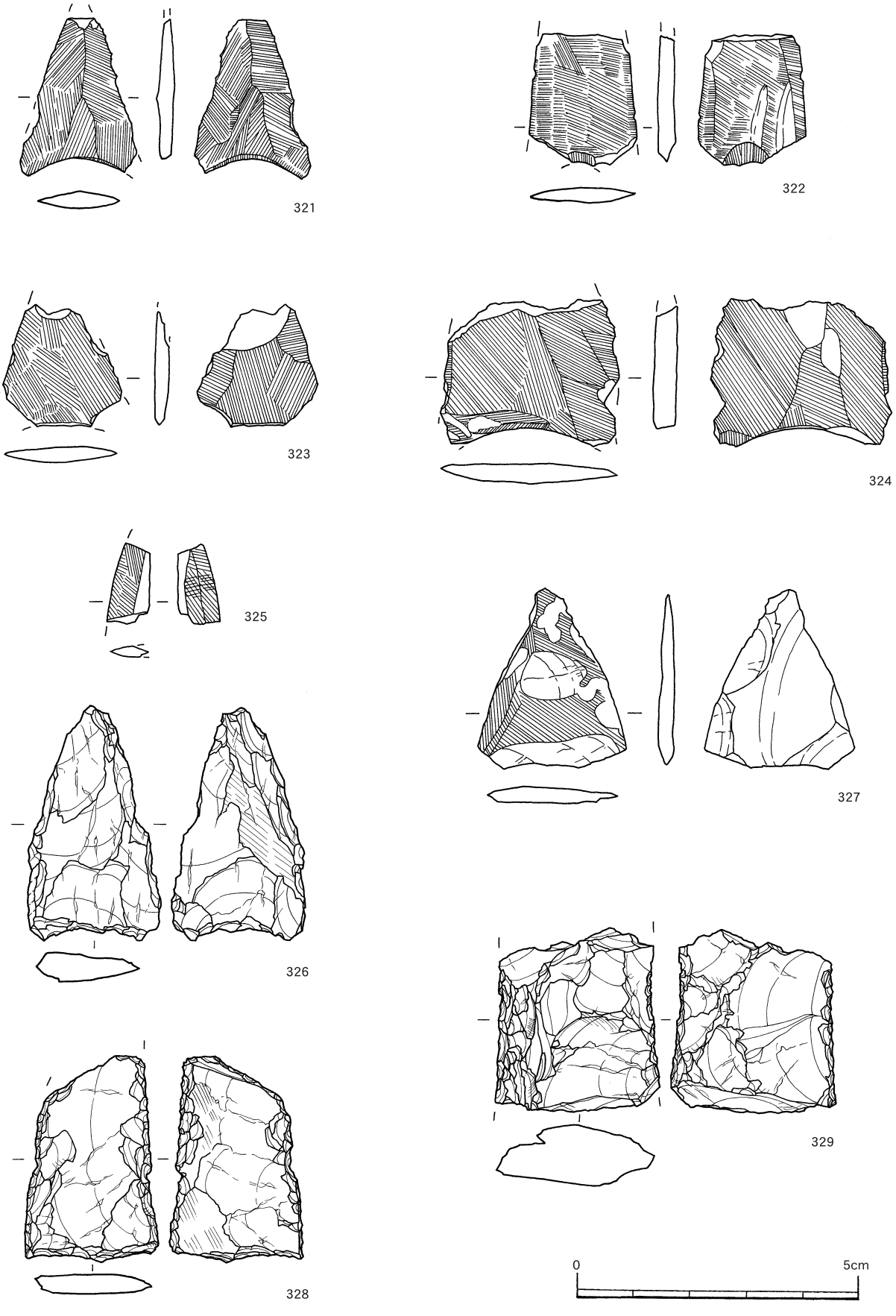
429は表裏に磨面があり，裏面の縁辺には敲打痕がみられる。430は石皿の破片で表面に顕著な磨面があり，表面の縁辺には敲打痕がみられる。429・431は扁平な石材で同一個体の可能性がある。

軽石製品（第125図：432～434）

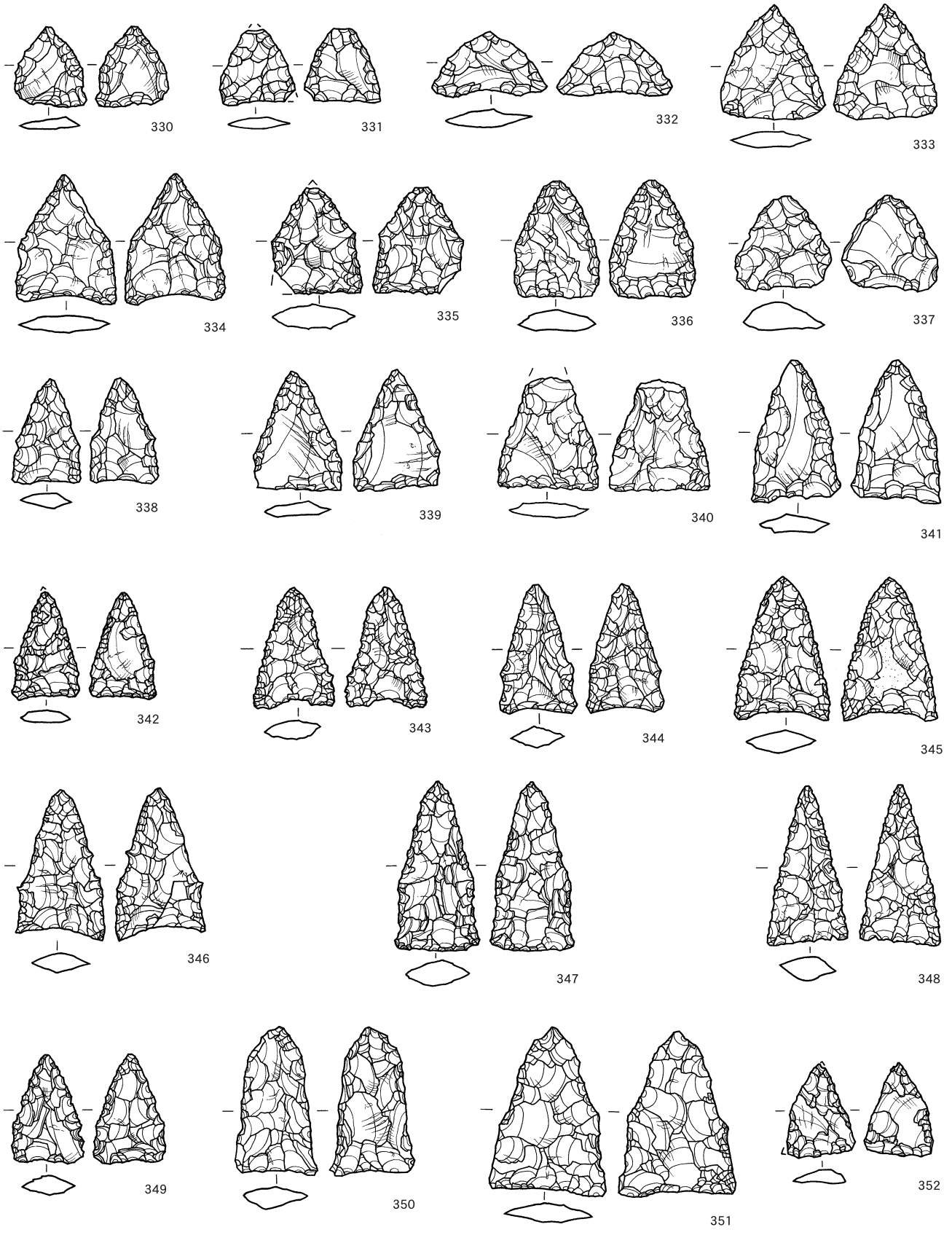
432～434は人為的に加工された軽石で，いずれも中央に縦方向の窪みをもつ。434は上面も加工され稜をもっている。

水晶（図版47）

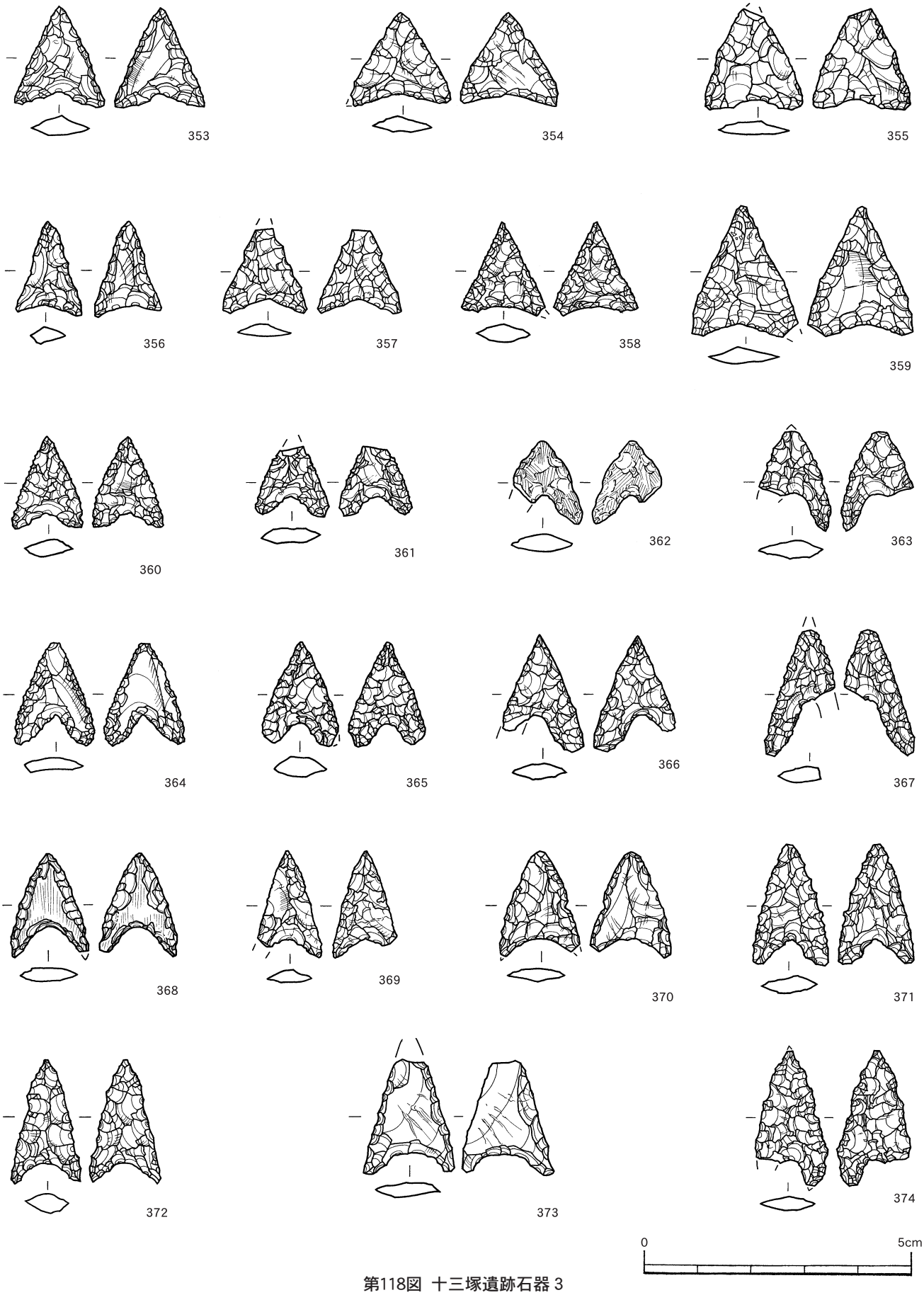
石材分類で水晶は1～4類に分類したが，ここでは写真掲載を行った4類の原石について述べたい。十三塚遺跡では4類の水晶が約30点出土している。どの水晶にも敲打による痕跡は見られないが，水晶の中にススで汚れたものや，赤変したものが見られることから何らかの形で使用された可能性も考えられる。



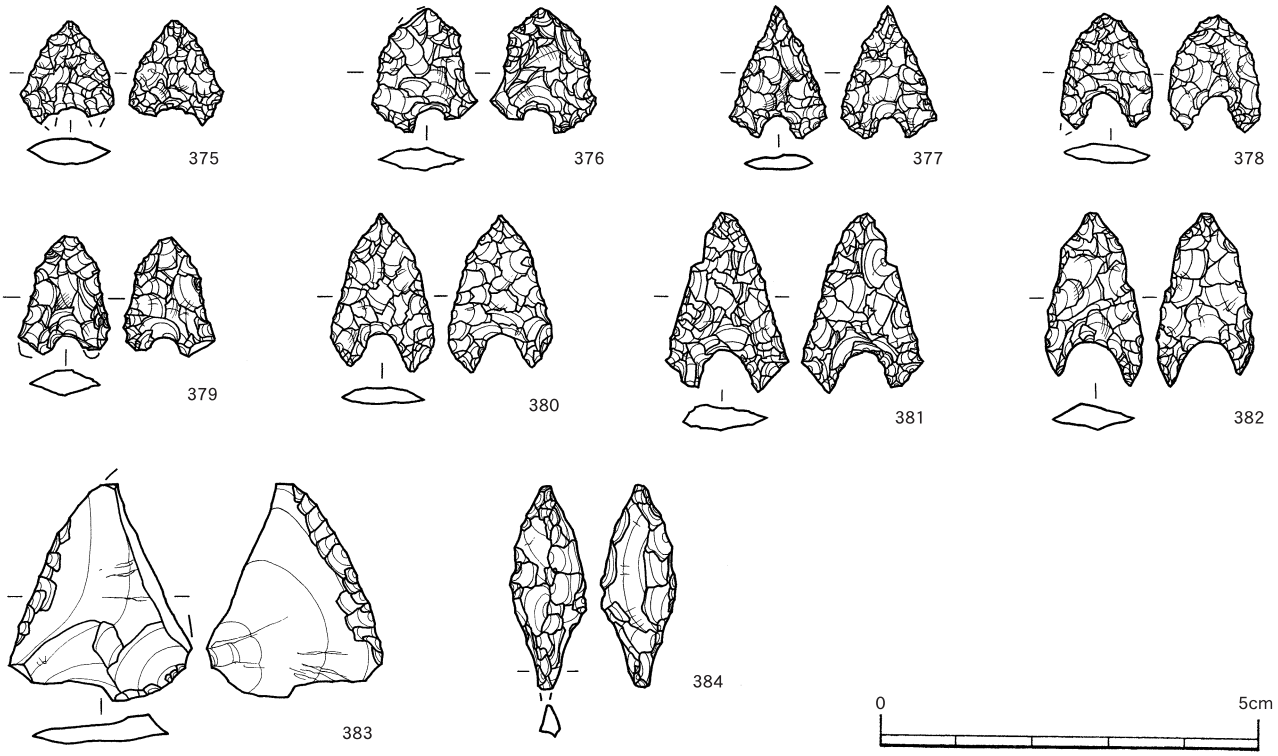
第116図 十三塚遺跡石器 1



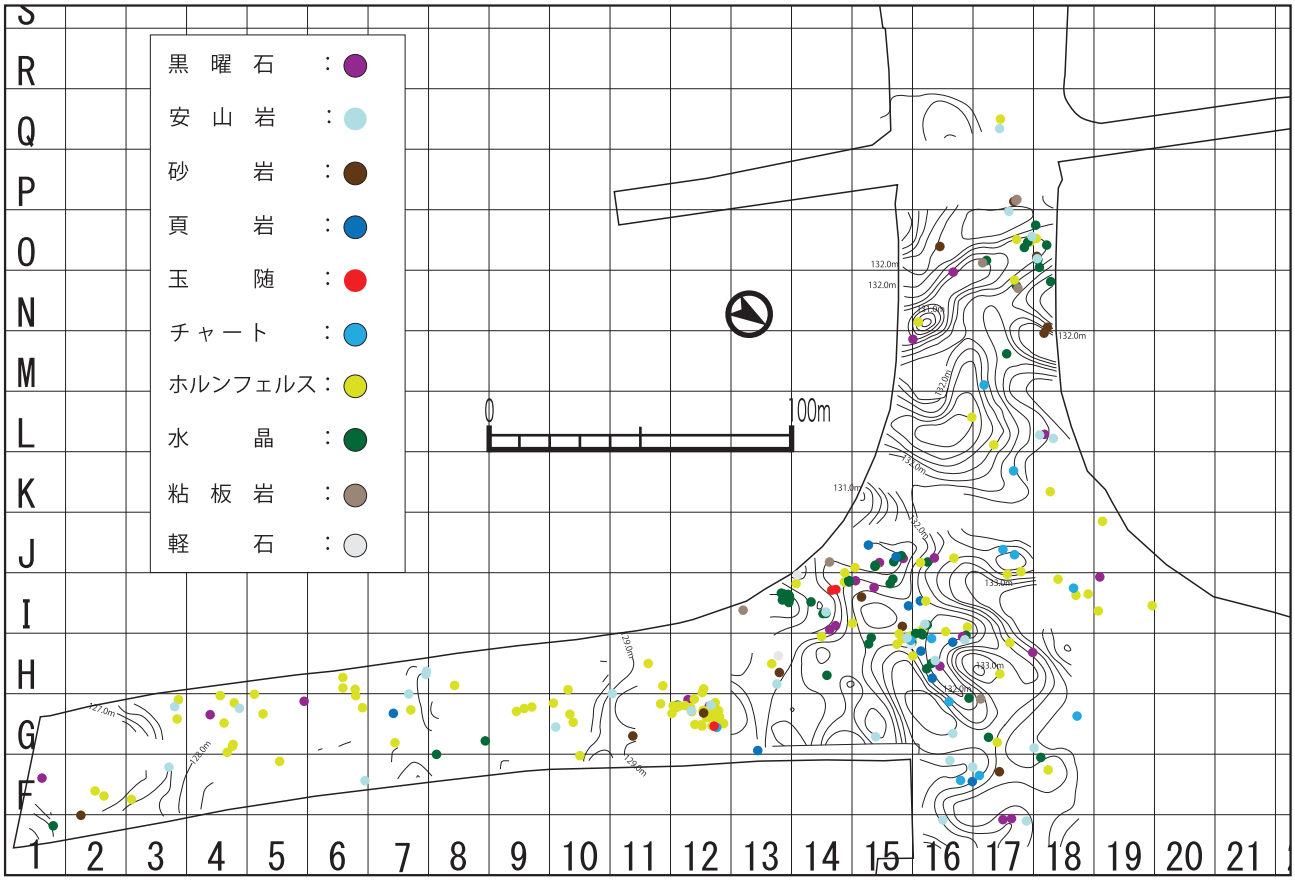
第117図 十三塚遺跡石器 2



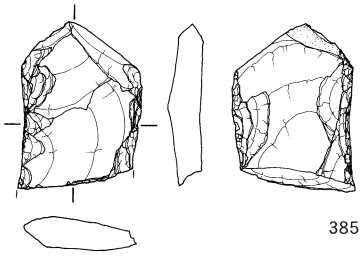
第118図 十三塚遺跡石器 3

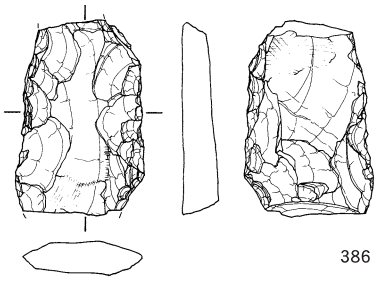


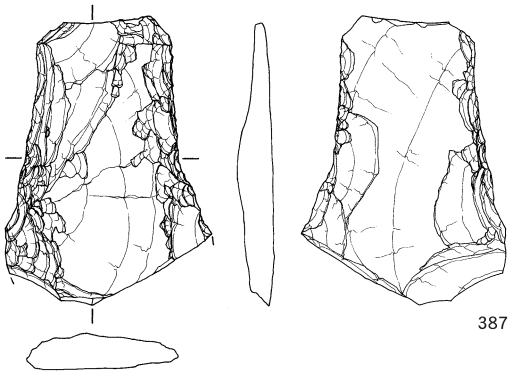
第119図　十三塚遺跡石器４

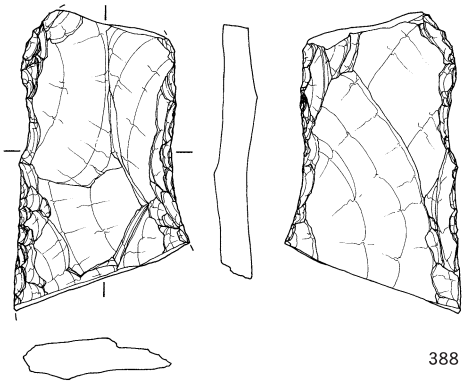


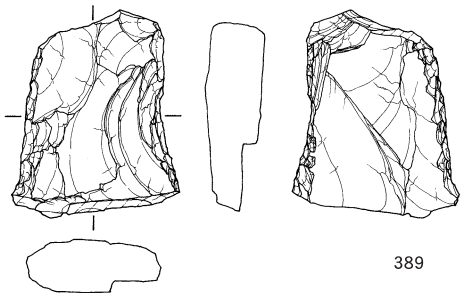
第120図　十三塚遺跡石材別出土状況図

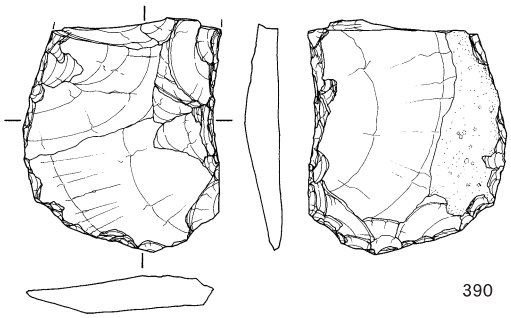


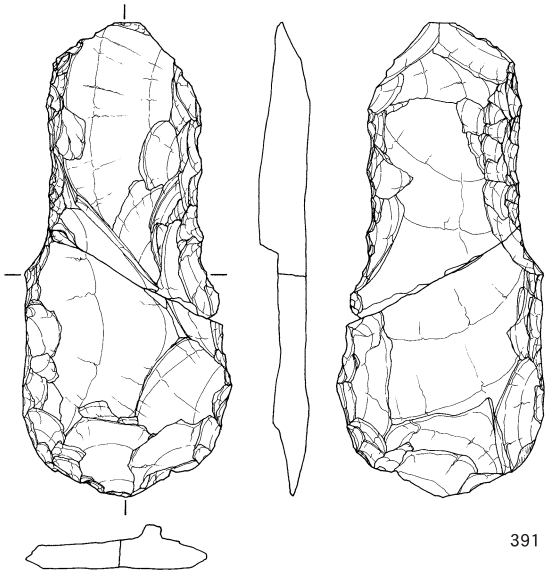


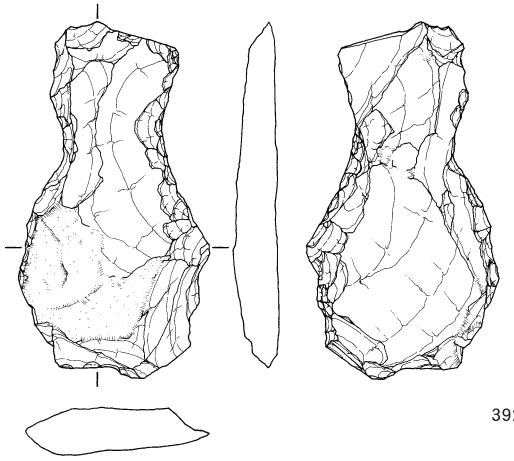




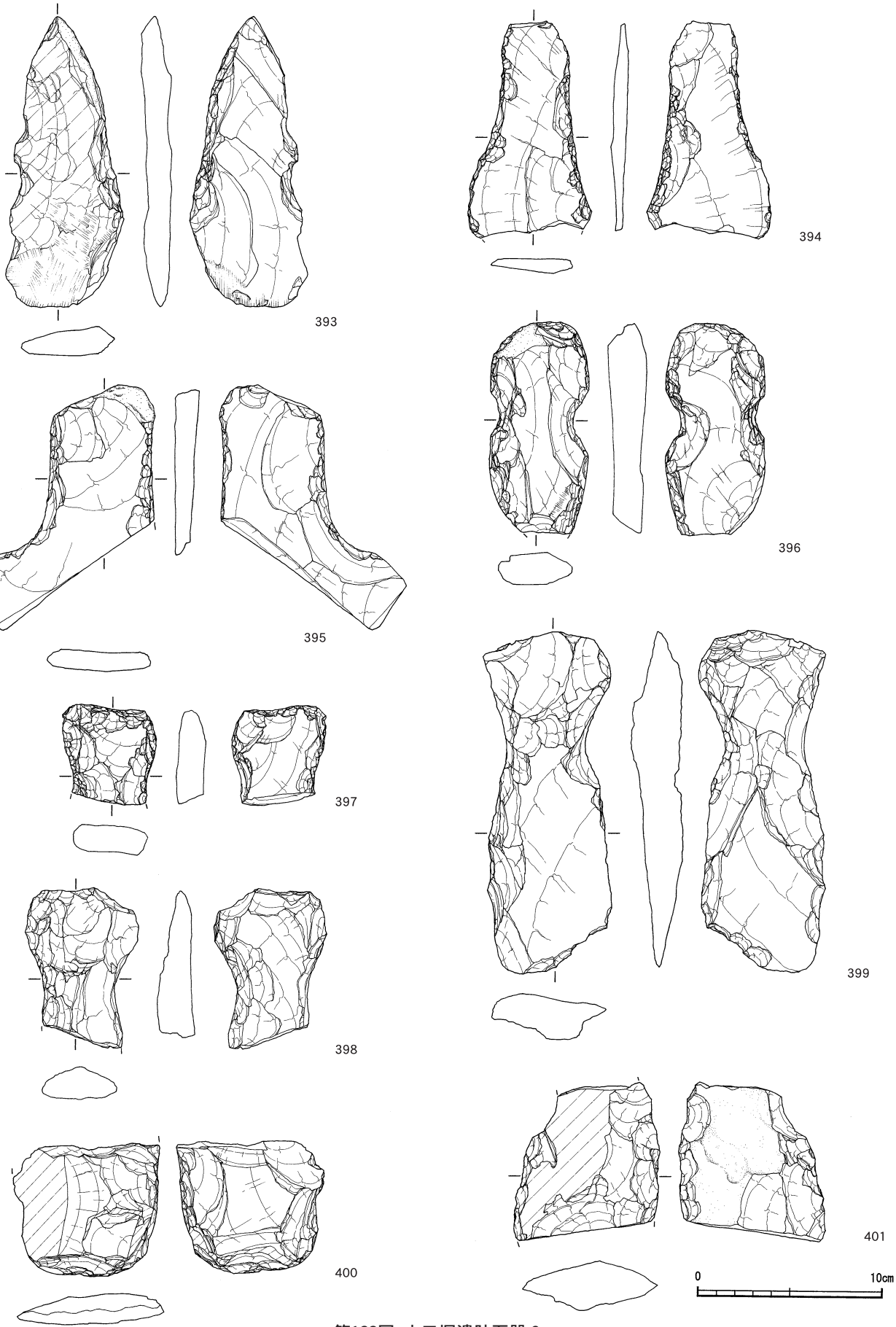




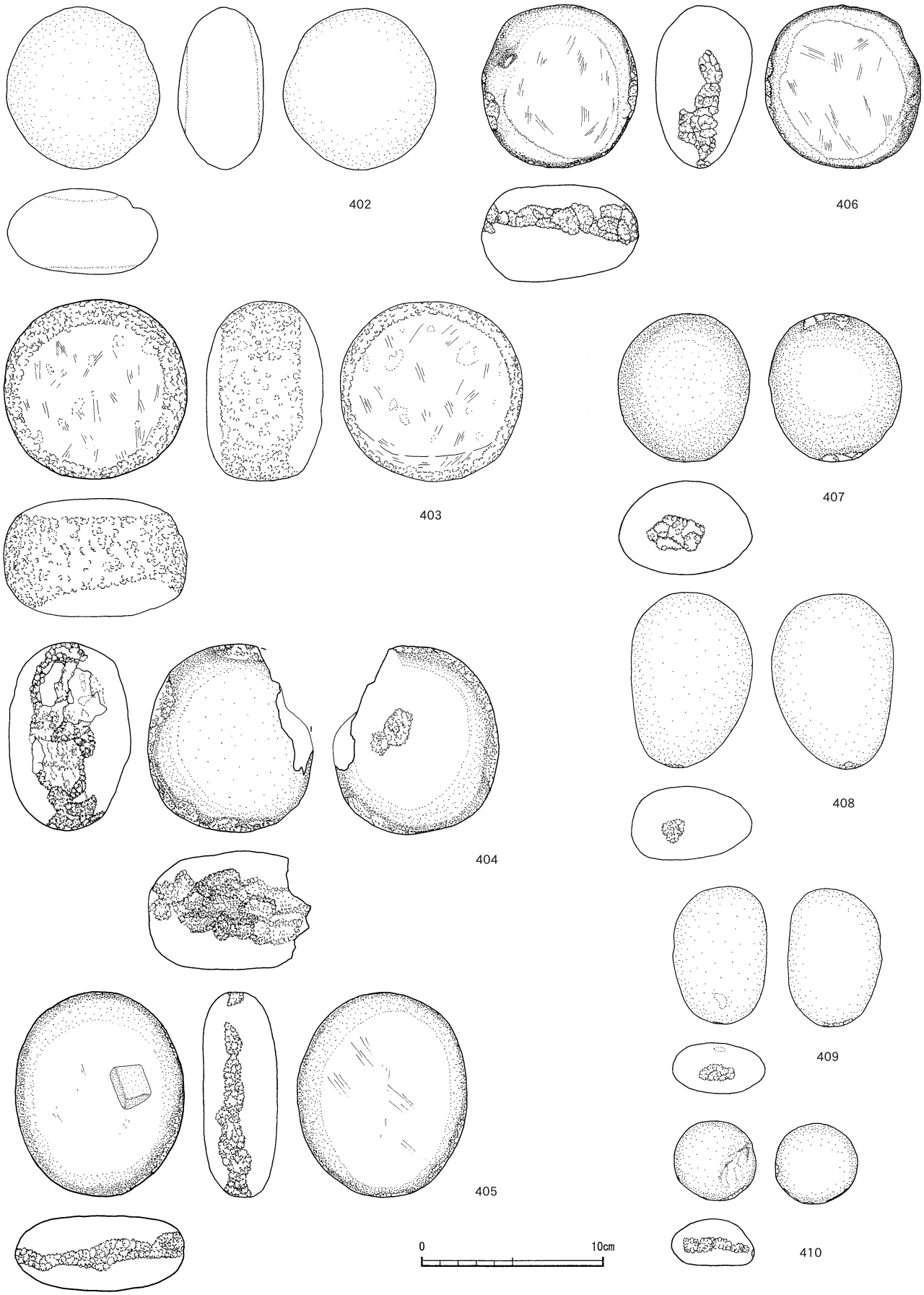




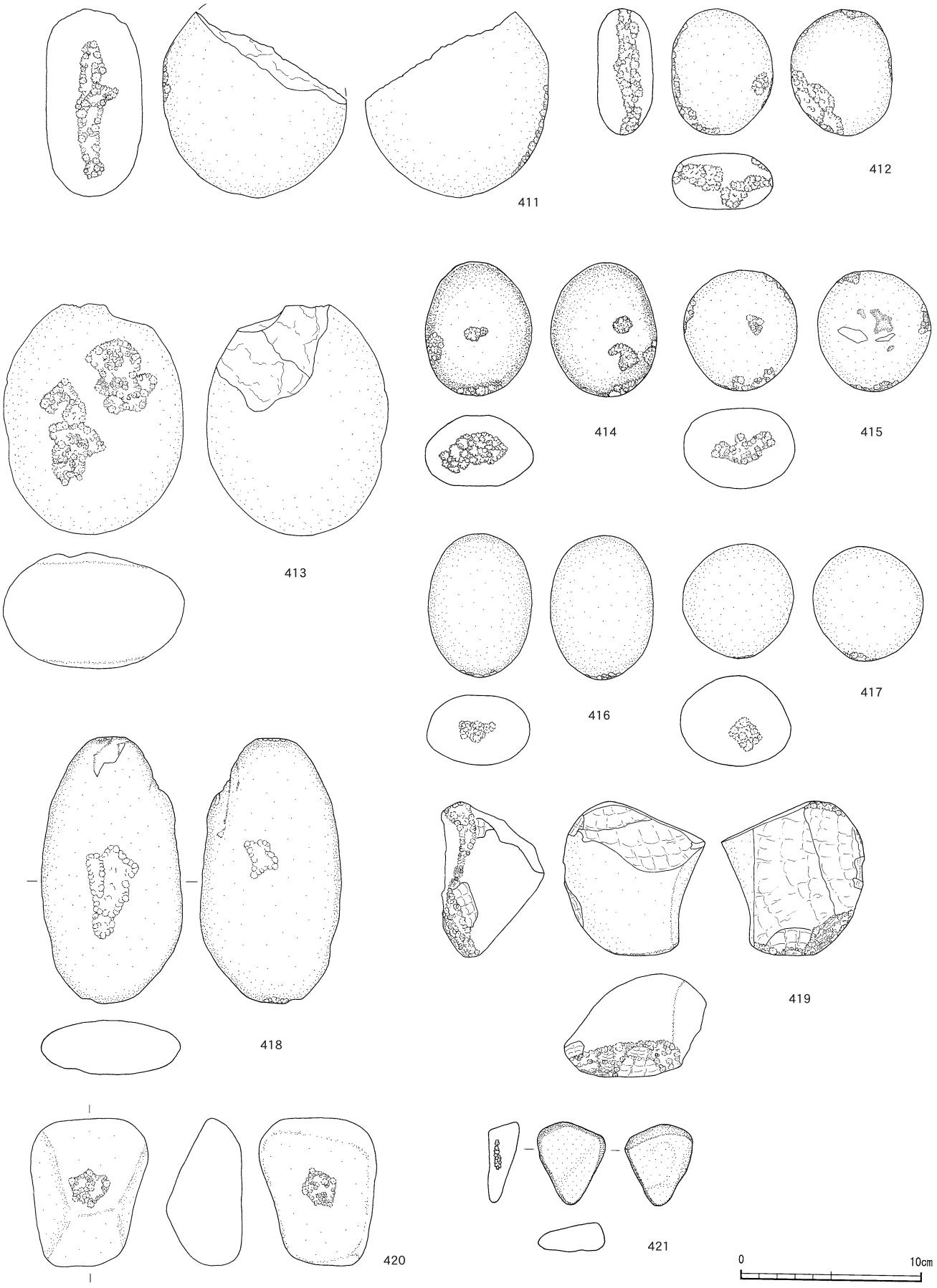
第121図 十三塚遺跡石器 5



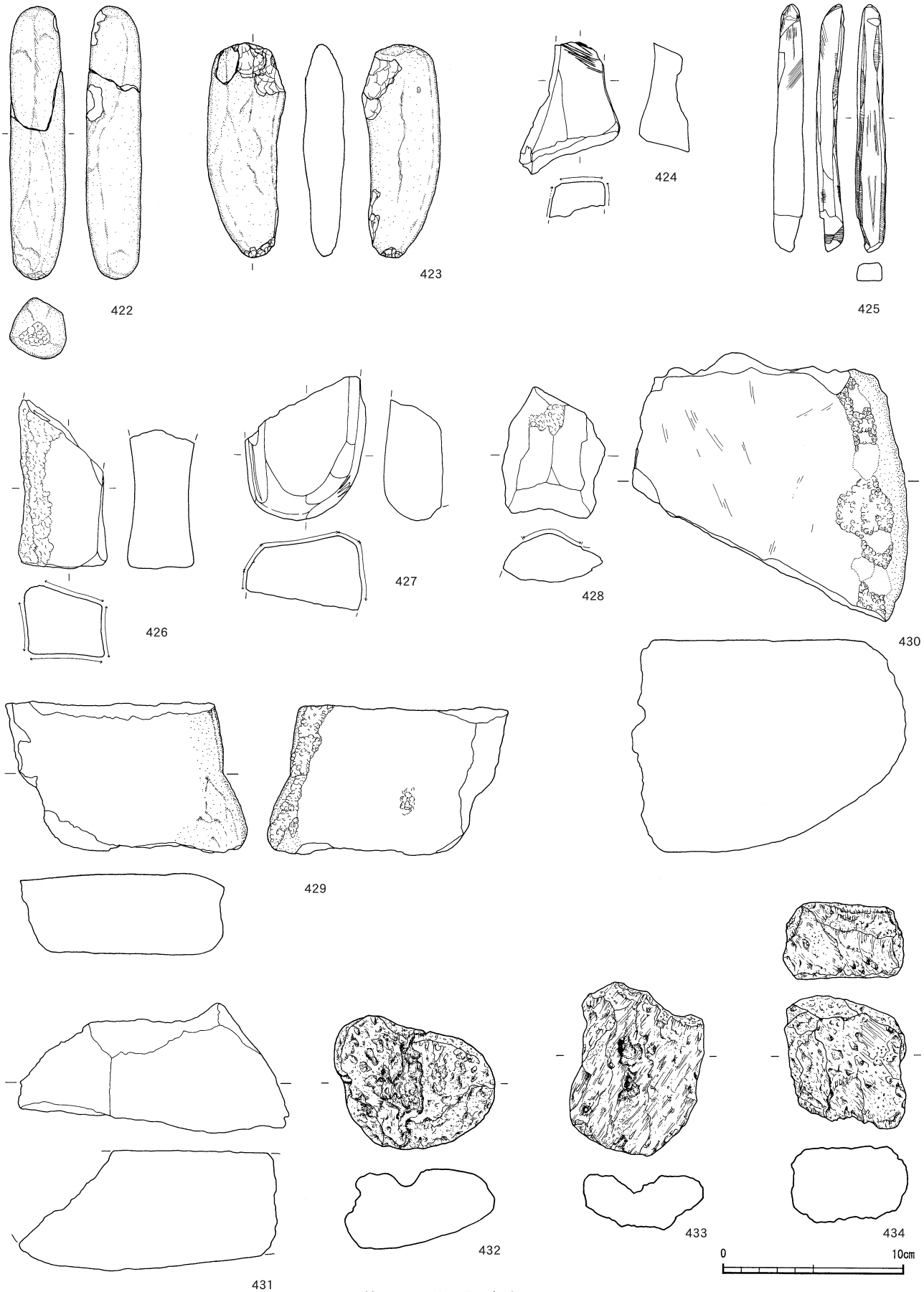
第122図 十三塚遺跡石器 6



第123図 十三塚遺跡石器 7



第124図 十三塚遺跡石器８



第125図 十三塚遺跡石器 9

第38表　十三塚遺跡石器観察表１

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
116	321	磨製石鏃		J－14	Ⅱc	粘板岩	2.9	2.1	0.4	1.2	1906	
	322	磨製石鏃		P－17	Ⅱb	粘板岩	2.4	2	0.3	1.62	7277	
	323	磨製石鏃		L－18	一括	粘板岩	2.2	2.2	0.3	1.46	－	
	324	磨製石鏃		N－17	Ⅱb	粘板岩	2.7	3.1	0.4	4.69	8699	
	325	磨製石鏃		P－17	Ⅱb	粘板岩	1.6	0.8	0.3	0.2	7406	
	326	磨製石鏃		I－13	Ⅱd	粘板岩	4.1	2.3	0.5	5.25	11562	未製品
	327	磨製石鏃		G－16	表層一括	粘板岩	3.2	2.6	0.4	2.45	－	未製品
	328	磨製石鏃		G－17	Ⅱb	粘板岩	3.7	2.4	0.4	5.58	6150	未製品
	329	磨製石鏃		O－17	Ⅱb	粘板岩	3.3	2.9	1.1	11.84	7504	未製品
117	330	打製石鏃	1	G－11	Ⅱb	安山岩１類	1.5	1.3	0.2	0.48	11487	
	331	打製石鏃	1	H－14	表採	安山岩１類	1.4	1.4	0.2	0.41	－	
	332	打製石鏃	1	E－17	一括	安山岩１類	1.2	2.1	0.4	0.62	－	
	333	打製石鏃	1	22T	Ⅱ	安山岩１類	2.1	1.9	0.3	1.2	716	
	334	打製石鏃	1	H－15	Ⅱd	安山岩１類	2.4	1.8	0.3	1.12	2335	
	335	打製石鏃	1	J－17	Ⅱ	チャート１類	1.9	1.6	0.4	1.58	1368	
	336	打製石鏃	1	F－16	Ⅱd	チャート２類	2.1	1.5	0.3	1.42	5519	
	337	打製石鏃	1	F－ 8	Ⅱd	水晶１類	1.7	1.7	0.5	1.33	11816	
	338	打製石鏃	2	J－15	Ⅱc	頁岩２類	1.9	1.3	0.3	0.57	2042	
	339	打製石鏃	2	H－16	Ⅱb	頁岩２類	2.2	1.6	0.3	0.82	2084	
	340	打製石鏃	2	H－16	Ⅱb	頁岩３類	2	1.8	0.3	1.3	5841	
	341	打製石鏃	2	F－16	Ⅱ	頁岩２類	2.6	1.6	0.3	1.44	5425	
	342	打製石鏃	2	26T	表	チャート２類	1.9	1.2	0.2	0.64	－	
	343	打製石鏃	2	G－18	Ⅱb	チャート４類	2.2	1.5	0.3	1.04	5621	
	344	打製石鏃	2	H－16	Ⅱ	チャート４類	2.3	1.4	0.4	1.12	1535	
	345	打製石鏃	2	F－16	Ⅱb	安山岩１類	2.6	1.7	0.4	1.7	5593	
	346	打製石鏃	2	F－16	Ⅱb	チャート２類	2.8	1.6	0.4	1.5	5522	
	347	打製石鏃	2	G－13	表採	チャート２類	3	1.5	0.5	2.05	－	
	348	打製石鏃	2	M－17	Ⅱb	チャート４類	2.9	1.5	0.4	1.46	11428	
	349	打製石鏃	2	F－ 6	Ⅱd	安山岩１類	2	1.3	0.3	0.71	11693	
	350	打製石鏃	2	G－18	Ⅱb	安山岩１類	2.7	1.5	0.4	1.59	6125	
	351	打製石鏃	2	H－16	表採	黒曜石３類	3.1	2.1	0.3	1.96	－	
	352	打製石鏃	2	I－15	表採	黒曜石３類	1.7	1.2	0.2	0.47	－	
118	353	打製石鏃	3	F－ 3	Ⅱd	安山岩３類	1.8	1.7	0.3	0.67	12489	
	354	打製石鏃	3	F－16	Ⅱb	安山岩３類	1.7	1.8	0.3	0.65	5527	
	355	打製石鏃	3	G－15	一括	安山岩３類	1.9	1.8	0.3	0.72	－	
	356	打製石鏃	3	I－16	Ⅱ	安山岩１類	1.8	1.2	0.4	0.5	1559	
	357	打製石鏃	3	G－12	Ⅱb	チャート１類	1.6	1.5	0.2	0.47	2531	
	358	打製石鏃	3	H－ 7	Ⅱc	黒曜石３類	1.8	1.5	0.3	0.5	－	
	359	打製石鏃	3	F－ 1	Ⅱd	黒曜石３類	2.4	2	0.3	1.08	13060	
	360	打製石鏃	4	I－14	Ⅱd	玉髄２類	1.7	1.3	0.3	0.56	2203	
	361	打製石鏃	4	J－15	Ⅱc	頁岩４類	1.3	1.3	0.3	0.41	1762	
	362	打製石鏃	4	G－13	Ⅱd	玉髄１類	1.5	1.3	0.3	0.43	2964	
	363	打製石鏃	4	G－16	Ⅱd	水晶１類	1.9	1.3	0.3	0.41	5897	
	364	打製石鏃	4	N－17	Ⅱb	ホルンフェルス３類	1.9	1.4	0.3	0.59	9430	
	365	打製石鏃	4	26T	－	黒曜石３類	2	1.4	0.5	0.71	－	
	366	打製石鏃	4	M－15	Ⅱ	黒曜石３類	2.2	1.5	0.3	0.56	3583	
	367	打製石鏃	4	J－15	Ⅱd	黒曜石４類	2.3	1.3	0.3	0.57	2248	
	368	打製石鏃	4	－	表採	安山岩２類	2	1.5	0.3	0.54	－	
	369	打製石鏃	4	L－18	Ⅱb	安山岩２類	2	1.2	0.3	0.39	10944	
	370	打製石鏃	4	G－15	Ⅱb	安山岩１類	2	1.5	0.2	0.54	5270	
	371	打製石鏃	4	I－14	住４付近	ホルンフェルス３類	2.3	1.4	0.3	0.78	－	
	372	打製石鏃	4	H－16	Ⅱ	黒曜石２類	2.3	1.2	0.4	0.67	1310	
	373	打製石鏃	4	G－13	Ⅱc	頁岩２類	2.2	1.7	0.3	0.96	2580	
	374	打製石鏃	4	G－ 4	Ⅱd	黒曜石３類	2.5	1.3	0.2	0.64	13044	
119	375	打製石鏃	5	I－14	Ⅱc	黒曜石３類	1.4	1.2	0.3	0.42	2140	
	376	打製石鏃	5	J－16	Ⅱ	黒曜石３類	1.6	1.4	0.3	0.55	1214	
	377	打製石鏃	5	L－18	Ⅱb	黒曜石３類	1.8	1.3	0.2	0.36	10935	
	378	打製石鏃	5	O－18	Ⅱb	安山岩１類	1.5	1.2	0.3	0.4	10528	
	379	打製石鏃	5	I－18	Ⅱ	チャート３類	1.6	1.1	0.3	0.52	1123	
	380	打製石鏃	5	K－17	Ⅱb	チャート３類	2.1	1.4	0.2	0.53	10974	
	381	打製石鏃	5	I－14	表採	チャート４類	2.3	1.6	0.3	1	－	
	382	打製石鏃	5	H－15	Ⅱ	チャート３類	2.3	1.2	0.3	0.82	1590	
	383	スクレイパー		H－ 7	Ⅱd	安山岩１類	2.9	2.4	0.4	1.77	11717	
	384	石錐		H－7	Ⅱd	安山岩１類	2.7	1	0.5	1.75	11716	
121	385	打製石斧		F－17	Ⅰ	ホルンフェルス１類	6.6	4.9	1.2	56.79	－	
	386	打製石斧		H－18	－	ホルンフェルス１類	7.8	5.2	1.3	79.99	－	
	387	打製石斧		G－12	Ⅱc	ホルンフェルス１類	11.4	8.3	1.4	169.73	3047	
	388	打製石斧		G－12	Ⅱc	ホルンフェルス１類	11.8	6.9	1.5	164.8	2690	
	389	打製石斧		G－ 4	Ⅱd	ホルンフェルス１類	8.3	6.8	2.2	140.6	12894	
	390	打製石斧		G－ 7	Ⅱb	ホルンフェルス１類	9.3	7.9	1.3	126.27	11689	
	391	打製石斧		G－ 9 H－11	Ⅱb	ホルンフェルス１類	18.7	8.4	1.7	331.21	11514 11839	
	392	打製石斧		I－15	Ⅱc	ホルンフェルス１類	14.1	7.7	1.8	222.65	2096	
122	393	打製石斧		I－19	Ⅱ	ホルンフェルス１類	15.6	6.5	1.6	172.8	1008	

第39表　十三塚遺跡石器観察表２

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号	備考
122	394	打製石斧		J－16	Ⅱ	ホルンフェルス１類	11.9	6.8	0.8	72.62	1240	
	395	打製石斧		G－３	Ⅱd	ホルンフェルス１類	12.3	12.5	1.6	139.87	12530	
	396	打製石斧		N－16	Ⅱb	ホルンフェルス１類	11.6	5.4	1.8	183.89	6595	
	397	打製石斧		H－11	Ⅱd	ホルンフェルス１類	5.5	5.1	1.6	63.09	11555	
	398	打製石斧		H－13	Ⅱb	ホルンフェルス１類	8.8	6.2	1.8	110.61	5348	
	399	打製石斧		G－９	Ⅱb	ホルンフェルス１類	18.5	6.9	2.5	360	11830	
	400	打製石斧		I－18	Ⅱ	ホルンフェルス３類	7.3	4.1	1.8	100.63	1078	
	401	打製石斧		I－14	Ⅱc	ホルンフェルス２類	8.6	8	2.7	185.37	1894	
123	402	磨石・敲石	1	Q－17	Ⅱb	安山岩	9	8.4	4.7	525	13182	
	403	磨石・敲石	2	E－１	Ⅱc	花崗岩	10	10	6.5	1005	11900	
	404	磨石・敲石	2	H－16	Ⅱe	安山岩	10.4	9.2	6.6	865	5888	
	405	磨石・敲石	2	G－４	Ⅱd	安山岩	11.3	9.3	4.2	665	12828	
	406	磨石・敲石	2	F－12	Ⅱd	安山岩	9	8.5	5.3	675	2862	
	407	磨石・敲石	2	G－３	Ⅱd	安山岩	8.2	7.3	5.1	400	12531	
	408	磨石・敲石	2	I－15	Ⅱb	安山岩	9.7	6.7	4.1	410	3122	
	409	磨石・敲石	2	L－18	Ⅱb	安山岩	7.6	5.1	2.8	160	10933	
	410	磨石・敲石	2	H－13	Ⅱb	安山岩	4.4	4.5	2.6	65	5088	
124	411	磨石・敲石	2	E－17	Ⅱb	安山岩	10.4	10.2	5.4	780	5536	
	412	磨石・敲石	2	K－16	表	安山岩	7	5.6	3.1	190	－	
	413	磨石・敲石	2	O－17	Ⅱd	安山岩	12.8	9.9	6.4	1100	9085	
	414	磨石・敲石	3	H－７	Ⅱd	安山岩	7.5	5.9	3.9	240	11720	
	415	磨石・敲石	3	G－16	Ⅱe	安山岩	10.4	10.2	5.4	210	5890	
	416	磨石・敲石	3	F－17	Ⅱ	砂岩	8	5.7	3.9	280	5474	
	417	磨石・敲石	3	E－16	Ⅱb	安山岩	6.4	6.1	5	270	5585	
	418	磨石・敲石	4	Q－17	Ⅱb	ホルンフェルス	14.8	7.8	3	530	13202	
	419	磨石・敲石	5	F－12	Ⅱd	砂岩	8.6	7.9	5.7	410	2861	
	420	磨石・敲石	5	O－18	Ⅱb	砂岩	8.2	6.5	4.2	320	9280	
	421	磨石・敲石	5	O－18	Ⅱb	安山岩	4.6	3.8	17.5	30	9283	
125	422	棒状敲石		M－18	Ⅱb	砂岩	15.1	3.1	3.4	222.98	7830	
	423	棒状敲石		N－18	Ⅱb	砂岩	11.8	4.4	2.3	156.58	10648	
	424	砥石		E－２	Ⅱc	泥岩	7.35	5.55	2.75	91.27	12439	
	425	砥石		H－13	Ⅱb	砂岩	13.7	1.75	1.5	41.24	5075	
	426	砥石		I－15	Ⅱc	砂岩	9.3	4.9	3.7	250.34	2128	
	427	砥石		O－16	Ⅱb	砂岩	8	6.7	4.1	233.37	6619	
	428	砥石		O－18	Ⅱb	砂岩	7.25	5.75	2.7	118.15	9126	
	429	石皿		H－16	Ⅱe	安山岩	8.0	11.2	4.7	765	5770	
	430	石皿		20T	Ⅱ	安山岩	14.8	15.4	11.7	2540	572	
	431	石皿		M－18	Ⅱb	礫岩	7.2	15.0	6.7	705	10752	
	432	軽石加工品		I－14	Ⅱd	軽石	7.4	8.9	4.5	110.46	2215	
	433	軽石加工品		I－15	Ⅱ	軽石	9.5	7.4	3	61.23	1585	
	434	軽石加工品		H－13	Ⅱb	軽石	7.4	6.8	4.2	64.07	5381	

第40表　十三塚遺跡出土水晶観察表

出土区	層	石材	重さ（g）	取上番号	出土区	層	石材	重さ（g）	取上番号
O－17	Ⅱb	水晶	139.39	7500	19T	表採	水晶	18.48	－
J－16	表	水晶	95.09	－	O-17	Ⅱb	水晶	17.88	9789
I－15	表	水晶	80.00	－	28T	Ⅳ	水晶	13.25	－
I－16	Ⅱb	水晶	73.13	1581	O-17	Ⅱb	水晶	11.90	7145
H－16	Ⅱ	水晶	64.54	1311	I-16	Ⅱb	水晶	11.09	1540
G－17	Ⅱb	水晶	57.59	6006	H-14	Ⅱb	水晶	10.50	5403
H－16	Ⅱb	水晶	49.83	5861	H-16	Ⅱb	水晶	8.75	1554
J－15	表	水晶	39.74	－	－	表採	水晶	6.22	－
O－18	Ⅱb	水晶	39.47	8117	G-18	Ⅱd	水晶	6.01	11825
O－18	Ⅱb	水晶	36.09	8518	J-15	表採	水晶	3.43	－
J－15	表	水晶	34.72	－	O-17	Ⅱb	水晶	1.96	10511
N－18	Ⅱb	水晶	26.66	10535	H-16	Ⅱb	水晶	1.23	5862
J－16	Ⅱ	水晶	25.91	1219	S-17	Ⅱd	水晶	1.10	－
I－16	Ⅱb	水晶	24.84	1555	F-18	Ⅱb	水晶	0.99	5576
O－18	Ⅱb	水晶	24.50	8105	H-14	表採	水晶	0.75	－

第３節　古墳時代の調査と成果

１　調査の概要（第126図）

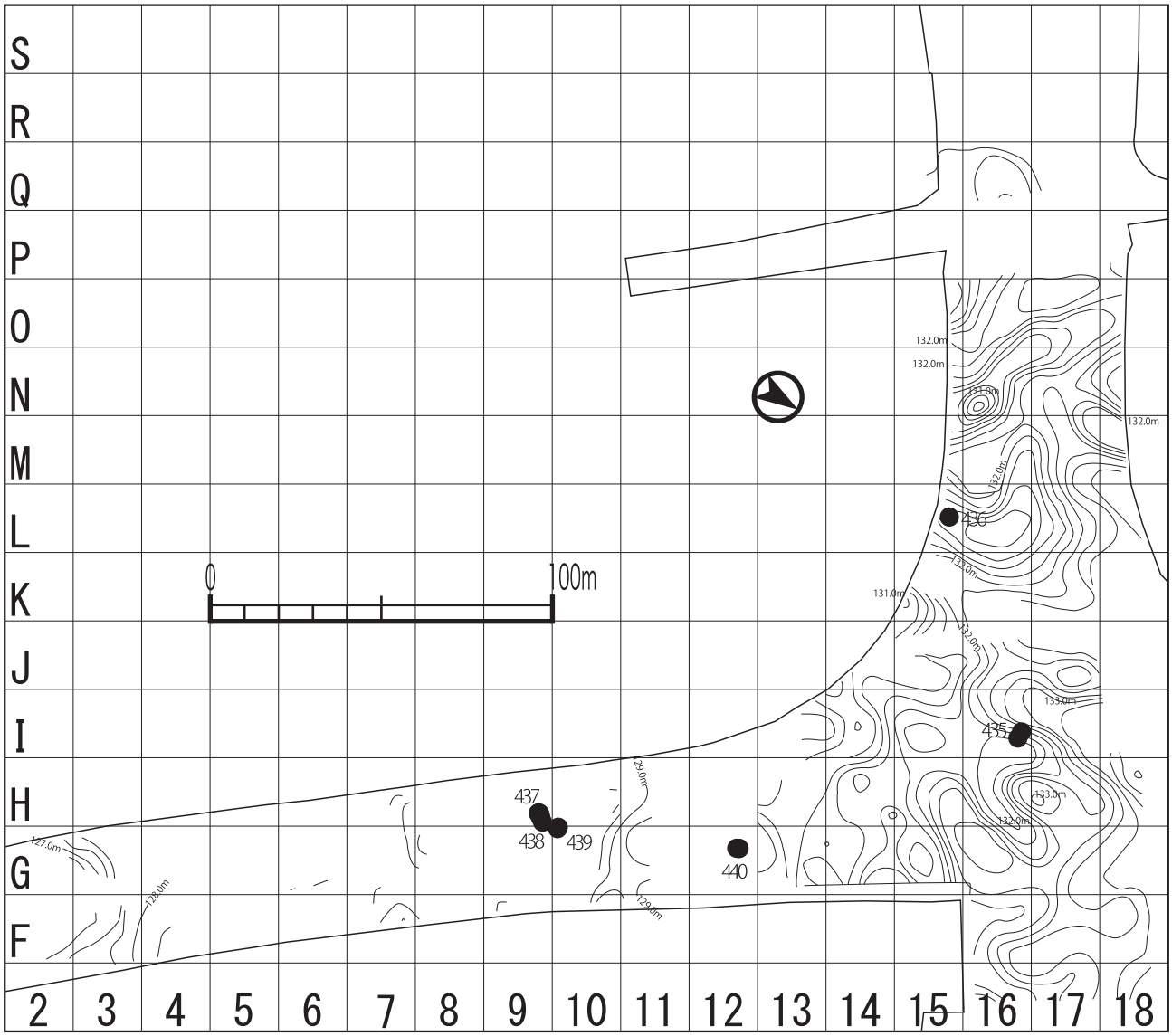
古墳時代の遺構は検出されていない。また，遺物はⅡａ層，Ⅱｂ層，Ⅱｄ層から少量であるが出土している。出土遺物の分布はＧ・Ｈ－９・10区のあたりに集中していたが，他は散在している状況であり，集落などの存在を想定できる状況ではなかった。

２　調査の成果

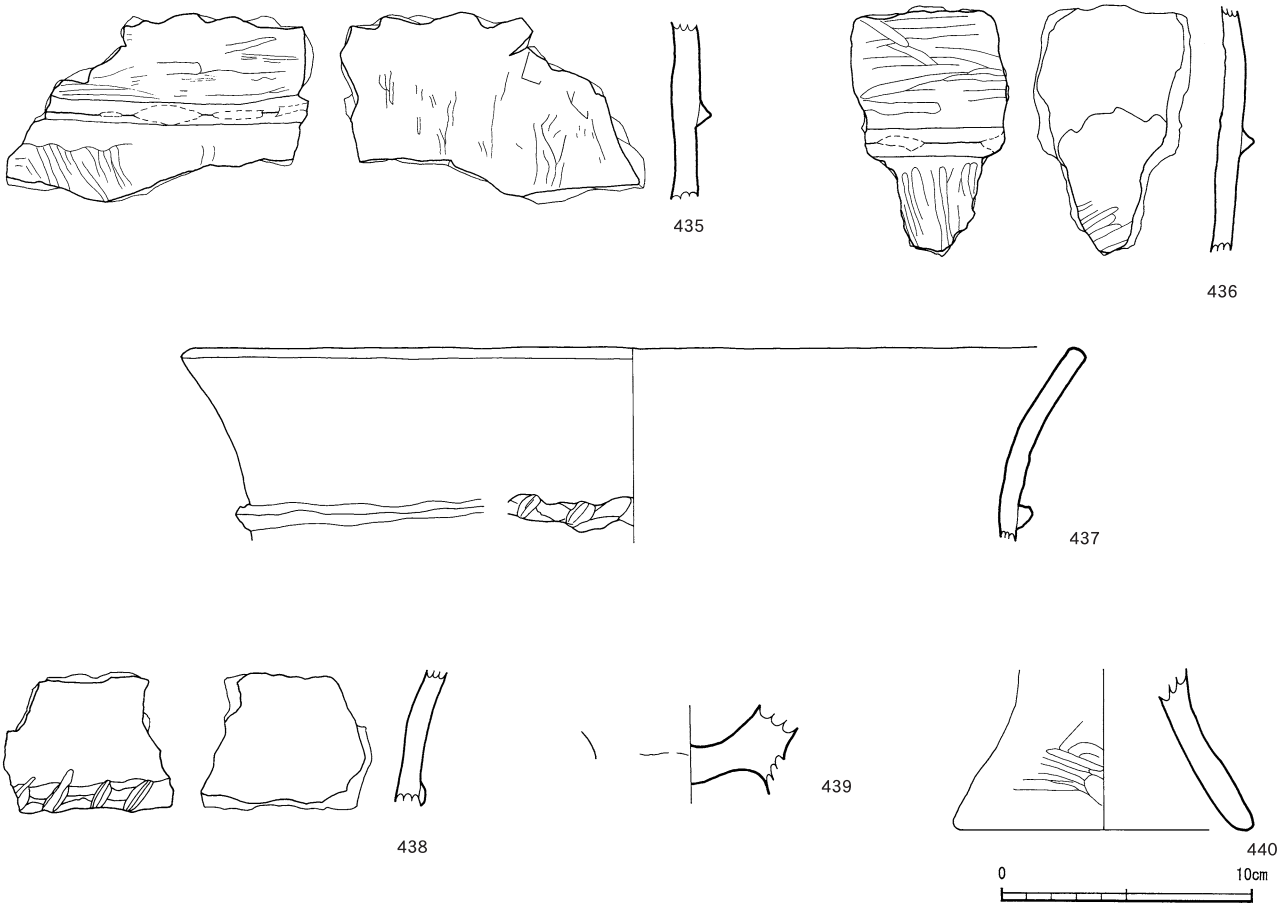
⑴　遺物（第127図：435～440）

出土している古墳時代の遺物は全て成川式土器である。その中から口縁部・底部を中心に６点図化した。

435～440は甕の破片である。435・436は胴部片で横方向に突帯が一条貼り付けられている。器面調整は外面の突帯の上は横方向の，突帯の下は縦もしくはやや斜めのミガキが行われている。内面もミガキが行われている。437は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部の復元径は35.0㎝である。口縁部は外反気味に外に開く。胴部には突帯が貼り付けられ，布目圧痕によって刻目がつけられている。438は胴部片で，437と同一個体と思われる。外面には437と同様に突帯が貼り付けられ，布目圧痕による刻目が付けられている。439は胴部から底部にかけての破片である。底部外面には胴部から口縁部まで成形した後に貼り付けられた脚台がついていたと思われるが，剥がれてしまっており，一部しか残っていない。脚台の内側は中心が盛り上がる。器面調整は内外面ともナデである。出土区が437・438と近く同一個体の底部の可能性も考えられる。440は底部片である。脚台のみで内底とは接合しなかった。底部の復元径は11.５㎝である。脚は直線的に外に開く。器面調整は外面が工具ナデが，内面にはケズリが行われている。



第126図 十三塚遺跡古墳時代遺物出土状況図



第127図 十三塚遺跡古墳時代出土土器

第41表　十三塚遺跡古墳時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	法量				色調		器面調整		胎土						焼成	取上番号	備考
						口縁部径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他			
127	435	I－16	Ⅱ	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ		○	○			岩片	良	1248他	突帯
	436	L－15	Ⅱb	甕	胴部	－	－	－	－	にぶい橙	橙	ミガキ	ミガキ	○	○				岩片	良	3204	突帯
	437	H－9	Ⅱb	甕	口縁～胴部	35.0	－	－	－	橙	橙	ナデ	ナデ	○		○			岩片	良	11863他	刻目突帯
	438	H－9	Ⅱa	甕	胴部	－	－	－	－	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	11439	刻目突帯
	439	H－9	Ⅱb	甕	胴部～底部	－	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○				岩片	良	11853他	
	440	G－12	Ⅱd	甕	底部	－	11.5	－	－	明赤褐	明赤褐	工具ナデ	ケズリ・ナデ	○	○				岩片	良	2944他	

第４節　中世以降の調査と成果

１　調査の概要（第128図）

中世以降の調査では遺構は８条の道路状遺構が検出されている。遺物は古銭・銃弾の他に陶磁器が出土しているが，多くが表土から出土しており，またほとんどが細片であった。

２　調査の成果

⑴　遺構

１号道路状遺構（第130図）

Ⅰ－18区，Ｊ－17・18区にⅡａ層にて検出された。東北から南西の方向に途中から２条に分かれて伸びている。標高は南西方向に20㎝ほど低くなっている。

２号道路状遺構（第129図）

Ｊ－15区にて途切れた状態の12mほどの硬化面が検出された。北西から南東の方向に伸びている。標高はほとんど変わらない。

３号道路状遺構（第129図）

Ｇ・Ｈ－16区にて13mほどの長さで検出された。東北から南東の方向に伸びている。標高は南東側が20㎝ほど低くなっている。

４号道路状遺構（第130図）

Ｏ－17・18区にて10mほどの長さで検出された。東西方向に伸びている。

５号道路状遺構（第130図）

Ｏ－17区にて10mほどの長さで検出された。東西方向に伸びている。途中で近世～近代と考えられる土坑で削られている。

６号道路状遺構（第130図）

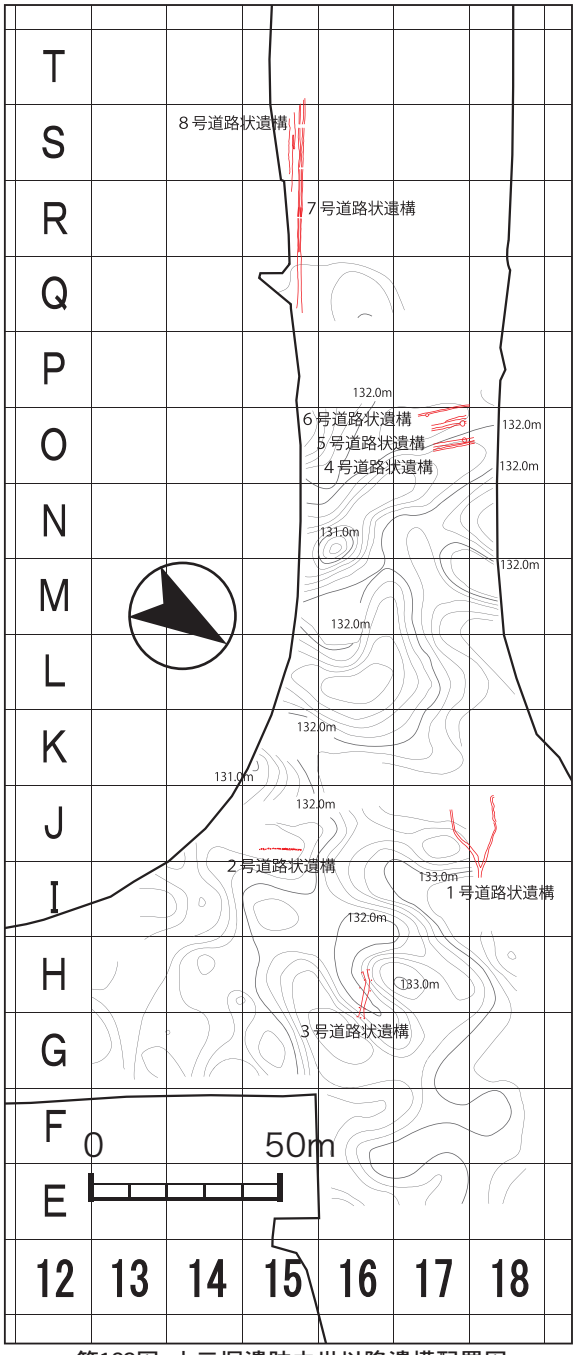
Ｐ・Ｏ－17区にて15mほどの長さで検出された。東西方向に伸びている。

７号道路状遺構（第129図）

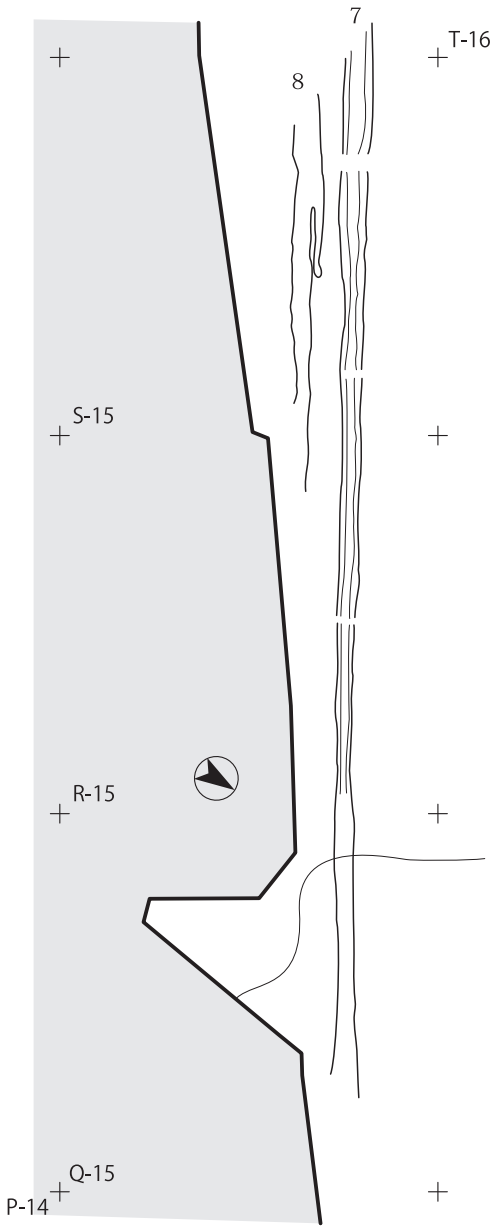
Ｒ～Ｔ－15区にて40mほどの長さで検出された。東北から南西方向に伸びており，北東側のＱ－15区では削ってしまい検出されていないが，その延長線上の壁面には硬化面の断面が検出されており，60m以上の長さになると考えられる。標高は北東側が低くなっている。

８号道路状遺構（第129図）

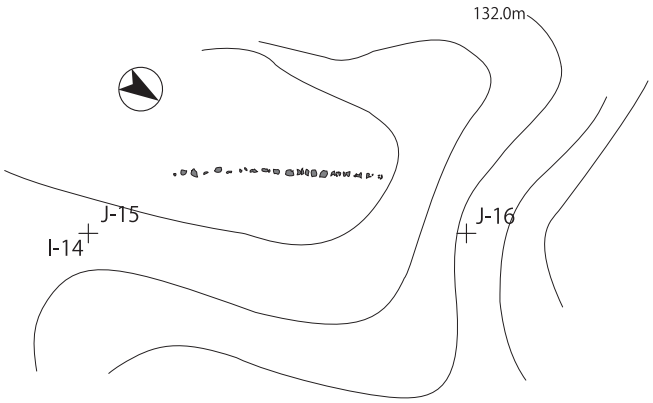
Ｒ・Ｓ－15区にて20mほどの長さで検出された。東北から南西方向に伸びており，７号道路状遺構に近接し，並行する。標高は北東側が低くなっている。



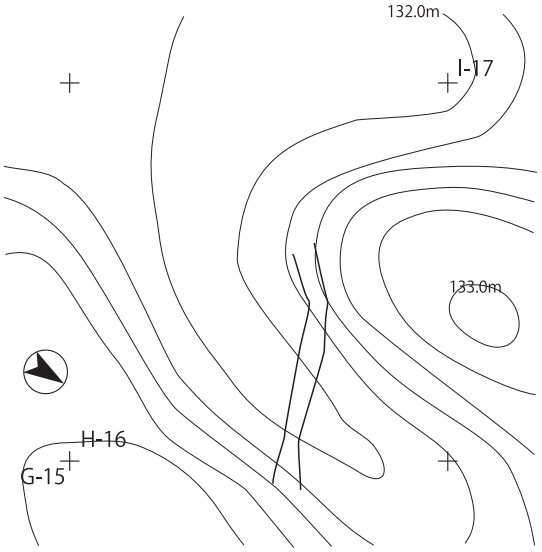
第128図　十三塚遺跡中世以降遺構配置図



十三塚遺跡７・８号道路状遺構

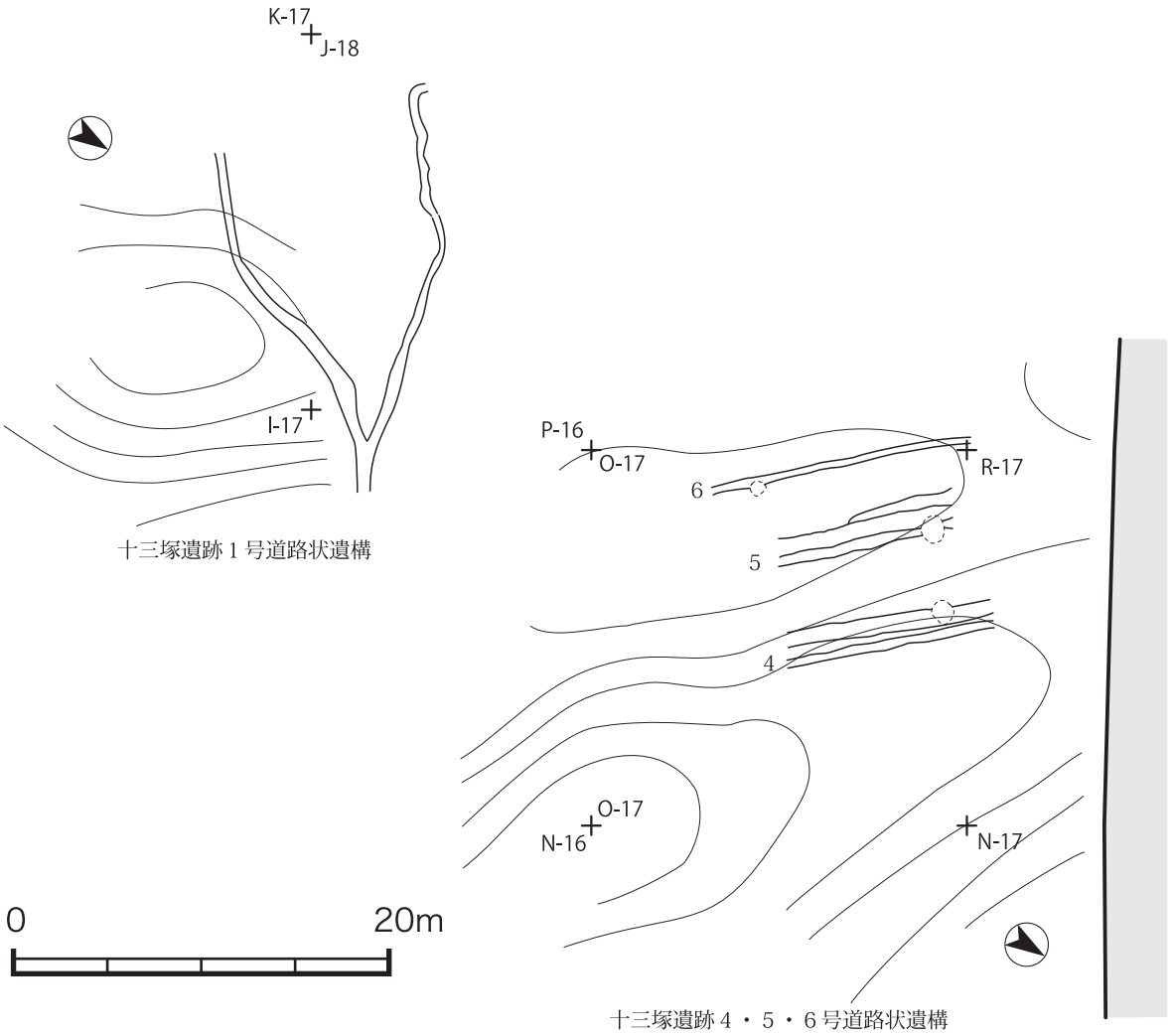


十三塚遺跡２号道路状遺構



十三塚遺跡３号道路状遺構

第129図 十三塚遺跡中世以降道路状遺構１

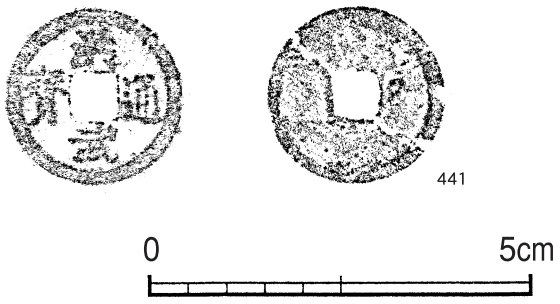


第130図　十三塚遺跡中世以降道路状遺構２

⑵　**遺物**

古銭（441）

441の表面には洪武通宝と書かれているが、文字の形状などから加治木銭の可能性も考えられる。



第131図　十三塚遺跡中世以降出土遺物

第42表　十三塚遺跡中世以降出土古銭計測表

挿図番号	掲載番号	層	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	特徴	備考
131	441	表採	古銭	2.3	2.3	0.1	2.02	洪武通宝	

第６章　自然科学分析

第１節　十三塚遺跡における自然科学分析

１　分析の種類と目的

十三塚遺跡の発掘調査における自然科学分析としては，「出土炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）」と「出土種実の同定」を行った。

分析は，前者が弥生時代の竪穴住居跡の埋土から出土した炭化物の年代を測定することによって，竪穴住居跡の年代観を知る手がかりとするということ。後者が弥生時代の竪穴住居跡や土坑から出土した種実を分析・同定することにより，当時の遺跡及び遺跡周辺部の植生復元や栽培植物の有無等を検討する際の資料として用いるということ等を目的として行った。

２　分析の内容と結果

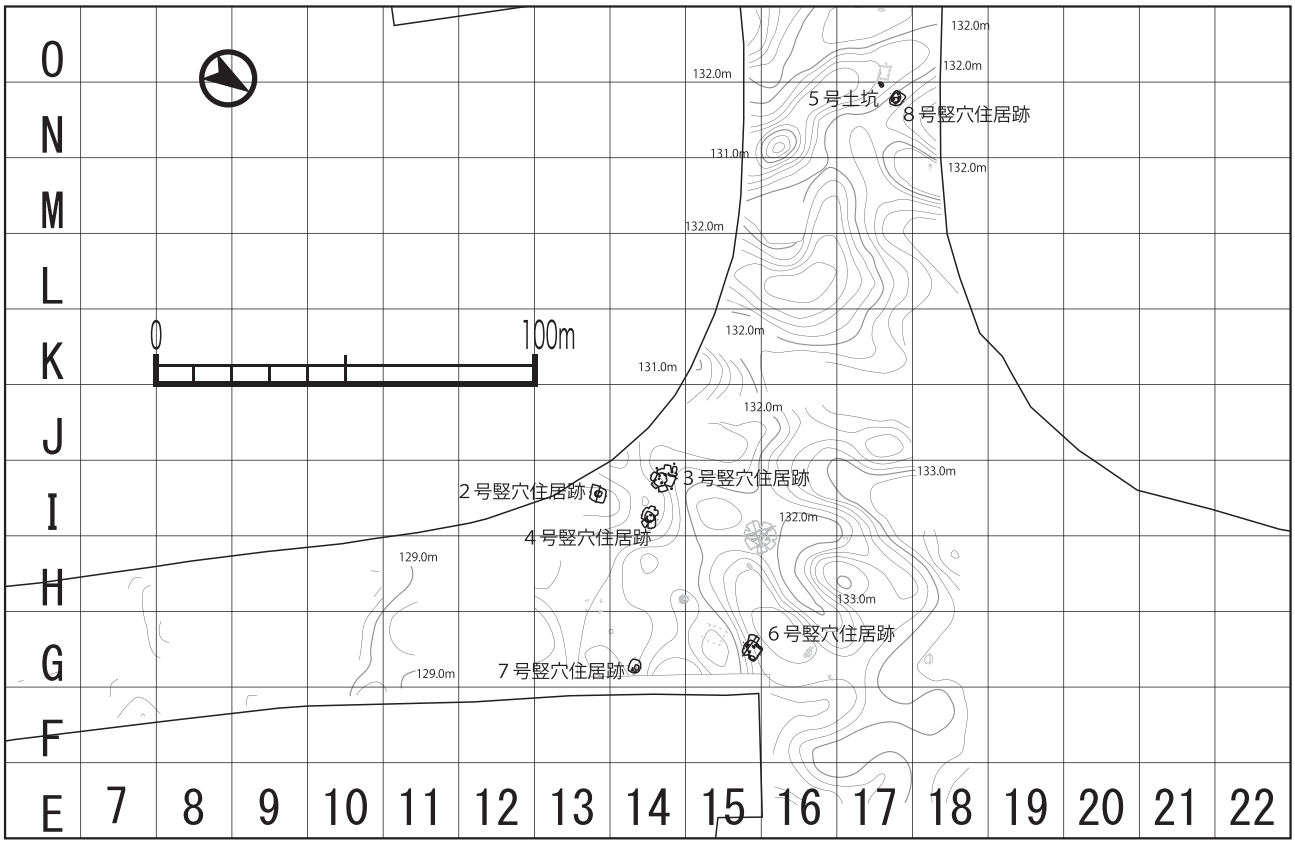
分析についての詳細な内容は第２～４節に譲るとして，ここではおおまかな概要について触れることにする。

放射性炭素年代測定　　年代測定については，平成20年度と21年度の２か年にそれぞれ２件，合計４件の測定を委託した。いずれも竪穴住居跡から出土した炭化物を対象として実施し，約2,000年から約2,300年前後の年代におさまる結果が得られている。出土遺物は，弥生時代中期後葉の山ノ口式土器であることから，これまでの年代観に層結果が得られた。

種実同定　　年代測定と同じ弥生時代中期後葉の竪穴住居跡や土坑から出土した炭化種実の同定を委託した。試料は３～10（ただし，試料５は枝番の１，２あり）の９点で，分析の結果，イネの胚乳やコナラ属の子葉，アカメガシワの種子等が抽出・同定された。

自然科学分析に関する一覧（年度別）

番号	年度	分析の内容	分析委託業者
1	平成20年度	・遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）	株式会社 加速器研究所
2	平成21年度	・遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）	
		・遺構内から出土した炭化物の種実同定	



第132図　自然科学分析対象遺構配置図

第２節　十三塚遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）１

㈱加速器分析研究所

１　測定対象試料

十三塚遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。測定対象試料は，３号住居跡埋土から出土した炭化物（１：IAAA-83139），４号住居跡埋土から出土した炭化物（２：IAAA-83140）である。試料は，ウォーターフローテーションにより採集された。

２　測定の意義

３号・４号住居跡は隣接しており，同時期に存在した可能性が高い。予想年代は弥生時代中期であるが，その前後関係を把握したい。

３　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　酸化銅と試料を石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

４　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.２％であることを意味する。

⑶　δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.２％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.４％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

６　測定結果

^{14}C年代は，３号住居跡の炭化物が2230±30yrBP，４号住居跡の炭化物が2090±30yrBPである。弥生時代中期の年代値となっている。No.１は５㎜以下の炭化物粒であり，樹木の中の帰属部位は明らかでない。No.２は炭化した枝の一部と考えられ，樹木の枯死・伐採年代に近い年代値と考えられる。炭素含有率は60%以上であり，化学処理，測定内容に問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-83139	No.1	竪穴住居跡 3 号 埋土	炭化物	AAA	**-24.98 ± 0.37**	**2,230 ± 30**	**75.73 ± 0.26**
IAAA-83140	No.2	竪穴住居跡 4 号 埋土	炭化物	AAA	**-25.07 ± 0.48**	**2,090 ± 30**	**77.05 ± 0.26**

[#2810]

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-83139	2,230 ± 30	75.74 ± 0.25	2,232 ± 27	376BC - 352BC (15.4%) 295BC - 229BC (47.3%) 220BC - 211BC (5.5%)	386BC - 345BC (22.9%) 323BC - 205BC (72.5%)
IAAA-83140	2,100 ± 30	77.04 ± 0.25	2,094 ± 27	165BC - 90BC (57.7%) 73BC - 58BC (10.5%)	191BC - 46BC (95.4%)

[参考値]

参考文献

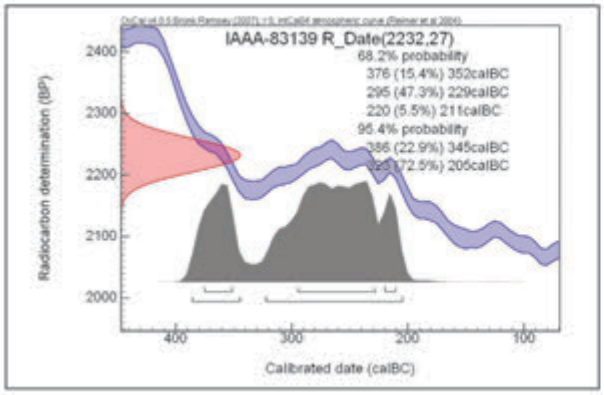
Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

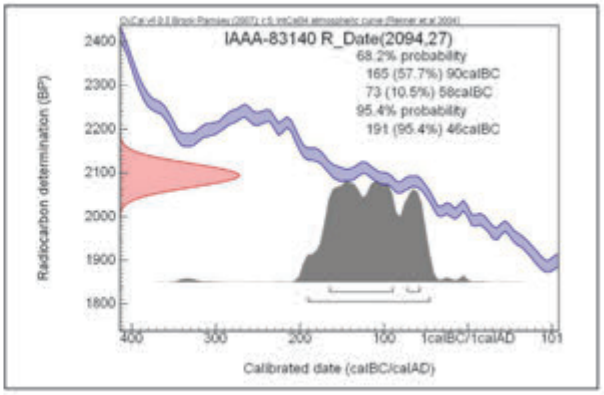
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058





[参考]暦年較正年代グラフ

第３節　十三塚遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）２

㈱加速器分析研究所

１　測定対象試料

十三塚遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。測定対象試料は，６号住居跡出土木炭（１：IAAA-92719），８号住居跡出土木炭（２：IAAA-92720），合計２点である。

２　測定の意義

竪穴住居の年代を明らかにする。あわせて，今後山ノ口式土器の細分を検討する資料とする。

３　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃ で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃ で30分，850℃ で２時間熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

４　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-２）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

⑴　年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。

⑵　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.２％であることを意味する。

⑶　δ^{13}Cは，試料炭素の13C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合は表中に（AMS）と注記する。

⑷　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。

⑸　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.２％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.４％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv４.１較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

６　測定結果

十三塚遺跡出土木炭の^{14}C年代は，６号住居跡出土の１が2150±30yrBP，８号住居跡出土の２が2190±30yrBPである。いずれも弥生時代中期に相当する年代値となっている。

炭素含有率は60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-92719	1	遺構:6 号住居跡	木炭	AAA	**-29.01 ± 0.47**	**2,150 ± 30**	**76.49 ± 0.30**
IAAA-92720	2	遺構:8 号住居跡	木炭	AaA	**-29.73 ± 0.54**	**2,190 ± 30**	**76.10 ± 0.31**

[#3443]

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-92719	2,220 ± 30	75.86 ± 0.29	2,152 ± 31	350BC - 305BC (25.9%) 210BC - 161BC (36.0%) 133BC - 118BC (6.2%)	357BC - 283BC (32.4%) 257BC - 246BC (1.1%) 235BC - 91BC (61.0%) 70BC - 61BC (0.9%)
IAAA-92720	2,270 ± 30	75.37 ± 0.29	2,193 ± 32	356BC - 286BC (46.7%) 234BC - 200BC (21.5%)	369BC - 176BC (95.4%)

[参考値]

参考文献

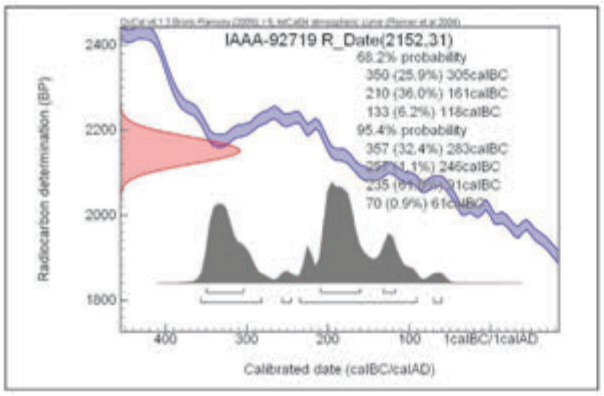
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

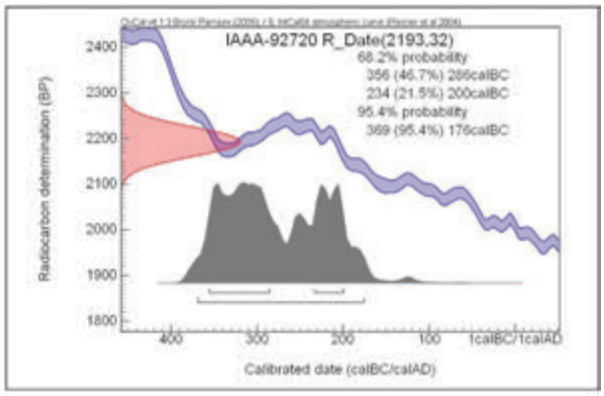
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058





[参考]暦年較正年代グラフ

第４節　十三塚遺跡出土種実同定報告

㈱加速器分析研究所

はじめに

今回の分析調査では，十三塚遺跡（鹿児島県鹿屋市串良町細山田所在）の弥生時代住居跡等の遺構から出土した炭化種実の同定を実施し，当時の植物利用等の状況を知る。

１　試料

試料は，８号住居跡（試料３），土坑５号（試料４），２号住居跡（試料５），３号住居跡（試料６），４号住居跡（試料７），６号住居跡（試料８），７号住居跡（試料９），８号住居跡（試料10）より出土した種実８点である。試料５は２点存在するため，便宜上枝番を付したので，合計９点となる。

２　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川（1994），中山ほか（2000）等との比較から，種実の種類と部位を同定し，個数を数えて表示する。

３　結果

結果を表１に示す。木本２分類群（コナラ属，アカメガシワ）９個，草本４分類群（イネ（?含む），ヒエ属，イネ科，ギシギシ属）15個，不明１個，計24個の種実が検出されたほか，炭化材，不明炭化物（菌類の菌核を含む），昆虫などが確認された。

種実遺体の保存状態は，破片，摩耗，表面に土が付着しているなど，不良である。ヒエ属，イネ科，ギシギシ属は，明らかに炭化していない。これらは明るく開けた場所に生育する，いわゆる人里植物に属する分類群であることから，周辺域の草地環境に由来すると考えられるが，後代の混入の可能性が高いため，後述する考察では除外する。落葉小高木のアカメガシワは，元々黒色で硬い種皮をもつことから，炭化，非炭化の判断は難しい。

炭化している分類群は，栽培種のイネと，常緑または落葉高木のコナラ属である。イネは，胚乳が２号住居跡より５個，３号住居跡より１個，４号住居跡より１個，６号住居跡より２個，８号住居跡より１個，計10個確認された。コナラ属は，子葉が８号住居跡より４個，土坑５区より３個，計７個確認された。

以下に，各分類群の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

・コナラ属（*Quercus*）　ブナ科

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色。長さ1.2㎝，径0.7㎝程度の狭卵状楕円体。頂部はやや尖り，基部は切形。破片は，２枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦に割れた半分以下である。子葉は硬く緻密で，表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で，正中線上は僅かに窪み，頂部には径１㎜程度の小さな孔（主根）がある。８号住居跡出土子葉１個は，子葉の合わせ目が密着した状態が確認されることから，子葉の離れにくさの特徴をもつイチイガシ（*Q. gilva Blume*）に由来する可能性がある（岡本,1979）。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus*（Thunb.）Muell. Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

種子が検出された。黒色，径3.8㎜程度の歪な球体。基部にＹ字形の稜がある。種皮は硬く，表面は粗面で瘤状突起が密布する。

＜草本＞

・イネ（*Oryza sativa* L.）イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色，長さ４-4.5㎜，幅２-３㎜，厚さ1.5㎜程度のやや偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で，２-３本の隆条が縦列する。２号住居跡（試料５-２）出土胚乳１個には，表面に穎の破片の付着が確認される。穎は，完形ならば長さ６-７.５㎜，幅３-４㎜，厚さ１-２㎜程度のやや偏平な長楕円体で，基部に斜切状円柱形の果実序柄と１対の護穎を有し，その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は５脈，内穎は３脈をもち，ともに舟形を呈し，縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

・ヒエ属（*Echinochloa*）　イネ科

果実が検出された。淡褐色，長さ3.6㎜，径1.7㎜程度の半広卵体で背面は丸みがあり腹面は偏平。外穎表面は粗面で剛毛が縦列する。内穎表面は平滑で光沢がある。イヌビエ（E. crus-galli（L.）Beauv. var. caudata（roshev.）Kitag.）に似る。

・イネ科（Gramineae）

果実が検出された。淡-黄褐色。長さ2.5-3.5㎜，径1.5-1.8㎜程度の狭卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には微細な網目模様が縦列し，毛が密生する。

・ギシギシ属（*Rumex*）　タデ科

果実が検出された。暗褐色，長さ2-2.5㎜，径１-1.5㎜程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭で，両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。果実周囲をとりまく花被は灰褐色，径4-4.5㎜程度の心円形で粗い網目模様をなし，縁には歯牙がある。中肋は瘤状に膨れる。

表１．種実同定結果

番号	遺構	分類群	部位	状態		個数	備　　考
試料３	８号住居	コナラ属	子葉	破片	炭化	4	1個子葉合わせ目密着，イチイガシの可能性
試料４	土坑５号	コナラ属	子葉	破片	炭化	3	
		炭化材			炭化	0.09g	4個，最大10.1mm
試料５－１	２号住居	イネ	胚乳	完形	炭化	3	
				破片	炭化	1	完形1個と接合
		炭化材			炭化	＜0.01g	1個,3.57mm
試料５－２	２号住居	アカメガシワ	種子	完形		2	
				破片		1	
		イネ	穎・胚乳	完形	炭化	1	
				破片	炭化	1	
			胚乳	完形	炭化	15	
				破片	炭化	8	
		イネ？	胚乳	完形	炭化	1	
		ヒエ属	果実	完形		1	
		ギシギシ属	果実	完形		1	
		炭化材				3.49g	最大13.64mm
		不明炭化物（菌核含む）				1.42g	
試料６	３号住居	イネ	胚乳	完形	炭化	1	
				破片	炭化	1	
		炭化材				0.58g	最大9.58mm
		不明炭化物（菌核含む）				0.03g	
		昆虫				2	
試料７	４号住居	イネ	胚乳	破片	炭化	1	
		イネ科	果実	完形		2	
				破片		1	
		炭化材				1.23g	最大7.77mm
		不明炭化物（菌核含む）				0.26g	
		昆虫				17	
試料８	６号住居	イネ	胚乳	破片	炭化	2	
		ギシギシ属	果実	完形		1	
		不明種実		破片	炭化	1	
		炭化材				0.98g	最大12.39mm
		不明炭化物（菌核含む）				0.12g	
試料９	７号住居	炭化材				0.44g	最大6.51mm
		不明炭化物（菌核含む）				0.34g	
		昆虫				1	
試料10	８号住居	イネ？	胚乳	破片	炭化	1	
		炭化材				0.05g	最大3.51mm
		不明炭化物（菌核含む）				0.01g	

４　考察

各住居跡から出土した炭化種実は，栽培種のイネの胚乳と，常緑または落葉高木のコナラ属の子葉が確認された。２号住居跡より５個，３号住居跡より１個，４号住居跡より１個，６号住居跡より２個，８号住居跡より１個が確認されたイネは，栽培のために大陸より持ち込まれた渡来種とされ，胚乳が食用される植物質食糧である。可食部である胚乳が炭化した状態で出土したことから，本遺跡周辺域で食用に利用され，なんらかの事情で火を受けたことが推定される。なお２号住居跡出土胚乳には，表面に穎の付着が確認されることから，籾がついた生米の状態で火を受けたことが示唆される。

コナラ属は，８号住居跡より４個，土坑５区より３個，計７個確認され，イチイガシの可能性を含む個体が確認された。イチイガシは，湿潤，肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する常緑高木で，現在は紀伊半島，四国，九州の山麓地に広く分布する。また，イチイガシの堅果はコナラ属の中でも渋みが少な

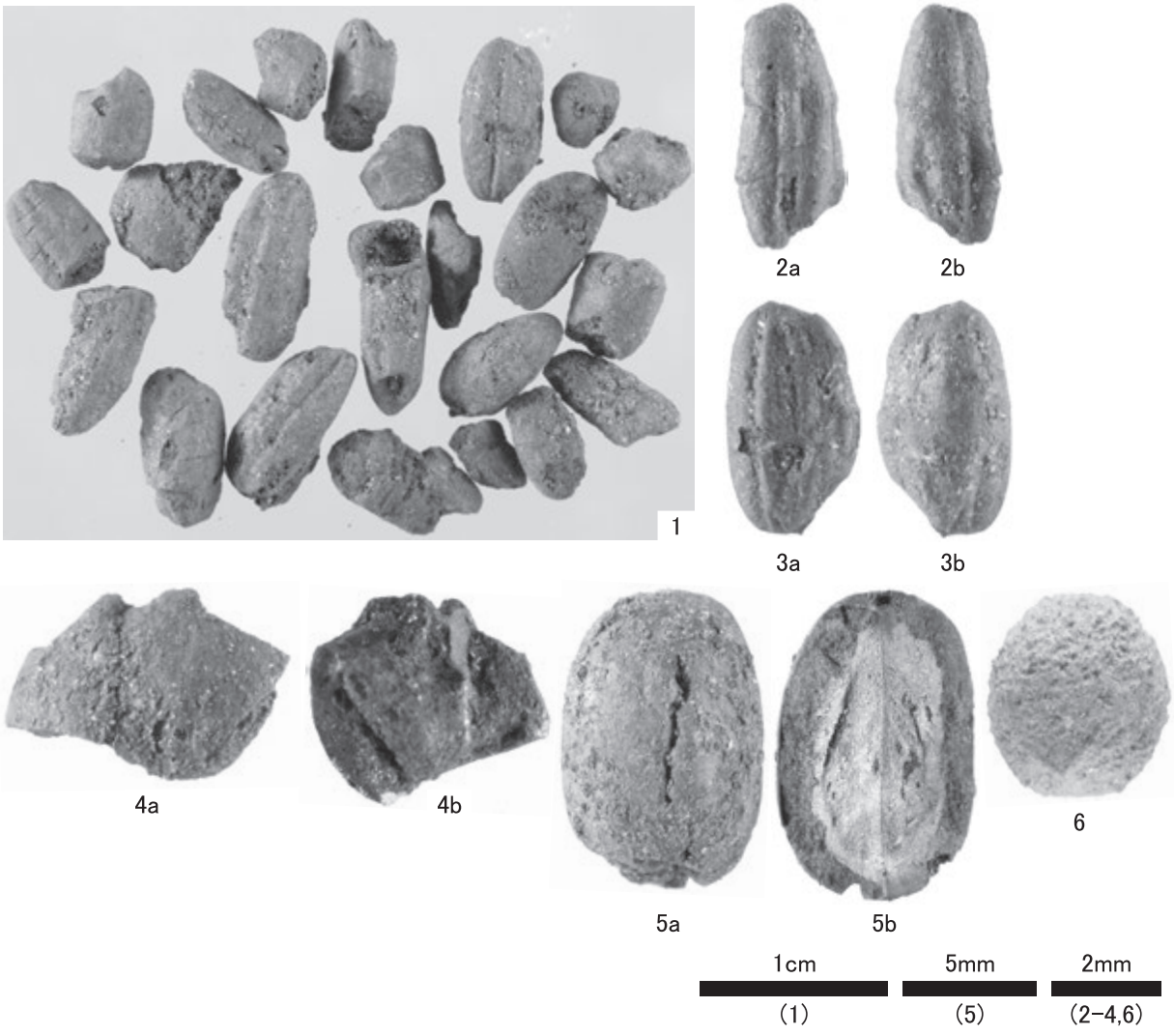
く，アク抜きせずに生食可能で収量も多いため，遺跡出土例も多い（渡辺，1975；岡本，1979など）。以上のことを考慮すると，イチイガシの可能性を含むコナラ属は，当時の本遺跡周辺域の照葉樹林から採取され，イネとともに住居内に持ち込まれた植物質食糧であることと，火を受け炭化残存したことが考えられる。

引用文献

石川　茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328ｐ．
中山　至大・井之口希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642ｐ．
岡本　素治，1979，遺跡から出土するイチイガシ．大阪市立自然史博物館業績，第230号，31－39．
渡辺　誠，1975，縄文時代の植物食．雄山閣出版，187ｐ．

※）本分析は，当社協力会社・パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

種実遺体



1．イネ 胚乳(試料5-2 H2)　　2．イネ 穎･胚乳(試料5-2 H2)
3．イネ 胚乳(試料5-2 H2)　　4．コナラ属 子葉(試料3 8号住居)
5．コナラ属 子葉(試料4 土坑5区)　　6．アカメガシワ 種子(試料5-2 H2)

第７章　総括

今回の調査によって石綴遺跡が縄文時代早期前半から早期末にかけて，十三塚遺跡が弥生時代中期を中心とした遺跡であることが確認された。ここでは各遺跡の発掘調査のまとめとして総括する。

第１節　石綴遺跡について

⑴　縄文時代について

ア　遺構

石綴遺跡では縄文時代に該当する遺構として，土坑１基と集石遺構７基検出された。土坑はⅤ層である薩摩火山灰層（Ｐ14）上面で検出されたが，その埋土にＰ13が堆積している状況から，縄文時代早期前半の所産で，本来はⅣｂ層下層かⅣｃ層から堀り込まれたものと考えられる。底面は硬いⅤ層を貫いてⅥ層まで達していた。形状から落とし穴である可能性が考えられるものの，想定される堀り込み面から底面までの深さが１ｍ未満であることを考慮すると，貯蔵穴などの他の利用方法も考える必要があろう。

集石遺構は６基がＧ－24・25区周辺で，１号集石遺構１基のみがＥ－28区で検出された。１号集石遺構以外は礫の集中度が弱く，いずれも掘り込みは確認できなかった。特に小型の４・５号集石遺構に関しては，元々は隣接する６・７号集石遺構と同一の遺構であった可能性も視野に入れるべきであろう。検出された層位から考えると全て縄文時代早期の集石遺構であり，礫も安山岩で構成されている点で共通しているが，使用されている礫の大きさに関しては１号集石遺構のみ，主として小型の礫を使用しているという相違点が見られる。

イ　遺物

石綴遺跡で出土した最も古い土器型式はⅠ類土器である。口唇部に小波状を作らない点では前平式土器と言えるが，胴部の貝殻条痕調整が浅く行われ，はっきりとしない点では岩本式土器に近い特徴であり，口縁部上端の「く」の字状に施されている貝殻刺突文からホケノ頭Ⅲ類と呼ばれているもので，岩本式土器と前平式土器の過渡期のものであると言える。Ⅱａ類土器は前平式土器で完全に器形が復元できる個体である。口縁部がやや内湾する特徴を持つ。Ⅱｂ類土器は横位方向の貝殻条痕調整が行われ，口唇部が平坦に整形される前平式土器で，東九州道関係の遺跡では定塚遺跡で１ｂ類土器とされているものであり，より志風頭式土器に近い段階の一群としてⅡａ類土器との時間差が考えられている。

Ⅲ類は志風頭式土器であり，口縁部のみレモン形で底部が円形の１個体が出土している。Ⅳ類は石坂式土器であり，石坂（Ⅰ）式と呼ばれている土器である。確認できるのは２個体で器壁の厚さに差異が見られる。Ⅴ類土器は無文の土器であり，胴部の下半部分の破片であると考えられ，平椿式土器ではないかと考えられる。Ⅵ類土器は早期末に見られる貝殻条痕文土器の一群である。Ⅵａ類は鎌石橋式土器，Ⅵｂ類土器は古段階の轟Ａ式土器と呼ばれているものである。Ⅵａ類が１個体，Ⅵｂ類が２タイプ２個体出土している。従来時期差があるとされる土器が１個体ずつ出土しているということが興味深く，同時期に存在した可能性も改めて考えていくべきであろう。東九州道関係の遺跡では野方前段遺跡Ａ地点からⅥｂ類が出土しており，右京西タイプとされている。

石綴遺跡出土の石器も縄文時代早期該当層からのみの出土となっている。チップ集中などの石器製作に関係すると考えられる遺構は検出されなかったが，削器に関してはその素材になると考えられる剥片が出土している。

⑵　弥生時代について（遺物）

弥生時代の土器は，周辺の遺跡からも多く出土している弥生時代中期後半の土器である山ノ口式土器が出土しており，さらに須玖式系と考えられる赤色顔料が塗布された土器の出土も見られる。

第２節　十三塚遺跡について

⑴　縄文時代について

ア　遺物

十三塚遺跡では縄文時代に該当する遺構は検出されなかった。遺物は全体の量としては少ないが，特徴的な土器が出土している。

Ⅰ類は石坂式土器である。石綴遺跡で出土したものと同じく石坂（Ⅰ）式である。Ⅱ類は岩崎上層式土器であり，最近は宮之迫式土器として捉えられている土器である。出土した全ての破片が細かく割れており，割れ口が摩滅してなめらかであるという特徴が見られた。出土分布は20トレンチ周辺にまとまって出土している。Ⅲ類は松山式土器としているが，市来式土器よりは古い様相で捉えられることからそのような分類としている。Ⅳ類は草野式土器としているが，市来式土器の範疇で捉えられる土器である。Ⅴ類は丸尾式土器で１点のみ出土している。Ⅵ類は西平式土器である。全て小破片で出土しているが磨消縄文が施されているのが確認できる。Ⅶ類は三万田式土器である。この地域での出土は非常に珍しく，ほぼ全ての出土資料を掲載した。Ⅷ類は中岳式土器で１点のみ胴部に刺突文（凹点）が施されている資料が出土している点から中岳Ⅱ式と考えられる。Ⅸ類は入佐式土器の浅鉢であり，Ｘ類はⅨ類よりやや下る時期のものであると考えられる組織痕の残る底部資料である。以上のように十三塚遺跡では縄文時代後期から晩期の様々な土器が出土している。岩崎上層式と松山式の間が空く（出水式・指宿式）が，ほぼ連続した形で土器型式が出土している点とその出土点数の少なさが特徴である。

⑵　弥生時代について

ア　遺構

遺構については４章で述べた通り，竪穴住居跡が８軒，堀立柱建物跡が３棟，土坑７基，集積遺構が竪穴住居跡１号内と包含層内の２箇所で検出された。これらの遺構の間には切り合い関係はなく，ほぼ同時期であると考えられる。

住居跡については方形を基調としたもの（２・６・７・８号），円形を基調とし，張り出しをもつ，いわゆる花弁形のもの（１・３・４号），不明（５号）とに分類できる。特に１号と３号においては張り出し部を含め径が１号は7.2m×6.1m，３号は7.2m×4.98mであり，方形を基調とした２・６・７・８号より一回り大きい。柱穴については，１号住居跡は14本と圧倒的に多い。主柱穴に移動があった可能性が考えられる。他の住居跡の柱穴は主柱穴と思われるものが２本，支柱穴と思われるものが２本である。柱穴の配置は，主柱穴が住居中央部よりやや北側，支柱穴と思われるものはやや南側にある。以上のことから，本遺跡の住居跡は，何らかの計画性を持って建てられたものではないかと考える。また，２号住居跡からは柱穴内から直立状態の甕形土器の底部が，３号住居跡からは，張り出し部に完形の鉢が，７号住居跡では，磨製石鏃・鉄鏃・完形の鉢等が出土しており，住居廃棄に伴う祭祀儀礼が行われた可能性もあるのではと考えられる。

本遺跡はいずれも上面がトレンチャーや現代の耕作により削平を受けており，遺構を上面で検出することができないものがあった。特に５号，７号，８号住居跡については遺構の平面プランは検出面と異なるものであった可能性も否定できない。遺構面をいかに上面で捉えられるか，今後の課題である。

掘立柱建物跡は３棟検出され，土坑は７基検出された。埋土，出土遺物の状況から，山ノ口式に伴う遺構と判断した。なかでも，５号・６号土坑は３号掘立柱建物跡に隣接して検出されており，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑との関係を総合的な視点でさらに詳細な検証を行う必要がある。

イ　遺物

本遺跡の出土遺物は，第４章の第３節⑵で概略を述べた。これらのうち，土器については，南九州の編年基準によれば弥生時代前期末から中期初頭と中期後半のものであり，ほとんどが在地の土器である。完形品が少なく，全容を知り得るものはわずかな個体であり，口縁部だけのもの，口縁部～胴部だけのもの，底部だけのものが多かった。前期末から中期初頭の土器は口縁部に突帯がつき，刻目を施すものが多かったが，ほとんどは胴部に横位突帯をめぐらすものであった。中には縦位の突帯がつくものも出土している。

本遺跡の中で出土量が最も多いものが中期の山ノ口式土器である。器種は多くが甕と壺で，他に鉢も出土している。甕は口縁部復元径が20～35㎝にまとまり，胴部に３条の突帯がつくものが多くを占める。他に突帯のないもの，１条のもの，４条のものも出土している。また，通常よりも口縁部復元径が大きい大甕も出土している。壺は口縁部が「へ」の字状に垂れ下がるもの，二叉状口縁のものが大部分を占める。鉢は口縁部の形態から突帯のないもの，「M」字状の突帯のつくもの，甕と同様の口縁をもつものと，３種類が出土している。壺・甕の中には外面にススが付着しているもの，器壁が脆くなっているものもあり，煮炊きに使用されていた可能性も考えられる。また，壺形土器と思われる口縁部に凹線文を伴うものがあった。314は胎土が異なることより移入品の可能性が高い。315は在地の壺形土器に凹線を施しており，瀬戸内系の影響を受けたものと考えられる。また，１号住居内から出土の46は，王子遺跡報告書より実測図（28）1294（矢羽根透かしが掘り込まれた高坏）の口縁部と酷似する。内・外面とも還元焔焼成により黒色を呈している。これらの土器が共伴して出土しており，山ノ口式土器と移入土器が共伴して出土した事実の時間的位置づけの検討が必要と考える。また，図化はしていないが，種子痕と思われる土器片も出土している。

土製勾玉は総数５点出土した。勾玉は一般的に祭祀に関係があるとされている。本遺跡で発見されているものは総て土製品であり，その中に大きく丁字頭を持つものが見られ，小型のものも丁字頭を持っている。ただ，祭祀関係と考えられる場所や遺構は確認できなかった。ほかにも，甕の口縁部に櫛描文を施したもの，円盤状土製品，種実痕の見られる土器片も出土している。

石器は砥石が多く出土しているのが特徴的である。本遺跡より出土した砥石は，磨り面の形状から鉄を研いだものであると考える。６号住居跡内より出土した砥石は，住居跡内に散乱していた。意図して熱破砕されたものか，偶然熱破砕されたものか，興味ある課題である。

１号住居跡からは棒状の叩具も出土している。これは王子遺跡で出土した，いわゆる樹皮布叩石ではとの説もあったが，木の繊維を作るためとされる絶対的な物証が得られなかったため，棒状叩具という表現にした。今後の類例を待ちたい。

鉄製品は１号，４号，７号住居跡内から出土した。埋土中で出土しており，山ノ口式土器と共伴するものと考えられる。注目されるのは７号住居跡埋土内出土の鉄鏃である。松木薗遺跡出土鉄鏃同様無茎である（本田道輝氏御教示）。おそらく鹿児島県内出土の最古の鉄鏃ではないかと考えられる。また，１号，４号内のものについては用途は不明である。

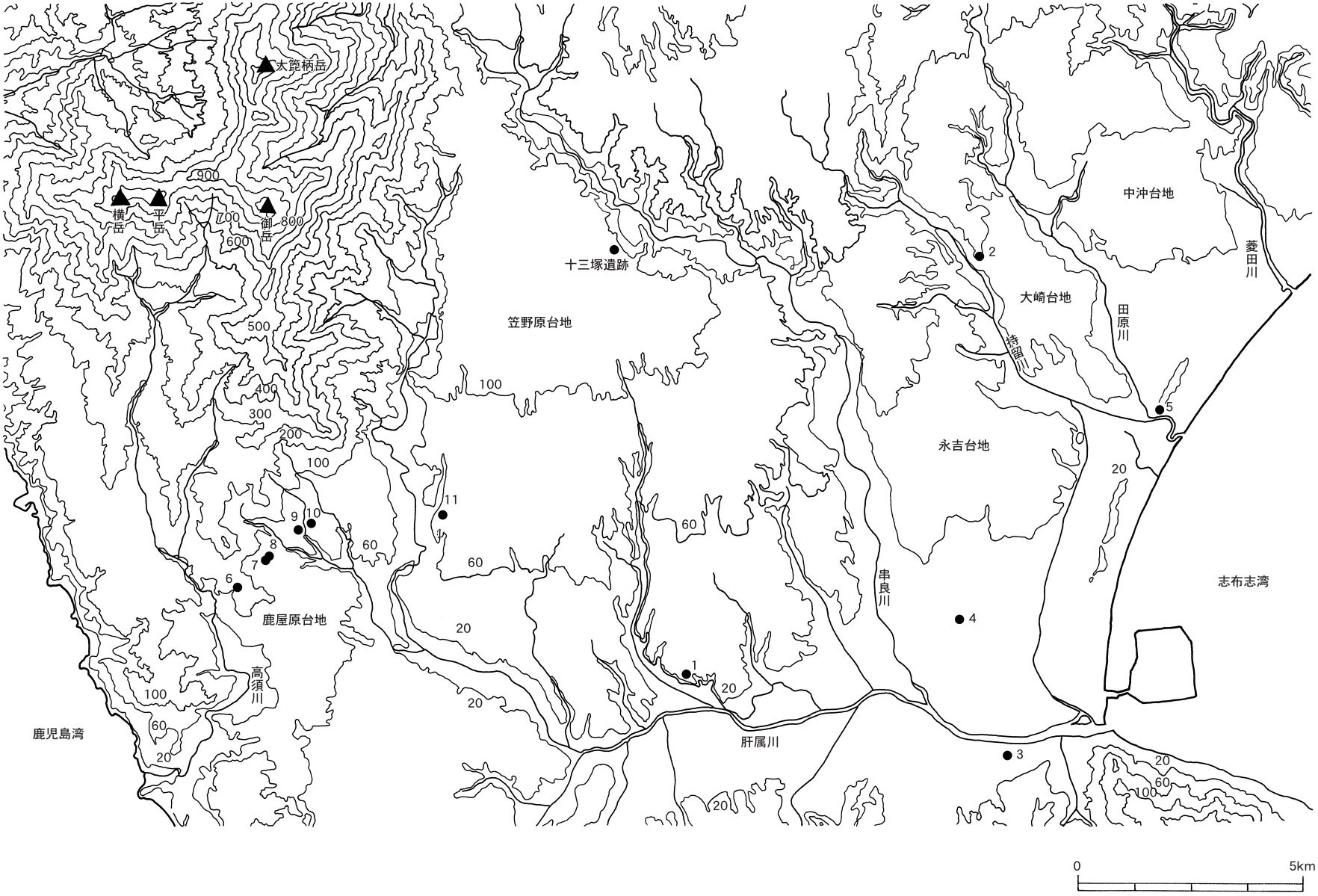
⑶　古墳時代について

成川式土器（東原段階）の甕の土器片がわずかに出土している。これらに伴う遺構は検出されなかった。

⑷　中世以降について

道路状遺構が８条検出された。周辺から出土した遺物は古銭が１枚である。遺構の時代は明確ではないが，表土から近世の陶磁器片が出土していることから，これらの遺構は近世の可能性が高いと考える。

大隅半島中央部に位置する鹿屋原台地，笠野原台地，永吉台地上には弥生時代中期の遺跡が多く発掘されており，第43表に挙げた遺跡の遺構・遺物を比較検討することで，この地域の弥生時代中期の生活の様子を知る手がかりになると考える。主な遺跡を第133図に掲載する。



第133図 大隅半島中央部弥生時代の主な遺跡

第43表　大隅半島中央部弥生時代の主な遺跡

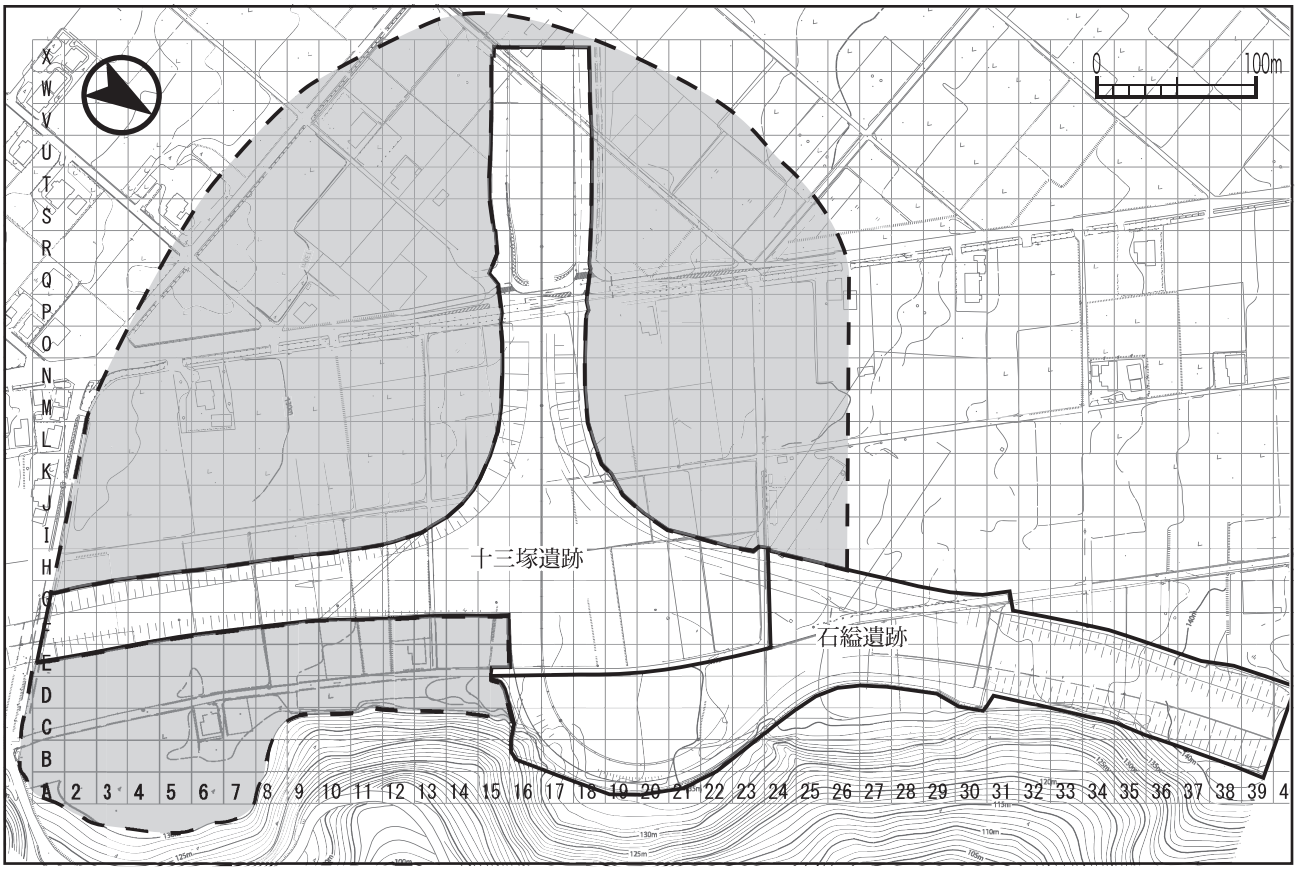
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等
1	吉ヶ崎	鹿児島県鹿屋市串良町吉ヶ崎	台地	弥生	竪穴住居跡４軒，磨製石鏃，打製石斧
2	下堀	鹿児島県曽於郡大崎町持留岡別府	台地	古墳	大型竪穴住居２軒，竪穴住居跡，掘立柱建物跡
3	波見西	鹿児島県鹿屋市高山町波見西	自然堤防	弥生，平安	竪穴住居跡５軒，土器，軽石製品，砥石，片刃磨製石斧
4	西牟田	鹿児島県鹿屋市東串良町川西西牟田	低地	弥生	竪穴住居跡１軒，土坑，土製勾玉
5	沢目	鹿児島県曽於郡大崎町益丸沢目	砂丘	縄文，弥生（中），古墳	竪穴住居跡48軒，入来式・山ノ口式，須玖式高坏，甕・鉄製品
6	飯盛ヶ岡	鹿児島県鹿屋市上野町飯盛ヶ岡	台地	縄文，弥生，古墳，古代	竪穴住居跡，磨製石鏃
7	前畑	鹿児島県鹿屋市郷之原町前畑	台地	縄文，弥生，古墳，近世	竪穴住居跡３軒，掘立柱建物跡８棟
8	中原山野	鹿児島県鹿屋市郷之原町中原山野	台地	縄文（早・晩），弥生，古墳	竪穴住居跡１軒，土製投弾
9	中ノ丸	鹿児島県鹿屋市大浦町中ノ丸	台地	縄文，弥生，歴史	竪穴住居跡４軒，円形周溝
10	中ノ原	鹿児島県鹿屋市大浦町中ノ原	台地	縄文，弥生，古墳	竪穴住居跡３軒，瀬戸内系土器
11	王子	鹿児島県鹿屋市王子町王子	台地	縄文，弥生（中）	竪穴住居跡42軒，掘立柱建物跡14棟

第３節　遺跡の残存状況

石綰遺跡・十三塚遺跡の残存状況を示したのが第134図である。

石綰遺跡は明確な図示はしていないが，Ｈ～Ｊ列に若干集石遺構が残存する可能性がある。現在畑地となっているこの区画は注意が必要である。

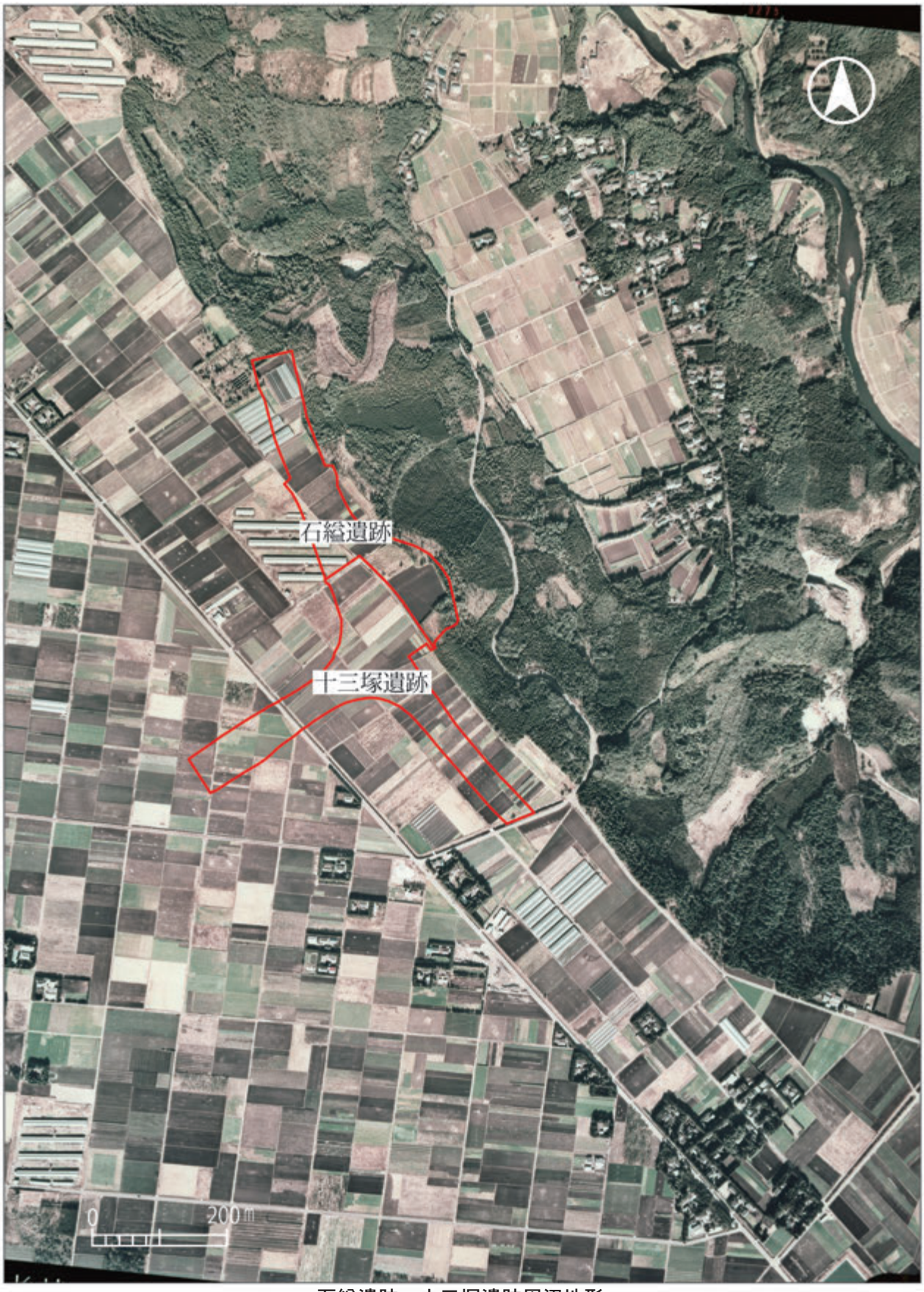
十三塚遺跡は遺跡範囲内，東西南北に継続して残存しているものと考える。今回調査対象となった区域に隣接する畑地の下には，弥生時代中期の集落跡が，まだ残存していると考える。どの区も弥生時代中期の包含層まで１ｍもない状況である。今後の開発の際は十分注意を要する。



第134図 石綰遺跡・十三塚遺跡の残存状況

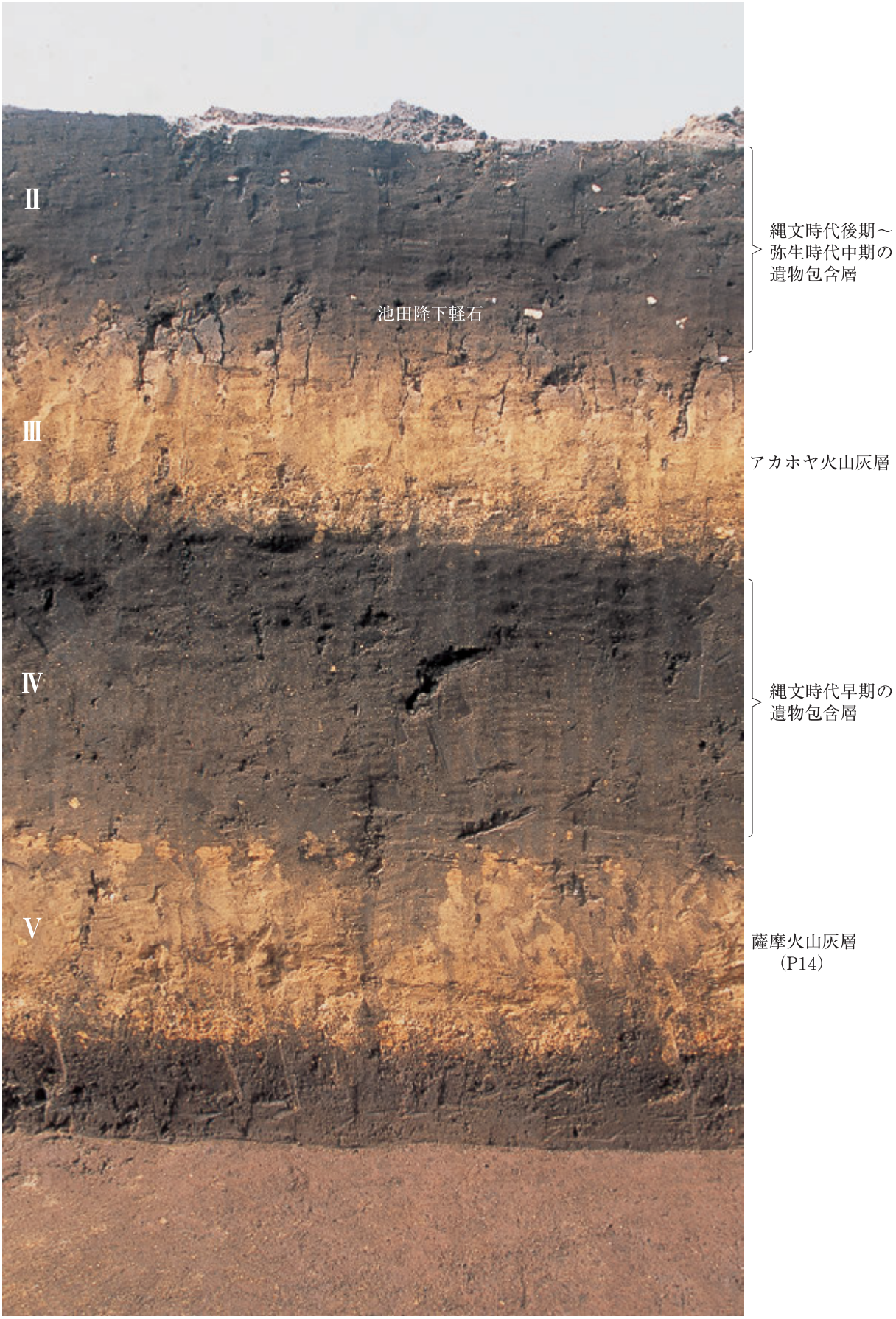
写　真　図　版

図版 1



石縄遺跡・十三塚遺跡周辺地形
（国土交通省空中写真・昭和49年）

図版２



石縊遺跡・十三塚遺跡の基本土層（Ⅱ～Ⅴ層）

1 号集石遺構

2 号集石遺構

石綘遺跡集石遺構検出状況 1

図版 4

3 号集石遺構

4 号集石遺構

石綘遺跡集石遺構検出状況 2

5 号集石遺構

6 号集石遺構

石綘遺跡集石遺構検出状況 3

図版 6

7 号集石遺構

1 号土坑

石綘遺跡集石遺構検出状況 4 ・土坑検出状況

石綘遺跡調査状況

図版８

平成20年度

平成21年度

十三塚遺跡竪穴住居跡と堀立柱建物跡の年度別検出状況

遺構プラン検出状況

遺構完掘状況

十三塚遺跡 1 号竪穴住居跡

図版10

遺構検出状況

遺構完掘状況

十三塚遺跡 2 号竪穴住居跡

遺構検出状況

遺構プラン確認状況

遺構完掘状況

十三塚遺跡 3 号竪穴住居跡

図版12

遺構検出状況

遺構プラン確認状況

遺構完掘状況

十三塚遺跡４号竪穴住居跡

遺構検出状況

遺構プラン確認状況

遺構完掘状況

十三塚遺跡 5 号竪穴住居跡

図版14

遺構検出状況

遺構完掘状況

十三塚遺跡 6 号竪穴住居跡

7号竪穴住居跡完掘状況

8号竪穴住居跡完掘状況

十三塚遺跡7・8号竪穴住居跡

図版16

十三塚遺跡調査状況

1 号掘立柱建物跡

2 号掘立柱建物跡

3 号掘立柱建物跡

十三塚遺跡掘立柱建物跡

図版18

5号・6号土坑

6号土坑遺物出土状況

7号土坑

道路状遺構（J－15区）

道路状遺構（O・P－17区）

道路状遺構（R～T－15区）

十三塚遺跡土坑・道路状遺構

土器集中区（G－15区）

集積遺構（H－17区）

砥石（2号竪穴住居跡内）

鉢（3号竪穴住居跡内）

砥石（6号竪穴住居跡内）

砥石（6号竪穴住居跡内）

十三塚遺跡遺物出土状況 1

図版20

炭化物（6 号竪穴住居跡内）

磨製石鏃（7 号竪穴住居跡内）

鉄鏃（7 号竪穴住居跡内）

鉢（7 号竪穴住居跡内）

勾玉（M－17区）

勾玉（P －17区）

十三塚遺跡遺物出土状況 2

石綘遺跡縄文時代早期土器

図版22

石綘遺跡縄文時代早期土器

石綘遺跡縄文時代早期土器

図版24

石綛遺跡縄文時代早期土器，弥生土器

石綘遺跡縄文時代早期石器(打製石鏃，磨製石鏃，打製石斧)

図版26

石綘遺跡縄文時代早期石器

十三塚遺跡縄文時代早・中・後期土器

図版28

十三塚遺跡縄文時代後期土器

十三塚遺跡縄文時代後・晩期土器，石器

図版30

十三塚遺跡弥生時代前期～中期土器

十三塚遺跡弥生時代土器

図版32

十三塚遺跡竪穴住居跡内出土土器

十三塚遺跡竪穴住居跡内出土土器

図版34

十三塚遺跡竪穴住居跡内出土石器，鉄製品

十三塚遺跡弥生時代土器

図版36

十三塚遺跡弥生時代土器

十三塚遺跡弥生時代土器

図版38

十三塚遺跡弥生時代土器

十三塚遺跡弥生時代土器

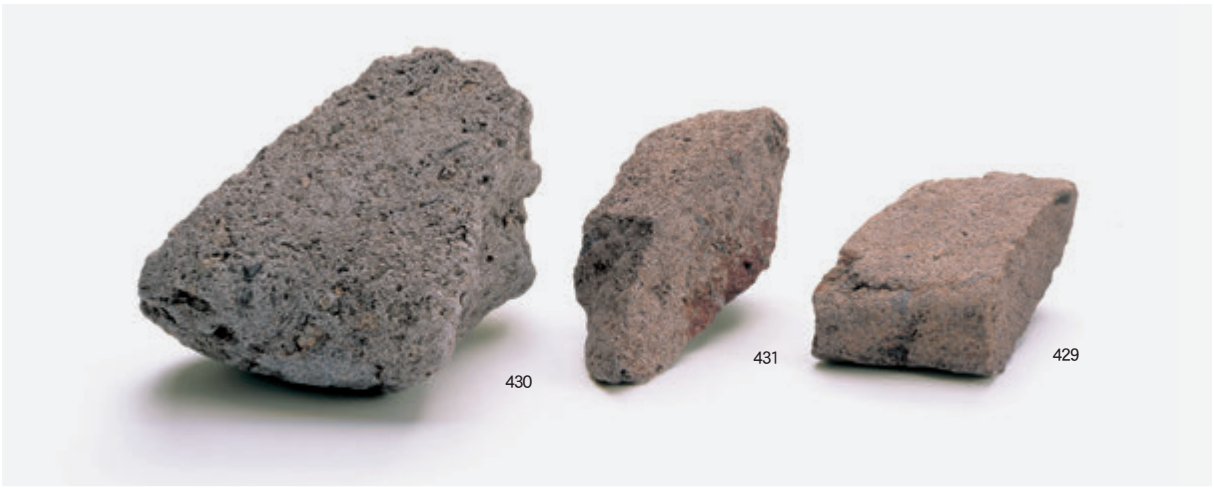
図版40

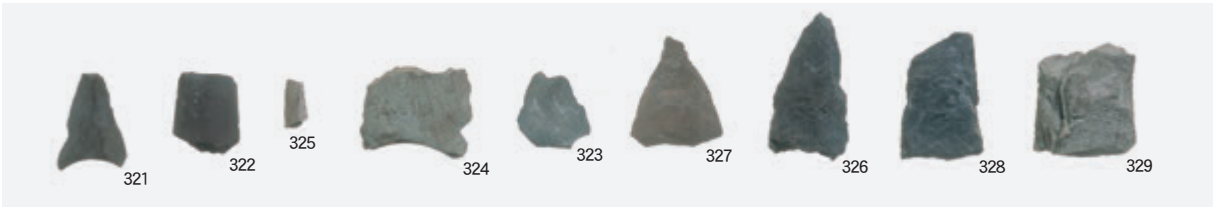
十三塚遺跡弥生時代土器

十三塚遺跡弥生時代土器，土製勾玉

図版42

十三塚遺跡弥生時代土器，種実痕付着土器（最下段３点：写真図版のみ）





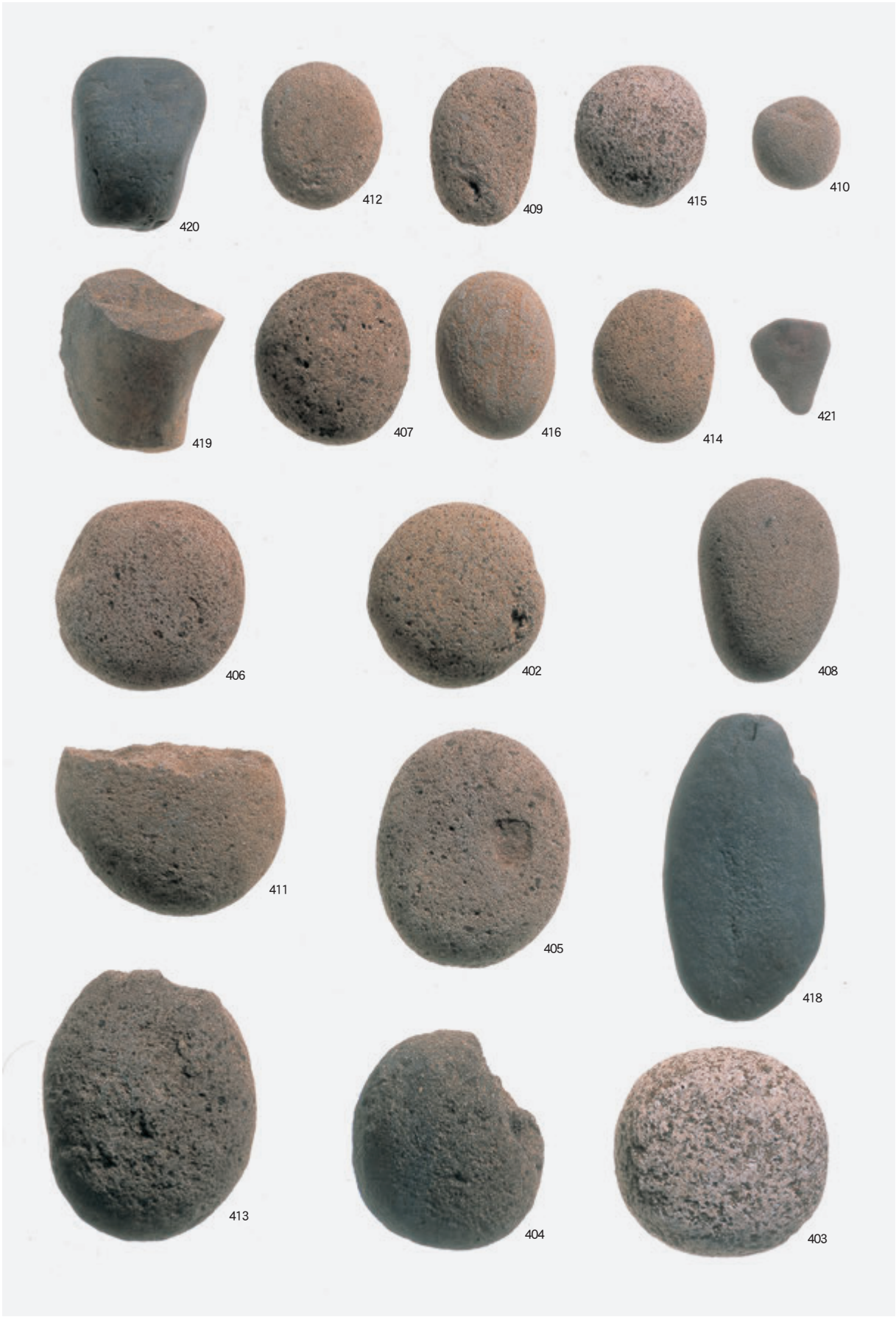
十三塚遺跡弥生時代出土遺物（石皿，軽石製品，砥石，鉄製品，磨製石鏃）

図版44

十三塚遺跡弥生時代石器

十三塚遺跡弥生時代石器

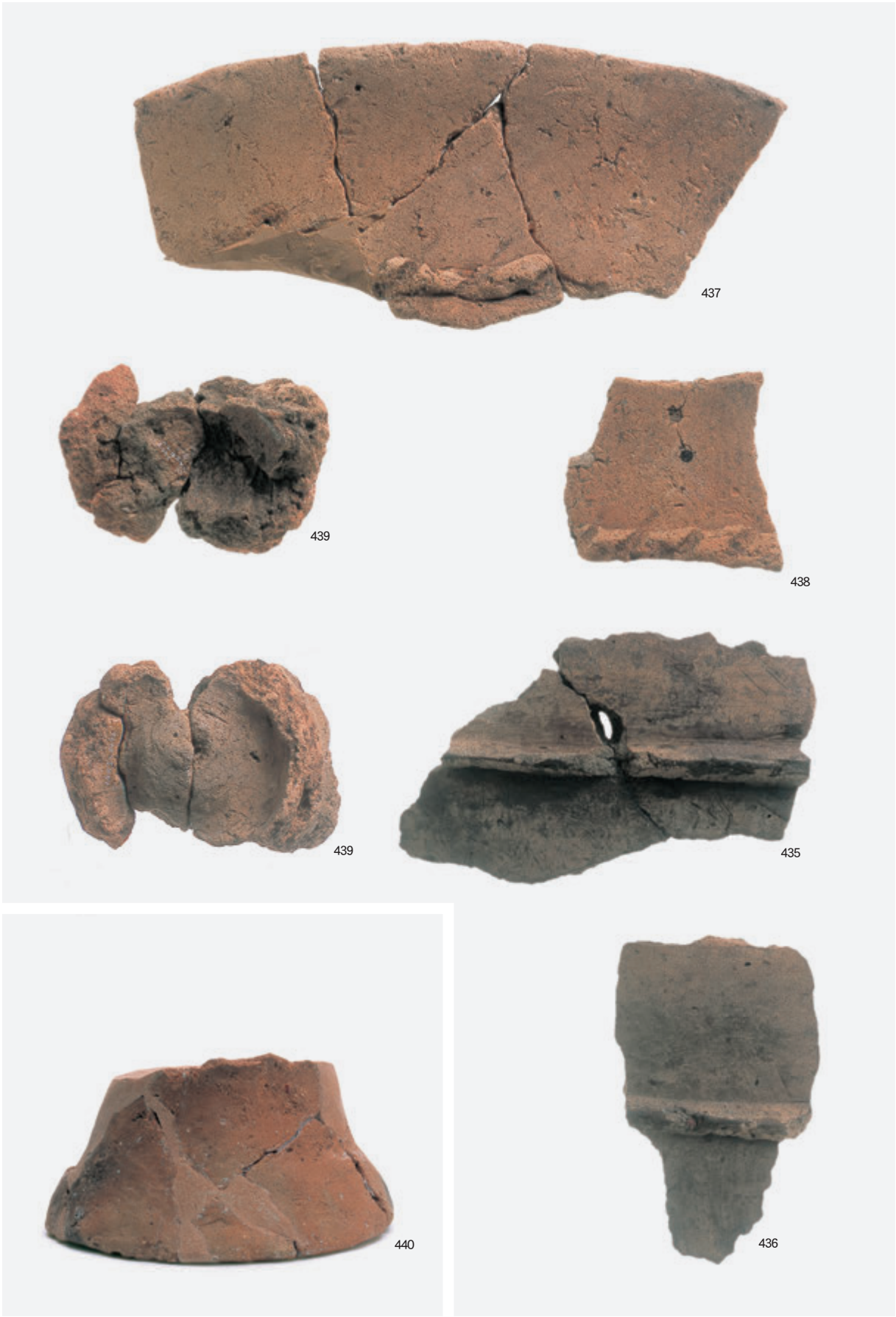
図版46



十三塚遺跡弥生時代石器

十三塚遺跡弥生時代包含層出土水晶，チップ（２号竪穴住居跡内）※写真図版のみ

図版48



十三塚遺跡古墳時代遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（164）

石縄遺跡・十三塚遺跡

発行日　2011年３月

発行者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995－48－5811　FAX　0995－48－5821

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
TEL　099－214－3757　FAX　099－214－3758